

とある魔術の仮想世界

小仏トンネル

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『学園都市』

人口230万人がその街に住み、その人口の実に8割を学生が占める学生の街であり、世界で最高峰の科学力を誇る科学の街でもある。

そんな学園都市の最先端の科学力、技術力を駆使して開発された「仮想空間」

その仮想空間を自由に行き来することの出来る革新的なゲームの新型ハードウェア「ナーヴギア」

そしてそのナーヴギアにおいて初めて実装される世界初のVRMMORPG「ソードアート・オンライン」通称「SAO」

学園都市に住む230万人がこの最新型ゲームに魅力され、人類史上初の仮想空間に魅せられいく中、不幸にもとある幻想殺しの少年、そして彼を知る多くの者が、後に世界では悲劇と呼ばれる「SAO事件」へと巻き込まれていく…

【追記】

本SSは完結致しました。つきましては下記URLが正式な続編になります。よろしければ是非お読みになって下さい。

↓『とある魔術の仮想世界「2」』

<https://syosetu.org/novel/1406>

目次

このSSを読むにあたって作者から
アインクラッド編 1

序章 始まり 3

第1話 運命のくじ引き 8

第2話 リンクスタート 12

第3話 悪夢の始まり 15

第4話 事件 19

第5話 剣の世界 24

第6話 現実世界 27

第7話 能力 36

第8話 決戦前夜 40

第9話 β テスター 45

第10話 シスターズ 50

第11話 説教 55

第12話 疑惑 59

第13話 ヒースクリフ 64

第14話 ボス戦 74

第15話 四面楚歌 80

第16話 死闘 87

第17話 新メンバー 92

第18話 死闘の果てに 97

第19話 座標移動 102

第20話 真実と選択 106

第21話	一方通行	113
第22話	参戦	120
第23話	情報	126
第24話	竜使い	130
第25話	アイドル	134
第26話	ラッキースケベ×3	141
第27話	オレンジ	148
第28話	二人の時間	157
第29話	圈内事件	162
第30話	罪の茨	166
第31話	連鎖	171
第32話	真相	176
第33話	十字の丘	182
第34話	原子崩し	187
第35話	世界の法則	195
第36話	黒い翼	200
第37話	結末	205
第38話	生還	210
第39話	リズベツト武具店	218
第40話	白竜	224
第41話	心の温度	229
第42話	想い	237
第43話	電撃姫とぼったくり鍛冶屋	247
第44話	影の物語	259
第45話	白人	261

第70話	幻想	409
第69話	最強	404
第68話	天使の力	397
第67話	トップ3	394
第66話	リバーズ	388
第65話	衝撃の杖	381
第64話	アイテム	376
第63話	悪人	370
第62話	激戦	364
第61話	上条当麻	360
第60話	神浄の討魔	353
第59話	世界	346
第58話	最終決戦へ	340
第57話	黒幕	330
第56話	ヒーロー	322
第55話	証明	315
第54話	決闘	307
第53話	勧誘	303
第52話	暴露	296
第51話	決意	293
第50話	エイワス	287
第49話	『ドラゴン』	281
第48話	月下の暗殺者	276
第47話	平穩	270
第46話	垣根帝督	265

最終話 卒業式
第7 2話 帰還
第7 1話 願い

427 424 416

このSSを読むにあたって作者から

どうもみなさん、こんにちは。作者の小仏トンネルです。

この度は何のご縁があつてか、数あるSS作品の中からこのSSまで足を運んでいただけたことを大変嬉しく思います。

お恥ずかしながら作者はハーメルンにSSを投稿しますのは初めてのなもので、システムがまだイマイチ良く掴めておりません。誠に申し訳ありませんがご容赦下さい。コメント欄などでご指摘、アドバイスなどいただければ幸いです。

加えますはこの度、ソードアート・オンラインは「アリシゼーション」編、とある魔術の禁書目録は三期のアニメ制作の決定、作者としても誠に嬉しく思う所存であります。

ご挨拶はこの辺りにいたしまして、このSSを読むに差し当たっての注意事項をいくつか説明させていただきたく存じます。

・既にタグ付けはしてあるのですが、本作品は「とある魔術の禁書目録」と「ソードアート・オンライン」のクロスオーバー作品となっております。クロスオーバーがどうしても苦手な方はこのSSは見なかったこととしてブラウザバックを推奨します。

・この作品は両原作のネタバレ、ストーリーバレを多く含んでおります。禁書目録に至りましてはスピントフ作品の「とある科学の超電磁砲」に関しても多くのネタバレを含んでおります。どうかご容赦下さい。

・本作品は作者の構想段階ではかなりの長編を予想しております。書くペースは極力維持していく所存ではありますが、どうか長い日取りと共に楽しみいただきたく思います。

・これも構想段階の話になってしまっていますが、作者はアインクラッド編とフェアリー・ダンス編までを執筆しようと考えております。しかし、ソードアート・オンラインファンの方々には大変申し訳ないのですが、ソードアート・オンラインの主要キャラ（キリトやアスナなど）の本格参戦はフェアリー・ダンス編以降となると思います。

それに加え、原作小説のファントム・バレット編以降のキャラ（シンやユウキなど）は一切出てきません。本当に申し訳ないのですが、このSSを読むにあたってはご容赦下さい。

・ソードアート・オンラインに関しては、ソードスキルを含むスキル項目、武器類、アイテム、全体のシステムなどに関しまして作者なりのアレンジや改変があります。

・そしてこれは「とある」シリーズに関しての注意事項になるのですが、基本的に未だに原作でも明確に明らかにされていない設定（竜王の顎や天使の力など）は作者の想像と自己解釈で書いていきますのでご容赦下さい。

・ストーリーの内容は作者なりに考えていく所存ではありませんが、アインクラッド編のストーリーは基本的にソードアート・オンラインの原作をなぞりながらの内容になると思います。しかし、登場キャラの違い、両作品のキャラ同士の掛け合い、戦闘シーンなどはクロスオーバーの面白さを十分に引き出していく所存ですので、楽しんでいただければと思います。時間軸なども基本的には両原作を基準にしています。

以上の点で1つ又は複数の該当項目がある方は先ほどと同じく本作品の存在は見なかったことにし、速やかなブラウザバックを推奨します。

該当項目が無かった方、もしくは「該当項目があったけど我慢して読むぜ!」という方々、深い配慮と心の広さを海より深く尊敬すると同時にこれ以降、本SSに目を通して頂けることを作者としてこれ以上ない感謝を申し上げます。本当にありがとうございます。

本当に大変長らく失礼致しました。完結まで頑張つて行きたいと思えます。ご意見、ご感想、アドバイスなどございましたらどうぞ遠慮なく申し上げて下さい。それでは、この辺で失礼します。

最後まで本SS「とある魔術の仮想世界」をどうぞお楽しみ下さい。

アインクラッド編

序章 始まり

時は10月の始まり頃、学園都市の街には少しずつではあるが、冬の訪れを感じさせるような寒気を伴った風が吹き始め、その街で日々を過ごす学生を装す服は寒さから身を守る為のものへと変わっていく

しかし、多くの人間は知らない・・・

この薄汚れた街の寒気から身を守るなことなど

不可能であるということ・・・

—————

その日の放課後、上条当麻は自身の通う学校の教室の窓からぼんやりと秋空を眺めていた

「あく…飛行船はいいよなくただ風に流されてるだけでその日が終わるんだもんなく…」

この少年、ここ最近、というかほぼ毎日のように厄介事に巻き込まれている、もしくは厄介事に自ら首を突っ込んでばかりである

それもそのはず、彼の右手には「幻想殺し」という摩訶不思議な力が宿っている。この右手に触れた「異能の力」は立ち所に打ち消されてしまう、という代物だ

そんな右手を持つ代償としてか、彼の身には数え切れないほどの不幸が襲いかかってくる。彼の部屋に居候している、その頭脳に10万3000冊の魔導書を記憶している少女「禁書目録」の推測によれば、

上条当麻は幻想殺しのせいで自分の運気を打ち消してしまっているらしく、彼を不幸にする一因を作ってしまったっていうとのことだ

そんな右手を持って生まれてきてしまったがゆえ、上条当麻は連日のように不幸に見舞われ、魔術結社と戦うこともしばしば、もはや魔術結社の方から幻想殺しが目当てで上条当麻自身が狙われる事さえある。上条当麻が望んで手にした力でない以上、もはや不幸にもほどがあるという話だ

「こちとら一日を乗り切れるかどうかも分からぬ極限の生活。今日も今日とて家計はギリギリ。ウチの暴食シスターのせいもあって、ここ最近毎日のように宣伝されてる喉から手が出るほど欲しい新型ゲームも上条さんにとっては夢のまた夢ような話。って訳ですよ、土御門さん」

そう、上条当麻が先程から眺めている窓から見える飛行船の液晶画面に写っているのは、本日付けを持って発売とされた新型ゲーム機、「ナーヴギア」とその新型ゲーム機のソフトウェア、世界初のVRMMORPG「ソードアート・オンライン」通称「SAO」である

「まあ、学園都市もついにやってくれちまったもんだぜい、人間の脳の五感を全てコントロール下に置く『フルダイブシステム』を完成させ、仮想空間を作り出すなんてまさに科学！文明の力を物語るゲームぜよ〜」

「せやかて、今日発売されとる初回製作分のナーヴギアもSAOも全世界で限定1万本ポッキリや！今日ゲームを手にしてプレイ出来る人は、ホンマにラッキーな人ってわけやな〜」

「俺ならまず！仮想空間で想いのままの妹を作り出して！気ままに妹ハーレムライフを過ごすぜよ〜！」

「何言うてはるの土御門くん！妹だけなんてけつたいなこと言わず！ありとあらゆる女の子に囲まれながらモテモテの女の子パラダイスを過ごさな損やで〜!!」

「お前ら少しは欲望隠せよ…ま、どうせ上条さんにはそんな新型ゲームを手に出来る幸運なんて、欠片ほども回ってございませんのことよ〜…」

「ふっふっふ、なら今日は少し運試ししてみようぜよ〜?」

「ああ?運試しい?」

「ん、なんや土御門くんその紙は?」

「運試し」と言う土御門の手には、赤い色をした三枚の紙が握られ、彼の手に揺られている

「これは!我らが第七学区のセブンスミストの大抽選会の福引き券ぜよ!一等はなんと!ナーヴギアとS A Oをセットにしてプレゼントトって話ぜよ〜!」

「な、なんやて〜!〜!〜!?!」

「なにつ!?そ、それ一回やらしてくれるのか土御門!?!」

「おおつ!?不幸に自覚がある上やんにしては随分ノリノリじゃないかにや〜?」

「あつたり前だ!外れのテイッシュだつてウチの家計には欠かせない非常に有力な資源なんだ!喜んで行かせてもらうぜ!!」

「・・・なんか聞いているこつちまで悲しくなつてくるぜよ」

「ほな!早いとこセブンスミストに行きましょか〜!」

—————

そして第七学区にある大型ショッピングモール「セブンスミスト」に到着したデルタフォース一行は、抽選会の会場へと向かおうとしていた

「で、土御門、抽選会場はどこなんだ?」

「もうちよい先ぜよ、この先のイベントホールで抽選会が行われてるぜよ」

「おおつと!?もしやあの行列は!?ナーヴギアとS A Oの先行予約に成

功した人の行列やでー！」

「へえ、こんなにいるのか、この人はいいよなく、俺らとは違って、今日から遊べるの確定なんだしよ〜」

やはりこの日に限っては長蛇の列を作り出すのも激ウマのラーメン店や一日限定10食の海鮮丼などではなく、新発売のゲームである。そんな行列を横目に過ぎ去ろうとする一行に行列の中から声をかける少女が1人

「あ！ちよつとアンタ!!」

「んあ？俺？あー、なんだ御坂か…」

「なんだとは何よ！失礼しちゃうわね！」

学園都市内有数の超お嬢様学校「常盤台中学」の制服に身を包むこの少女「御坂美琴」は学園都市に7人しかいないレベル5の中の第3位にして「超電磁砲」の異名と電気系統最高位の超能力を持つ少女である

「んで？こんなところにいるなんて珍しいわね？あんたもこのゲーム買いに来たの？」

「違う！俺は福引きでティツシユを貰いに来たんだ！」

「福引きで最初っからティツシユ当てにくってそれどうなのよ…」

「お前の方こそ、その列に並ぶってことはゲーム買いに来たんだろ？」

「いいよなくお嬢様は。ゲームをかうお小遣いもポンポン出て来て」

「なっ!?!ふざけた事言ってるんじゃないわよアンタ！このゲームはお金だけじゃ買えないんだからね！先に抽選に応募した世界中の何億人という人の中から抽選で選ばれた人だけが！自分の住んでる近くのショップに取り寄せて初めて買えるんだから！」

「あーあー、どいつもこいつも口を開けば抽選だ抽選だって、不幸な上条さんの耳には痛いばかりですよ」

「上やーん！そんなところで女の子ナンパしてるんやったら、上やんの

分の抽選も僕が引いでまうで〜?」

「ナンパなんかしてねえよ! ってか本当に引くなよ! 俺のティツシユ
!」

「本当に目当てはティツシユ以外にないのかぜよ……」

「そんじや俺のツレが呼んでるから行くわ。じやな! 御坂!」

「あ、ちよつと! ……せつかく会えたんだし、行列も長いんだからもう少し話に付き合いなさいよ……あのバカ……/ /」

そう彼を罵倒する彼女の頬は、秋にしては暖かすぎるこの部屋の空調のせいなのか、はたまた彼への想いの表れなのか、ほんのりと赤く染まっていた

第1話 運命のくじ引き

「ふ、不幸だ……」

上条当麻は今まさに自身の不幸を噛み締めていた。上条当麻はその不幸を自覚した上で、悪魔でもティツシユを貰いに来るという名目でこの抽選会場へと足を運んだのだ。だが…

「外れにはティツシユはおろか何も無しって…そんなの福引きって言わねえだろおおー！！！！」

そう、今回の福引きの外れにはティツシユどころか、なんの景品も付かなかった。まさに鬼畜の所業と言うべきか、上条当麻自らがこの不幸な福引きを生み出したとも言えるかもしれない

「さあゝて、後は上やんだけぜよ？」

「ハズレかな？ハズレかな？それともハズレ？」

「選択肢にハズレ以外ないじゃねーか…はあゝ…ま、そんなことはこの上条さん自身が一番分かかってんですけどね…」

「悪いにやく俺たちだけいい思いしちゃって〜♪」

「僕たちは帰りにこの1000円分の商品券を使って何か夕飯の材料でも買って帰りましょか土御門くん♪」

「てめえら後でほんと覚えとけよ！」

「ほらほら、上やんお得意のその右手でずずい〜！つとガラガラを回すぜよ〜！」

「誰がわざわざ右手で回すか！こんな時のために上条さんには左手が生えてるんでございますのことよ!？」

「いやそれは流石にちやうやろ…」

「見てろ！この黄金の左手で必ずや六等のう〇い棒を当ててやるからな！」

「結局下の方しか狙わないのねアンタ…」

「おおつと？・おやく？・どこの誰かと思ったらいつかの夏休みの最終日の常盤台のお嬢ちゃんやないか〜」

「どうも、どうせだからあいつの不幸っぷりを拝みに来たわ」

「なあ、お嬢ちゃんは上やん何等出すと思う？ハズレかな？外れかな？それともスカ？」

「ま、その全部でしようね」

「お前ら…御坂まで…あーもうそんなに言うなら見とけよクソ！御坂こそ！俺がもし一等当たったらその手から下げてるゲーム今夜一緒に手伝ってもらうからな!!」

「なっ／＼／!？」

「おやおやく？これは土御門くうくん？」

「ま、超電磁砲はとづくに上やん病にかかっているから何とも言い難いけどにゃ〜」

「行くぜっ！ふんっ!!」

上条はその手で乱雑に抽選機の取っ手を掴むと時計回りに回し始めた

「そいや!!」

「あ、上やん右手・・・」

「二あ…」

土御門が言及するその時すでに遅し。人間とつさの時には利き手が勝手に出てくるように、上条もまた無意識のうちに、取っ手を右手で掴んで抽選機を回し始めていた

「だああ〜!!ええい！ままよっ！」

そのままの勢いに乗せ、上条の右手は抽選機を乱雑に回し、3回、4回とガラガラと不規則な音を立てて回る

(神様！お願い！今までロクに信じて来なかったけど！どうか！どうかアイツに！一等を当てさせてあげて！これつきりでもいいから！)

なぜか御坂美琴も彼の運気を神に祈る中、抽選機からついに、福引きの結果を知らせる1つの玉が現れた

「……………おっ？」

「い、今、玉1個出はったよな？どやった上やん？やっぱしハズレ？」「ちよ、ちよつとアンタ？何固まつてんのよ？何が当たったのよ？」

「は、は、はは、ハハハ……………」

「ハ？ハズレってこと？やっぱりにや〜」

「もおく上や〜ん、いつからそんな演技派になつた〜ん、そないな反応するからてつきりハズレじゃないんかと思つてしまったや〜ん」

(何よ…せっかく一緒に遊べると思つたのに…バカ…)

「やっぱり、上やんは上やんつて事ぜよ、それに結局回したのはあの右手だしにや〜。さて、帰るぜよ〜」

「は、『春』が……………」

「……………え？」

「ついにこんな不幸な俺にも!!! ついに！ついに春が来た〜〜〜〜〜
〜〜!!!」

カランカランカランカラン!!

『おめでとうございます！一等賞！新型ゲーム機ナーヴギアと新型ゲームソフトSAOの当選者が出ました〜!』

「二、な、何いいいい……………!!!?」

—————

「ほら食えーインデックス！今日はご飯も炊飯器が空になるまで食つていいからな！カレールーも鍋が空になるまで食つていいぞー!」

「本当だねとうま!?! 私は食べることに関しては有言実行するんだよ!?! わああ〜いい!! いっただきまあ〜す!」

とある高校の学生寮に住む男女2人、純白の修道服に身を包み、その脳の中に10万3000冊の魔道書を記憶した彼女、『禁書目録』と上条当麻は放課後の熱も冷めぬまま、夕暮れの食卓を囲んでいた。本日の上条家のメニューは庶民の味の味方、カレーである。香ばしいスパイスとにんじんとじゃがいも、そして鶏肉がふんだんに使われたカレーライス。普段の夕食とは見違えるほど夕食らしい夕食となっていた。

「はっはっは〜！今日は俺の幸運に感謝して出血大サービスだ！何てったってほぼ絶対に手に入らないと思っていた物が手に入ったんだからな〜！」

「??何のこと？とうまに幸運が訪れるなんて神様が自ら貧乏くじ引いたと思えないんだよ？」

「お、お前も中々キツついこと言うな…」

「それで？何が手に入ったのとうま？」

「いや〜！これがお前にも分からないほど凄いものなわけですよ！インデックス！VRMMOって知ってるか!？」

「ぶ？ぶいあーるえむえむおー？何それ？美味しくなさそうなんだよ」

「そうだろう？分からないだろう？なーんたって普通に買おうと思えばお前と俺の食費半年分はするんだ！それが福引きごときでタダで手に入るなんて！こんなに嬉しいことはないぜ！」

「むむむ〜！そうやってとうまはいつもいつも！そこまで穀潰し宣言されると流石の私でも頭に來るんだよ！本当にとうまの分のおかわりがなくなるぐらいカレーとご飯を食い尽くしてやるんだよ！」

「ちよ!?!おま!?!流石に一杯ぐらいは俺にもおかわりさせてくれよ!?!」
「にゃああ〜〜〜」

いつもよりも楽しげに食卓を囲む2人と1匹。しかし、彼らはまだ知らない。こうして彼らが食卓を囲む日はもう2度と來ないかもしれないということに

第2話 リンクスタート

「~~~~~♪~~~~~♪~~~~~♪」

「お姉様？随分とまた上機嫌ですわね？やはりあの新型ゲームが手に入ったからなんですの？」

常盤台中学の学生寮の一室、鼻唄まじりにパジャマに着替える御坂美琴に、風呂上りの髪を梳かしながら問いかけるのは彼女と相部屋の後輩、「白井黒子」である。この白井黒子もまた、御坂美琴と共に学園都市で激動の日々をくぐり抜けてきたレベル4の「空間移動」の能力者であり、御坂美琴をまるで血縁者であるかのように「お姉様」と呼び、深く慕っている

「んん、それもあるけど、それ意外もあるっていうか、いや、べ、別にアイツと一緒にゲーム出来るってのが嬉しいわけじゃないのよ？でもやっぱり同じことを出来る人が身近にいるっていうのは嬉しいって言うか？♪」

そう語る彼女の頬は緩みきっている

「へ、へえ〜…そうなんですの…」

（ま、またあの憎き類人猿ですよ!?あの野郎まして！仮想世界までお姉様をたらしこむつもりですよ!?もう今度という今度は許しませんわ！こうなったら今度会った時に空間移動で鉄矢を体内に！）
「じゃー私今から『コレ』やるけど、黒子は気にせず寝てて良いからね」「全く、ほどほどにしてくださいまし。夜更かしはお肌には大敵ですよ。」

「言っておくけどーコレやってる間に私の身体に変なことするんじゃないわよ!?電撃飛ばすじゃ済まさないんだからね!？」

「ぎつくう!?!な、なんのことやら〜?そ、そんなことこの黒子は1ミリも思ってませんのよ〜?」

「全く、油断も隙もあつたもんじやないわ…。まあでも、アンタも気が向いたらコレ買いなさいよ、そしたら一緒に遊んであげるからさ♪」
「お、お姉様♪黒子はその言葉だけでもう、もう、もおくくく♡」
「あつははは…じゃ、おやすみ」
「はい、おやすみなさいまし」

相部屋の友人に1日の終わりの挨拶を向けると、御坂美琴はおもむろに電源を入れたナーヴギアを頭に被り、自身のベットに寝そべる

「さて…それじゃ…」

そして、御坂美琴は自分自身を別世界へと誘う、科学の世界には似つかわしくないまるで「魔法」のような言葉を言い放つ

「リンクスタート!!」

「さて、インデックスはもうちゃんと寝たかな？」

時刻は九時を過ぎる頃、インデックスは早めの就寝につきりビングの電気は消えている。しかし、上条当麻のいる風呂場と洗面所は明かりが灯っており、上条は本日手に入れた「ソレ」を包まれた箱から取り出し、興味深そうに眺めている

「こうやって見てみると、なんだか御坂妹のゴージャルに似てるかもな…いざやってみたら御坂妹達の中の1人もコレで遊んでるかも…なんてな」

「…でも、そーいやあなんだかんだで、この前の大覇星祭来場者ナンバーズでも一等が当たって北イタリア5泊7日の旅が当たったっけ…」

そう、何を隠そうこの上条当麻はつい先月の大覇星祭来場者ナンバーズでも見事に一等を当て、北イタリア5泊7日の旅へ出たのだが、その旅先でまたまたトラブルに見舞われ、5泊7日の旅を1日で終え、傷だらけで学園都市に帰還した

「今思い返せばあの来場者ナンバーズも不幸以外の何ものでもなかったな…今回のコレもまさか…」

そう言いながらまたナーヴギアを眺める上条、やはり自分にしてはどうにも話が出来すぎていると勘ぐってしまう

「まー考えすぎか！所詮ゲームはゲーム！不幸が起こってもそれはゲームの中での話だ！とりあえずは噂のコイツを楽しみますか！」

すると、上条当麻は洗面所のドライヤーのプラグをコンセントから抜き、ナーヴギアのプラグをコンセントに差し込む、そしていつもの寝床の風呂桶へ入って寝そべり、彼の一種のトレードマークであるツンツン頭をナーヴギアですっぽりと覆いこんだ

「さてと、これで準備オーケーなんだよな？…ふう、ちよつと緊張するな」

風呂場というなんとも言えない空間から別世界へと上条当麻は飛び立つことを試みる。そして彼もまた、普段なら自分の右手で打ち消してしまうような「魔法」の言葉を言い放つ

「リンクスタート!!」

第3話 悪夢の始まり

「さて、お次はユーザーネームか…」

ナーヴギアを使いSAOの世界に入り込んだ上条当麻はユーザーIDやパスワード、自分のアバターの初期設定を終え、最後にこの仮想世界での自分の名を指すユーザーネームを決める段階まで来た

「こういうのはアレだろう？ やっぱ自分のリアルの名前をそのまま使うのはタブーなんだろう？ ならまあ、コレでいいか」

まだ慣れない手つきで英字のキーボードをタップし自分の名を入力する上条当麻。その手で入力する名は日頃の学校生活を共に送る友人の間での一種の自分の愛称のようなものだ

『『Kamiyan』でよろしいですか？』

「はは、まさかアイツらのつけたあだ名をこんな場面で自分から名乗ることになるとはな…Yesっ…」

「Welcome to Sword Art Online
！」

「おっと!? これで全部終わりですか!? じゃ! 始めるとしますか!」

すると、上条当麻の身体はまばゆい光に包まれ見る見るうちに殺風景だった初期設定の背景に色がついていき、思わずまぶしさと鮮烈な背景の配色に上条は目を閉じてしまう。しかし、次に目を開けた瞬間、上条当麻は新たな別世界の扉の前にいた

「おおおおお〜!!すげえ!すげえすげえすげえ!まるで本物の自分の身体みたいだぜ!」

上条は物珍しさからか自分の身体感覚を確かめるようにその場でジャンプしたり、手を握ったり、走り回ったりしている。その様はまるで水を得た魚のようだ

「いやしつかし、これ本当に俺の身体なんじゃないか?右手の力もそのまんまだったして:『幻想殺し!』:…:…:…な〜んつつてな!…:…:…って、あれ?」

自分の右手に宿る力の名を叫んで正拳突きを撃つ上条。しかし、その後の自分の行為の恥ずかしさから日常的な仕草をつい行った時、ある違和感に気づいてしまった。そう、「自分の頭を搔きむしった」瞬間に

「こ、これ?い、いやいや!そんなまさか!さつきだってアバター作ってた時にちゃんと…:…」

その違和感を確かめる為に上条は近くの噴水の水面に写る自分の顔を確認する。しかし、上条が抱いていた違和感はその行為を経て確信へと変わるそう、現実世界の自分の容姿と瓜二つの「いつものツンツン頭な自分の顔」を見た時に

「う、嘘だろおおお〜!?!さつきちゃんとアバター設定したのに!?!普段の俺じゃ絶対にあり得ないサラサラヘアーにしたのに!男前な二枚目フェイスを作るのにも苦労したのに!顔も頭も元の俺のままじゃねーか!…:…ううつ、不幸だ…:…」

「ああっ!?!ちよつとアンター!やつと見つけたわよ!!今までどこ行つたのよ!?!おかげですつごい探しちゃったじゃない!」

「んあ？お、おいお前！御坂か!?お前その顔、現実のお前の顔そのまんまじゃねえか！流石にそれはマズイだろ！リアルの知り合いがこれから増えたら色々と面倒だぞ！」

噴水の淵にもたれかかり落胆する上条に声をかけるのは、同じくS A Oにログインした御坂美琴である。しかし、彼女の容姿もまた、上条と同じように現実の彼女の容姿と瓜二つだった

「……はあ？この顔はみんながみんな現実のそのままに今さつきなっちゃったでしょうが。それに、今はそんなこと気にしてる暇じゃないわ、どうやってこの世界から脱出するか考えないと……」

「……はあ？みんながみんな現実の顔になった？この世界から脱出？なんだ御坂、お前ナーヴギア被って頭おかしくなっちゃったのか？」「……は？な、何よアンター！さつきの話聞いてなかったワケ!」

「さつきの話も何も、俺は今この世界に来たばっかなんだ、まだチュートリアルも何も始まってねーよ」

「……あー、分かったわ。いい？これからする話は全部本当よ、嘘じゃないわ。その耳かっぽじってよく聞いてなさい」

「……お、おう」

「まず自分のメインメニュー画面を開いて、ウィンドウを操作してログアウトしようとしてみなさい」

「え？今さつきS A Oにログインしたのにもうログアウトすんのか？」

「いいから早くする！」

「うお!?わ、分かったよ……えっと、さつき読んだ取扱説明書通りなら……こうか？」

上条が右手を振り下ろすといくつもの項目に別れたメインメニュー画面が現れる、そしてそのタッチパネルを操作し、さきほどゲームの取扱説明書で読んだ通りにログアウトの手順をたどっていく

「えーと、確かここでログアウト……ってアレ!? ログアウトがねえ!? どうなってんだ!? 押しても何も反応しねえ! バグか!」

「やっぱり……さっきの話聞いてないどころかログインもしてないから聞けなかったのね……いいわ、勿体振る時間も惜しいし、要点だけ掻い摘んで説明するわ」

「……私たちは、このゲームの……このアインクラッドの100層を突破してゲームをクリアしない限り、このゲームからログアウト出来ないの」

「……はあ?」

第4話 事件

「兄貴く起きろー。もう朝飯出来てるぞ〜」

土御門舞夏の朝は早い。この学園都市に来ておいてなお、能力開発とは何の縁もない家政婦育成の専門学校である「繚乱家政女学校」へと通う彼女は実習と称し、この血の繋がりのない義兄である土御門元春の部屋に住まい、彼の生活の衣食住のほとんどの面倒を見ている

「はいは〜い、おはようぜよ〜。くあ〜…全く、舞夏の作る香ばしい朝飯の匂いで起きる朝は最高ぜよ…」

「お膳立てはいいから早く食べてしまってくれ〜、遅刻しても知らんぞ〜」

「全く、ニュースキャスターは下手な美人さんなんて使わずにもっと可愛い妹系女子を使うべきぜよ、そうすれば学園都市の朝は平和そのものになるはずぜよ〜」

自宅の食卓に座り、トーストを齧りながら日課である朝のニュースを見ることで土御門元春の朝は始まる。しかし、「学園都市は平和になる」と語る彼の口調にはいわゆる学園都市の闇で生きる「暗部」の人間らしい皮肉がこもっている

「やれやれ、今日も今日とてニュースはSAO一色ぜよ。全く、これじゃ今日は上やんが学校で天狗になるに違い…ない…ぜい…」

愛する舞夏の朝食を食べる彼の手が急に止まる。その理由は何にあるのか、彼が真っ直ぐと見据えるテレビニュースが伝える信じられないような「事件」の内容を目にしてしまったが故、気だるい朝の開ききつていない瞳孔も、そのニュースに釘付けである

ドンドンドンドン!!

「うお!?なんだー?上条んとこのシスターかー?そんなに強くドアを叩くと近所迷惑だぞー?…それにこんな朝早くに何の用が…はいはい、そんなに叩かなくても今開けるぞー」

ガチャ

「ま、まいか!大変なんだよ!大変なんだよ大変なんだよ大変なんだよ!!とうまが!!とうまが!!」

土御門家のアパートの扉を大音量で叩いていた彼女の顔には一目見れば誰でもわかるほどの焦りの色が見えていた、その焦りは彼女の住まう部屋の家主への心配から来るものだった

「ど、どうどう。一旦落ち着け、一体何がどうしたんだ?状況を説明してくれないと私としても分からないぞ?」

「と、とうまが!とうまがお風呂場で変な機会を頭につけたまま起きて来ないんだよ!」

「禁書目録!その話は本当か!」

「うおお!?兄貴か!びっくりしたな〜!」

「ほ、本当なんだよ!さつきも何度も起こそうとしたんだけど、私にはあーいう機械の知識がないから怖くて何も出来なくて…」

「チツ!…クソツ!」

「あ、兄貴!?どこへ!」

「上やんの部屋だ!入るぞ!禁書目録!上やん!」

「い、いらつしやいませなんだよ!」

「風呂場はっ!?上やんっ!!」

土御門元春は上条の家に上がると一直線に風呂場に向かい、頭にナーヴギアを装着したままの上条当麻の姿を目の当たりにする

「なんてことだ…」

「も、もとはる?と、とうまは大丈夫なんだよね?死んだりしてないん

だよね?」

「あ、兄貴?どうなんだ?」

『警備員』だ!舞夏!今すぐに警備員に連絡しろ!今すぐに!」

「警備員!?分かった!部屋に戻って連絡してくるぞ!」

「だ、大丈夫だよね!?とうまは…とうまはちゃんと生きてよね!」

「…いや、これじゃ人間としては『死んでる』も同然だ…」

—————

「ふわああああ、おはようございますお姉さ…んまつ!」

学生が住むには余りにも豪華な部屋で起床する白井黒子、彼女が呼びかける先にはナーヴギアを頭に装着したままの御坂美琴が寝そべっている

「ま、まさか一晩中ゲームをやっていたんですの!?!ちよつとお姉様!起きてくださいまし!流石の私でも看過出来ませんわよ!?!各なる上はこのままお姉様の可憐なるお身体をこの黒子が…黒子が…うひ、うえひひひひひ」

白井が美琴をいくら揺すっても美琴はいつまで経っても返事をしない、1日の始まりを意味する「おはよう」という挨拶の言葉すらもその口から発せられることはない

「あ、あら?ま、まさか本当にゲームしてるまんまですの?お姉様!朝ですの!このままじゃ本当に遅刻してしまいますわよ!」

「……………」

やはり美琴は白井の必死の声にも反応しない

「え、ええ分かりましたわよ、お姉様が悪魔でも起きないとおっしゃる

のなら！この『訳の分からないゲーム』は没収ですよ！そうと決まればコレごと『空間移動』で…」
『ソレ』に触るな白井ツ！！」

怒号と共に彼女らの部屋に入り込んで来たのは、この「常盤台中学学生寮」を取り仕切る寮監である。普段は鬼のような形相でこの寮に住む生徒を取り締まるのがこの彼女。白井のナーヴギアへと伸びる手をを静止させた今、その形相にも多少の焦りが見て取れる。

「ひええっ!!りよ、寮監様!?!ここ、ここ、これは違うんですのよ!?!お姉様は決してこのゲームの遊びすぎのせいで夜更かししていたワケでは…」

「言われなくてもそんなことは分かっている!!」

「…ふえ?」

素つ頓狂な声を上げる白井をよそに寮監は彼女らの部屋にズカズカと上がり込み美琴のベッドの横に行き、その手で美琴の脈拍と心拍、その肌にある一定の体温が感じられるかを確認する

「一先ずは無事…か…」

「りよ、寮監様…?先ほどから何をなさって…というか、何をおっしやっているんですの?」

「…白井、今の御坂の身に起きている事態の全容を語るには私の身はいささか忙しすぎる。これから私は御坂の身元の安全の確保の為に学校側の教員と連絡を取り合わねばならん」

「お、お姉様の身元の安全…?」

「今は何が何やら状況の理解がイマイチ追いつかんだらう、それは私も同じだ。だが先んじておおよその事柄の概要が知りたいのなら、私の部屋に行くといい。お前の能力を使えば鍵は必要ないだらう。机の上に今日の新聞の朝刊がある、一面を読めば今の御坂が何の事件に巻き込まれているかすぐに分かる」

「じ、事件!? 事件って一体なんですか!?! それも新聞に載るような…!」
「ああ、昨今ずっと世間を騒がせていたゲームがまさかこんな大惨事を招くとは誰も思いはしないさ…こんな『SAO事件』なんて悪夢はな…!」

第5話 剣の世界

「・・・俺はやっぱり仮想世界でも不幸だあああああ!!!」

現実世界の面々が事件の概要を知る少し前、上条当麻は今回の事件のおおよその内容を同じくこのデスゲームと化したSAOにログインしてしまった御坂美琴にアインクラッド第1層の次の街へ向かって2人で走りながら説明され終わっていた

「ちよつとーそれをアンタの不幸だって言うんなら私はそれに巻き込まれた被害者じゃない!!」

「んなこと言ったって！気ままに遊び始めたゲームで急に『死んだら現実でも死にます。』って言われたら、そんなの不幸でしかないだろ！」

今まさにSAOの世界を二本の足で走っている上条が同じく走りながら美琴から受けたこの世界のおおよその説明はこうだ

・SAOにログインした全てのプレイヤーが1度、第1層の始まりの街に転移させられ、VR技術の先駆者であり、SAOを作成した張本人「茅場晶彦」が自らこのゲームをデスゲームに変えたという演説があり、その演説の最後に全てのプレイヤーのアバターは現実世界のナーヴギアを介してプレイヤーの顔を認識し、ゲームの世界でもプレイヤー自身の容姿が現実世界と同じ顔へと変貌してしまった。

・メインメニューからログアウトボタンがなくなったのはシステム的なバグではなく、このSAOの世界そのものであるアインクラッドの100層のボスを倒さない限り、SAOにログインした1万人の全プレイヤーはログアウトする事が出来ない。

・この世界でHPが0になりゲームオーバーになってしまうと、現実世界で自分が頭につけているナーヴギアから脳内に強電磁パルスが発生させられ、現実世界の自分もろとも死に至る。

・また外部からナーヴギアの強制停止、解除が試みられた場合にも同様にナーヴギア使用者の脳内に強電磁パルスが発生し死に至るが、既にその行為により何人かの死者が現実世界で出てしまっている。

「でも、裏を返せばそれは100層までたどり着いちゃえばこつちのもんって訳だろ？所詮たかがゲームなんだし、死んじまうって言っても三週間ぐらいすりゃあつという間に誰かがクリアしちゃうんじゃないか？」

「バカね！アンタSAOのβテストの話も知らないわけ!？」

「べ、βテスト？アレか？たしか、SAOが発売される前に製品版じゃない体験版みたいなSAOを1000人ぐらいが試験的にプレイしてたヤツらのことだろ？」

「そう、その1000人のβテストがプレイしてた当時、1000人の内の大部分がインクラッドの攻略に乗り出してたらしいけど、それでも二ヶ月でたどり着いたのは第8層まで、いい？二ヶ月で8層よ!？」

「あ、ああく？えくつとお？二ヶ月で8層だろ？だからつまり、約一週間で1層クリア出来るとして、それが100層まであつて100週間かかるとして、うくん…」

「そんなに単純なペースでクリアできるか分からないけど、そのペースでやってたら100層までクリアするのに約2年かかるってことよ！」

「約2年!?!2年間も俺らは現実じゃ寝たきりなのか!？」

「そうよ！だから誰かがクリアするまで待つてるなんて悠長な構え方してらんないのよ！私だったら2年もこんなゲームに囚われてるのに納得いかないわ！この世界で少しでも私が戦力として役に立つなら、とことん立ってやろうじゃないの！そしたら一刻も早く現実の世界に戻る！アンタはどう!？」

「そんなの当たり前だ！俺だってクリアしたいに決まってる！とことん前線に出て戦ってやるぜ！それに今回は1000人じゃねえ！10倍の1万人だ！そんだけの人数がいりゃあ2年もかからずにクリ

ア出来ちまうぜ！」

「そう言うと思ったわよ！じゃ、一旦ストップ！」

そういうと美琴は急に次の街へ向けて走る足を止め、辺りの草原を見渡し始めた

「えっ!?おいおい！今の話の通りなら次の街まで早く行かなくちゃならないだろ！立ち止まってる暇なんかないぜ！早く走ろうぜ！」

「バカねえ…次の街まで行くのは確かに走ればどうとでもなるけど、ボスとの戦闘は走ってるだけじゃどうにもならないのよ？」

「……!?と、ということとはつまりここで戦うんですか美琴さん!？」

「バカのくせに『そういう』察しだけはいいのね…良いわ、まず私がお手本見せるからよく見ときなさい。そ、それと！本人の許可がないのに勝手に名前と呼んでんじゃないわよ！／＼／＼」

「お前のユーザーネームが普通にリアルの名前なんだから仕方ねーだろ！」

上条が言う通り、美琴とパーティーを組んだ上条の目線の左上には美琴のHPゲージとその上にユーザーネームが表示されており、その仮の名前は現実世界の彼女の名がそのまま英字で「M i k o t o」と表示されていた

「た、たしかにそれもそうだけど／＼／＼まあ呼び方に関しては追々考えるとして、とりあえず私の動きをよく見てなさい」

そう言うとき美琴は自分が背負っている剣を鞘から抜き、その矛先を草原に出現しているイノシシのようなモンスターに向けた

「今から見せるのは、このゲームが『ソードアート・オンライン』と呼ばれる由縁であり、この剣の世界で戦う鍵を握る技…『ソードスキル』よ！」

第6話 現実世界

「か、上条ちゃん！」

慌ただしかつた朝を送り、時刻は昼下がり。上条当麻の病室に入りなり彼の名を呼ぶその歳に似つかわしくない身長と愛くるしさを持つ彼女は、彼の通う学校で彼のクラスの担任の教師を務める月詠小萌である

「せ、先生！上条ちゃんは、上条ちゃんは大丈夫なのですか!？」

「今のところは命に別状はないね。ナーヴギアの電源接続の変更も上手くいったし、特に問題はないはずだけどね…もし仮に問題があるとすれば…やはりこのゲームそのものだろうね…」

そう語りながら今や1人の患者である上条を見るカエルのマスコットによく似た顔をしている医者、この病院で度々上条を手当てし、世界最高峰の名医とも呼ばれる医者、通称『冥土帰し』である

「せ、先生、か、上条は…上条はちゃんと生きて帰ってくるんですよ？」

冥土帰しに上条の安否を心配そうに訪ねている彼女は、上条のクラスメートであり、そのクラスの学級委員を務める対カミジョー属性を持つ女、吹寄制理である

「……………生きている状態でこの病院に来た以上、どんな手を使ってでも治す。というのが僕のスタンスなんだが…すまない、こればかりは断言出来そうにない。なにしろ治そうにも治せない。もはや完全に僕の専門外だ。それに前例がない…」

「そ、そんな……………」

「・・・なんでや・・・なんでなんや上やん!!昨日はあんなに!あんなに嬉しそうに飛び跳ねて喜んでたやないか!それがなんで!こないなことになってしまうたんや!」

彼とそれなりの交友を持つ青髪ピアスは上条の寝るベッドに自らの拳を打ち付け、自分の無念の意を込める。しかし、上条はその行為に行動はおろか、言葉すらも返すことは出来ない

「そ、そういえばシスターちゃんはどうしたのです?」

「・・・ああ、彼女なら先ほどまでずっとこの病室にいたんだが、何やら長身の赤い髪の子と片足の布がなくなっているジーンズを履いた女性と共に部屋を出ていったのを見たナースがいたそうだよ」

「そ、そうですか・・・」

上条を真っ直ぐに見つめる月詠小萌の瞳からは今にも涙が零れ落ちそうである。しかし、彼女はその涙をぐつとこらえ、上条の右手をそつと掴みこう告げる

「・・・上条ちゃんは、本当に世話が焼けるのです・・・でも、それでもやつぱり先生の可愛い可愛い生徒なのです。今回の遅刻は大目に見てあげますが、卒業式にはちゃんと戻ってくるのですよ?先生のこの涙は、卒業式まで取っておくのです。だから・・・ちゃんと元気に帰って来て下さいね・・・上条ちゃん・・・」

—————

「御坂さん!」

「白井さん!」

同じく冥土帰しの病院の一室のベッドで眠る御坂美琴の様子を見に来るセーラー服の少女が2人。頭にお花畑を咲かせる彼女の名は

初春飾利、ロングヘアアの彼女の名は佐天涙子

「そ、それで白井さん！御坂さんの容態はどうなんですか!?無事なんですよね!？」

「・・・無事でいてくれるのなら・・・私だって朝からずっとこの病室にはおりませんわ」

「そ、それじゃあ御坂さんは!？」

「ええ、生きてこそいるものの、SAOの世界に囚われたまま、依然朝から何の変化もございませんわ・・・」

「そ、そんな・・・!!」

「な、なんとかか！なんとかならないんですか白井さん！」

佐天が白井の肩を掴み現状打破の方法がないのか問いたです、しかし白井の身体はまるで魂が抜けたかのように動くことはない

「・・・お姉様がこうなつてしまったのは私のせいですわ：昨晚、お姉様を私がきちんと止めていれば・・・っ！」

「そ、それは違いますよ白井さん！白井さんは何も悪くなんてありません！悪いのは・・・」

「それでも！今の私に出来ることなんて！こうして眠っているお姉様を眺めている事だけですわ!!」

「し、白井さん・・・」

「今までは・・・お姉様と共に多くの困難を乗り越えてきたというのに、今回はこうして指を啜えて見ている以外に何か出来ることはありませんの・・・?『風紀委員』の白井黒子として、お姉様を手助けすることも出来ませんの?」

握りしめた手の甲に涙を落としながら問いかける白井。しかし、美琴が返事をするのではない。その表情、その容姿は普段の天真爛漫な彼女そのものであるのに、そこに彼女としての意志はない

「すいません、御坂さん、白井さん。私は一旦ここで失礼します…」
「うえっ!? ちよ、ちよつと初春!？」

ガラガラッ!

初春は病室の戸を開けると真っ直ぐに飛び出して行く。そしてその背中を佐天が追いかける

「ちよつと初春! いくらなんでも帰るの早すぎじゃない!? もう少しぐらい御坂さんのお見舞いしようよ? 白井さんも大分キテるみたいだし…」

「…すいません佐天さん、後のことはよろしくお願いします…私は私の場所で戦わなくちゃいけないんです!」

「へ? わ、私の場所で戦うって…」

「私だって風紀委員なんです! 『己の信念に従い正しいと感じた行動をとるべし!』私が今取るべき行動は私なりにSAOとナーヴギアを解析することです! そうすればいつかきつと! きつと助けられるはずなんです! 御坂さんも! 今の白井さんも…!」

「初春…」

「佐天さん、御坂さんと白井さんに伝えておいて下さい。『また4人でファミレス行きましょう!』って!」

「…うん! 分かった! こっちは任せなさい! 初春も頑張つて! 頼りにしてるからね! SAOのプログラムを丸裸にしてこい! 目指せ茅場晶彦超え!」

「はい! 風紀委員の初春節利! 行ってきます!」

そう言い残して初春は御坂美琴の病室を後にする、その足取りと顔つきからは確かな彼女の決意が感じられた

—————

「やだ!!!」

「仕方がないんだインデックス！こうなってしまった以上、君を学園都市に置いておく訳にはいかない！」

「やだ！やだっただら嫌だ！とうまは絶対に帰ってくるんだよ！私はどうまが目を覚ますまでずっとここに居るんだよ!!」

場所は変わり、病院の屋上で魔術を扱う彼女らは各々の意見を交わす。啞えタバコを吸いながらインデックスを説得する赤髪の黒い神父は、イギリス清教の『必要悪の教会』所属の魔術師、ステイルⅡマグヌスである

「元々のあなたの首輪の『枷』である『幻想殺しの彼』がああ状況におかれてしまったては、彼はあなたを守るといふ役目を果たせません、イギリス清教としてもこのままあなたを野放しにしておく訳にはいかないんです。分かってくださいインデックス…」

同じくインデックスに優しく諭すように声をかける、腰から人1人の身長はあろうかという日本刀を下げる彼女は、イギリス清教の必要悪の教会所属の魔術師にして『天草式十字凄教』の女教皇、神裂火織

「どうして！どうしてなの!?!とうまはあそこにいる！ちゃんと息だつてしてる！その内絶対にひよっこり起きてくるに決まってるんだよ!!」

「そのいつかが分からないから私達はあなたの元へ来たんです！あなた自身も分かっているでしょう！自分がどういった存在でどういった組織から狙われるのかが！」

「そんなの関係ないんだよ！とうまなんかいなくても私は大丈夫なんだよ！それよりも、今は私がとうまの傍にいてとうまのことを守ってあげなくちゃいけない…!」

「自惚れるなっ!!」

「ひっ!?!……」

「す、ステイル……？」

「いつまでも聞き分けの悪い子供みたいなことを言わないでくれないか!? 君はそれで良くても君の頭の中にある書庫はそうはいかないんだ! 上条当麻の存在がなき今、君を外敵から守れるのは僕らイギリス清教なんだ!! 君の魔導書の知識だけじゃ君は君自身の身を守れない! そんなことも分からないのか!？」

「…ふ、ふぐ…うえ…ひつく…うわああああああ!!!」

あのインデックスには激甘のステイルのものとは思えない程の罵倒が終わると、インデックスは涙を堪えきれず、その場を走り去ってしまう

「あつ…! インデックス!」

「いいんだ神裂、今は監視だけにして彼女を1人にしてあげてくれ…」

「し、しかし…」

「いいんだ…まだイギリスに帰国するには日が残っている。ここで強引に連れて行くより、上条当麻に会うなり、今の上条当麻を見て現実を理解するなりした方がいい」

「…ですがステイル、それではあなたが…」

「僕のこととは気にしなくていい。たとえ彼女にどれだけ嫌われようと、僕はこれから先も彼女を守り、彼女の為に生き、彼女の為に死ぬ」

「ステイル……」

「怨むぞ上条当麻……SAOだか何だか知らないが、そんなもので遊んでいる暇があるなら彼女にその笑顔の1つでも見せてやったらどうなんだ…その右手で彼女を救ったのは曲がりなりにも貴様だろう…! いつまでも寝ているつもりなら貴様の病室ごと骨まで燃やし尽くすぞ…ッ!!」

—————

「おい! アレイスター! 一体どういつもりだ!？」

激昂する土御門元春が問い詰める相手は、「窓のないビル」の唯一の住民であり、弱アルカリ性の培養液に満たされた試験管に逆さまになって浮かび続ける「人間」。学園都市最高権力者にして学園都市統括理事長であり、かつての世界最高最強の魔術師、「アレイスター」クロウリー」

「ふむ、質問の意図を理解しかねるな。どうつもりだとはどういう意味を指しているのかね？」

「とぼけるな！ S A Oに上条当麻が囚われるなんて事態をお前が見過ごすはずがない！ あの幻想殺しはお前の『計画』の要のはずだ!!」

「・・・ふむ、ここでちよつとした講義を行うとしようか。世界を作り出す、その世界そのものの運命を捻じ曲げ改変するという行為を行う上で、君はまず何を思い浮かべるかな？」

「・・・『魔神』」

「結構だ。そう、彼ら魔神は存在するだけで世界に多大なる影響を及ぼし、あつという間にソレを破壊することも、作り出すことも、世界の理そのものを捻じ曲げることも容易い。彼らの最低辺である『隻眼のオティヌス』でさえもそれは変わらない。むしろ彼女ほど世界の改変に特化した魔神は存在しないかのようにも見える。世界の改変という点のみで言えば『御使墮し』なんてものもソレに含まれるだろう」

「・・・それで貴様は今回、自分で必要なだけの仮想世界を作り出し、そこに意図的に介入すべき人物を誘い込み、S A Oにログインさせたというのか」

「左様」

「・・・なんだか今日はよく喋るじゃないかアレイスター」

「ふふふ・・・なに、私は今までこういうった余興には疎かったものでね。少しぐらい喋らせてもらっても君に損はないだろう？」

「ならばその余興の目的はなんだ？ なぜせっかくの『計画』を一旦中断してまで彼らを仮想世界に送り込んだ？」

「中断？ 人聞きが悪いな。私は計画を中断したなんて一言も言ってな

いじゃないか」

「たかがゲームが貴様の計画の過程にあるとでも言うのか？ 勿体振らずに教えてもらおうか」

「やれやれ、そう結論を焦るな。そこは君の悪い癖だ。では講義の続きといこうか、君は『絶対能力進化計画』の為に『樹形図の設計者』が算出した『一方通行』への課題は何だったか覚えているかね？」

「・・・2万体の軍用クローン『妹達』の殺害」

「うむ、2万通りの戦場を用意し2万体の妹達を殺害することで『絶対能力者(レベル6)』への進化を達成する。実に遠回りな計画だ。省略可能な部分はいくらでもある」

「白々しいな、あの計画はそもそもの目的が違う。途中で計画が頓挫するとはお前だつて分かつてやっただことだろう」

「別に私はあの産物を生み出すことにはそこまでこだわってはいないさ、本来の目的である『虚数学区・五行機関』のデータの採取、『ヒューズIIカザキリ』のデータも全て手中に収めた。ならばもう既に用済みだ。私が求めているものはもつと別のものだ」

「別のものだと？」

「いつから仮想世界で得たものは仮想世界でしか扱えないと決めつけたんだい？ いつから仮想世界では能力も魔術も使えないと決めつけたんだ？ 先ほども言っただろう？ 『数値とデータさえ入力してしまえば出来ないことはない』と」

「ま、まさか仮想世界で全て実現させる気か!? その為の『彼ら』だとも言うつもりか!？」

「まあ、私が彼らに与えたプレゼントはあくまでも『彼らの現状』であり、既存のものだけだがね。最も、そこから先の数式とデータを生み出すのは彼ら自身さ・・・」

「・・・気づかないことだつてあるかもしれんぞ、それにその『能力』を使わずにSAOをクリアすれば・・・」

「いいや使うさ・・・彼らはいずれ自分本来の力を使わざるを得なくなるだろう。その為の『計画』。そしてその為の『アインクラッド』さ」

「・・・いいだろう、一先ずは泳がせておいてやる、それまで仮想の城

で悦に浸ればいいぜ、アレイスター」

「・・・1つ講義の間違いを訂正して課題を出しておこう。君は先ほど『その為の彼らなのか』と聞いていたが、能力者はまだしもそもそも『幻想殺し』なんて代物がその世界に必ずしも必要だと思おうかね?」

「・・・」

「・・・だんまりか、まあいいだろう。これは元々課題のつもりだったのだからな。提出期限は特に定めないがね。さあ、行くといい」

「・・・最後に1ついいか?」

「ほお、なんだね?」

「所詮はS A Oもゲームだ。勝つ奴が勝つし負ける奴は負ける。お前の計画は一筋縄に遂行されるとは思わないでおくことだな」

「・・・くくくつ、返す刀で申し訳ないが、私の古い友人に『茅場晶彦』という者がいてね、彼はこのゲームを語る上でこんな言葉を残している」

「これは『ゲーム』であつても『遊び』ではない」

第7話 能力

「どおりやあああ!!」

上条当麻が雄叫びをあげると、ソードスキルの力を得た剣が狼のモンスターを切り裂き、そのHPを全て削り切り、モンスターがたちまちオブジェクト破碎音と共にポリゴン状になり四散した

「ああ〜〜また暇だ〜〜…」

SAOが始まってから約1ヶ月が経った。βテスト時のペースならば既に4層までを突破していてもおかしくはない。しかし、1層を突破するどころかボス部屋を発見することも出来ていない。βテストを含めるプレイヤーの全員が「現実的な死」と向き合うあまり、どうしても慎重になってしまい思うような攻略が出来ずにいた

「俺のレベルも大分上がったはずなんだけど…やっぱ『コレ』だけは慣れねーなあ…」

上条当麻こと彼は今まさに自身のレベル上げや金稼ぎの為にモンスター狩りに出ている。ここまで旅を共にしてきた御坂美琴も、今だけは彼の傍にはいない、なぜなら…

「どうして俺の周りには!!こんなにもモンスターがポップしねえんだよおお!!不幸だー!ー!ー!」

彼の周りでは異様なほど初期出現のモンスターを倒した後に、モンスターが再出現する「ポップ」という現象が中々起こらない。このゲーム内でのモンスターのポップは常に一定の時間間隔で行われるはずなのだが、彼の周りではその法則が何故か働かなくなるのだ。故

に彼のレベル上げはある意味では困難を極め、今までこそ付き合っていた美琴も、ついに痺れを切らし、今日は一旦とことん暴れて狩りをしたいということで別行動を取っている

「はああああ…いつの間に関の不幸は数値で設定されてるものまで打ち消せるようになったんだよ…はあ…やっぱ『コイツ』のせいなのか…?」

そう呟きながら自身の背負う鞆に片手剣をしまい、草原に大の字で仰向けになり大きく溜め息を吐いた彼は、右手を振り下ろしメインメニューを開き、自身のスキルを確認する

「…『幻想殺し』」

そう、彼のスキル項目の中には、いつからかなのか、それとも最初からなのか、現実世界で彼が持つ能力と同じスキルが存在していた

「…でもこれ、やっぱりおかしいよな。最初っからカンストしてるし。そもそもこの世界に異能の力なんてもんあんのか?」

スキルとは、一定の経験値やスキルの反復使用で段々とその数値を貯め、レベルを上げるもののだが、彼のスキル「幻想殺し」はゲームの数値ではもう既に成長の限界に達していた。

「おかげで普通に剣で戦うよりも素手で戦った方がよっぽど強えぜ。でも何だかなあ…怪しすぎて使う気になれねーんだよなあ…」

「…御坂にも言つといた方がいいのかな?これ。でもなあ、それでいざ教えて『じゃあアンタは素手で戦え!』なんて言われるのもなあ…大体それじゃあこのゲームの意味ねえだろ。ここは『ソードアート・オンライン』言つちまえば剣で生きる世界なんだぜ…?」

どうも彼としてはこの剣の世界で生きる以上、自分の拳で戦うのは避けたいようだ。それもそのはずであろう。そもそも剣と拳ではそもそも「リーチ」が違う。拳で戦うならば、その分モンスターに近づかなければならない、当然危険も増える。HPが0になれば現実でも死んでしまうこの世界ではあまりにもリスクが高い

「まー今は考えてても仕方ねえな。とりあえずレベル上げとかねーとな。御坂にドヤされるし、何よりボスと戦えねえ…きてー！やるか！」

そう言つて仰向けで空を眺めるのをやめ、飛び起きる上条。しかし、彼の周りには…

「…いやまだモンスター湧いてねえのかよ!?!流石にそりやないだろ!?!不幸だー!?!」

「幻想殺し」の少年、上条当麻。いずれその能力でこの世界の在り方を根本的に変えてしまう少年。しかし、彼の気苦労は、現実世界でも仮想世界でも絶えることはない

—————

「やっぱり『コレ』…紛れもなく本物だ…」

この彼女、御坂美琴は今SAOの世界でモンスターと戦闘を行なっていた。しかし、それはただの戦闘とは必ずしも呼べない。なぜなら…

『超電磁砲』…なんで現実世界の私の能力が私のスキルとして扱えるわけ？」

彼女もまた、上条と同じくして自身のスキル項目に現実世界と同じ

自分が持つ『能力』を隠していた

「使ったところで本当に発動するなんて確証はない、だから今日だけはコレを試す為に『アイツ』とも理由をつけて別行動にした…でも…だけど本当に使えるなんて…」

半信半疑で使った彼女のスキルは余すことなくその能力を発揮し、「常盤台の電撃姫」という彼女の二つ名に恥じぬ電撃を見せ、周囲のモンスターを全滅させた。

「…確かにこれがあれば私はもつともつと強くなれる。それこそ、βテスターやこの層のボス…いや、もつと先の層のモンスターなんて目じゃないくらいに…」

御坂美琴は仮にも学園都市に7人しかいないレベル5の第3位である。その彼女の能力がフルに使えるのなら、並大抵の敵では彼女を征することはできないだろう

「…でも、だからこそこの『能力』はこの世界じゃ使えないわね…」

そう、彼女、御坂美琴は知っている。強大すぎる力は、自ら周りの人間を遠ざけてしまうということを。そしてその周りからは妬みや嫉みと言った、黒い感情がこもった視線を向けられることがあるということも。彼女は孤独に悩まされていたこともあった。今でこそ白井のような心を許せる後輩がいるが、それまでは周りとのレベルによる『差』という孤独を味わっていた。そしてそれはこのゲームも例外ではない。ネットゲーマーには嫉妬深い者が多い。きつと周りからは嫌われるに決まっている。そう思ったからこそ、彼女はこの能力を永遠に隠しておくことを心に誓った

第8話 決戦前夜

「おーーい美琴ー！」

「遅い！アンタ一体どこで油売ってたのよ！」

ここは第1層の市街地『トールバーナ』。上条当麻と御坂美琴はお互いの狩りを終え、指定した場所に集まっていた。ちなみに、上条が美琴を呼ぶ時はユーザーネーム通りに下の名前ということ。美琴は恥ずかしがりながらも渋々承諾した

「いやあすまんすまん、最後の方になって急にモンスターがポップするようになってな、ついつい時間を無視しちゃった」

「へえ〜？そこまで言ってこの美琴様を待たせたんだから、私を満足させるようなレベルまで到達したんでしょうね？」

「ふっふっふ、何を隠そう！今の上条さんはレベル13でございますのこともよ!?どうだ！今朝より2つもレベルアップしたんだぞ！」

「残念、私はそのまた2つ上のレベル15。やっぱりアンタと狩りに行かなくて正解だったわ。モンスターも続々とポップしてくれるから効率よくレベルも上がったわ」

「なにい!?!とほほ…そこまで断言されると上条さんのにも流石にくるものが…」

「まあいいわ、どつかのご飯屋に入って夕飯にしましょ」

「そうだな、俺もちつとばかし腹が減ったよ」

そして2人は夕食を求めて市街地を歩き出した

「はあく、相つ変わらず味気ないご飯ね、白米が恋しいわ…」

「へっ、お前はそもそもその育ちがお嬢様だからな。少しぐらいは節制を覚えた方が将来役立つてーの」

「そういうアンタはどうなのよ?こんな味気ない定食で寂しくないわ

け？」

「なーにを言ってやがりますか、一汁一菜にご飯がついてるだけで上条さんは幸せですよ。なんだって普段は家に家計と飯をひたすら貪る暴食…シスター…さん…が…」

「……………ッ」

やはり現実世界も上条当麻がSAOに囚われたことにありったけの悲しみの感情が溢れたように、上条もまた、ふとしたことで現実世界のことを思い出して情に脆くなってしまう。それは1ヶ月経った今でもこれから先でも変わらないのだろう

「…ちよつと、勝手に自分で話し広げといて自分で勝手に落ち込まないでくれる？」

「…え？あ、悪い悪い！今さら美琴にこんなこと言っても始まんねーよな！っしや！早く飯食って体力つけねーとな！」

「…別に気にしてないわよ」

「モグモグ…え？」

「そりゃ私だって、現実のことを忘れた訳じゃない。むしろ忘れられる訳ないじゃない。戻れるなら今すぐにも戻ってやりたいわ。ふとした事で脳裏をよぎるのはいつだって現実世界のこと。全く嫌になるわ…アンタがこっちに来てなけりゃ、私は心ごととつくにへし折れてたかもね…」

「…そんなのは俺だって同じだ。俺だって散々恋い焦がれてるんだ、帰りたい場所があるんだ。だから絶対に戻る。どれだけの時間がかかってもだ。美琴、俺たちは必ず2人で一緒にあの世界に帰るぞ」

「ふえ!?う、うん…ありがと／＼」

（ふ、ふふ、2人で一緒になって!!コイツはまた無自覚でこういうことをサラッと…!／＼）

「…いやあ〜でも正直なところ美琴があん時俺を探してくれてなかったら俺としても大分ヤバかったぜ〜!なんせ右も左も分かんなかったし、ソードスキルもお前に教わるまでなーんも分からなかった

「からな！」

「それ笑い事じゃないわよ本当に。まだ私がいたからいいものの、アンタそれがなきや多分今ごろとつくにHPOになって死んでるわよ？」

「でも、それにしても意外だったよ。まさか美琴がゲームにここまで精通してるなんて思わなかったからな」

「別に？ただいきなりこのゲーム始めたアンタと違って、予約抽選に当たった時からネットで事前に情報は集めてたし、取扱説明書だっちゃんど読んでたからよ。アンタの残念な頭脳と私の頭脳を比べないでくれる？」

「ぐふっ、ちゅ、中学生にそこまで言われる日が来るとは…」

「それに、私は元々ゲームが好きなのよ？」

「え、そうだったのか？」

「そうよ、私が超電磁砲ぶっ放す時に使ってるコインは通い詰めのゲームセンターのコインだし。まあゲーセンのゲームと違って、VRMMOどころかオンラインゲームはこれが初めてだけどね…」

「超電磁砲か：なんかそんな響きを聞くのも懐かしいな！そういやあ、現実世界から数えても美琴の電撃は最近全然見てねーな！早いとこ現実に戻ってお前のビリビリを受け止めてやらねーとな！」

「ッ!!」

「？おい美琴？なんか顔怖えーぞ？何かあったのか？」

「・・・何でもないわよ。そんなの気のせいでしょ」

「そ、そうか、ならいいんだが…」

「お食事中失礼するヨ、お二人さん」

「うわっ!?!ちよつとアルゴ！ビックリさせないでよ！」

食事中の2人に突如として声をかける、美琴より一回り背の低い彼女は、このSAOの世界において個人で情報屋を営む「鼠のアルゴ」である

「元氣してたかいみこっちゃん？まあこのシヤレにならないデスゲー

ムの中でも彼氏と2人でイチャつける程度には元気ってどこかな?」
「だからいつも言ってるんでしょ!こ、コイツは私の彼氏なんかじゃない!だ、大体私がこんなやつのことなんかす、すす、好きになんてなるわけないじゃない!／＼／＼」

「どうどう、落ち着け美琴。お前はアルゴに会うといっつもそれだ、それじゃ話が進まないだろ」

「そうだゾ、みこっちゃん」

「こ、このガキ…!」

「で、アルゴ。お前が来たってことはまた何か情報なんだろう?今回はどんな情報なんだ?」

「攻略情報」

「!!」

「つてことはつまり…?」

「ああ…アインクラッド第1層のボス部屋が見つかった。明日、攻略会議が行われル」

「マジかよ…場所は?」

「『トールバーナ』」

「トールバーナか…つてそれここじゃねえか!でもありがとよ。おかげで助かったぜ」

「500コル」

「いや金取んのかよ!?クソツ!言葉1つで500コルも儲かるなんて良い商売してやがるぜ!」

「いいわよ、別にアンタが払わなくても。私の方がモンスター狩って稼いでんだから。はい、アルゴ」

「まいド。ついでにこの最新版のガイドブックも渡しておくゾ。安心しろ、これは無料ダ。元々は道具屋でβテスター達と一緒に無料配布していた物だからナ。βテスターが知る役立つ情報や明日のボス攻略会議に必要なボスモンスターとその取り巻きモンスターの情報なんかも載ってる」

「お!アレ新しいの出てたのか!へへっ、サンキュ!」

「へえ、いい仕事すんじゃない。ありがたく読ませてもらうわ」

「それと…2人にも参考までに現在の死者数を教えておくヨ」

「ツ!?!」

「およそ2000人。まあこれは金が取れるような情報じゃないネ。じゃ、また良い情報が入った伝えにくるヨ」

そう言い残すとアルゴは自分のフードを深く被り直し店を出て行った

「現在の…死者数2000人…か…」

「…その、結構…多くない?」

「多いと取るか少ないと取るかなんてのはその人次第だ。でも多かろうと少なかろうと、死んだ人の無念を晴らす為にも、俺らはこのゲームを最後まで攻略して、生きて帰らなきゃいけないんだ…」

「…それもそうね。さて、これ食べ終わったら早いとこ宿屋に戻るわよ、グズグズしてられないわ。攻略会議は明日、その為の用意もあるし、それに加えてアンタもこの本にちゃんと目を通しておきなさい」

「ああ、やってやろうぜ美琴」

そう語り合いながらアインクラッド第一層ボスを目前にした決戦前夜は、まるでいつもと何変わらぬように明けていった

第9話 βテスター

「なんか…割と少なくないか？攻略会議に出る人」

「どうかしらね…昨日アンタも言ってたように多いか少ないかなんてのはその人の感覚次第よ。でも例え何人で戦うことになるうと、私達はやるしかないのよ」

「…それもそうか」

昨日アルゴから聞いた情報を頼りに上条当麻と御坂美琴は「トールバーナ」まで足を運んでいた。SAOが開始されてから1ヶ月が経ち、その間に実に約2000人のプレイヤーが死亡した。だが、まだ誰も第1層を突破できていない。このゲームを1度プレイしていたはずのβテスターでさえ、昨日まではボス部屋を発見出来ずにいた。しかし、ボス部屋の発見をもつてようやく今日「第1層ボス攻略会議」が行われようとしていた

「じゃ、この辺に座っとく？」

「そうだな。よつこらせ…つと」

半円形の遺跡のような建物に来た2人は周りから少し距離を置いて座席に腰かけた

「はーい!!それじゃあそろそろ始めさせてもらいまーす!!」

2人が座ったすぐ後、1番前で手を叩き大きな声を出し、ここ一帯の注目を集める人物が1人いた。背は高く、青いロングヘアの髪をしていて、盾と剣を背負っている

「今日は！俺の呼びかけに応じてくれてありがとう！」

「じゃあまずは簡単な自己紹介から。俺の名はディアベル！職業は気

「持ち的に、ナイトやってます！」

「ははははっ！ジョブシステムなんてねーだろー！」

そんな軽い冗談を挟みながら攻略会議を始めたディアベルだったが、その笑顔は徐々に薄れていき、真剣な面持ちになり話し始めた

「…昨日、俺たちのパーティーがああ塔の最上階で、ボスの部屋を発見した！」

「!!!」
「!!!」

ディアベルの一言に周囲のプレイヤーもその顔色を変える

「俺たちはボスを倒し、この第2層に到達して、このデスゲームをいつか必ずクリア出来るってことを始まりの街で待っているみんなに伝えなくちゃあならない！それが！今この場所にいる俺たちの義務なんだ！そうだろ!?みんな!!」

「.....」

パチパチパチパチ!!

ディアベルの演説の言葉に、上条当麻は無言で頷く。周りからはディアベルに対する拍手が起こる

「OK！それじゃあ早速だけど、攻略会議を始めさせてもらおうと思う！まずは6人の『パーティー』を組んでみてくれ！」

「パ、パーティー？」

「ほら、静かにしとく。よく聞こえないでしょ」

「フロアボスは単なるパーティーじゃ対抗出来ない。パーティーを束ねた『レイド』を作るんだ！」

「ど、どうする美琴？ここにみんな攻略会議と称した『メイドパーティー』を始めるみたいだぞ？」

「あ、アンタねえ…はああ…違うわよ。ここで言う『パーティー』ってのは、いわゆるグループみたいなものを目指す言葉なのよ。で、メイドじゃなくて『レイド』よ。レイドって言うのはそのパーティーを集めた、例えるならパーティーという車両をいくつも連結させた列車みたいなものよ」

「な、なるほど…分かりやすい…」

「てかそもそも、アンタはもう私と出会ってすぐにパーティー申請してとつくにパーティー組んでんでしようが」

「え、そうなのか？知らなかった…」

「アンタね…ちゃんとウインドウ見てから操作しなさいよ…その内変な条件飲まされて大損しても知らないわよ？」

「か、返す言葉もございません…」

「まあいいわ、6人でパーティー組めって言われてるけど、私たちは2人で十分。むしろ他がいると気を使って逆に動きづらいわ」

「え？いいのか？確かに俺らなら今までずっと2人でやってきたからコンビネーションは抜群だけど、やっぱり人数は多い方が有利じゃないか？」

「いいのよ。私たち2人を含めればここにいる全員の人数は44人。私たちを差し引いたら42人。そしたら丁度他の全員が6で割り切れるでしょ。だったら別に2人のパーティーが出てきても誰も文句は言われないでしょ？」

「じ、じゃあそれでいいか…」

「よおーし！そろそろ組み終わったかなー？」

ディアベルが全体の雰囲気を見計らい、パーティーが組めたかどうかを周囲に確認する

「じゃあ！これから…」

「ちよつと待ってんかー!？」

「えっ？な、何だあ？」

急に背後からなにやら関西弁の叫び声が聞こえた。その声の発せられた方向へ上条を含めた全員が振り向いた

「ほっ、ふっ、よっ、てっ、せやっ、でえい！よつと！ふう…」

会議場の階段を一段一段声を出しながら飛び降り、茶髪のとげとげ頭の男がディアベルの少し斜め前に降り立った

「ワイはキバオウってモンや、ボスと戦う前に、一言言わせてもらいたいことがある。こん中に！今まで死んでいった2000人に詫び入れなアカンやつがおるはずや!!」

キバオウと名乗る男の言葉に攻略会議に参加する面々の顔が曇り、会場はざわつき始める

(な、なんだ…？死んでいった2000人に謝らなきゃいけない人って…一体誰が？どんな理由で…)

「キバオウさん、君の言う『ヤツら』とはつまり、元βテスター達の人のこと…かな？」

キバオウの言葉に対し、ディアベルが発言し、その疑問の解を問う

「そや！決まってるやないか！β上がりのヤツらは、このゲームが始まったその日にビギナーを見捨てて消えよつたやないか！ヤツらは美味い狩場やら、ボロいクエストを1人占めして、自分らだけポンポン強なって、その後もずっと知らんぷりや」

「こん中にもおるはずやで！β上がりのヤツらが！」

「そいつらに土下座さして！溜め込んだ金やアイテムを吐き出してもらわな、パーティーメンバーとして命は預けられんし、預かれん！」

キバオウの演説が終わると、攻略会議の面々はどこかバツが悪そう

な顔色を浮かべるも、何も言いだすことは出来ずにいた。しかし、そんな中…

「ふざけんなよ………」

重苦しい声でそんな言葉を呟いた黒髪のツンツン頭の男がいた

第10話 シスターズ

「ふう、まだまだ問題は山積みだね…」

「先生、お茶を淹れました。少し休憩を挟まれてはどうですか?と、ミサカは高級茶葉を使用した暖かいお茶を差し出します」

そう言いながら冥土帰しにお茶を差し出したのは、御坂美琴のDN Aマップから生み出された軍用クローンの『妹達』10032号だ

「ああ、ありがとう。だがここで休む訳にはいなくてね、君たちのお姉さんがSAOに囚われて1ヶ月も経つのになんの打開策もなくてはどうにも…」

「確かにミサカ達的能力でもナーヴギアの回線経路へのアクセスは不可能でした。このミサカ達にもアクセス出来ないのなら、おそらく先生でも打開策を立てることは不可能であると推測します。と、ミサカはさり気なく電子機器においては先生よりも優位にしていることを主張します」

「君も言ってくれるようになったね。確かにそれもそうかもしれないけどね、これはそういう問題ではないんだ」

「…すいませんが先生の言葉の真意が読み取れません。と、ミサカは何やら哲学的な先生の言葉の意味を問いかけます」

「これはね、治せる治せないの問題じゃないんだよ。自分の専門外だと分かっているけど、私はここで患者の為に私なりに尽力しなければならないんだ」

「先生は医者としてではなく、人としても立派な人物なんですね。と、ミサカは先生への尊敬の念を抱きます」

「そう言ってくれると嬉しいよ。ああ、お茶の方もどうもありがとう、湯のみはもう片付けておいてくれて大丈夫だ。それと、君達の力が必要になる時がいずれ来るかもしれない。その時は力を貸してくれるかな?」

「はい、もちろんです。と、ミサカは最大限のサポートを尽くすことを了承します」

「すまないね、しかしまあ茅場くんも人が悪い。まさかここまで嚴重なプログラミングを仕掛けてくれるとは…」

「…？先生は茅場晶彦と知り合いだったのですか？と、ミサカは問いかけます」

「何度か研究者として顔を合わせたことがあるんだ。私から見ると当時から彼はプログラマーとしても、研究者としても超一流。まさに天才と呼ぶに相応しい人物だったよ」

「何らかの繋がりがあるのなら茅場晶彦の居場所は分からないのですか？と、ミサカは先生の携帯に登録されてる連絡先を伺います」

「いやいや、本当に何度か研究発表などの場で顔を合わせたぐらいですね。連絡先を交換するほどの親しい仲ではなかったさ」

「そうですか…と、ミサカは希望を失いしよんぼりとしています…」

「そうだね、希望と呼ぶなら唯一、君たちのお姉さんの能力ならこのプログラミングを突破できたのかもしれないが…何しろその本人が寝たきりなのだからね…まさに泣きつ面にハチと言ったところかな…」

「そんなお姉様を助け出す為にも、共に事件解決の為に頑張りましょう。これは全世界のミサカ達の総意でもあります。と、ミサカは先生を真っ直ぐ見つめ決意を新たにします」

「ああ、くれぐれもよろしく頼むよ」

（君はあの浮遊城を実現させ、長年の夢であり目標だったものを成し遂げた今…一体全体どこで何をやっているんだい？茅場くん…）

—————

「とうま…」

「……………」

今、純白の修道服を来た彼女、インデックスは上条当麻の病室を訪れていた。彼女がこの病室を訪れるのは、かれこれSAO事件が起

こつてから1ヶ月ぶりである

「久しぶりだね、とうま…元気にしてた？」

「……………」

ピツ…ピツ…ピツ…

インデックスが上条に心配そうに声をかける。しかし、上条は返事など一つも寄越さない。彼の代わりに返事をするのは、ただ一定の間隔で刻まれる彼の心音を示す機械音だけ

「…………ごめんね…とうま…私、ずっと嫌だつて言ってたんだけどね、やっぱりどうしてもイギリスに帰らなきゃいけないみたいなんだよ…」

「……………」

「ごめんね、とうま…一人で置いていっちゃう事になって…」

「……………」

「ごめんね、とうま…いつも私はご飯を食べさせてもらってばかりで…ワガママばかりで…碌に家事の手伝いもしてあげられなくて…いつもとうまの優しさに甘えちゃって…」

「……………」

「ごめんね、とうま…本当はわざとじゃないって分かっているのに…いつもいつも噛み付いたりして…きつと痛かったよね…」

「……………」

「ごめ…ヒツグ…ごめんね、とうま…グスツ…とうまはいつだってわたし…ヒツ…わたし…私のことを助けてくれるのに…エグツ…肝心な時にいつも私は…とうまのことを助けて上げらなくて…ごめんね…ごめ…ごめんしやいなんだよ…」

「……………」

何も答えず、その表情を一つとして変えることのない上条に向けてインデックスは謝罪を続けた。しかし、とうとう我慢の限界が訪れ涙

腺からは涙がとめどなく溢れ始め、その声には嗚咽が混じり始め、大粒の涙が上条のベッドに染みを作り始めた

「ごめんね…ズズツ…本当に一番辛いのはとうまの方なのに…私ばかりこんな泣いちゃって…普通ならこういう時に迷える子羊を慰めて導いてあげるのがシスターの役目なのに…私はシスター失格だよね…」

「エグっ…ひつく…とうまあ…とうまあ…お願いだから…お願いだから何か喋ってよお…ご飯食べるのも我慢するから…掃除だって洗濯だってお料理だってお手伝いするから…だから…お願いだから…目を開けてよ…声を聞かせてよ…いつもみたい…私と一緒に笑ってほしいよ…」

「………」

「ぐずっ…とうまあ…ひつく…とうまあ…とうまあ…とうまああああああああああああああああああああああああ!!!!!うわあああああああああああ!!!!!」

「………」

ついにインデックスは泣き崩れ、上条のベッドに倒れ込むように縫い付き、彼の右手を力一杯に握り締めた。しかし、その右手がピクリとも動くことはなく、病室には一番大切な人を救うことが出来なかった悲しきシスターの叫びだけが虚しく反響していた

「……本当にこれで良かったんでしょか…ステイル…」

「どうだろうな…だが、どれだけ僕達が願ったところで、彼が今すぐ目を覚ますことなどない」

そんな病室の前で、病室のドアの両隣の壁に背を向け体重を預け、神裂とステイルは話し合っていた

「それでもこんな結末…悲しすぎます…」

「……いいのか神裂? 僕の記憶が確かなら君も上条当麻に気があつた

はずだが…」

「構いません。むしろ私の想いの丈など、今のインデックスの足下にも及びません…」

「…そんな風に言われると本当にこうしてあげた事が正しいのか疑わしくなってくるな…僕はただ、彼女のお別れの前に少しでもアイツとの時間が欲しいという願いを聞いただけなのにな…これではここにいる誰もが…心残りを増やしただけじゃないか…」

「…ステイル…」

「行こう、時間だ…彼女を頼む…」

そんな自嘲にも似た愚痴を零した後、ステイルは病室に背を向け歩き始めた。そして、決して誰にも見られぬように、己の不甲斐なさから生まれた怒りに身を任せ、啞えているタバコを強く噛み締めながら、一粒の涙を流した

第11話 説教

「ッ!? ああん!? 誰や!? 今『ふぎけんな』って文句言ったヤツ!」

上条はどういう訳かキバオウの意見が気に食わず、思わず小声で喧嘩腰の言葉を口にしてしまっていた

「ちよ、ちよつとアンタどうすんのよ! あのキバオウって人に聞こえちやってるじゃない!」

「おおい! 出てこいやあ! 今文句言うたヤツ! どうせβ上がりのクソ野郎に決まってるやで!」

「言われなくなつてこつちから出て行ってやるよ!」

「ちよ、ちよつと!」

「美琴、お前はここでちよつと待ってろ」

そう言う上条は一段一段ゆっくりと階段を降り、キバオウの正面に立った

「おいコラ! そのツンツン頭! この期に及んでこないなここに女連れで来るとはええ度胸やないか!」

「今アイツは関係ねえだろ! それに俺は女連れじゃなくてむしろアイツに連れて来られてんだ! そこんとこ勘違いしてんじゃねえ!!」

(あ、アイツ…! 後で覚えるときなさいよ…!!)

「今はそんなことどうでもええんや! ワイが言いたいんは! ワイの意見のどこに文句があるかって聞いとるんや! どうせおのれもβテスターなんやろ! さっきのワイの意見に反発するってことは絶対そうに決まってる!」

「ふぎっけんなよ! 意見だけで人を判断してんじゃねえ! 俺はβテスターなんかじゃねえしバリバリのオンラインゲーム初心者なんだよ!」

「な、なんやと!？」

「さつきから黙って聞いてりやβテストがどうの、βテストから詫びを入れられなきゃ納得出来ねえし、パーティーとして命を預かれないって…お前はそんなに恥ずかしくないのかよ!!」

「そ、そんなんやとお!？」

(あーあ、始まった…アイツの説教が…)

「なんでそうやって歪み合うんだよ!先に始めたとか、後から始めたとか、熟練者とか初心者とか関係ないだろ!みんな同じ仲間じゃねえか!ここにいろみんなは!いつかこの世界から生きて帰るって志の下にここに集まってんだよ!」

「な、なんや!だったらワイらとβ上がりのヤツらとの差は仕方ないっちゅーんか!アイツらはそもそも自分自身がよけりやそれでいいって思っとなあ…!」

「生きることになっっちゃダメなのかよ!死にたくないのは誰だって同じだろ!今までに死んでいった2000人だってそれは同じじゃないのかよ!死にたくないから、この世界から生きて帰りたいから、自分の力でなんとかしたいって思ったから始まりの街から出てモンスターと戦ったんだろ!だったらその意思にはβテストも何もないはずだ!!」

「そ、それは…」

「その思いがあつたからこそ!今ここにこれだけの人が集まっているんだ!それを考えるなら、今ここで一番自分勝手なのは他の誰でもない!お前だろキバオウ!お前がさつきから言っていることは、人が生きたいと願って苦勞して集めたものを横から奪い取ってまで自分の安全を確保したいって言うてるのと同じなんだよ!そんなのは間違っているんだよ!ここにいろみんなに対して一番失礼なのはお前なんだよ!」

「お前はそれでいいのか!?今ここで仮にβテストからアイテムやら金をもらえたとして、それが原因でこの先その人が死にそうになったらお前はなんの罪悪感もなくその人を見殺しに出来るのか!?俺にはそんなこと絶対に出来ない!だったら俺はそんな物もらってもちっ

とも嬉しくなんか……！」

「おい、もうその辺にしといてやれ」

「ない!!それに……えっ……?」

キバオウに向かつて熱烈な説教を続ける上条の肩に手を置き彼に静止を促したのは、背中に斧を背負った屈強な体格をしている外人顔の黒人であった

「落ち着いて目の前のトゲトゲ頭をみてください。もうお前に返す言葉もなくなってるぞ」

「……」

「あつ、そうなのか……すまん、いつもならこうなつた時、絶対最後にぶん殴るからイマイチ止めどころが分からなくてな……」

「そ、それもそれでどうかと思うがな……まあ周りを見てみるよ、少なくともお前の言葉を聞いてたヤツは全員お前の意見に賛成のようだけ……?」

「……ヘンツッ!」

その場の雰囲気を観察するとキバオウはいたたまれなくなったのか、鼻息を荒く吹いて上条から顔を逸らすとヘソを曲げた子どものように最前列の席に座り込んだ

「さつ、お前も戻れ。やつとこの攻略会議の本題が始まるぞ」

「そうだな、サンキュー。えつと……」

「エギルでいい。お前には興味が湧いた。会議が終わったらまた話そう」

「そうか、ありがとなエギル。また後で会おうぜ!」

そう言うとう上条とエギルは自席に戻り腰を降ろした

「よし!じゃあ再開していいかな?」

ディアベルが問いかけると会場の皆が頷くなどして各々が了解のリアクションを示す

「街の道具屋で配布されていた最新版のガイドブックによると、第1層のボスの名前は『イルファング・ザ・コボルド・ロード』というモンスターだ。それと、『ルイン・コボルド・センチネル』という取り巻きモンスターがいることも事前に判明している」

「ボスの武器は斧とバックラー、4段あるHPゲージの最後の1段のゲージが赤くなると、曲刀カテゴリーの『タルワール』という武器に持ち替え、攻撃のパターンが変わる。ということだ!」

「攻略会議は以上だ!最後に、アイテム分配についてだが、金は全員で自動的に均等に割る。経験値は、モンスターを倒したパーティーの物。アイテムはゲットした人の物とする。異存はないかな?」

ディアベルの言葉に異を唱える者はおらず、みんなの目からは肯定の意が見て取れる

「よし!ではそれぞれの準備もあるだろうから、出発は今から1時間半後の10時30分とする!では、解散!」

その言葉を最後に攻略会議は終わり、プレイヤーは各々の準備を整える為にその場を後にした

第12話 疑惑

「さて、じゃあ私たちも一旦準備しに街に戻りましょ？回復アイテムとか道具屋で可能な限り買つとかないと、流石にザコと違ってボスマンスターは何が起こるか分からないわ」

「あ、ちよつと待ってくれ美琴。実はちよつとこの後…」

「よう、さつきぶりだな」

「お、わざわざ来てくれたのかエギル、悪いな」

「なに、気にすることはない」

上条当麻の言葉を遮り彼に話しかけるのは、先ほどのキバオウの一件で彼らの仲裁…もとい上条の暴走を止めたエギルであった

「あ、そうだ。俺がまだ名乗ってなかったな。俺の名前は上やん。そんでこつちがパーティーメンバーの美琴だ」

「あつ、えつと…ど、どうも…」

「あつはっは、そんなにかしこまらなくてもいいさ。どうせこれから一緒に戦うんだ。仲良くしようぜ」

「おう！改めてよろしくなエギル！」

そう言つて上条とエギルは熱い握手を交わした

「おう！それはそうと、さつきはすごかったな。それにお前のおかげで助かった。実を言うと、俺もあの時発言しようとは思ってたんだが、どうやら俺よりもパンチが効いた言葉だったようだ。お前の演説には俺も心を打たれたよ。改めて礼を言わせてくれ」

「よ、よしてくれよ…そんなつもりで言つたんじゃないんだ…それにアレは何つーかいつものクセみたいなものじゃないか…」

「そう言えばさつきも言つてたが、最後は決まってるぶん殴るって…お前一体リアルではどんだけクレイジーな生活送ってたんだ？」

「ん〜つと…まあ、そういうことが起こる街に住んでたんだよ」

「ああ〜つと…スマン！リアルへの詮索はマナー違反だな。許してくれ」

「いやいや、大丈夫だ。そんなことは気にしない」

「そうか…ありがとな。じゃあ、俺はもうそろそろ行かせてもらおう。パーティメンバーを待たせてるんだ。また後で会おうぜ。上やん、お嬢さん」

「おう！またな〜！」

そう言うのとエギルは2人に背を向けてパーティメンバーの方へと歩き出す

「さて、俺たちも一旦街に戻るとするか」

「そうね、時間もないしそろそろ…」

「ちよつと待ってんか〜!!?」

そう言つてその場を離れようとする2人を止める男が1人。先ほどβテスターに関して上条と一悶着起こした彼、その名はキバオウである

「あ？あー誰かと思つたらお前か…え〜つと、名前が思い出せない…ちよつと待ってくれ…え〜つと…」

「アンタ仮にも自分があんだけ説教した相手なんだから覚えといてあげなさいよ。マキバオーよ」

「キバオウや！誰が馬か！」

「ああ、そつかキバオウだったな。なんか用か？」

「ああ、すまん。話の前にあんはんの名前を聞いてもええか？」

「ああ、俺は上やんだ」

「上やんはん…さっきはスマンかったな、あんはんの言葉のおかげで自分が間違つてたことを自覚できたわ、ホンマにスマンかった！」

「あーいや、分かつてくれたならいいんだ。俺たちはもう同じ敵と戦

う仲間なんだ、仲良くしようぜ。ああ、紹介しとくよ、こっちは美琴。2人で同じパーティー組んでんだ」

「おお、ミコトさんか。さつきはスマンかったな、口論ん時に引き合いに出したりして。ちなみに俺はディアベルはんと同じパーティーに参加しとるんや、よろしくや」

「はいはいよろしくね、マキバオーさん」

「だからキバオウや！ええ加減覚とかんかい！」

「で、なんだが上やんはん…！一つワイのお願いを聞いてくれへんか？」「お願い？なんだ？言ってみてくれ、俺にできることなら何でもするぜ！」

「じゃあ上やんはん！ワイを一発殴ってくれ！」

「え？ええっ!?殴ってくれ!？」

「そや！ワイの根性はひん曲がつとる！男として鍛え直す為にもここでワイを一発殴ってくれ！そうすればワイの中でもちゃんとアンタを対等な仲間になれて命懸けで守ることが出来るんや！今のままじゃ罪悪感で仲間を名乗りきれん！頼んます！」

「い、いや…でもなあ…」

「いいじゃない、殴ってあげれば。そういう性癖の持ち主なんですよ？」

「ちやうわ！ワイはドMとちやうわ！で、どやろか上やんはん？やってくれまっか？」

「…分かった、そこまで言うなら思いっきり行くぞ!!」

「ホンマか!?おおきに！」

「あーあー、男って本当にバカね。手に負えないわ」

「っしやあー！来い！」

そう言うときバオウは歯を食いしばり頬を上条の前に突き出す

「いいぜ…お前がそこまでβテスターが許せねえってんなら…」

上条は自身の右手で握り拳を作り地面に踏み込み、最高の一撃を叩

き込む構えを作る

「まずは！その惨めな『幻想』をぶち殺す!!」

バキイイイイイイ!!!

上条の右拳が完璧にキバオウの顔面を捉えたその瞬間、上条は妙な違和感を拳に覚えた。そう、まるで上条当麻の右手が「何かに反応した」ように…

「どわああああああっ!!!」

「……………えっ?」

キバオウは上条の拳により、ゆうに2、3メートルは宙を泳ぎ吹っ飛ばす。しかしここは安全圏内であるためHPは減らないが、上条は自身の感覚で分かっていた。自分の右手がキバオウに当たった瞬間、右手に宿る幻想殺しが何かを壊したことを

(俺の幻想殺しが反応した…?でも一体何に対して?異能の力がキバオウに働いてんのか?それともキバオウ自身が異能の存在なのか?)
「つつか〜!!!効いたで上やんはん!確かに痛みはあらへんが、あんはんの意思がしっかり乗った意味のある拳やったわ!しっかしあんはん腕力高いなあ、まさかここまで吹っ飛ばすとは思わへんかったわ。こりやその腕力で繰り出される剣技があればボス戦も楽勝やな!」

(…おろ?ここ安全圏なのにHPが今ので減つとるがな…バグか何かか?…まあええか、生きとるし)

「あ、ああ…」

「ほな!世話かけたな!ワイはこれでおさらばするわ!おおきに!ボス戦でもよろしく頼みますわ!」

「お、おう…またな…」

そう言うとキバオウは2人にひとまずの別れを告げ走り去って行った

(…気のせいなのか？なんだかんだでこの世界で右手を使ったのは初めてだったが…せめて…この世界で定義されてる「異能の力」が何か分かれれば…)

「……ねえ、ちよつとアンタ。ひよつとして今のつて…」

「えっ!? な、なんのことだ!？」

「……まあいいわ、それよりアンタのせいで時間を使い過ぎたわ。とつとと街に戻って買い出しに行くわよ」

「あ、ああ！ そうだな！ 悪かった！ 行こう！」

(…さっきのアイツがキバオウさんを殴った後の反応は一体何？ それに「この安全圏内でHPが減った？」…もしかして、私にも現実の能力があったように、アイツにはアイツの右手が残ってるってこと？ まだまだ分からないことだらけね…でも、それにしてもやっぱりお互いの能力は隠しておくべきよ…いずれ私達自身の身を滅ぼすことになる。それだけは全ての真相が分かった時にアイツにも伝えないと…)

こうして上条の幻想殺しが一体何に発動したのか、それとも発動していないのかすらも何も分からないまま彼らは歩き出す。美琴は真相を知りたい意欲と彼を心配する気持ちを胸の内に秘めるが、その真相の解を見出し、心の曇りが晴れる日を知る者はまだいない…

第13話 ヒースクリフ

「お願いします！1機だけ！1機だけでいいんです！それか話だけでも！どうかお願いします！お願いします！」

「あのねえ！いい加減にしつこいよ君！早く帰りたまえ！」

この1人の警備員に必死に頭を下げる彼女、初春飾利は今、ナーヴギアとSAOを開発した大手企業である「ARGUS」の本社ビルの目の前に来ていた。彼女がARGUSを訪ねた理由は、解析の為にナーヴギアとSAOを譲ってほしいという願いを聞き入れてもらう為だったのだが、本社ビルに入って担当者に話を聞いてもらうことすらも叶わず、ビルの警備と口論になっていた

「風紀委員として救わなければいけない命が！救いたい命がいくつもあるんです！その為に協力して下さい！お願いします！お願いします！す！」

「風紀委員なんてたかだか学生の団体じゃないか！警備員ならまだしも、流石に君ら風紀委員には何も協力できないよ！」

「無理を承知なのは分かってます！必要とあればお金だっていくらでも払います！一機だけあれば十分なんです！お願いします！お願いします！」

驚くことなかれ、実は彼女はかれこれこうして1時間以上も警備に頭を下げ続けているのだ。すると警備も根負けしたのか、渋々といった感じで口を開こうとしていた

「はあ、分かった分かった。じゃあここだけの話をしよう」

「ほ、本当ですか!? 一体どんな話なんですか!？」

「ただし！本当にここだけの話だ！他言は一切無用！誰が君に話したのか聞かれても私だとは答えないこと！これを守るのなら話そう」

「はい！約束します！」

「ふう…実はね、ここまでやらせてしまった君には大変気の毒な話なんだが…実は事件が起こったすぐ後に政府から規制が敷かれてね。もうこの会社に残ってたナーヴギアとS A Oは全て設計図も含めて回収されてしまつて、製造ラインも廃止されてしまつたんだ。だからもうこの会社にはナーヴギアとS A Oは一つも残つてないし、一つも作ることは出来ないんだよ…」

「そ、そんな…！」

「さつきも言つたが、警備員の人達も何度かこの会社に来てるんだ。だが君と違つて会社内には通して担当者と話すんだが、それでもされる話は今君にしてる話と同じ。だから警備員の人もナーヴギアとS A Oは入手出来ていないんだ」

「え!?警備員でもですか!?!」

「ああ、それとこれは会社内の社員の友人から聞いた話なんだが、ここでは入手出来ないと分かつた警備員がナーヴギアとS A Oを回収した政府に直接掛け合つたそうなんだが、政府も決してナーヴギアとS A Oを表には出そうとしないんだ。だから結局のところ警備員もナーヴギアとS A Oは入手出来ていない。ナーヴギアとS A Oを解析して事件の解決に当たつてるのは政府の人間だけなんだ。何故かは知らないがね」

「そ、そう…ですか…」

「すまないね、力になれなくて。だが、君が救いたいと語る人達の命運を心より祈つているよ」

「いえ、こちらこそ長い時間申し訳ありませんでした。その話を聞いただけでもとてもありがたかつたです…どうもありがとうございました。それでは…」

そう言つて初春はA R G U Sを後にした。しかし表情は暗いままである。手にしたものは結局のところ情報のみ。しかもその情報は事態を好転させる情報というよりも、むしろさらに絶望へと突き落とされる情報だった。もはや自分には打つ手はないのではないかと初

春は酷く肩を落とした

ピロリン♪

「…メール？佐天さんから…ああ、そうでした…ずっと学校以外で2人で会う機会が取れてないから久しぶりに2人でファミレスに行く約束をしてたんでしたね…『すいません、今から行きますね』つと…さて、行きましようか」

—————

「いらっしやいませ！一名様でよろしいでしょうか？」

「いえ、待ち合わせです」

「かしこまりました！ごゆっくりどうぞ」

「あ！初春！こっちこっちー！」

「あ！佐天さん！」

ファミレスにてドリンクバーのみを注文し初春の到着を待つ彼女、佐天涙子は久しぶりに学校以外で会う彼女を見るやいなや手を振って自分の存在をアピールしていた

「いやー！初春とファミレスに来たのも久しぶりだね！」

「すいません、最近風紀委員の方でも忙しくって…」

「ううん！いいのいいの！しかもうー1月だね。随分と寒くなつたね、空気も乾燥してお肌に悪いよ」

「もう、佐天さんってばー。白井さんみたいなこと言わないで下さいよ」

「そう言えば白井さんは大丈夫なの？私はあの時から会ってないけど、風紀委員では会ってるんでしょ？」

「はい、確かに最初の頃はずっと気分が沈みっぱなしでしたけど、今じゃすっかり元の白井さんですよ。『お姉様がなき今、日頃お姉様が懲らしめていたスキルアウト達を私が取り締まらなければいけません』

んの！』って」

「あつはっは！初春の白井さんのモノマネ初めて見たけど似てる似てる！」

「そ、そうですかあ？えへへ／／／」

ファミレスで楽しく会話をする2人のようすは事件が起こる前のいつもの彼女たちそのものだった。しかし、やはりあの事件は楽しさで誤魔化して無視すべきものではない。今日の初春の行動の予定を知っていた佐天は初春の今日の首尾を知るために話題を切り出す

「それで初春、A R G U Sに行つてナーヴギアとS A Oは手に入ったの？」

「それが……」

佐天に今日の出来事を聞かれ、初春は佐天に対しても口外しないことを条件にA R G U S本社の前で話をしてくれた警備員が語った今回の事件の後のA R G U Sの状態、政府の対応、警備員の現状についての情報を話した

「警備員でも事件の解決に関われないって：一体政府の人達は何を考えてるんだろ……」

「分かりません……どうやら製造ラインも止まっただけでなく、社内にあつたナーヴギアとS A Oの設計図とプログラミングデータも全て回収されたせいで、A R G U S社自体も事件解決には関われないみたいですよ……」

「……ますます謎は深まるばかりだね……」

「そうですね……どうやらこの事件はどうにも一筋縄ではいかないみたいです……実は私、もっと根本的に違う何かがこの事件には関わってる気がしてならないんです……」

「こ、根本的に違う何かって……？」

「具体的には分かりませんが、すごい違和感がするんです。な

んと言うかこの事件、ナーヴギアとS A Oを作った張本人である茅場さんらしくないんです…」

「え？初春って茅場さんと知り合いなの!？」

「い、いえいえ、知り合いではないんですが、純粹にプログラマーとして以前まで尊敬していて、彼の生い立ちや功績について色々調べて知っていたんです。でも、そこから見えてくる茅場さんの人間性と、今回の事件を起こした茅場さんの語り方って…なんと言うか別人のような感じがするんです」

「なるほど…でも、その茅場さんに関してネットの情報全てじゃないんだし、そこからだけじゃ茅場さんの全ての人柄なんて見えないんじゃないのかな？」

「ええ、確かにそれは自分でも分かっているんですが、それを抜きにしても、引つかかる事はまだあるんです」

「その引つかかることってどんなこと…?」

「やはり、この学園都市の政府の対応です。統括理事会なんて名前でもしか聞いた事ありませんが、どうにも怪しすぎるんです」

「あ、怪しすぎるって…?」

「表側に出てる情報だけじゃ限界があると思って、佐天さんを見習って都市伝説とか、出回ってる噂について語られてるネットの掲示板をひたすら漁ったりもしてみたんです。でも、その情報もどれもおかしいんです」

「おかしいって…そもそもあーゆうネットの情報ってほとんどがマユツバものじゃない?」

「それ佐天さんが言っちゃうんですね…でも、おかしいって言うのはそう言う事じゃないんです。元から嘘が書かれてるとか、最初っから信じられない話を書いているとかじゃなくて…」

「た、例えばどんな?」

「情報がどれも全て矛盾するように書き出されているんです。何か1つの情報が出ればその情報を打ち消すような話が出てきて、両方の言い分が両方を打ち消し合うようになってるんです」

「じよ、情報で情報を打ち消しあってる?それってつまり…」

「はい、まるで何かを意図的に隠してるようにしか思えないんです。それもS A O事件に関する事ばかり。他の噂も掲示板には出るのに、それはほったらかし。S A Oに関する事件だけは必ずどんな情報が投稿されても、その後にその情報が矛盾し合うように新しい投稿があるんです」

「い、一体なんで…」

「私にもそれは分かりません…ですが恐らく『誰か』が、あるいは『何か』が意図的に情報を隠してることに間違いはないと思っています…」

「都市伝説系に関しては初春よりも歴が深いつもりだけど…そんなの私でも聞いた事ないよ…」

「はい…なんだか私、嫌な予感がするんです…」

「嫌な予感？」

「まるで、底知れぬ何かを覗き込んでいるようで…この事件は何かが違うんです。この学園都市の…統括理事会の根本的なものを見ているような気がしてならないんです。まるで…私たちからは普段見ること出来ない、この学園都市の底知れない『闇』を覗いているような…」

「学園都市の…『闇』…」

「ま、まあ！なんの確証もない話なんですけどね！多分気のせいだとは思いますが！それに私のこういう予感って大抵外れちゃいますし！」
「そ、そっか…まあそれにしてもやっぱりナーヴギアとS A Oが一つぐらいなきや状況は変わらないよね…」

「はい…そうですね。せめて機器自体が手に入らなくても、A R G U Sが設計したナーヴギアとS A Oの設計図とプログラミングデータさえあれば解析自体は難しくはないんですが…」

「うくん、やっぱり振り出しのまんまかあ…ごめんね初春、私こういう時何も力になれなくて」

「いえいえー…こういう話を聞いてくれるだけでも助かってます！ありがとうございます佐天さん！」

「そっか、そう言ってくれると嬉しいよ初春。その努力に免じて今

度スカート捲ってあげるよ〜」

「学校で散々やつてるじゃないですかー!／＼／＼」

「あははは!それじゃ私はもう出るね。実は今日家に新しい音楽プレイヤーが届くんだ。初春はどうする?一緒に出る?」

「いえ、どうせなので飲み物とパフェを食べて行きます。それじゃ佐天さん、また明日学校で!」

「うん!また明日ね!バイバイ!」

そう言つて佐天はファミレスを後にする。そして初春の元には店員に注文したソフトドリンクとパフェが運ばれ、それを自身の口へと運ぶ

「うん!甘〜い!ひさしぶりですけどやっぱりこのパフェは美味しいです〜!」

(・・・しかし、一体何なんでしょうか:まるで正体が掴めません:なぜ政府はそこまでしてSAOを外に出したがるらないんでしょう?それこそ、フェブリちゃんとジャーニーちゃんを助けた時の「STUDY」のような:)

「まあそれも:学園都市に『闇』なんて部分があるなら:の話ですが:」

途中で初春の思考はつい小声で口から漏れてしまっていた。すると、それに答えるように初春の後ろ側から声が聞こえてきた

「.....『深淵をのぞく時、深淵もまたこちらを覗いている』」

「.....えっ?」

「すまないね、実は先ほど2人でいた時から話が聞こえてしまっていたね。今のはニーチェの言葉さ、本当はもう少し長い言葉なんだがね。意味はご存知かな?お嬢さん」

そう言つて初春に向けて話し始めた男は少しだけ後ろを振り向き、

影のかかった横顔のみを見せるようにして初春に話しかける。口元からは今まで飲んでいたのであろうコーヒーの香りが漂っている。背は初春より一回り以上大きく、目と眉は細く鋭い。髪の色は茶色に近く、まるで研究者のような白衣を着ている

「えっ? い、いえ…ご存知ありませんが…」

「実はこの言葉に明確な意味はなくてね…哲学的な言葉でそれぞれの人の解釈によってこの言葉の意味は変わってくるのさ」

「は、はあ…」

「お嬢さんはこの言葉の意味、どう捉えるかな?」

「え、えっと…深淵をのぞく時、深淵もまたこちらを覗いている。でしたよね? そうですね…『物事の本質を見る時に、物事の本質に自分自身も試されている…』ということでしょうか?」

「ふむ、そういう解釈を取るか…面白いね、君は」

「あつ、はい…ありがとうございます…」

「さて、それでは答えさせてしまった以上、私の解答を答えるべきかな? 私としてはこの言葉はいわば…深淵、つまりは『深い闇を一度覗いてしまえば、その闇に魅せられ、いつの間にか自分も闇に取り込まれてしまう。』という意味なんじゃないかと思う」

「…闇をのぞけば、闇に魅せられて自分も取り込まれてしまう…」

「そう、まるで今の私のようにね…」

「…えっ?」

そう語る白衣の男の目は、どこか遠くを見ているようで、何も見えていないような虚ろな目をしていた

「いや、なんでもない。今のはただの独り言だ、忘れてくれていい」

「は、はあ…」

「ところで、君はナーヴギアとSAOの設計図を欲しがっていたね」

「えっ!? あ、すいません! さっきの話が聞こえてたならどうか誰にも他言しないでください…」

「いいや大丈夫さ、心配してくれなくてもいい。こう見えて私はナーヴギアとS A Oの設計に関わっていた人間でね。実は君が今望むデータを持っているんだよ」

「ええっ!?ほ、本当ですか!?そ、そのデータを譲ってもらっても…」
「声が大きいな、この内容が機密だということは君の方も分かっているんじゃないかな?」

「はっ!?／＼す、すいませんでした…そ、それでそのデータを譲っていただく訳には…」

「ああ、構わないさ。データのコピーは自宅にも残っているからね」
「ほ、本当ですか!」

「ああ、このUSBにナーヴギアとS A Oの設計図とプログラミングデータ…いわゆるその全てが入っている。大切にしてくれたまえ…」

そう言つて白衣の男は小さなUSBメモリを初春に手渡した

「は、はい!ほ、本当にありがとうございます!!」

「こうしてこのデータをまだ純粋な意志のままに求める誰かに出会ってしまったのも何かの縁だ。名前を聞いてもいいかな?」

「…?えっ…あっ!は、はい!風紀委員第177支部の初春飾利です!」

「初春飾利君か…良い名だ。覚えておくことにするよ」

「本当にありがとうございます!し、失礼ですが私の方もお名前を伺つてもよろしいでしょうか!」

(…あれ?今まであんまり顔見えてなかったけど、よく見てみるとなんかこの人どこかで見たことが…)

「ふむ…実は今ワケありで本名を名乗る訳にはいなくてね…」

「えっ…あっ…!すいません!離婚されてしまったんですか!?気が使えずに申し訳ありません!」

「あ、いや違う、そういう訳ではないんだ。謝ってくれなくてもいい。そうだな…私の名は…『ヒースクリフ』と名乗っておこう。余裕があれば覚えておいてくれたまえ。さて、僕はもう店を出るよ…実はこの

後少し用事を控えていてね」

「は、はい！ヒースクリフさん！この度はどうもありがとうございます！ございました！このデータ大切にします！」

ヒースクリフと名乗る男が席を離れ、初春はその男の背に向けて頭を下げた

「頑張ってくれたまえ、初春君…その『闇』は君の言う通り君の本質そのものを試す。私のように取り込まれるかどうかは、この先の君次第だがね…」

ヒースクリフと名乗る男は小声で聞こえないようにそう呟くと、ファミレスを後にし、学園都市の裏路地へとその姿を消していった…

第14話 ボス戦

「いい？作戦を再確認しとくわよ？私たちの役目は、ボスの取り巻きの相手をする事。モンスターが来たらある程度攻撃して傾合いを見て『パリング』で弾いて隙を作る。そしたら『スイッチ』して2人で入れ替わりで戦う。今までも何回かこのコンビネーションで戦ったことあるから問題は特にないわよね？」

「おう、任せとけ」

上条当麻と御坂美琴は今、アインクラッド第1層のボス攻略会議を経て、ボス部屋を目指して攻略会議の面々とダンジョンを進んでいた

「しかし、情報だけじゃ実感湧かないんだがやっぱ強いのかね？ボスってもんは」

「さあ？私も戦うのは初めてだし、そもそもβテスターじゃなきゃ戦ったことなんてないわよ」

「まあ、それもこの中にβテスターがいたらの話だけだな…」

「正直なところ、私としては何人かはいてほしいところだけどね。戦力になるのは確かだし、戦況によつては苦戦しないとも限らないわ。ひよつとしたらこの中から死者が出るかもしれないし…」

「死なせねえ」

「・・・え？」

「この中の誰も死なせやしねえ。仲間はず絶対に守り抜く。もちろんお前だって守り抜いてみせる、必ずだ」

「うえええ!?!あ、ありがと／＼／＼」

(ほ、本当にコイツは無自覚でこういうことを平気で…!)

「おっと、そろそろ目的地に着いたみたいだぜ」

かくして一行は塔のダンジョンの1番上にあるボスの部屋にたどり着き、全員を先導して来たディアベルが後ろに振り向きみんなに向

けて言った

「みんな、聞いてくれ、ここまで来たら俺から言えることは1つだ！勝とうぜ！」

その言葉に全員が頷き、各々の装備した武器を構える

「行くぞ…」

ギギイ…バン!!

その言葉を言い終えると同時に、ディアベルが重く厚いボス部屋の扉を開け放つ、そしてゆっくりと前進し全員が部屋の中に入る。すると部屋が急に明るくなり、目の前に巨大な斧と盾を持つ大きな赤い牛のようなボスが現れ、取り巻きの小さなハンマーを持ち、西洋風の鎧を着た取り巻きモンスターが出現する

「グオオオオオオオオ!!!」

「キキイツ!!」

「攻撃！開始イイイイ!!!」

「うおおおおおおお!!!」

ボスの咆哮と迫ってくる取り巻きモンスターに負けじと、ディアベルが隊を鼓舞するかけ声を出し、それに答えるように全員がモンスターに立ち向かっていく

「おりやつ！」「せやつ！」

「キキイツ！」

「喰らえっ！」「死ねっ！」

「グオオオツ！」

事前に立てた作戦通りにパーティーで分かれて戦闘を行い、取り巻きと戦う者も、ボスに立ち向かう者も必死になって戦っていた。もちろん、上条当麻と御坂美琴の2人も…

「キイツ!!」

「だあっ!美琴ツ!!スイッチ!!」

「任せなさい!『スター・スプラッシュ』!!」

「ギギイイイツ!!」

(ツ!?!本気的美琴ってこんなに強かったのか!?もはや早すぎてレイピアの剣先が見えない!!)

上条が敵の攻撃を剣で弾いて隙を作る「パリング」を決めると、その隙を逃さず美琴が前列の仲間と入れ替わる「スイッチ」で敵の前に割り込み自慢のソードスキルを発動し、モンスターのHPを削り切る。たちまちモンスターは光のオブジェクトとなり四散して消える

「よっしや!討伐完了!」

「まだまだ行くわよ!他のパーティーの援護!」

「あいよ!」

「おいっ!ボスが来るぞっ!全員気をつけろ!」

「!!?」

2人がボスと戦うパーティーの声かけに反応して振り向くと、ボスの最後の段のHPゲージが赤ゾーンまで到達していた

「ガアアアア!!グオオツ!!」

するとボスは今まで装備していた斧とバックラーを投げ捨てた

「どうやら情報通りみたいやなディアベルはん!」

「みんな下がれっ!俺が出る!」

「おー!!行っけー!!ディアベル!!」

(・・・えっ?!?ここはパーティーで取り囲んで止めをさすのがセオリーのはずじゃ・・・)

武器を入れ替えようとするボスの前にディアベルが1人で躍り出る。そのセオリーにすぐわかない行動に美琴を含め何人かは疑問を抱くが、誰もその行動を止めず、上条に至ってはディアベルを応援している

「行くぞっ!!!」

ディアベルの構えた剣がソードスキル力を得て眩しく輝いた

「グオオオオオオオツツツ!!!」

しかし、ここでボスマンスターは周囲が予想だにしない行動を見せた

(あれ?あれただの刀じゃねーか?曲刀に持ち替えるんじゃないのか?)

(タ、タルワールじゃない!あれは…『刀(ノダチ)』!!事前の情報と違う!)

(な、何ッ!?タルワールじゃないだ?!?βテスト時の行動と違うッ!クソッ!!)

「グオオオオオオオオオツツツ!!!」

「ぐわああああっっ!!」

ディアベルがボスの予想外の行動に困惑している隙を突くかのようにはボスが持ち替えたノダチでディアベルの身体を切り裂く。その一撃によりディアベルの身体に切り込みが入り、まるで血のように切り込まれた傷が赤く染まる

「ドイツ、ディアベル!!大丈夫か!？」

負傷したディアベルの所へと上条当麻が駆け出す

「あ、ちよ、ちよつとアンタ!!あーもうしようがないわね!みんな一旦退いてガードを固めるのよ!ボスの行動は事前の情報と違う!ガードしながら攻撃パターンを探るのよ!」

「りよ、了解した!」

「みんな!ミコトはんの言う通り一旦退いてガードを固めるんや!」

美琴の指示にエギルやキバオウが反応し全員に伝達する。みなその指示に従い一旦ボスモンスターから距離を取る

「大丈夫かディアベル!?待ってる今回復アイテムをつ…!!」

バシツ!!

「えっ?」

「ダメだ、上やん君。僕にはそれを受け取る資格はない」

上条が回復アイテムを差し出すもディアベルがそれを手で制し受け取ることを拒む

「どっ!どうしてだ!?このままじゃお前死んじゃうんだぞ!？」

「いいんだ…みんなを騙して少し欲を出しすぎてしまった…きつとそのバチが当たったのさ…」

「よ、欲を出しすぎた…?バチが当たった…?な、何言ってるんだよお前…」

「上やん君…良いことを教えておくよ…βテスターからのアドバイス、きつとこの先でも役に立つはずさ…」

「なっ!?アンタβテスターだったのか!？」

「ははっ、まあね…実はボスに止めをさしたプレイヤーには、金や経験

値やドロップアイテムとは別に『ラストアタックボーナス』という報酬が入るんだ：僕はβテスターだったから元から知っていたんだがね…」

「だ、だからお前はあの時、パーティーで攻めずに1人で特攻して…」「そういうことさ、仲間には話しておいても良かったんだが…どうしても言い出せなくてね…最後はやはり自分の欲が勝ってしまった…その結果がこれだ…βテスターは所詮この世界じゃみんなの嫌われものだ…こんなんじゃないやみんなに合わせる顔がない…」

「デイ、ディアベル…」

「上やん、君はここにいる誰よりも意志の強い人間だ…正直なところ、異議を唱えたキバオウに堂々と自分の言葉を叩きつけた君を心の底からカツコいいと思ってしまった…その意志があれば、きつとこの世界でも強く生きていける…頼む、このゲームを…必ずクリアしてくれ…みんなのために…!」

ガシヤアアアアアン!!

その言葉を最後にディアベルのHPゲージは0になり、上条当麻の腕の中でいくつもの光の散りとなって消えた

「嘘…だろ…」

「デイ、ディアベルはんが…死んだ…?」

第15話 四面楚歌

「まさかこんな思わぬところでナーヴギアとSAOの設計図とプログラミングデータが手に入るなんて…！運命としか思えません！今日ばかりはこの運命の出会いをくれた神様仏様に感謝しかありません！」

先ほどヒースクリフと名乗る研究者風の男から、自らが欲しくてやまなかったナーヴギアとSAOのデータが入ったUSBを手渡された初春飾利。自身の有り余るほどの幸運に驚いたのか、彼女の胸の内の高揚感はまだ収まりそうにはない

「こうしちゃいられません！さっさとこのパフェを食べて支部に戻ってこのUSBの中身のデータを確認して解析作業に移らないと…！」
「失礼、お嬢さん」

不意に横からそんな事を言われた。知らない人にこのファミレスで声をかけられるのは今日だけでもう2度目だ。パフェを食べる手を止めてそちらを見ると、何だかガラの悪そうな少年がそこに立っていた

「はあ。どちら様ですか？」
「垣根帝督。人を捜しているんだけど」

垣根と名乗る少年は、ワインレッドに似た色のいかにもホスト風の服の内ポケットから一枚の写真を取り出し初春の前に差し出す

「このおっさんがどこへ行ったか、知らないかな？」

そう言われて初春は差し出された写真をじっと見る。すると、その

写真には先ほどまで自分と話していたある男性の顔が写っていた

「・・・!!ヒースクリフさん:!!)」

「どうかな?どこへ行ったか分かるかな?」

「・・・」

初春飾利は垣根とヒースクリフの写った写真を何度か交互に見比べ、それから首を横に振ってこう言った

「いいえ。残念ですけど、見ていないですね」

「・・・そうか」

「どうしても見つけられないなら、警備員の詰め所に届け出を出した方がいいと思いますけど」

「そうだね、だけでももう少し自分で探してみるよ。ありがとう」

につこりと笑いながら垣根は言つて写真を胸ポケットに戻し、そこから立ち去った。それを見ると初春は一度手を離れたスプーンを持ち直してパフェをすくうと口に運びかけたが

「ああそうだ、お嬢さん。1ついい忘れた事があるんだけど」

「・・・?なんですか?」

「テメエが『茅場』と何かを話してた事は知ってたよ、クソボケ」

(えっ!?茅場っ!?!?)

ゴンツツ!!

「ツツ!?!?」

初春のこめかみの辺りに衝撃が走る。それが殴られた為に受けた衝撃だと気づくいた時には既に椅子から転げ落ちていた。それに続くようにテーブルや他の椅子も倒れてしまう。まだかなり残っていたパフェも雑に地面にぶちまけられた。ファミレスの店員や他の客の悲鳴が聞こえる。何が起きたか判断は追いついていないが初春は

起き上がろうとする。

「ツ！くっ……！」

「おっと」

「あぐ!？」

しかし、起き上がろうとする初春をもう一度仰向けに倒し足で踏みつけ、床へと押し付ける

「だから俺はこう尋ねたんだぜ? 『このおっさんを知りませんか?』
じゃなく『このおっさんがどこへ行ったか分かりませんか?』ってな」

ゴキゴキツ!!

「うぎっ!?!うあああああああああ!?!?」

初春の肩に乗っている垣根の足に体重がかけられ、鈍い感触と共に骨と骨とが擦れ合い激痛が初春を襲った。骨が関節から外されたのだ。あまりの痛みへのうち回りたくなる初春だが、垣根がそれを上から押さえつけている為、ただただ痛みで絶叫することしか出来ない

「実を言うとな、目的は茅場晶彦じゃねえんだ。ヤツだけが持っているナーヴギアとSAOに関するデータが欲しいだけなんだ。お嬢さんなら今俺が何のことについて言ってるかの意味が分かるだろう?」

（や、やっぱり間違いない…茅場晶彦って…つまり、私が話していた人は「ヒースクリフ」なんて名前のんじゃない…どこかで見たことがある顔だと思ったら、昔の頃に尊敬して調べていた写真の中のあのんじゃない…本物の茅場晶彦だったんだ…!）

初春の心の中では先ほどまで話していた男に関しての全ての伏線が回収され1つの解が導き出されていた。しかし、それは今まさに目の前に迫るピンチを打開するための解にはなり得ない

「・・・なに・・・？」

垣根の眉がその言葉を理解出来ないと言っているかのように動かされる。初春は震える唇で、また言う

「聞こえ、なかったんですか・・・？ならもう一度言つてあげます・・・」

ありつただけの力を、感情を込めて言い放つ

「死んでも・・・渡しませんっ!!」

「・・・ほお？」

「このUSBは希望なんです！世界中の人々を救う為の・・・私の大切な友達を救う為の希望なんです！私だけこんな痛みに負けるわけには・・・いかないんです！みんな戦ってるんです・・・御坂さんも・・・白井さんも・・・佐天さんも・・・みんな戦ってるんです！私だって戦えます！だからこのUSBは絶対にあなたなんかには渡しません!!」

そう言い放つた後、初春は垣根を睨みつける。絶対に負けまいと。死んでもお前が望んでいる物は渡すまいと。その眼力で、垣根に訴える

「・・・良いだろう」

そう言つて垣根は彼女の肩から足を退ける。しかし、その足は地面にはつけない。初春の顔の上に一度持つて行き、そこから上へ振り上げる

「俺は一般人には手を出さないが、自分の敵には容赦はしないと云つたはずだぜ。それを理解した上で渡さねえって判断したなら、それはもう仕方ねえ。だから試してやるよ」

垣根は振り上げていた足に力を込める。まるで空き缶でも踏み潰すかのよう

「死んだテメエが、本当にソイツを渡さねえのかをな」
「ッ!!」

ブオンツツ!!という風圧に初春は垣根を睨みつけていた目を思わず瞑ってしまう。もう自分の身を守ることにも出来なかったのだ。しかし、垣根の足が彼女の頭部を捉えることはなかった

バツゴオオオオオン!!!!

「・・・ガッ!？」

もはや目では追えないほどのスピードで垣根の後頭部をファミレスのレジが襲う。レジに入っていた硬貨は音を立てて散らばり、紙幣は羽のように宙をひらひらと舞う。垣根は怒りの表情を浮かべ、振り降ろしかけた足を地に返し、レジの飛んできた方向へ振り向く。それと同じくして、垣根の先にいる誰かを初春も視認する。そして初春は初めて目にする。学園都市最強のレベル5の姿を

「・・・まったく、シケた遊びでハシャいでんじゃねエよ。三下」

「痛ってえな第1位・・・」

「・・・第...1位・・・」

初春はまだ何が起こったのかの全貌が掴めておらず混濁している。そして垣根の言葉に耳を疑う。噂程度にしか聞かなかった学園都市の第1位が今、自分の目の前にいるのかと、本当にこの人が本物の第1位なのか、そしてこれは本当に現実なのか...と

「結標、暴れんのにこの花女が邪魔だ。飛ばせ」

「・・・えっ?」

第1位と呼ばれていた男が何かを話したと思ったら初春の身体はファミレスから消えてなくなっていた

「ああ？今結標って言ったのか？オイオイ、あの露出狂まで来てんのかよ。にしては姿が見えねえなあ…こんなんと遊ぶぐらいだったら多少の露出癖は大目に見つから俺と遊ぼうぜ〜？」

「安心しなア、テメエの遊び相手は俺がちやあんとやってヤンよ」

「ああ？遊んで欲しいのはテメエの方だろ白うさぎ」

「死ぬまで言ってる永遠の2番手が」

「・・・テメエ殺す」

「出来もしねえ事口走ってンじゃねエぞ三下」

た 学園都市の第1位と第2位。一方通行と垣根帝督がここに激突した

第16話 死闘

「グオオオオオオオツツツ!!」

「む、無理だ：最初っからこんな：こんなヤツに勝てるはずなんかあったんだ!」

「い、嫌だあつ!俺は死にたくねえっ!!俺は死にたくねえんだ!だ、誰かアイツを倒してくれ!!」

「わ、私にはまだ5歳の可愛い娘がいるんだ!!こんなところで死ぬわけにはいかないんだ!誰か：誰か頼むうっ!!」

「ちよっ!ちよつとみんな落ち着きなさいよ!まだ勝負は終わってないのよ!?勝手に諦めて絶望してんじゃないよ!!」

ディアベルというこの全員のリーダーの「死」が皆に与える影響は想像以上に強かった。だがそれはディアベルでなくても同じだったのかもしれない。目の前で見る自分以外の誰か「死」はより明確な恐怖を与える。次に死ぬのは誰か：次は自分の番かもしれないという目には見えぬ恐怖がより一層人々を困惑させるのだ。だが、そんな死の恐怖に怯える人の中で、この少年だけは違っていた。そう、誰よりも近くでディアベルの死を見ていた上条当麻だけは…

「……」

（『頼む、このゲームを：必ずクリアしてくれ：!』）

「……ちゃんと受け取ったぜ、ディアベル：お前の想いを：願いを：お前の：『命』をつ!!任せろ：こんなふざけたゲームはいつか必ず終わりにしてやる!!」

そう言つて上条は立ち上がる。怯えることなく、絶望せず、その胸に「必ずこのゲームを終わらせる」という確かな意志を持って

「アンタならそう言うと思ってたわよ」

「美琴…」

「アンター人で倒せんのか？私の力があつた方が良いんじゃない？さっきの取り巻きで大半のヤツに止めさせたの私の方でしょ？」

「・・・ああ、助かる」

「おいしい、俺にも手柄を残してとってくれよ？」

立ち上がった上条の隣に美琴とエギルが左右に並んで立つ

「エギル…ありがとな！それじゃあ行くぞ2人とも!!」

「アンタこそ！しくじって私達の足引っ張るんじゃないわよっ!!」

「おうっ!!」

「グオオオオオオオオオツツツ!!」

「どりやあああああっ！」

ギリギリギリギリッ!!

ボスが振り下ろす刀と上条の剣がぶつかり合い、つばぜり合いになる

「重ツ…すぎる…!」

「『リニア』!!」

美琴が上条とボスの間に割って入り、ソードスキルの力を得たレイピアの突き技でボスの刀を弾き飛ばした

「グオオツ!」

「美琴ツ!」

「ボスの攻撃は思ったよりも強い！2人じゃなきや受け切れない！2人ずつでローテーションして戦うわよ！」

「お、おう分かった！」

「グオオオオオオオオツツツ!!」

「次右来るぞ！パリング！」

「はあああっっ!!」

「エギル！スイツチ!!」

「任せろ!!オラアアアツツツ!!」

エギルのソードスキルがボスに炸裂しHPゲージを減らす

「よしっ！いいぞっ!!」

「ギギイイイ!!」

「!?まずいつ!もう取り巻きが湧いてる!!」

気づけばボスの相手をしていた3人の周りには、先ほど倒していたボスの取り巻きモンスターが3体もポップしていた、万事休すかと思ったその時

「そいつらは任せろおおおっ!」

「うおおおおおっ!!」

「ギギイイイ!!」

「み、みんな!?」

先ほどまで怯えきっていたプレイヤー達が3人を援護するように取り巻きモンスターの前に割り込み元々組んでいたパーティーで戦闘を始める

「センチネルは俺たちに任せろ!お前たちはアイツを頼む!」

「分かった!助かる!」

「アンタ!今の内に回復しときなさい!2人ずつでローテーションするから今はエギルさんと私で...!」

「グオオオオオオツツ!!」

「!?マズイッ!ミコト!余所見するな!攻撃来るぞ!!」

「えっ!?しまっも...!?きやああああああ!!!」

ズバアアアアアン!!

「美琴ー!!大丈夫かー!?」

「あっ!...ぐっ...」

ボスの一撃が美琴を完璧に捉えた。美琴に赤い切り傷が入りHP

ゲージがみるみる減るが、0になるすんでの所で止まる

「ツ！大丈夫だエギル！まだ美琴のHPは残ってる!!」

「!!よしっ！オラア！バケモノ！今度は俺が相手だ！これ以上ミコトに傷はつけさせねえぞ!!」

「グオオオオオオ!!」

「どわっ!?クソツ!!」

「エギル!!」

「エギルさん！」

ボスの刀とエギルの斧がぶつかり合うが、エギルの力が負けてしまい押し返されてしまう

(くそおっ！どうする!?今のボスのHPを見る限り、俺の右手のパワーなら異能うんぬんじゃなく普通に1発ぶん殴れば止めをさせる！でもそれだとどうしてもリーチと隙がねえと…！)

「グオオオオオオオツツ!!」

上条がボスに目をやると、ボスの刀は今にもエギルに斬りかかろうとしていた

「クソツ!!迷ってる暇なんかねえ!!」

そう自分を鼓舞すると上条は自分が持っていた剣を背中の鞘にしまい、ボスに向かって一直線に走り出す

「エギル！1回でいい！なんとかボスの攻撃をパリングしてくれ！」

「!?わ、分かった！おっしや任せとけ!!」

「あ、アンタ一体何する気!?!」

「そこで見たりやあ分かるよ！」

「喰らいやがれ！パリングなんかには使うのは勿体ねえが、これが今の俺の最高の、ソードスキルだあああああつ!!」

ガキイイイイン!!

エギルはソードスキルを使い緑色に光り輝いた斧をアッパーカットのように振り上げ、斬りかかってくるボスの刀を思い切り弾き上げ、ボスも思わずその巨体の体勢を崩した

「オオオオオツツ!?」

「いぞエギル!スイツチ!」

「おうっ!…ツ!?お、おい上やん!お前素手なんかで何を!」

「どりやああああつ!!」

エギルの疑問には答えずに上条はエギルと場所を入れ替わりボスの目の前になると、右足で踏み切り、一回り以上は大きいであろうボスの顔の目の前までジャンプした

「…今もどつかで見てんだろ、だったらその目を開いてよく見とけよ茅場晶彦…お前はこんな世界を作ってさぞご満悦かもしれねえがな…こんなゲームまで使つてなお…人の命を弄ぼうってんなら…」

「そんなふざけた幻想は…この右手でぶち殺す!!」

ドガアアアツツツ!!!

「グオアアアアアアアアツツツ!?」

ガシャアアアアアン!!!!

「Congratulations!」

上条の右拳がボスの顔面に炸裂した瞬間、ボスのHPを全て残さず削り切り、まるで断末魔のような叫びを上げ、ボスモンスターはまばゆい光を放ち、光の結晶となって爆散する。そして上条達の目の前に、彼らの勝利を讃えるテキストが現れた

第17話 新メンバー

『今回はやりすぎましたね』

「・・・ちっ、またオマエか」

『まあ、ああなつたあなたを止められる人はこの都市には数えるほどしかいませんからね。例えば身内とか。その身内も、今回はなぜか止めに入れなかったようですが・・・』

「んなこと知るか、ああなつたら大半の意識は他には行かねエ、目に見えてたのはあのムカつくメルヘン野郎だけだ」

学園都市最強のレベル5である一方通行は今、救急車の中で傷の手当てを受けていた。しかし、本物の救急車ではない。この車は病院には行かない。そういう所とは違う場所に運ばれるのだ。傷の手当ては全て医療機器が行うため、電話を誰かに盗み聞きされることもないので、一方通行は傷の手当てを受けながら携帯電話で統括理事直轄の暗部に精通する上司と電話をしていた。

『・・・分かっていますよね?』

「チツ」

しかし、なぜ彼がここまでの傷を負いその手当てを受けているかと言えば、先ほどまで学園都市最強の彼に続く順位をもつ垣根帝督との戦闘が原因である。垣根は一方通行の反射を自身の能力である「未元物質」を駆使し無効化してきたのだ。そうなれば一方通行には彼の攻撃を防ぐ手立てはない。幾つもの傷を負い苦戦を強いられた。しかし最後には切り札である「黒い翼」を使い、戦いの中でその力を覚醒させ更にパワーアップした垣根の実力をも遥かに凌駕し、垣根を文字通り叩き潰した。しかし、その代償として学園都市の一区画をほぼ破壊し尽くした

「分かった」

電話の相手の言い分を舌打ちしながら聞き入れる一方通行

『こちらとしても考えはしたのですが、結果としてあなたは目先の事に囚われすぎて本来の目的であるデータの奪取を達成し得なかった。しかし、垣根帝督の居場所に関する情報を教えて任務を与えたのは私ですし、もう少し与えられた情報を上手く活用してほしいものです』
「ああ？何言ってるんだ？USBの奪取に成功してんだろ？が、結果がああに能力で…」

『私が任務を命じたのはあなただけです。その話の限りでは任務を達成し得たのは『グループ』という事になりますか？』

「ちっ、屁理屈じゃねえか…」

相手の言い分に舌打ちして頭を抱える一方通行

「でエ？そのペナルティは？」

『単なる借金ではもうあなたに実感は湧かないでしょうし、処分するには惜しい人材でもあります。ですので、今回はこちらが手配する少々の長旅に出てもらいます』

「長旅だア？ケツ、オマエらはいつから旅行会社まで経営するようになったんだオイ」

『到着地にもう既に旅券とパスポートは送ってありますので、あなたは直に新しい世界へ旅立つことになります』

「ああ？そりや一体どういう意味で…」

『では、良き旅を…』

プツツ…ツ…ツ…

「チツ…おい！オイ！…クソが、切りやがった…」

電話の相手は何の前触れもなく突然電話を切る。一方通行はその電話の相手の態度にイラつきながらも、電話が終了していることを画面で確認すると携帯電話を閉じた

(新しい世界だア…？連中また何か企んでやがるな…どうにも面倒く

せエペナルティをもらっちゃったなア…)

一方通行がそんなことを考えていると不意に車が止まる。どうやら目的地とやらに着いたようだ。傷を手当てしていた医療機器も役目を終え、アームや器具を折りたたんで収納されていた

「着いたみてエだな…さて、行くか…」

一方通行は救急車のベッドから起き上がり杖をつきながら車を降りる。外に出るとそこは学園都市の裏路地にあるとあるビルの前だった。しかし、暗部などが好んで使うような廃ビルではない。むしろ、裏路地にあるのが場違いなほどに見えるくらいに丁寧に整備されているビルだった

「ヤケに設備の良い場所だな…本当にここで合ってるのか？」

そう言いながらビルの前に立つ一方通行。ビルの自動ドアが開き、これまた綺麗なオフィスが見えた。一方通行はゆっくりとビルに入った。

「…誰もいねエのか？」

ピーン！

あまりにも静かすぎる為かそんな思考が一方通行の頭の中をよぎる。しかし、そんな思考を遮るかのように、右手のエレベーターが到着した合図である電子音を鳴らす。するとそのエレベーターからよく知るようであり知らない人間が三人出てきた

「よう。お疲れさん」

「…何でオマエらまでここにいんだよ」

「私たちが詳しい訳は知らされてないわ、これでまた仕事の話なら正

直もう帰りたいわ」

「自分も気になって土御門さんに聞いては見たのですが、『仕事の話でもあるが仕事だと断言はできない』なんて事を言っていて…ここに集められた真相は土御門さんしか認知していない状況です」

エレベーターから出てきたのは暗部組織『グループ』のメンバー、土御門元春と結標淡希、海原光貴の3人だった

「そういう事ならさっさと要件を話せ土御門。こちとらこの後に旅客機をチャーターされてんだ」

「まあまあ、みんな一旦落ち着け。とりあえず任務ご苦労だった。まあ一方通行に關してはスマンなかつたな。結果的に手柄のほとんどもを横取りすることになって」

「自覚があんならなおのこと悪いがな。特にテメエの場合は」

「まあ、おかげでいくつもの暗部組織が血眼になって探していた茅場晶彦は逃したが、本筋の目的であったデータの入手には成功した。だが問題がまだ1つ残っている」

「・・・問題ですか？」

「ああ、データを手に入れたはいいが、ウチの組織にはこういったデータの解析、実行…まあ平たく言えばデータや電子機器系統を扱えるプロフェッショナルがいらない。このままじゃこのデータは俺たちが持っていたとしても猫に小判、豚に真珠だ」

「まあ確かに言われてみればその通りね。私たちは所詮その後の事を考えずに仕事としてそのデータを回収しただけだし」

「そこで、今回はその為のバイト…もとい協力者を雇った」

「協力者ですか？」

「ああ…入ってきてくれ！」

ガチャ…

土御門が声をかけるとビルの一室から1人の中学生ぐらいの少女が出てきた

「あア？…テメエ確か…」

「あら、バイトってあなたの事だったのね」

「既に顔見知りか何人かいるみたいだが、改めて紹介しよう。非正規構成員ではあるが、俺たちの新しい仲間になった『初春飾利』だ」

第18話 死闘の果てに

「Congratulations!」

「終わった……のか？」

「あ、ああ……勝った……俺たちが……勝ったんだ……！」

「「やったああー！！！！」」

自分達の栄光を告げる表示を見るなり、ボス部屋にいる全員が自分達の勝利に湧き上がった

「はあ、はあ……クツソ……マジでビビった……寿命縮むかと思っただぜ……いやHPは縮んでんのか……笑えねえ……」

「アンタ、お疲れ様。まあ最後の1発に関しては現実世界のアンタのやってる事と大差ないけど」

「美琴!?お前大丈夫なのか!?!」

「あのね、一応ちゃんとしたゲームなんだからHPが勝手に減るわけではないですよ?ちゃんと回復はしてあるわよ」

（やっぱり気のせいなんかじゃない……さっきのキバオウを殴った時みたいな感じはなかったけど、コイツにはコイツ自身の現実の能力がこの世界でスキルとして宿ってる……私と同じで……）

「そ、そうか……なら良かった……」

「……ええ」

「よくやったな上やん！」

「おおエギル!お前もナイスアシストだったぜ！」

「いや、俺のアシストなんて霞んで見えちゃうほどの見事な一撃だった。Congratulations. まさか素手で止めをさすとは……この勝利は、アンタのものだ！」

「いや、そんなことないさ……この戦いの勝利は、ここにいるみんなで掴

んだものだ」

パチパチパチパチパチパチ!!

「イエーイー!」「いいぞいいぞー!」「すげえよ!」

この戦いを終わらせた上条の一言に拍手が送られ、賞賛の言葉が寄せられる。しかし、そんな中…

「なんでや!上やんはん!!」

「…えっ?」

全員から少し離れた場所に、キバオウを始めとしたディアベルのパーティーメンバーの面々の顔が見えた。そして、その中心にいるキバオウから上条に対しての言葉が向けられる

「なんで…なんでディアベルはんを見殺しにしたんや…」

「み、見殺しって…ち、違う!あれはアイツが自分の意思で俺の回復アイテムを受け取るのを拒んで…!」

「ちやうわ!そういうことを言うてるんやない!!」

「…えっ?」

「なんで、なんで最初っからその右手で戦ってくれなかったんや…」
「ッ!!?」

「ワイには分かる!あんはんの右ストレートを一回もろたからな!あんはん本当は元から剣で戦うよりも拳で戦った方が強いんやろ!あのボスの残りHPはともソードスキル使っても1発で削り切れるような量やなかった!なのにアンタはその拳1発で削りきった!これが紛れもない証拠や!」

「だったら…上やんはんが最初っからその拳でボスと全力尽くして戦ってたら…ディアベルはんはこの戦いで死なずにすんだんちやうんか!」

「そうだ…」「言われてみれば確かに…」「なんで…」

「ちよ、ちよつと…」

「……………」

キバオウの言葉があまりにも的を射ている為、上条は何も言い返すことが出来なくなつて黙り込んでしまう。キバオウの意見に周りも反応してその意見に流されてしまう

「見損なつた…見損なつたで上やんはん！ワイはアンタを本物の男やと思つてた！今この瞬間まではな！アンタはただの臆病者や！自分が死ぬのが怖いからわざわざ少ない人数でパーティー組んで取り巻きモンスターの方にわざと逃げた臆病者や!!」

「!!!」

「ちよ、ちよつと！それは違うわよ！そもそもこの2人のパーティーで行こうつて提案したのは私の方で…！」

「…いいんだ美琴…キバオウの言う通りだ」

「そんな訳ないわよ！アンタには何一つとして悪いところなんて…！」

「この右手とその実力を隠してたのは事実だ。言い出す機会なんていくらでもあつたのだから事実だ。最初から全力でやれば、ディアベルがああ時…死なずにすんだのかもしれない。最後までお前と2人きりのパーティーだったのだから、俺がお前を説得出来なかつたつてのもある。お前が俺なんかを庇ってくれる必要もない」

「そ、そんなの…」

（そんなの私だつて同じよ…！私だつて誰にも…アンタにでさえも能力を隠してたのよ！なんでそんなに自分だけを責めるのよ！アンタはいつだつてそうじゃない！周りの人を助けることばかり先に考えて、自分のことはいつとも二の次じゃない！たまには自分のことだけを考えたつていいじゃない…！）

「ああ、認めるよキバオウ。俺は確かに剣で戦うより、素手で戦つた方がずっと強い。そういうスキルを持つてることも下らない価値観でこれまでずっと隠してきた」

「!!やつと白状しよつたな…！こんのプレイヤーの面汚しが！何が

『この戦いの勝利はみんなで見えだものだ』や！白々しいにもほどつてもんがあるわ！」

「ッ！このッ！アンタいい加減にしないと……！」

「やめろ美琴」

「嫌よ！だってコイツが……！」

「やめろっつってんだ!!!」

「!!!」

上条は美琴に向けて怒鳴った後、右手を振り下ろしメニューを開いた。そしてウインドウを操作し美琴とのパーティーを解散させる。すると美琴の前にもそれを知らせるウインドウが目の前に表示された

「……!!? ぱつ……パーティー解散って……!!アンタ！こ、これから先はどうすんのよ!？」

「心配すんな、一人で気ままにやっていくさ」

「ひ、一人でって……!ふざけて言ってるの!?!このゲームをソロでプレイすることがどれだけ危険か分かってるの!?!HPが0になったら死ぬのよ!?!例え途中でまでソロでやれてたとしても、ソロプレイには絶対的な限界がある!それにアンタはソロで良くて、このままじゃ私までソロになっちゃうじゃない!お断りよそんなの!」

「……すまん美琴。それでも今の俺には、ここにいるみんなと一緒に戦う資格なんかないんだ……」

「や、やだ……やだ……」

上条の悲痛な声を聞き、彼の暗い表情を見ていた美琴の目からは涙が溢れ始める。その涙を見てもなお、上条の意志が変わることはない

「でも、お前は違う。お前までこの先ソロでやる必要はないさ。新しい人達とパーティーを組めばいい。お前は強い、それにお転婆でワガママだけど、なんだかんだ言って可愛いところもあるからな。お前を仲

間にしたがるパーティーは少なからずはいるはずだ」

「行かないで……行かないで!!」

「今まで世話になったな美琴。じゃあな。この先、もしもお互い死んでなかったらまたどこかで会おうぜ」

そう言い残し上条当麻は御坂美琴に背を向け、第2層へと続く扉の闇に消えていった

第19話 座標移動

時間は少し前、一方通行と垣根帝督がファミレスで激突した直後に巻き戻る

「ぴぎや!？」

「あら、可愛い悲鳴ね」

「こ、ここは…?」

「さっきのファミレスの近くのビルよ。ここならさっきみたいなのは来ないから安心なさい」

つい先ほどまで一方通行と垣根が合間見えていたファミレスにいた初春だったが、一瞬でどこか分からないビルの中に移動していた。その原因は彼女に語りかける上半身にブレザーを羽織って胸にサラシを巻いただけというかなり露出度の高い服装の女、結標淡希の能力である「座標移動」にある

「あ、あの危ないところを助けていただいてどうも……あ、あれ?む、結標淡希…?」

「あら?私もう名乗ってたかs…ああ、なるほど。その腕の腕章、白井さん繋がりにね」

初春は件のファミレスを訪れる前は単なる市民としてではなく、風紀委員としてARGUS本社を訪れていた為、その腕には学園都市の風紀を守る為の盾が描かれた腕章をつけていた

『残骸』の時かしら?白井さんには色んな意味でお世話になったわ。まあ…彼女の先輩、もしくはは因縁の相手とでも思ってもらって構わないわ」

「い、いえ…今は助けられた訳ですし…その…ありがとうございます

…」

「お礼を言うにはまだ早いわ、ちよつと一旦歯食いしばりなさい」

「え?」

バキツ!!

「ツ~~~~~?!?!?」

あまりにも短い忠告のすぐ後、初春の外れた関節を結標がはめ直した。いきなりのごとすぎて歯を食いしばる暇もなかったため、その痛みをもろに感じ初春はその場でじたばたする

「よかった、ちゃんとハマったわね」

「ひゃ…ひゃい…」

垣根の時ほどの痛みではないとは言え、あまりの荒療治に初春は少し涙目になる

「結標、そつちは終わったか?」

「あら、遅かったわね。とりあえずはデータごと彼女を保護したわ」

「よくやった。もはや現状的にはこつちにお釣りまで付いてきてる」

初春の気づかぬ間にビルにいたこの男、土御門元春は緑が基調のアロハシャツに学ランという異彩な組み合わせの服装に身を包んでいる

「ちよつとあなた、少しの間動かないで頂戴。軟膏塗った後にその肩固定しちゃうから」

「あつ、はい。よろしくお願いします」

(白井さんの時は良いイメージを持っててませんでした…必ずしも悪い人ではないんでしょうか?)

そんな風に初春が考えていると、結標は彼女のセーラー服を上半分

だけ脱がし、初春の肩に軟膏を塗った。すると彼女は自分の胸のサラシを解き始めた

「え…ええっ!?ちよ、ちよっど!?む、結標さん!む、胸見えちゃってますよ!」

「別に胸くらい良いじゃない、同じ女同士なんだから。それとももしかしてあなたたってそういう性癖?まあ私も似たようなもんだから否定はしないわ。肯定もしないけど」

「い、いやそうじゃなくて!そ、その金髪でサングラスの人は男の人ですよね!」

「いいのよ、アイツは自分の義妹の裸にしか興味ないんだから」

「オイ、それは聞き捨てならないぞ」

そんなやり取りをしている間に、結標は自身のサラシに使っていた包帯で初春の肩を固定し終わった

「はい、これで一先ずはオツケーよ。でも今日が終わるまではあんまり無理に動かさちゃダメよ」

「無視か…」

「は、はい。どうもありがとうございます…」

「礼には及ばないわ、白井さんの同僚ならここで媚びを売つといっても悪くないわ」

「は、はあ…」

「よし、それなら結標、俺と彼女を今比較的安全な外に飛ばせ。彼女からデータを回収して解放したらそっちにもう一度連絡を入れる、後サラシはちゃんと巻き直せよ」

「余計なお世話よ」

「?!あ、あなた達までデータを狙ってるんですか!?お断りします!このデータは私にとって…」

「はいはい、そういうやり取りはそっちでやって頂戴」

そう言つて結標は土御門と初春を対象の座標を定める為の軍用ライトをかざす。すると2人の姿は跡形もなく一瞬で

ビルの中から消えた

第20話 真実と選択

「…命より大事な！ぴぎゃ!?」

「よっ！つと…」

突然の座標移動にまたも尻餅をつく初春。彼女とは対照的に、同じく結標の座標移動で移動させられた土御門はスマートに両足で着地する

「あいたたた…」

「なんだ結標のやつ、わざわざ俺たちの車に飛ばしたのか」

2人が結標によって移動させられた場所は、彼女なりに気を使ったのか彼女と土御門と他2人によって構成される「グループ」が使っていた運び屋の車だった

「…さて、初春飾利」

「!!!だ、ダメです！このデータは絶対に誰にも渡しません！」

土御門が話題を切り出す前に、彼が何を言い出すのか察知した初春は彼が求めるデータのUSBを渡すまいとUSBを入れているポケットを両手で塞ぐ

「なに、わざわざ渡してくれる必要はない」

「…えっ?」

土御門の予想外の返答に初春は思わず素っ頓狂な声を出す

「さつきは回収すると結標には言ってたが、あれは嘘だ」

「な、なんだ…そうだったんですね…」

彼の言葉にほつと一息ついて胸を撫で下ろす初春

「だが、ここから先は2人だけの密会だ」

「・・・えっ?」

急に土御門の纏う空気の質が変わる。そして初春はまるで万華鏡のように移り変わる彼の巧みな言葉使いについて行けず、その言葉の真意を読み取ることが出来なかった

「結標とは顔見知りだったようだが、俺とはまだ初対面だろ? まずは自己紹介をしておこう初春。俺の名は土御門元春。暗部組織『グループ』の正規構成員だ」

「・・・『グループ』?」

「まあ、お前が所属している風紀委員会を縮小化しまくった組織とでも思っておいてくれ」

「・・・その土御門さんが私に一体なんの用ですか? もう私が持っているデータに用はないんですよね?」

土御門の纏う空気に合わせ初春も真剣な面持ちになって土御門に接する

「いや? 渡さなくていいとは言ったが『用がない』とは言っていない」
「えっ?」

「俺が用があるのはお前が持つデータはもちろん、その他にもう一つある」

「・・・そのもう一つはなんですか?」

「・・・お前の身体さ」

「!? い、いや...!」

土御門の解答の意味を瞬時に理解すると、初春は自分の身体を守るため身体の前で腕を交錯させそれぞれの腕とは反対の腕を掴み、自分の身を守る姿勢を取り車の壁の方へ後ずさる

「へっへっへ、大人しくしてもらおうか…」

「い、いや…!やめて…下さい…」

「ガオオオオオオオオオオー!!」

「きやあああああああああああああああああ!!!」

「ま、冗談はこの辺にしといて」

「…へ?」

「さっきの結標の話を聞いてなかったのか?生憎、俺は自分の妹以外の身体には興味がなくてにや。お前に襲いかかろうなんて思ってもないにや」

「ひ、ひどいです!セクハラ!痴漢!外道!強姦魔!変態!風紀委員として身柄を拘束します!!」

「変態で結構、自覚はある。って言うか今身柄を拘束されてるのはどっちかって言うとお前の方だ」

「そ、そうですよ!私の身体に興味がないなら私の身体に用があるって何なんですか!」

「俺たちグループは、お前のその情報処理技術を借りたい」

「…情報処理技術?」

「ああ、運のないことにウチの組織に正規構成員は4人もいるのにそういう技術を持つてる人間がいなくてな。データを入手してもそれを扱う技術がないならもはやそれはただの数字とプログラムの羅列でしかない」

「まあ、それはそうですが…」

「そこで、お前の力を貸して欲しい。という話に至るわけだ。分かってもらえたかな?」

「力を貸すとは言っても、私は具体的に何をすればいいんですか?」

「そのUSBのデータを使って、ある人間をSAOの世界に飛ばして欲しい」

「!?しよ、正気ですか!?今となってはSAOはHPがゼロになれば現実でも死亡確定のデスゲームですよ!?!もう被害者も2000人を超えています!そんなの危険すぎます!」

「だが、お前はどの道その危険なデータを解析しようとしていたんだろ？御坂美琴を救う為に」

「そ、それはそうですが…」

「なら、話は簡単だ。交換条件さ」

「交換条件？」

「そのある人間をSAOの世界に飛ばせば御坂美琴を生きて現実世界に連れ戻せる確率が跳ね上がる」

「えっ!？」

「絶対とは言い切れないがな、だが絶対を言い切れないのはお前の解析作業も同じさ。お前もあのファミレスで知っただろうが、そのデータはあの茅場晶彦の生涯を懸けた最高傑作であり、全プログラム史上最高の鉄壁だ。プロが寝ずに解析作業を行ったとしても、おそらく最低でも2、3年はかかる。まあ悪魔でも予想だがな」

「…政府の人たちだって解析作業に当たってるはずです。その人達と作業を共有しさえれば解析作業に必要な時間はぐっと短縮出来ます。その為にARGUSの本社からナーヴギアとSAOとこのUSBに入ってる物と同じデータを政府の人達だって回収したんですから」

「統括理事会は解析作業なんて行ってないさ」

「えっ!？」

「そもそも、このSAO事件を仕向けたのは政府の人間達だ。調べてたならどこかで気づいただろう？徹底した情報操作、ナーヴギアとSAOを開発したARGUSでさえも解析作業に当たることも出来ない。はたから見ればもはや謎でしかない。調べていればバカでも気づく、もしくは途中で引つかかって疑問を抱く」

「……」

自分でもそれを薄々勘づいていた為か、初春は土御門の意見に反対しようとしても反対しきれなかった

「つまり、今この世界で統括理事会以外でそのデータを持つてる人間はお前だけ、解析作業を始めようなんて考えてる人間に関してはもはや正真正銘、世界でお前たった1人だ。それでも解析作業を完璧にこなして御坂美琴を救えると言い切れるか？」

「・・・なら私は両方ともやります」

「・・・両方？」

「あなたの言うある人をS A Oの世界に送れば御坂さんを救える可能性が上がるんですよね？ならその人をS A Oの世界に送ってから私は自分で解析作業を行います」

「残念だがそれは出来ない」

「!? ど、どうして!？」

「そのデータを使えば確かにS A Oの世界に誰か1人だけを送ることが出来る。だが、その世界に飛ばすというプログラムの『実行』を一度でも行えば、そのUSBのデータは全て完全に消去される。そういう風にプログラムされているからだ」

「じゃ、じゃあ予めそのデータのコピーを取っておくとか!」

「それも出来ん。データは元々複製が出来ないようにロックがかかっている。そのコピー不可のロックを解除すればそれが引き金になってUSBのデータも全て消える」

「そ、そんな・・・」

「要するに俺が言う誰かを送るという選択をすればお前は解析作業を行うことは出来ない」

「だが、もし仮にお前が自分で解析作業を行うという選択をすれば、ソイツはS A Oの世界に行って御坂美琴の手助けは出来ん。お前は御坂美琴が生きている間にS A Oの解析作業を1人でやり終えられるかどうかという大博打を打つことになる」

「・・・」

「まあ、どちらを選択しても絶対ではないがな。だがどちらの選択の方が御坂美琴を救えるかの確率が高いかも分からん」

「・・・」

「だが、お前が解析作業を行うと選択したとしても、それを俺たちが手伝えることはない。お前が持っているデータを狙うヤツらが居たとしても、俺達はお前の身の安全を保証はしない」

「・・・」

「それと同様に、S A Oにある人間を送る選択をしたなら、お前と俺た

ちの関係はそれつきりだ。俺たちがそれで以降お前に関わることはないし、その後またお前が茅場晶彦を血眼で探し回って新しいデータをもたらって解析作業を行うにしても、もう俺たちは知らん」

「……」

「さあ、全てを聞いた上でお前はどちらを選ぶ？初春飾利」

「……1つだけ聞かせて下さい」

「なんだ？」

「サングラスを取って私の目を見て下さい」

「……ほお？」

土御門はその初春の言葉に従いサングラスを外し、初春の目を真っ直ぐと見る

「私の目を見て下さい」

「……これでいいか？」

「……今の話に、何1つとして嘘はついていませんか？偽りの事実はありませんか？」

「……ああ、ついていない」

「……」

「……」

数秒の沈黙……しかし、2人にとっては何分を感じただろうか、それとも何時間に感じたのだろうか。それだけの意味のある数秒の沈黙だった。その間2人は互いの視線から目を逸らすことは一度としてなかった

「……ありがとうございます。どうやら嘘はついてないみたいです
ね」

「……信じるのか？こんな会って間もない男の突拍子のない話を」
「私の目には、あなたが嘘をついているようには見えませんでした。
これでも風紀委員として、人がある程度判断できるほどの目は持ち合
わせているつもりですよ？」

「木山春生の時は彼女の事を信じ切っていた気がするが？」

「き、木山先生は方法はともかく良い人でした！それに関してはギリギリセーフです！っていうか何でそれ知ってるんですか!？」

「ま、お前がそれでいいならいいが」

そう言いつつ土御門は自身のトレードマークの1つであるサングラスをかけ直す

「で、どうする？悪いがあまり選択に時間はやれんぞ？」

「・・・なら・・・」

「？」

「それなら・・・その人に会わせてもらっても良いですか？そのSAOに送りたいと言っている人に・・・」

「・・・それがなければ選択は出来んか？」

「はい」

土御門から全ての真実を聞いた上で、嘘はないと信じた上で初春は1つの選択を下す。だがそれは土御門から出された2つの選択肢にはなかった、初春が自ら新たに導いた選択だ

「いいだろう、そういう事ならついて来い。一先ずは歓迎しよう。俺達の『グループ』にな」

「分かりました、行きましよう」

そう言つて2人は車を降りて歩き出した

第21話 一方通行

「……って訳だ」
「なるほど」

再び時間は戻り、グループの4人が各々の仕事を終え集結し、妙に綺麗に整備されているビルの中で土御門と初春のここまでの経緯を聞いていた

「改めまして、初春飾利です。どうぞよろしくお願いします。えつと……」

「ここまでの経緯ですと……一方通行さんはともかくとして、自分だけがまだ彼女と関わっていませんね。自分の名は海原光貴と言います」
「あ、はい。よろしくお願いします、海原さん」

「初春飾利さん、でしたね。以前から存じ上げております。こちらこそ、どうぞよろしくお願いします」

「?えつ……?あつ、は、はい」

「あら、あなたこの子と面識あったの?」

「いえ、面識というほどでは。以前から彼女が御坂さんと楽しそうに遊んでいたところを何度もお見かけしていたもので」

「……あなた生きてて恥ずかしくないのかしら」

「あなたに言われたくもないのですが……」

「……一方通行だ」

「あ、アクセラレータ?は、はあ……よろしくお願いします……」

(変わった名前の人だなあ……すごい白いし……)

「さつきも会ったけれど、結標淡希よ。改めてよろしく」

「はい、よろしく願います」

「さて、顔合わせも終わったところで、時間もあまりない。早速本題に移ろう」

土御門がそう切り出すと5人の空気ががらりと変わり、息をするの

も苦しくなるほどの緊迫した空気になる

「初春はここにいる『グループ』の初春を除いた4人の中にいるSAOに送られる誰かの顔を見たいと言った」

「はい」

(・・・チツ、なるほど。アイツが言ってた長旅つーのはSAOの事だったのか…って事は旅券はあのUSBのデータでパスポートはこの花女つーことか…面倒くせえことになったな…)

土御門の言葉から電話の相手が自分に言ってた長旅とはSAOの世界に行くことだと察しをつけた一方通行。面倒くさい事になったと心の中で舌打ちする

「ではでは、それは一体この中の誰でしょう?」

「・・・え?」

「時間がねエンじゃなかったのかよ…」

「まあまあ、この先の選択によってはその誰かはしばらくこっちの世界とはおさらばなんだ、少くくは余興があってもいいだろう?」

「え、えっと…」

「さ、誰だと思う?初春」

「じゃ、じゃあ…その…海原さん…だと思えます」

「ファイナルアンサー?」

「ふあ、ふあいなるあんさー…」

「どうるるるる! 正解はくく!!? じゃじゃくん! 結標さん! どうぞ!」

「せっかくのイケメンを選んだところ申し訳ないけど、正解はそっちの白うさぎよ」

「にゃっはっはっはく! イケメンだって白うさぎだってく! にやはははははは!!」

「あははははは…何だかすいません一方通行さん。自分だけが良い思いをしてしまったようで」

「・・・死にてエンだなテムエら」

「あら？あなたこそ全裸にひん剥かれてから女湯に飛ばされたいのかしらっ..」

「自分としても、御坂さんをこの手で守りたいのは山々なんですけど、どうにも今回選ばれたのは一方通行さんみたいなんですよ」

「は、はあ..」

(なんか、真面目だったり愉快だったり、忙しい人達だなあ..)

「まあいい。そのババア共が言ってるように、どうも俺がSAOに飛ばされる予定らしい」

「ババアは余計よ」

「一方通行さんが..SAOに..」

「ああ。どうなんだア？テムエが一目見てえって言ったんだろ？実際見てみてどう思ったんですかア？失望した感じですかア？」

一方通行は敢えて初春を挑発するような口調で語りかける

「・・・じゃあ一方通行さん、いくつか質問してもいいですか？」

「ああ？」

「い..い..で..す..か？」

「おやおや、これは見た目に反して中々の精神力の強さをお持ちの女性のようにすね」

「・・・..」

一方通行の紅い目を真っ直ぐと何かを語りかけるように見つめる
初春

「・・・チツ、分かったからすんならさっさとしろ」

「怖くはないんですか？」

「・・・死ぬのがか？」

「それも含めてです。一方通行さんはこの現実ではその能力で学園都市最強を名乗っているようですが、これから行くところはゲームです。現実でのあなたの強さは100%は反映されません。それでも怖くないんですか？自分の最大の武器を失った状態で数値で定められた命が0になったら死ぬ場所に行くんですよ？」

「はっ、こんなクソツタレな場所に身を置いてる時点で死ぬのなんか

いつでも覚悟してる。死ぬことなンギ怖かねエよ。それに俺はそもそも死ぬ気もねエし殺されなンギしねエからな」

「そうですか」

「もういいだろ、分かったらさっさと…」

「まだ終わってません」

「まだあんのかよ…さっさとしろ」

「あなたは、御坂さんを…御坂さんの事を必ず守ると誓ってくださいませんか？」

「…ああ？」

「御坂さんの事を誰よりも大切にして、御坂さんの周りの人達にもその責任を取れますか？」

「…」

一方通行は一旦初春から視線を逸らし土御門に「おい、どういふことだ話が違うぞ」と言った具合の視線を送る。それに対して土御門は両手の手の平を合わせて「スマン、何とかうまいこと話を合わせてくれ！後でちゃんと説明するから！頼む！」と平謝りする感じのジェスチャーで伝える

「一方通行さん、今は私から目を逸らさないで下さい」

初春が真っ直ぐな目で自分に視線を戻すように一方通行に訴える

「チツ…ああ…誓ってやるよ、クソツタレ」

「本当ですか？」

「…」

『そんなもののためにあの子を殺したのかーっ
!!!!!!』

「…」

『これが「死」ですか…と…ミサ…カ…は…』

「……………」

『あなた—！—ってミサカはミサカは帰ってきたあなたの胸の中に飛び込んでみる！』

「……………」

『病院にいる他の妹達个体から聞いたんだけどね、実はお姉様は既にSAOの世界に取り込まれてるらしいの…ってミサカはミサカは自分に出ることがないか考えながらお姉様を助けたいって心の底から願ってみたり…』

一方通行は初春の言葉にかつて自分をこれ以上なく恨んだ御坂美琴本人と、自分がその生涯で初めて命にまで手をかけた御坂美琴の軍用クローンであるミサカ00001号、そして彼女達に似た小さなクローン个体、妹達の上位个体である「打ち止め」を自分の記憶の中で

重ね合わせていた。そして一方通行は初春に向き合ってた

「・・・ああ、誓うさ。元より超電磁砲は俺と同じ加害者と言っても過言じゃねえが、それでもアイツや嫌になるほど多いアイツの関係者にや償つても償いきれねエ罪があんだよ。それに、超電磁砲がいなくなるってだけで悲しんじゃまうクソガキ共がいんだよ。だったら誓ってやるさ。どこのどんな世界だろうと、アイツら全員が光の世界で一片の曇りなく笑っていられる場所を作り上げてやんのが、俺のせめてもの罪滅ぼしなんだよ」

「・・・そうですか」

「・・・ああ」

そう言うとき一方通行は土御門に目線で「これでいいか?」と伝え、土御門は「あ、ああ、大丈夫だ」と言った具合にぎこちなく頷く

「土御門さん」

「えっ?お、おうどうしたぜよ?」

「私決めました」

「そ、それはどつちに?」

「私は一方通行さんを信頼します。私は一方通行さんをSAOに送り出したいと思います」

「えっ!?あ、ああそうか?り、理由を聞いてもいいか?」

「私ずっと御坂さんを助けたいって思ってたんです。でも、それは私だけじゃなかったんだって一方通行さんの言葉を聞いていて思ったんです。そして、その言葉を聞いてすごく嬉しかったです。だから、私は一方通行さんに御坂さんを救ってほしくなりましたし、一方通行さんに頼りたくなかったです」

(・・・何が「人がある程度判断できる目は持っているつもり」だ?人の事を信じて疑わねエだけじゃねエか。稀に見る本物のバカだコイツは...そう...コイツは...)

『歯を食いしばれよ最強…俺の最弱は…ちつとばつか響くぞ』

(コイツは…あの時の俺を止めたアイツと…同じだ…)

「そう言う事なら初春、早速準備を始めるがいいか？一方通行も」

「はいっ！」

「上等だ」

「よし、みんなついて来い。白状なやつだが、見送りぐらいはしてやろう」

「そうですね、行きますか」

「あのね、わざわざあなたについて行かなくても私の能力があれば一発なのよ。先に行つてなさい」

結標が言い終わると同時に、4人はマンションの今までいたフロアの1つ上のフロアに飛ばされた

「あれ？結標さんは来ないんですか？」

「アイツは過去に座標の計算をミスって自分の転移に失敗してな。それ以来それがトラウマになって自分の身体を思うように飛ばせないのさ」

「あ、そういえば白井さんの時にそんなことを調べた気が…」

「おい、お喋りはそこまでにしてやるならとつと始めやがれ」

「あっ！は、はい！」

第22話 参戦

「でエ？どオいう事なんだろうなア土御門クウウウン!?」

「いやー、まあそう怒らないで欲しいぜよ。結果は丸く収まったんだ。

一方通行の稀に見る名演説も聞けたことだしなあ」

「今俺はソレを言及してンだよ！俺にあそこまで言わせたンだ！覚悟は出来てンだろうなア!?」

「だが、アレはお前の本心だろう?」

「……」

「それをたまたま口に出して言わなければいけない機会がこの場で回ってきたから、その意思をそのまま吐き出した。俺にはそう見えな」

「……チツ、どいつもこいつも」

「だが、本当にお前はそれでいいのか?」

「ああ?今さら何聞いてやがンだ。いいに決まってンだろ」

「最終信号を置いて行くことになるんだぞ?」

「……」

「さっきのお前の言葉通りなら、たしかにこのSAOは彼女たちの光を守ることに繋がる。だが、もしお前がSAOに行っている間に彼女達を狙うヤツらがいたらどうする?」

「……別にそんなのは大した問題じゃねエ、あのカエル医者者の病院にでも預けときゃあの医者は何でもするさ」

「なら、旅立つ前に電話ぐらいしてやったらどうだ?」

「……」

「……俺は一旦向こうの部屋に戻る。済ませるべきことが済んだら戻ってきてくれ」

そう言って土御門は一方通行を部屋に残し、他の三人がいる部屋へ戻った

「チツ…」

一方通行は舌打ちすると携帯を開き、連絡先を選択し電話をかけた。何コールか鳴った後、誰かが電話を取り応答した

『はい、もしもし。黄泉川です』

「芳川か？」

『あら、一方通行。なんで私だって分かったのかしら？』

「家で大体暇してンのは teme だけだからな」

『あら、そんなことないわよ。今日はあなた以外全員家にいるみたいだし』

「そおか、なら丁度良い。黄泉川に変われ」

『はいはい、今変わるわね』

『もしもしー？急にどうしたじゃんよ一方通行？』

「しばらく家を空ける」

『・・・どのくらいじゃん？』

「早くて2年以上……もしくは永遠にだ」

『・・・SAOか』

「ああ、だからもう俺の部屋は要らねエ。他に使ってくれ」

『そいつは聞けない相談じゃん？』

「ああ？どおいうことだ？」

『それじゃあSAOが終わった時にお前が帰る場所がないじゃんよ？永遠に帰って来ないなんて言わせないじゃん。ちゃんと待ってるからいつか必ずまたうちに帰って来るじゃん？』

「・・・チツ…あのガキを頼む。何か困ったンならあの医者を頼れ。アイツなら大抵のことは解決できる」

『ああ、分かったじゃん。あの子も今部屋にいるんだけど変わるかじゃん？』

「・・・ああ、頼む」

『じゃあちよつと待ってるじゃん』

「・・・」

『はい！もしもし！ってミサカはミサカは電話がミサカに変わったことを主張してみたり！』

「耳元で騒がれっとうっせエからもう少し黙りやがれ」

『・・・行っちゃうの？ってミサカはミサカは聞いてみたり』

「!?…クソガキ、テメエ知ってたのか？」

『うーん、具体的に知ってたってわけじゃないんだけど…』

「あア？」

『何だか、さつき、あなたがお姉様やミサカ達の事を考えていてくれた気がしたの。ってミサカはミサカは貴方との不思議な繋がりを感じてみたり！』

「・・・そオカ」

『それに実はね、さつきのあなたと黄泉川の会話ちよつと聞こえちやっただ。ほら、黄泉川って電話してる時も声が大きいから。ってミサカはミサカは密かに家主の愚痴を言ってみたり』

「・・・そオカ」

『それでね、ありがとう。一方通行。私たちのお姉様を助けようとしてくれて。ってミサカは…ミサカは…あ、あれ？』

「？」

『あ、あれ？…グスツ…おかしいな…泣かないって…ヒツ…決めた…のに…ってミサカは…ミサ…かは…』

「……………」

『嫌だよ…ずっと一緒にいたいよって…ミサカはミサカはお願いしてみろ』

「・・・そオだな…俺も、ずっと一緒にいたかった」

『…………え？』

ブツツ…ツ…ツ…

「…………たたく…こんな事言うガラじゃねえだろ…テメエは…………」

パタン

一方通行はゆっくりと携帯を閉じる

「…………行くか」

ガチャ！

部屋のドアを開け4人がいる部屋へと戻る一方通行

「・・・もういいのか？」

「ああ、そっちは準備出来たのか？」

「いえ、すいません。あともう少しかかりそうです…」

「・・・ああ？」

初春が必死になって睨めっこしているパソコンの画面を見て、一方通行はふと疑問を抱く

「・・・おい、その画面見せてみる」

「えっ？」

「いいから見せろって言ってんだ」

「は、はい…」

そう言つて初春をパソコンの前から少し退かし画面に表示されているデータを覗き込む一方通行

「・・・なあ？これがナーヴギアとSAOのデータなのか？」

「・・・え？は、はい」

「コピー取れんじゃねエかよ」

「え…ええっ!?な、なんで!?ど、どうやってですか!？」

「ちげエよバカ、パソコンでコピーする訳じゃねエよ」

「?????」

一方通行の言葉の意味が分からず話についていけない初春

「そいつはどう言う事だ？一方通行」

「バカかテメエら。コピーは出来なくてもこの画面の写真を撮るかメモに書き起こしてまた他の場所で入力し直せば後でコピーした事と同じになるだろ。そしたら後でその花女は自分でデータの解析も出来るだろうが」

「「あ」」

「まあこれはどっちかつつーとデータの『複製』じゃなく『復元』だ。

ミスなく入力し直すつっ—手間があるが、やろうと思えばいくらでも同じデータが増やсенだろ」

「な、なあんて話聞いた最初に言ってくれなかったんですかああああ!?!?」

「つたく、んな簡単な事にも気付かねエのかよ。こんなの小学生にだつて思いつくぞ」

「た、たしかにそいつは盲点だったな…データの『表示』が出来るならそれはどちらも可能だ…」

「い、今すぐこの画面のスクリーンショットを撮ります!!」

「つたく、バカしかいねエのかよこの組織はよオ…」

「結標さん、枕はどちらがいいでしょうか?」

「石でも構わないんじゃないかしら?寝心地悪くてもどうせ起きてこないんだし」

「テメエらはマジであつちに行く前に一回殺しといてやるよオオオ!!!」

「今のは自分は悪くないですよ!?!」

—————

「ふう、全ての準備が整いました…後は実行するだけです」

「よし、分かった。ひとまずはお疲れ様だ初春」

「それにしても、一方通行さんって体細いですね?ちゃんとご飯食べてますか?」

「仮にもこれから食事取れないんだからもう少し食べてからにしたら?なんだつたら今適当な食事をミキサーにかけて貴方の胃袋に直接飛ばしてあげるけど?」

「余計なお世話だクソツタレども」

一方通行の身体には今、要所要所、様々なところにパソコンに繋がれた電極が張り付いている。今回はナーヴギアというハードウェアも、SAOというソフトウェアもない為、仕方なくこういった形を

取っている。しかし、初春によればこれが最善策であり問題なくSA
Oの世界に行けると言う

「さて、しばらく来れないこつちの世界に何か言い残すことはあるか
?」

「ねエよ。遺言も遺書も残す気はねエ。恥ずかしくて残していけねエ
よそんなもん」

「一方通行さん、待ってて下さい。時間はかかるかもしれませんが、私
がこのデータを解析してみせます!そしたらゲームの途中でもログ
アウト出来る様になりますから!」

「そオだな。期待しねエで待つといてやる」

「そこは少しは期待して下さいよ!?!」

「・・・時間が惜しい。とっとと初めやがれ」

「あ、はい。分かりました。それじゃ先ほど説明した通りよろしくお
願いしますね」

「あア」

「それじゃ、向こうでも元気でやれぜよ。一方通行」

「せっかくのゲームなんだからまずは楽しんでみなさい」

「ログインしている期間の身の世話は自分達に任せて下さい。で
は、よき旅を」

「では行きます!プログラム実行!」

ウイイイイイン…

「全システムチェック!オールクリア!いつでも言つて下さい!」

「・・・リンクスタート」

その言葉を最後に、一方通行の意識は現実世界を離れ仮想世界へと
飛んだ

第23話 情報

「どはあ〜〜〜…」

「お疲れのようだな上やん。聞いたゾ？昨日のボス戦でまた無茶したらしいナ？」

「あ〜〜？なんだ、アルゴか。そりや無茶だつてするさ、なんたつてもう100層までの折り返し地点はとつくに過ぎて第55層のボスだからな。多少の無理してなんぼつてとこだろ」

SAOが始まっておよそ1年と半年が経過した。最初の頃は多発していたプレイヤーの死亡もやがて並行線を辿るようになり、アインクラッドの攻略は第56層まで進んだ。そして今この男、上条当麻はつい昨日のボス戦の疲れを取るために昼寝でも始めようかと街から少し外れた人気のなく静かな草原に寝転がったところを、情報屋を営んでいるアルゴに話しかけられていた

「なぜそうまでしてソロを貫くんダ？攻略組にまざるならどこぞのギルドかパーティーにでも入れれば楽なの二。『もう少し自分の命を大切にしろ！』つてみこつちやんカンカンに怒つてたゾ？」

上条は第1層のボス戦の後に起こった一件以来、誰ともパーティーを組まなくなり、攻略からも離れ、自分なりにレベルを上げたり、気ままな生活を送っていた。しかし、初めてのクォーターポイントである25層のボス戦時に多数の死者が出たのをきっかけに、また攻略やボス戦に顔を出すようになった。それ以降は彼の周りから頭一つ抜けた攻撃力を誇る右手とその能力のおかげもあつてか、攻略も幾分か楽になった

「いいんだよ、俺はソロで。そもそも今の俺の闘り方でコンビネーション組める奴らなんかいねーだろうが」

「みこっちゃんならどうかな?」

「・・・いやそもそも美琴は・・・」

「まあ、無理だろうナ。あれからソロを貫いてる上やんとは違って、みこっちゃんは今や『閃光のミコト』の二つ名を冠する超一流プレイヤーで、攻略組最強ギルド『血盟騎士団』の副団長ダ。今さら上やんなんかとパーティーなんて組まないだろうナ?」

「分かっててなんで聞いてくんだよ嫌味かよ・・・」

「そうダゾ」

「分かってて言ってるならなおのこと悪いわ!・・・まあだから実質ソロでやるしかねーんだよ。でもソロだからと言って、それに甘えて攻略で手抜いてる訳じゃねーんだから別にいいだろ。それに、なんだかんだ俺はまだこの世界で数えるほどしかいない『ユニークスキル』の持ち主で、攻略組の重要な戦力なんだからナ」

「・・・ま、俺も未だにこの世界での「コイツ」の真相は分からないことだらけだけどな・・・」

「・・・それも十分なぐらい他の攻略組への嫌味だと思うゾ?」

「大丈夫だ、分かってて言ってる」

「なおのこと悪い」

そう、あのボス戦以来、上条は自分のスキルにある幻想殺しの存在と詳細を情報屋であるアルゴを通じ、全てのプレイヤーに向けて公開した。それ以来、上条は攻撃手段に自身のメインに片手剣ではなく右手を用いるようになった。おかげで今背負っている片手剣はあくまでも「念の為」のほぼお飾り状態になっており、第1層攻略以来、強化もしてなければ新調もしていない。この装備で55層にソロで挑むのはもはやあり得ないとさえ言える

「で?何か用でもあんのかよ?世間話しなら帰ってくれ。さつきも言ったけどボス戦で疲れてんだよ・・・まあ重要な情報が入ったってんなら話は別だが」

「あるゾ」

「・・・不幸だ」

「まあ、人によつては必ずしも良い情報とは言えないがナ」

「? どういう情報だよ?」

「スキルの情報だゾ」

「あー? スキル? 興味ねーよ、帰つてくれ」

「いや、絶対に上やんなら興味を持つゾ」

「・・・まさかユニークスキルとか言うんじゃないだろうな?」

「ご明察ダ」

「・・・マジか」

このSAOにはソードスキルを始めとした何種類ものスキルが存在する。戦闘系のスキルである盾スキルや索敵スキル。他にも料理スキルや鍛冶スキル、挙句の果てには釣りスキルなんて代物もある。だが、それらは誰もが身につけようと思えば身につけることが出来るスキル。これらのスキルの枠組みには当てはまらない、この世界でそのスキルを最初に身につけた「その最初の1人だけ」が扱うことが出来る特別でありこの世界で唯一無二のスキル。それが「ユニークスキル」だ。この世界で彼のスキルとなった「幻想殺し」も大まかにはこのユニークスキルに分類されている

「上やんの『幻想殺し』、血盟騎士団団長ヒースクリフの『神聖剣』。これまで公にされてたのはこの2つだけだったガ、新しいユニークスキルが1つ見つかったゾ」

「新しいユニークスキルね...で? それどういうスキルなんだよ?」

「分からない」

「分かんねーのかよ! 帰れ!」

「重要なのはむしろ、その新しいユニークスキルの持ち主さ」

「誰だよ? 勿体振らずに早く話してくれ」

「『ラフィンコフィン』、聞いたことくらいはあるだろ?」

「ラフィンコフィン!? あのレッドプレイヤーだらけの殺人ギルドか!?!」

「そう、その殺人ギルドのラフィンコフィンだゾ」

「・・・その名前が出てくるってことは・・・おい、まさか・・・」

「そう、新しいユニークスキルの持ち主はラフィンコフィンの『リーダー』だと言われている」

「・・・ちよつとその話詳しく聞かせろ」

「1000コル」

「いつの間に値上げしたんだ!?マジで殴るぞ!」

「『その情報をぶち殺す!』っテ?」

「幻想だ!!俺の決め台詞バカにしてんのか!」

「決め台詞にしてる自覚はあったのか・・・ま、おふぎはこれくらいにして話しを始めようか・・・5000コル払った後デ」

「ほらよ・・・さっさと話せ!」

「まぐろ」

第24話 竜使い

ここは第35層北部の森林地帯、通称「迷いの森」である。現在の最前線とはかけ離れているこの場所で、2人の女性が口論を繰り広げていた

「なくに言っただか。あんたはそのトカゲが回復してくれるんだから、ヒールクリスタルは分配しなくてもいいでしょう?」

この赤い髪をしたガラの悪い女、ロザリアの言うヒールクリスタルとは、いわゆる回復アイテムである。HPが0になれば現実でも死ぬこの世界では、この手のアイテムはもはやプレイヤーにとっての生命線であるとも言える

「そう言うあなたこそ!ロクに前衛に出ないくせに結晶なんて必要なんですか!」

そのガラの悪い女に負けじと、小さな青いドラゴンを肩に乗せた茶髪のツインテールの女の子、シリカは強い口調で言い返した

「もちろんよくお子ちゃまアイドルのシリカちゃんと違って、男たちが回復してくれるわけじゃなくいいもの?」

「ッ!!」

「お、おい…2人とも…」

2人と同じパーティーに属する3人の男の内の1人が2人の口論を止めに入る

「…分かりました!アイテムなんていりません!あなたなんかとは絶対に組まない!パーティーも抜けます!私を欲しいって言うパーティーは他にも山ほどあるんですからね!」

「あつ!ちょ!シリカちゃん!」

そう言い切るとシリカはロザリアとパーティーから背を向け、男の
静止を求める声も無視して迷いの森の中へ1人きりで歩き始めた

「……迷った……」

そしてこの男、上条当麻も「とある目的」を果たす為にこの迷いの
森に入り、ものの見事に道に迷っていた

「流石に迷いの森って言うだけあるぜ……迷宮区と良い勝負だな……もう
右も左も分かんねえぞ……あ、幻想殺しがあるから右はこつちだ……な
んちって……あははは……不幸だ……」

「でも流石にこんな下層で転移結晶使うってのも気が引けるな……さ
て、どうしたもんですかね……」

くピナアアアア!!……

なんて冗談を言いながら己の不幸を嘆いていた上条の耳に不意に
誰かの悲鳴が聞こえてきた

「ッ!?誰かの悲鳴!?誰かモンスターと戦ってるのか!?クソッ!間に
合ってくれ!」

「ピナ!ピナアッ!!」

シリカの呼びかけも虚しく、青いフェザーリドラの「ピナ」はHP
が0になりポリゴンの欠片となって砕け散り、光る尾羽が1枚だけ残

り、しばらく宙を舞ってふわりと地面に落ちた

「オオオオオオオ……」

「あ……あ、ああ……」

ピナに止めを刺し、1人になったシリカを3体で取り囲むのはこの迷いの森では最強クラスの猿人モンスター「ドラंकエイプ」。シリカはHPゲージが既に危険域に達しているにも関わらず、ピナを失った悲しみと自分を襲う恐怖に怯えたからか、動き出す事が出来ない

(あ、私……ここで死ぬんだ……)

そんな考えがシリカの頭の中に浮かんだその瞬間

「可愛い女の子を3人で囲んでイジメようだなんて、流石に心の広い上条さんでも関心しませんのことよ？」

「……え？」

そんな声があったと気づけば後に聞こえてきたのは爆碎音。目の前にいたはずの3体のドラंकエイプは爆散していた

「ふう、大丈夫か？それとも手助けなんて必要なかったか？」

(す、すごい……3体もいたドラंकエイプを……一瞬で……でも……)

「……ピナ……あたしを1人にしないでよ……」

泣きながらピナが残した1枚の尾羽を両手で拾いあげるシリカ

「ピナ？……その尾羽、ひよつとしてお前『ビーストタイマー』なのか？」

「……はい……でもその大切な……パートナーだったピナが……ピナが……」

そう言つて瞳から大粒の涙をぼろぼろと流し始めるシリカ

「・・・すまなかつた、もう少し早ければお前の友達も…助けられたかもしれないのに…」

「いえ…私がバカだったんです…一人で森を突破できるだなんて思い上がっていたから…ありがとうございます…助けてくれて…」

「えっと…その羽根なんだけど、アイテム名とかあるか？」

「？ はい、確認してみます…」

そう言つてピナが残した羽根にシリカが触れるとアイテム名を示したウインドウが現れた

「ピナの心」

「!!…ヒック…」

「あーあーあー！待ってくれ！泣くのはまだ早い！ソイツが残ってるならまだ蘇生出来るから！」

「え!？」

「さて…そうだったら善は急げだな。よし！俺の右手を掴んでてくれ！」

「？」

「ほら、いいから」

「は、はい…」

「よし！離すなよ！」

(結局転移結晶使うハメになってしまった…まあいいか、自分の為だけに使うんじゃないし)

そう言つて上条は左手で転移結晶を掴んで天にかざし、転移の行き先を叫んだ

「転移！『ミィシエ』！」

第25話 アイドル

「よっ!…っ」と
「はわわ!…ほっ」

上条当麻の使った転移結晶により2人は35層のミーシエへと移動していた

「よし!ここならモンスターはいないし落ち着いて話せるな。俺の名前は上やんだ。君の名前は?」

「へ?は、はい!シリカです!」

「シリカか、よろしく」

「よ、よろしくお願いします…」

「それで、なんだけど。君が持つてるアイテム:『ピナの心』があれば君のタイムモンスターは蘇生出来る」

「!?ほ、本当ですか!」

「ああ、47層の南に『思い出の丘』っていうフィールドがあつてな、そのてっぺんに咲く『プネウマの花』つてのが使い魔蘇生用のアイテムらしい」

「!!47層…」

(私のレベルじゃ…全然足りない…)

「ま、そういうことだから俺も行くよ、思い出の丘に」

「ええっ!」

「あれ?嫌だったか?」

「い、いえ!そんな!迷惑ですよ!私まだまだ47層に行くにはレベルが足りないですけど、いつかレベルを上げて1人で…!」

「残念だけどそうもいかないんだ。ティマーと一緒にゃないと蘇生アイテムの花は咲かないし、そのアイテムで使い魔が蘇生出来るのはモンスターが死んでから3日以内まで。それを過ぎるとアイテムを使っても蘇生は出来ない」

「!!そ、そんな…」

「だから俺と一緒に行くよ。あそこの層のモンスターだったら、俺だったら大抵1・2発で終わるしな」

「あ、あの…」

「あれ? やっぱ行きたくなかった? それともそもそも蘇生をお望みでない感じでせうか?」

「い、いや! そういうことではなく! …な、なんで…そこまでしてくれるんですか…?」

「困ってる人を見たが最後、どんな人でも救いたくなっちゃうのが俺の性分だな。困ってる人とか悲しんでる人を見てたらどうにもほっとけないんだよ」

(…やっぱり何か信用しづらいんだよね…どうしても話が美味しすぎて裏がありそうっていうか…またさっきのロザリアさんみたいに悪い人かもしれないし…)

「…や、やっぱr」

「お! シリカちゃん発見!」

「んあ?」

「あ…」

シリカを見つけるなり二人組の男が声をかけてきた

「随分遅かったんだね? 心配したよ。ロザリアさんのパーティー抜けたんだって?」

「あ、あの…」

「じゃあさじゃあさ! 今度俺たちとパーティー組もうよ! 好きなどこ連れてってあげるから!」

「い、いや…その…あの…」

余りにもパーティーを組むことを押ししてくる2人の勢いに負けシリカがどう返答しようか困っていたところ

「・・・おい、お前ら」

「ああん!」

「か、上やんさん・・・」

「お前ら今のシリカの今の状況分かってソレ言ってるのか?」

「ああ?シリカちゃんの今の状況って:アレ?シリカちゃん、いつものフェザーリドラはどうしたの?」

「・・・その:ピナは:さつきまで行ってた迷いの森で死んでしまつて:」

「そうだったんだ:それは大変だったね:でも大丈夫、すぐに新しい使い魔が見つかるよ!僕達も一緒に探してあげるよ!」

「あ、新しい使い魔って:あなた達:ふざけ:」

「ふざけんじゃねえぞ teme エら!!」

「!?か、上やんさん:」

シリカが彼らの言葉に怒りを覚え、反論しようとしたところ、彼女より一足早く上条が激昂しその怒りの感情をあらわにしていた

「ああ!?さつきから何なんだ teme エ!俺たちのアイドルシリカちゃんに何の用があんだよ!」

「teme エらは知らねえだろうがな:ピナはシリカの心の支えだったんだよ!そりや俺にも具体的にいつから二人が一緒だったかなんてとこまでは知らねえさ:でもな!シリカがどれだけピナの事を大事にしてたかはシリカが『ピナの心』を見た瞬間に分かった!」

「!!」

「新しい使い魔?俺たちのアイドルのシリカちゃんだ?冗談も大概しろ:シリカにとって!ピナは何よりも大切な友達だったんだ!仲間だったんだよ!死んだら終わりのこの世界で一緒に生きる心の支えだったんだよ!だったらシリカが望んでるのは新しい使い魔なんかじゃないだろ!」

「そ、それは:」

「ピナを生き返らせる方法があるんだ!二人をもう一度会わせて笑顔

にしてやれる未来があるんだ！だったらそれを叶えてやるべきなんじゃないのか!? 大切な友達を失って悲しんでる女の子がそこにいるんだ…助けてやりたくなくなるのが普通なんじゃないのかよ!!」

「か、上やんさん…」

(か、カツコいいな…悪い人なんかじゃなかったんだ…)

「…そうだな、僕たちが間違ってたんだ。シリカちゃん、無神経なことを言ってゴメンよ」

「俺も…悪かった…」

「い、いえ…悪いと思ってくれてるなら私はもう大丈夫ですから…」

「必ずピナちゃんを生き返らせてあげてくれ…僕も心の底からシリカちゃんとピナちゃんの幸せを願っているから」

「おう、俺もだ。それと、そのえつと…」

「上やんだ」

「上やんさん、本当にすまなかった。シリカちゃん達の事、よろしく頼みます」

「僕の方からも！よろしく願います！元気なシリカちゃん達を見るのが！僕達の心の支えなんです！」

「ああ、任せとけ」

「それじゃあまたね！シリカちゃん！」

「ば、ばいばいシリカちゃん！」

「は…はい、さようなら…」

そう言つて二人に背を向けて手を振つてシリカに別れを告げ、男二人組はその場から去つていった

「ふう…ごめんなシリカ。急に怒鳴ったりして」

「い、いえ！嬉しかったです！ありがとうございました！ピナもきつと喜んでます！」

「はは、そう言つてくれるとありがたいな。にしても、シリカつてみんなのアイドルだったんだな。知らなかったよ、人気者なんだな」

「…いえ、そんなんじゃないですよ…マスコット代わりに誘われて

るだけですよ…きつと…」

「……………」

「それなのに、竜使いシリカなんて呼ばれていい気になって…」

シリカはピナのことを自分の身勝手に殺してしまったことを責めてまた泣きそうになってしまう

「心配ねえよ…またピナとはちゃんと会える。そしたら、今度は自分をアイドルとかマスコットとしてじゃなく、シリカをシリカとして対等に見てくれる人と、またパーティーを組めばいい」

「!!グスツ…はい!」

上条の一言に元気づけられ、涙を拭ったシリカ。その目にはもう迷いは残っていないかった

「それで、話が途中だったな。どうする?行くか?行かないか?…ま、もうそもそも聞く必要なんかないか」

「はい!行きます!一緒に行かせて下さい!さつきも言っていたように、ピナは私の大切な仲間なんです!」

「よっしゃ!話は決まったな!でも今日はもう夜遅い。今日はこの層の宿にでも止まって明日改めて47層に転移して思い出の丘を目指そう」

「あ!じゃあ私が今泊まってる宿屋まで案内します!」

「お、そうか助かるよ。じゃあ連れて行ってくれるか?」

「はい!行きましょう!」

「あゝらゝ?シリカじゃなくい」

「えっ?ツ…ろ、ロザリアさん…」

宿屋に向けて出発しようとしていた2人を不意に呼び止めたのは、迷いの森でシリカと口論になっていたロザリアだった

「へ〜？森から脱出出来たんた〜？良かったわね？」

「・・・シリカ？どうかしたか？知り合いか？」

「いえ…別に…」

「あら？あのトカゲど〜しちやったの？もしかして…」

「ピナは死にました…でも！絶対に生き返らせませす！」

「へ〜？ってことは思い出の丘に行く気なんだ？でもアンタのレベル攻略できるの？」

「ッ…」

ロザリアが言うのももつともな見解なので何も言い返せなくなってしまうシリカ。しかし、そんな彼女を庇うように前に踊りでた上条がロザリアに言い返した

「出来るさ。47層でも思い出の丘はそんなに高い難易度じゃない。

それに、シリカには思い出の丘に行く為の願いと意志がある」

「か、上やんさん…」

「・・・アンタもその子に垂らし込まれたクチ？見たところ、そんなに強そうじゃないけど…はあ!?アンタその剣まさか1層のNPCの武器屋のヤツじゃないでしょうね!?難易度低いとは言うけどそんなんで行くとか自殺しに行くのと同じよ!?あつはつはつは！久しぶりに面白い冗談だわ〜！」

「見てりや今に分かるさ」

「あ？」

「行こう、シリカ」

「えっ?…は、はい…」

(ほ、本当だ…ロザリアさんに言われてから気づいたけど…上やんさんの装備してる片手剣、ほとんど初期の武器だ…ほ、本当にこれだと思
い出の丘に行くつもりなのかな…?)

「・・・フツ」

そんな2人の背を見てロザリアが不気味に笑った。その笑みの裏

に何が隠れているのか、その真相を知る者はいない

第26話 ラッキースケベ×3

「きゃあああああああああああああああああああ
?!!?!?!?!」
「どわあああああああああああああああああああ
?!!?!?!?!」

いきなり悲鳴を上げる上条とシリカ。原因は上条当麻が明日行く
思い出の丘について『ミラージュスファイア』というマップを立体的に
映し出すアイテムで説明しようと思い、シリカが泊まっている宿の一
室に入った。ところが運悪く彼女は下着姿だった為、2人して悲鳴を
上げた

「上やんさんの…バカアアアアアアアアアアア!!!」

バッチーン!!☆

「ぎゃああああああ!!不幸だああああああ!!!」

シリカの怒りのビンタによって宙を舞う上条。現実世界でも仮想
世界でも女子と関わればこうなるところは変わる様子はない

「さ、先ほどはつい失礼を…」

「い、いや俺の方こそノックもせずにはいませんでした…」

「い、いえ…それにわざわざ丁寧にマップの説明もして下さってあり
がとうございm…」

「しッ!!」

「ふえ!?上やんさ…」

ダダダダダッ!バンッ!

「誰だ!?!」

スタタタッ…

上条が部屋でシリカと話していたところ、上条の索敵スキルに何か
が反応した。シリカとの話を静止し、勢いよくドアを開けるが、相手
もそれに気づいたのか、階段から駆け降りた後だった

「・・・逃げられたか・・・」

「な・・・何だったんですか？」

「聞かれてたのさ、俺たちの会話を」

「え!?で、でも。宿屋ではノックなしにはドア越しの声は聞こえない
はずじゃ・・・」

『聞き耳スキル』を上げていれば話は違ってくる。そんなの上げてる
ヤツは中々いないと思うけどな」

「何で立ち聞きなんか・・・」

「・・・」

2人をつけ狙う不穏な「何か」。その気配を感じとれてはいるのだ
が、その正体は掴めない。得体の知れない不安を抱えながらも、2人
は宿屋で眠りにつき次第に夜は明けていった

—————

「わあああああああく!!夢の国みたい・・・」

「相変わらず花だらけだなここは」

翌日2人は準備を整えると早速準備を整え、35層の転移門を潜
り、47層のフロリアへ来ていた。辺り一面に広がりどこまでも続
いている色とりどりの花にシリカはすっかり見惚れてしまっていた

「アルゴの話だと、ここは『フラワーガーデン』なんて呼ばれててな。

フロア全体が花だらけなんだ・・・っとおい!シリカ?」

「はくくくえへへ・・・」

「はあ、全く・・・女の子はやっぱこうなっちゃうのなく」

(・・・あれ?でもここって)

シリカは花や花の蜜を吸う虫を眺めながらふと周りを見てみる。すると、あることに気づいた。辺り一帯が男女2人のペアだらけ。よーするに恋人同士の人たちがほとんどだった。

(・・・ひよ、ひよつとしてここって...デ、デデデ...デートスポット!?)

「・・・おい、シリカ?」

「ひゃ!ひゃい!お待たせしました!」

(か、噛んじやった...)

(噛んだな...しかしまあ、どいつもコイツも見せつけるようにイチヤついてくれやがって...はあ...上条さんも可愛い彼女が出会いが欲しい...)

いくら鈍感な彼でもここまで恋人が多いと流石にここがデートスポットだと分かった。しかし、やはり自分への女子からの好意には鈍いままだ。ここに土御門や青髪ピアスがいたら間違いなく彼もどつかれていたところだろう

「さて、行こうか」

「は、はい!」

2人で47層をしばらく歩き、思い出の丘に行くまでの安全圏を跨ごうとした時、上条は一度立ち止まり、シリカにあるアイテムを差し出した

「さて、シリカ。これ持つといってくれ」

「・・・これは?」

上条がシリカに手渡したのは転移結晶だった

「もし俺が危険だと判断して、『逃げろ』って言ったら、これを使って
どこの街でもいいから転移するんだ」

「・・・でもそれじゃあ上やんさんが・・・」

「俺のことは気にしなくていい。ただ俺に心配をかけたくないなら、
約束してくれ」

「・・・分かりました」

そう言うときシリカは彼の手から転移結晶を受け取り、腰につけてい
るアイテムポーチにしまった

「よし、じゃあ行くか。思い出の丘まで後少しだ」

「は、はい！」

そう言うときスタスタと道を歩き出す上条の後を急いで追いかけて、ま
た彼の隣に駆け寄り寄りシリカ

「・・・あ、あの・・・上やんさん・・・」

「シュルシュル！ガシッ！」

「うわっ!?わあっ!?」

「ッ！シリカッ！」

シリカの背後からモンスターのツタが忍び寄り、彼女の足を絡め取
り、彼女を宙吊りにした

「きゃああああああっ!?」

「グパアアアア・・・」

そして宙吊りにした彼女を丸呑みにしようと植物系のモンスター
の口が大きく開かれる

「ひいひいひいっ!?いやあああああああ!!!」

「おい！落ち着けシリカ！こいつそんなに強くない！お前でも余裕持って倒せる！」

「か、上やんさん！助けて！見ないでー！！」

「そ、そりや無理ですよ…上条さんだって男の子ですから…／／／」

足を上にして宙吊りにされているせいで重力を受けたスカートがどうしても下がって来てしまう。おかげで彼女のパンツは上条からは丸見えだ

「こんのおおお！いい加減に！しろおおお！！」

「グオオオオオっ!？」

装備しているダガーで自分を拘束するツタを切り裂くシリカ。そのした落下しながらソードスキルを使い、植物系モンスターを突き刺す。たちまちモンスターは光のポリゴンになって消えた

スタツ…

「…見ました？／／」

「…い、いくら払えば良いんでせう？」

「そういう問題じゃありません！」

「…不幸だ…」

その先もモンスターを上条のアドバイス通りにシリカが倒しながら進んで行く。その道の途中でシリカがある疑問を上条に聞いたのだ

「あ、あの…上やんさん…」

「ん？どうかしたか？」

「そ、その…どうしてそんな初期の片手剣を使ってるんですか？」

「ああ、これか？これはな、お守りっつーか…俺自身の戒めみたいな物でもあるんだ」

「い、戒め…?」

「まあ、色々あつたんだ。やっぱりアレか?こんな初期武器背負ってたら本当に頼つていいのか心配になるか?」

「あ、いえ!そういうわけでは…」

「いや大丈夫さ、そういう反応するのが普通さ。でも、盾はちゃんと強化してるんだ。何だつたら見てくれてもいいぞ?」

そう言つて上条は、自身の装備として背負っている円形の盾を正面にもつて来てシリカに手渡した

ズンツ!!

「!?う重ツ!?!」

「あ、スマン。大丈夫だったか?」

「い、いえ…大丈夫です…」

(め、めちやめちや重い…た、確かにこの盾はこんな中層じゃ見られないくらいすごい盾…でもじゃあなおさらなんで…)

「なんでこんな初期の片手剣を装備してるの?つてか?」
「!?」

「さつきも言つたけどみんな最初は同じこと考えるから分かつちまうんだよ。まあそれは俺の闘い方に関係してんだけど…あ、盾返してもらつていいか?」

「あ、すみません!ありがとうございます…お返しします」

そう言つて盾を上条に返した瞬間、シリカの足下が紫色に怪しく光り、地面からモンスターが現れ、その触手がシリカの全身を絡め取つた

「きやあああああ!!か、上やんさあああああん!!」

「おらあああつ!!」

バゴオオオオツ!!バアアアン!

上条の右拳がモンスターに突き刺さった瞬間、モンスターはHPがなくなり散霧する。そしてモンスターがいなくなったせいでシリカは空中に置き去りにされ、そのまま落下する

「いてっ!!」

「ま、こういう訳なんだ」

そう言つて上条は盾を装備した左手とは逆の何も持っていない右手を閉じたり開いたりしてシリカに見せる

「す、素手…?」

「そ…そう素手…／＼。俺はそもそも筋力とスキルの関係で剣を使うよりも素手…っつーか右手で戦った方が攻撃力が高いんだ…」

(素手の方が攻撃力が高いって…そんなの聞いたことが…しかも右手だけ?)

「で、そ、その…シリカさん…ぱ、パンツ見えてる…／＼」

「バカあああっ!!／＼」

第27話 オレンジ

「こ、ここに蘇生の花が…」

「ああ。ほら、あそこだ。行つてこいシリカ」

「はいー!」

タタタタツ…

2人は今、道を進んだ先の思い出の丘の頂上に辿りつき、蘇生アイテムの出現するオブジェクトの場所に到達していた。そしてそのオブジェクトの前にシリカが立つと、台座が光を放ち、その光の中から種子が芽吹き、一輪の花を咲かす。シリカはその花を手取る

「わあ…!」

「プネウマの花」

シリカが花を手にとると、アイテム名を表示するウィンドウが現れた

「これでピナが生き返るんですね?」

「ああ」

「良かったあ…」

「でも、この辺はまだモンスターが湧く場所だから一旦街に戻つてから生き返らせた方がいい。その方がピナも喜ぶさ」

「はいー!」

そう言つて来た道に戻つていく2人。もう少しで47層の広場に戻れるというところで、上条はシリカの肩を掴み立ち止まるように示唆する

「?上やんさん?」

「そこで待ち伏せてるやつ、出てこいよ。なんだったら名前を呼んでやろうか?」

「・・・あら、私のハイディングを見破るなんて中々高い索敵スキルね」
「え?えっ!?ろ、ロザリアさん!」

上条が一見すると何も無いように思える木陰に向かって話しかけると、そこからシリカとの元パーティーメンバーだったロザリアが姿を見せた

「その様子だと、首尾よくプネウマの花をゲットできたみたいねえ?」

「だから言ったら『見てりや今に分かる』って」

「??」

「ふっふっふ、そういうえばそんなこと言ってたわね・・・まずはおめでとう。じゃ、早速花を渡してちょうだい!」

「!?ふ、2人とも何を言ってるんですか!」

「やっぱりそれが狙いだったようだな・・・オレンジギルド『タイタンズハンド』のリーダー、ロザリアさん」

「ッ!?オレンジギルド...!」

上条の言う「オレンジ」とはいわゆるプレイヤーの頭上にあるカーソルの色である。カーソルの色は二種類存在する。最初は全てのプレイヤーのカーソルの色は「グリーン」。しかし、圏外で自分以外の他人のプレイヤーにダメージを与えると、カーソルの色がグリーンから「オレンジ」に変わる。その中でも「プレイヤーキル」通称「PK」を行なったもの。つまりこの世界で殺人を犯した者はカーソルの色は「オレンジ」のままでも、ゲームの死が現実の死に直結するSAOで人殺しという最大の罪を犯したという経緯から「レッドプレイヤー」と呼ばれる

「・・・へえ?知ってたのねアナタ」

「で、でも・・・ロザリアさんのカーソルの色はグリーン...」

「簡単な手口さ。グリーンのプレイヤーが獲物を見つけて、オレンジが待ち受けているポイントまで誘い込むのさ。昨夜の俺たちの部屋の話盗み聞きしてたのも、アンタのお仲間なんだろう？」

「え〜〜？ちよつとアンタどこまで分かってんのよ？」

「じゃあ…ここ2週間…ずっと私とパーティーを組んでたのは…」

「そうよ〜シリカちゃん。戦力を確認して、冒険でお金とアイテムが溜まるのを待ってたの」

そう言っつてロザリアは不気味に舌舐めずりをする

「!!そんな…」

「1番楽しみな獲物だったアンタがパーティーを抜けちゃった時は残念だったけど…レアアイテムを取りに行くって言うじゃない？だから諦めずに跡をつけさせてもらおうことにしたの」

「でも、そこまで分かっつてて付き合っつたそのアンタ、一体どうしてよ？」

ロザリアが上条に疑問を投げかけた

「俺はある情報をアルゴから聞いて、お前達を個人的に追っていたんだ」

「へ〜？その聞いた情報つて言うのは？」

「お前達タイタンズハンドが、殺人ギルド『ラフィンコフィン』と繋がってるってな」

「!?チツ、バレてやがったのか…」

「それともう1つ。あんた達、10日前に『シルバーフラグス』ってギルドを襲ったろ？そしてリーダー以外の4人を殺した」

「あ〜？あの貧乏な連中ね」

「そのリーダーだった男が、その次の日の朝から晩まで最前線の転移門広場で泣きながら仇討ちをしてくれるヤツを探してたよ。そして、俺はその依頼を受けた。どうせアルゴから情報を聞いた時から後々お前らを探すつもりだったからな。どうせなら、可哀想だし助けてやろうと思っつてその依頼を受けた。テメエらみたいなクソ野郎を更生

させてやろうと思つてなあ!!」

「か、上やんさん…」

「はあ?何マジになつちやつてんの?バツカみたい。ここで人を殺したところで、死んだそいつが本当に死ぬ確証なんてどこにもないじゃない。それに、今はそんな他人の心配より、自分たちの心配をした方がいいんじゃない?」

パチンツ!とロザリアが指を鳴らすと7人のオレンジカーソルのプレイヤーが物陰から姿を見せた

「!?こ、こんなに!?!」

オレンジカーソルを持つ人の多さに驚きを隠せずシリカはすっかり怯えてしまっていた

「どお?これなら流石のアンタも依頼を受けたことを後悔するんじゃない?」

「上やんさん!数が多すぎます!逃げましょう!」

「いや大丈夫さ、俺が『逃げろ』って言うまでシリカはここで転移結晶を用意してここで待つてくれ」

そう言つてシリカの頭を軽く撫でると、上条はタイタンズハンドの方に向かつて歩き出した

「は、はい…でも…あつ、ちよつと上やんさん!」

シリカの自分を呼ぶ声には答えず、背負っている盾を右手で持ち上げ自分の正面に持つてくると、その盾の取っ手に左手を通し盾を構えた

「…上やん?今あのチビ、アイツを上やんって呼んだか?」

シリカが上条のユーザーネームを呼んだ声を聞いたタイタンズハンドの1人が、まるでそのユーザーネームを以前に聞いたことがあるかのような反応を見せる

「何も装備しない素手の右手に左手のデカイ円形の盾…そして黒髪のツンツン頭…ま、まさかコイツ…!」

『右腕の上やん』か!? ロザリアさん! コイツずっとソロで…しかも素手で前線に潜り込んでるって噂のユニークスキル持ちの…攻略組だ!」

(こ、攻略組!? 上やんさんって攻略組だったの!?)

タイタンズハンドの男達の言葉に思わず自分の耳を疑うシリカ

「攻略組がこんなところにいるわけねえだろ! それに、例えアイツが攻略組でもこの人数で囲んじまえば結果は同じさ! ほら! とつとと始末しちまいな!」

「それもそうか…っしやあ行くぞお前らあ!」

ロザリアがそう言うのとそれに賛同し7人の男達がソードスキルを使い、一斉に上条に向かって切りかかってきた

「はー…やれやれ…仕方ねーな…」

「か、上やんさんっ!!!」

「死ねやああああ!!!」

「ほっ」

上条が襲いかかる男達に対して取った行動はかなりシンプルだった。「甲羅にこもる」という表現が相応しいだろう。上条はその場に少ししやがみ、まるで亀のように自分の左手の盾を、自分の頭上で自分の身を守るドームを作るように構えた

ギイン！ボギン！ガキン！パキン！バギン！バギン！ボキィ！

「……は？」

「はい、お粗末様」

盾を構えた上条に特攻した7人の武器がそれぞれ音を立ててポツキリ折れていく。7人の武器全ての耐久値が上条当麻の装備する盾の耐久値を下回っていた為、一太刀でどの武器も折れてしまい、オブジェクト破砕音と共に跡形もなく消えてしまった

「く、くそッ！俺たちの武器が！」

「あのなあ、7人で来たってこの世界じゃ耐久値対決は所詮一对一の比べ合いなんだよ。まあでも7人の武器合計の耐久値でも俺の盾は壊れなかっただろうけどな」

「なっ!?アイツッ!?!」

「す、すごい……」

「どしたあ？もう終わりですかあ？それとも代わりに武器でも出してくるかあ？まあこの盾の耐久値より上の武器がお前らのストレージから出てくるとは思えねえけどな」

「そ、そんなのアリかよ……」

「そんじやま、全員この回廊結晶で牢獄に飛んでもらおうか。それが俺の依頼主の願いなんだな。せめて自分の罪を数えながら牢獄で楽しい生活を送るんだな」

「チッ！おい！まだ私が残ってんだよ！かかってきな！もつとも、グリーンの私を傷つければアンタがオレンジに……!」

ビュンッ!!!

「ッ?!?!」

ロザリアが言い終わる前に、上条はそこにいる全員が肉眼で捉えられぬほどのスピードでロザリアに肉迫し、彼女の眼前には上条の右拳が迫っていた

「言つとくが、俺はこの後カーソル回復クエストでいくらでもカーソルの色なんざ回復できるぞ。それともここでお前が選ぶか？残りのゲームが終わるまでの日々を牢獄で過ごすか、それとも本当に現実で死ぬのかの確証もない賭けに出て俺の右手で砕け散るか。なあ、ロザリアさん？」

「クッ……」

それからタイタンズハンドは観念し、上条が使った回廊結晶により牢獄まで連れていかれ、全員まとめて仲良く牢屋へと投獄された

――――
全ての始末を終え、上条とシリカは朝まで泊まっていた宿屋に戻り、上条当麻が改めて自分の攻略組としての自己紹介や今回の自分の立ち回りについて話していた

「すまなかったなシリカ……結果的にはお前に囲みたいな役回りをさせちまった……出会って最初に俺の話をすれば、怖がられちゃうと思ったんだ……」

そんな彼の言葉にシリカは首を横に振った

「いえ、上やんさんは良い人だから……怖がったりなんてしません」
「そうか、ありがとう」

そんなシリカの言葉に、上条も微笑みながらお礼の言葉を返す

「その……やっぱり行っちゃうんですか？」

「……ああ、なんだかんだで5日も前線から離れちゃったからな。すぐに戻らねえと……美琴にどやされる」

「……、攻略組なんてすごいですね！私じゃ…何年たつてもなれないですよ……」

そんな風にあやふやに言葉を紡いでいるシリカの表情は、みるみるうちに曇っていった。それは仕方のないことなのかもしれない。ただの2日程度の関係とはいえ、死と隣り合わせの世界で初めて心から頼りにした人と別れてしまうと思えば、別れを惜しむのも当然だった

「あの、上やんさん…私…!!」

「レベルや装備なんて、所詮突き詰めればただの数字だ。この世界での強さなんて単なる『幻想』だ。そんなものよりも、もっと大切なものがある」

「……え？」

「人との繋がりに。人との繋がりは、強さとかパラメータじゃ測り切れない。それは現実でも、この仮想世界でも変わらないんじゃないかって、俺は思う」

「上やんさん……」

「次はいつか現実世界で会おうぜシリカ。『上条当麻』それが俺の本当の名前だ。いつか向こうの世界に戻った時に探す時の参考にしてくれ。そんでまた出会ったら、同じように友達になれるさ」

「!!はい！私の名前は『綾野桂子』です！またいつか会いましょう！約束ですよ!!上条さん！」

「……ああ、約束するよ綾野。さ、ピナを生き返らせてやろうぜ」
「はい…」

そう言うとしリカはメニューを開いてウインドウを操作し、アイテムストレージからピナの心と pneuma の花を取り出した

(…ピナ…戻ってきたらいっぱい、いっぱいお話してあげるからね。今日のすごい冒険の話…私とあなたの…たった1日だけの…とびっきりの『ヒーロー』さんの話を…)

その翌日、第56層の転移門広場にて上やんの元をとある情報屋が訪れていた

「よう上やん。一連の活躍は聞いたゾ。ご苦労だったナ」

「ようアルゴ。で、例の情報は聞き出せたのか？」

「ああ、牢獄の尋問官の繋がりからナ。どうやらお前がアイツらをぶち込んだ後、ロザリアが洗いざらい吐いたらしい」

「で？その詳細は？」

「洗いざらい吐いたとは言っても、アジトの場所までは知らなかつタ。分かったのはロザリアが自分へ指示を出していたラフィンコフィンの下っ端から聞いたと言っていたリーダーの名前とユニークスキルの名称だけダ」

「・・・その名前とスキル名は？」

「1000コル」

「クソツ!!!」

揮を執ることになっています。ここでは私の言う事に従ってもらいます」

「ツ~~~~!!ああそうかよ!だったら俺は今回のボス攻略戦は降りるぜ!」

ドサツ!

「つたく!…何なんだよ美琴のやつ…お前だって普段NPCの世話になつてんだろうが…NPCあつての俺たちみたいなところもあるつてのによお…」

ドサツ!

「おす!よもやまた『閃光』さんと揉めるとは、お前も相変わらずだなあ…上の字よお…」

「…クラインか…」

洞窟での口論から数時間した後、上条は村外れの草原に乱暴に腰を下ろした。するとそこに、攻略組として顔を合わせるようになり、いつしかこの世界の友人の一人となった男が同じように腰を下ろし話しかけてきた

「何でお前と閃光さんはいつもああなんだか…まあとりあえず飲めよ。気分が紛れる」

「…俺リアルじゃ未成年なんだけどな…」

「少しくらいはいいだろ…大体がリアルで眠ってる体がこれ飲んで酔っ払う訳じゃなし」

「…お前きつとリアルじゃダメな大人だろ」

「バレたか♪」

上条に話しかける赤髪の頭にバンダナを巻いた野武士面の男の名は「クライン」。攻略組の一角であるギルド「風林火山」のリーダーで

あり、上条とは友人改め、今ではお互いの実力を認め合える悪友とも言える関係となった

「しっかしよお？本当何で…ゴクツ…っペー！お前とミコトさんはあななんだよ」

「喋るか飲むかどつちかにしろよ…まあきつとアレだよ、俺も美琴もリアルを忘れたくないだけなんだよ、きつと。俺たちリアルじゃずつとああだったからな。元々の気が合わねえんだよ」

「よく言うぜこのモテ男め…」

「ああ？モテ男？この上やんさんがか？冗談キツイぜ」

「ふんっ！」

バキッ！

「痛えっ!?!何でいきなり殴るんだよクライン！」

「今のお前のセリフは殴られて当然なんだよ!!」

「何のことだよ…ゴクツゴクツ…うげえ、にっがいなこれ…」

「いつかそれが美味く感じる時が来るんだよ…つぶはあー！」

「…でもまあ、アイツにはパーティー解散した別れ際に『他の誰かとパーティー組め』なんて言いはしたけど…まさかトツプギルドの副団長にまでなつて、そのレイピアの剣術の早さたるや『閃光』とまで呼ばれるようになるとはな…」

「…そりゃきつと、お前への気持ちと罪悪感から逃れたいと思って必死になつてんだよ…あの子は…」

「あ？なんか言つたか？」

「何でもねーよ。はあく、俺もお前みたいにリアルで繋がれる仲の良い女の子が欲しいぜくもしくは恋人がよく」

「はあ？俺と美琴が仲が良い？冗談はよしてくれよ」

「いいや〜？俺にはお前ら2人はこれ以上なくお似合いに見えるぜく？一回ぐらい付き合ってみたらどうだ？」

「おいおい…仲良いまでは見過ごせるけど、流石に恋人はよしてくれよ。あんなワガママで自己中で向こう見ずで高飛車なお嬢様なんかと付き合ったらこつちの身が保たねーよ。それに、上やんさんの理想

「本当！本気！マジで！誓います！」

「じゃあ今回は特別に見逃してあげるわ。丁度さつき56層の攻略も終わって次の層のアクティベートも終わったし、新しく到達した57層の『マーテン』って主街区のレストランで夕食でも奢ってもらおうかしら？無論フルコースで」

「ふ、フルコース!?そ、それってちなみにおいくらなんでせう…?」

「さあー?まだ食べたことないから分かんないけど、NPCの中じゃトップクラスだったから、8000コルぐらいはするんじゃないかしら?」

「・・・不幸だ」

「じゃ、早速行くわよ。誰かさんが反論なんてしなけりやNPCを困にしてみよう少し楽に倒せたところを、ちゃんと正攻法で私なりにも頑張って倒したんだから。おかげでもうお腹ペッコペコよ…」

「えっ…?それってつまり…」

「・・・転移。マーテン」

シユン!

上条の言葉を遮って美琴は転移結晶にこれから行くレストランのある街の名前を指示し光と共に消えた。彼とご飯を食べられる喜びなのか、それともただの照れ隠しなのか彼女の頬は心なしか少し赤らんでいた

「あ、おい!…つたく美琴のヤツ…大して緊急事態でもないのに割と価値の高い転移結晶なんか使いやがって…転移門まで行けばそれで済む話じゃねえか…ま、俺もボチボチ行くかな…」

そう言って上条は立ち上がり、転移門広場に向けて歩き出した

「!?」

「誰かの悲鳴か!？」

「行くわよアンタ!」

「お、おう!」

ダダダダダダダダダッ!!!

「た、たしかこの辺から…!」

「おい美琴!こっちだ!人だかりが出来てる!」

「!分かったわ!すぐ行く!」

「あ…ああ…あ…」

「あれは!？」

上条と美琴が見たのは、とある教会の上から縄で首を縛られ吊るされた状態で、いくつもの棘のようなものが飛び出ている槍が胸に突き刺さっている男性だった

「ッ!おい!早く抜け!」

「あ…ああ…:…あ、ああ…」

グッ…ググ…グッ!

(…?アイツが抜けて呼びかけたのに一瞬躊躇した?一体なんで?)

「おい美琴!上から引き上げてくれ!俺は下で受け止める!」

「!わ、分かったわ!」

「待ってる!今助ける!」

「あ…ああ…あ、ああああああああ!!」

ガシヤアアアアアアアアア!

カラン!…カラッ…カラン…

男性が最後に一際大きく叫ぶと、光のポリゴンとなって砕け散り、男性を身体を貫いていた槍だけが残って落下してきた

「ッ!?!クソッ!!」

「ちよつとアンタ！ボサツとしてんじやないわよ！HPの減らない安全圏内じゃ『デュエル』以外で死ぬことはまずあり得ない！周りにいる人の中からデュエルのWINNER表示を探すのよ！」

「！わ、分かった！」

美琴が教会の上から上条に呼びかけ、その声にハツとした上条がデュエルのWINNER表示を先の男性の一件を目撃していた何人もの野次馬の中から探す

「・・・いない：逃げられたのか？」

「アンタ！中には誰もいなかったわ！そっちはどう!？」

「ダメだ！こつちにもいない！」

「・・・どういうことだ、これ」

一連の事件から上条当麻は現場を一旦離れた後、2人で事件のあった教会の上で今回の事件の犯人の手口について話し合っていた

「普通に考えれば、デュエルの相手が被害者の胸に槍を突き刺してロープを首に引っ掛けて、その窓から突き落とされた：つてのが妥当かしらね・・・」

「だけど、デュエルのWINNER表示がどこにもなかったんだぞ？」

「正直こんなのありえないわ。安全圏内でデュエル以外で人が死ぬなんて。そもそも圏内じゃどんなに頑張ってもダメージは与えられないのよ？」

ザワザワザワ・・・

「・・・また下に人が集まってきたな・・・」

「・・・どちらにしても、このまま放置なんて出来ないわ。事件の真相を明らかにしないと。もし仮に圏内でPKするスキルか方法を誰か

が見つけていたとしたら、これから先、外だけでなく街の中まで危険だということになるわ」

「そうだな・・・」

「前線からは一旦離れることになっちやうけど・・・この際仕方ないわ。解決までアンタも協力しなさい。この事件はここで解決しとかないと、恐らく後々厄介なことになる気がするわ」

「おう！任せろ！じゃあまず下で最初っから見ている人がいないか事情聴取だな！」

第30話 罪の茨

「本日はどうもありがとうございます…ございました…すみません、怖い思いをしたばかりなのに色々と聞いたりしてしまつて…」

「いえ…こちらこそ、こんなところまで送つてもらつて…」

「いや、気にしないで下さい。それよりもまた明日、お話を聞かせて下さい」

「はい」

「よし、じゃあ行くこう美琴」

「ええ」

スタスタスタ…

「さて、現状把握もかねて、ヨルコさんから聞いた話をお互いに確かめておくか」

「そうね、それがいいわ」

2人はあその後、教会の下に集まっていた野次馬の中から、事件を最初から見ているという紫色の髪をした「ヨルコ」という女性を保護した。それから一連の事情を聞き終わり、彼女を泊まっている宿まで送つて行つた後だった

「被害者は『カインズ』さん。ヨルコさんとは知り合いで、あの時の少し前、2人は一緒にご飯を食べていた」

「2人は同じギルドいたことがあつた知り合いで、食事をし終わった後、2人はそのこの広場ではぐれてしまった…ということね」

「そして周りを見渡したら、いきなりこの教会の窓からカインズさんが投げ出されて吊るされていた」

「そしてその時、確証はないけれど、ヨルコさんはカインズさんの後ろに誰かの影を見ていたのよね。でも、その人影に見覚えはなかった」

「そして、カインズさんに関してカインズさんが狙われるような理由に心当たりはなく、彼を狙うような人にも心当たりはなかった…」

「これで全部ね…後は、現場に残されたそのスピアだけ。だけど、そのスピアの出所が分かれば、犯人を追えるかも…」

「となると…鑑定スキルがいるな…美琴、お前上げてるか？」

「上げてる訳ないじゃないそんな実戦に役立たないスキル」

「だよな…つて事はエギルに頼むしかねえな…」

「エギルさん？あの人そういう道に進んでたの？たまに前線にも顔出してるのに」

「装備専門ではねえよ。ただの雑貨屋さ。俺もたまに世話になってる」

「私も知り合いに専門の武具屋やってる子がいるけど…まあいつか、今は一番忙しい時間帯だし」

「じゃ、話は決まったな。50層のアルゲードに行こう」

――――

「なんか…治安悪そうなところね…」

「こういう路地だから仕方ねーんだよ、夜は特にな…ま、学園都市の裏路地とか思い出すだろ？」

「それ大してフオローになってないわよ…」

「まあそこは流してくれよ、そろそろだ…つと…」

カランカラン！

＜毎度！また頼むよにーちゃん！

「はあ〜〜〜…」

第50層の主街区アルゲードを歩く上条達がある店の前にたどり着くと、その店の中からエギルの声が聞こえて来たかと思えば、それに続いて、いかにも気だるそうに槍を背負っている青年が出て来た

「ははは、今の人見る限り、相変わらずアコギな商売してるみたいだな、エギル」

「よお！なんだ上やんか！なに、安く仕入れて安く売るのがうちの

モットーなんでね」

「安く売るのはいいが、仕入れるのはほどほどにしといてやれよ」

「それじゃあウチはあつという間に赤字になっちまうよ」

「よく言うぜ、こんな店を経営しながらも前線に顔出すくせに」

「あつはつは…つておい！そ、そこにいんのひよつとしてミコトか!？」

「え？ああそうだけd…ぐえ!？」

上条が話している途中にも関わらずエギルは彼の首に腕を回し強引に店のカウンターの内側へと引き込む

「ど、どうなってんだ!？お、お前あの後からずつとソロやってんじやなかったのか!？あの第1層の時からとかくミコトからは一線引いて距離取ってパーティーとか組まないようにしてたんじやねえのかよ!？」

「いでつ!？いてて!!あ、あーもうちげーよ！色々と事情があんだよ！てか顔ちけーんだよホモかお前!!」

「誰がホモだ!？現実じゃ俺は所帯持ちだ!」

「え、そうなの?」

「あゝっ!？つい口が…」

「おいテメーエギル！いい歳こいて奥さん持ちとは聞いてねえぞ！詳しく聞かせるコンチクショウ！美人だったら承知しねーぞゴラアアア!!」

「あ、あはははは…」

「圏内で人が死んだ、か…デュエルじゃないのか?」

あれから上条は奥さんの話は脇に置き、事件の内容と事情をエギルに説明し、美琴と共にエギルの店の裏の居間へ通してもらっていた

「それがデュエルだって分かってんなら、こんな苦労しちやいねーっ

つの。WINNER表示は確認出来なかったしな」

「直前までヨルコさんと一緒にいたから睡眠PKの可能性も低いわ」
「それに、突発的なデュエルにしてはやり口が複雑すぎる。他に方法なんざいくらでもあったはずだ。それを踏まえると、確実に事前に計画されていたPKだと思っ正しいい」

「そこで、コイツか…」

そう言うとエギルは、先ほど上条から手渡された事件現場に残された槍を取り、鑑定スキルを使って武器の詳細を調べる

「どうだ？何か分かるか？」

「…『プレイヤーメイド』だ。つまりはソイツのオリジナル武器。一般的に出回ってるモンじゃねえ」

「そ、それ本当か!？」

「さ、作成者は一体誰なの!？」

「作成者は『グリムロック』…商人同士の間じゃ聞いたことねえな…少なくとも一線級の刀匠じゃねえ、武器自体にも特に変わった性能はない…」

「そう…でも、手掛かりにはなるはずよ」

「そうだな…エギル、その武器の名前って分かるか？」

「えーっと？『ギルティール・ソーン』となっているな。さしずめ『罪の茨』ってところか」

「罪の…茨…」

「ま、とりあえず返すぜ…」

「おう、サンキュな」

エギルは上条当麻に槍を返し、上条はそれを受け取った

「…よし、試してみるか」

そう言うと上条当麻は槍を逆手に持ち、自分の手の平を広げる

「えっ？ちよ、アンタ何を!?」

「ふっ!!!」

ビュツツ!!!!

!!!ダメツ!!!

ガシツ!!!

「!?お、おいなんだよ美琴!?ビツクリさせんなよ!」

「ビツクリしたのはこっちよ!アンタバカなの!?その武器で実際に死んだ人がいんのよ!」

「いやだって、試してみねえ事には分かんねえだろ?」

「そういう無茶はやめなさいよ!何度言ったら分かるの!?少しでも死ぬ要素がある時は自分を第一に考えなさいって!」

「いやでもこれは…方が一原因がこの武器にあつたと仮定して…」

「とにかく!これは、エギルさんにしばらく預かってもらってももう少し調べてもらおうわ!それから誰かに試し切りするでも遅くないでしょ!?!いいわね!」

「わ、分かったよ…何もそんなにムキになるかよ…たかが自分の腕一本傷つけようとしたぐらいで…」

「おい、俺の意向は無視かよ…まあいいが…」

第31話 連鎖

事件の翌日、2人はまた57層を訪れ、昨日のレストランで飲み物のみを注文し、話を聞いていた

「ねえ、ヨルコさん？あなた、グリムロックって名前に聞き覚えない？」

「えっ!?は、はい昔、私とカインズが所属していた、ギルドのメンバーでした」

御坂美琴の言葉に明らかな驚きの表情を浮かべたヨルコ。そして昔の自分とグリムロックについての関係性を語った

「実は…カインズさんの胸に刺さっていたのは、そのグリムロックさんが作った武器だったんです」

「えっ!? そ、そんな…」

「何か、思い当たることはありませんか？」

「はい、あります…」

上条当麻がそう聞くと、彼女は何やら気まずそうに話し始めた

「昨日…お話出来なくてすみませんでした…忘れたいし…あまり思い出したくない話だったので…でも、お話しします」

「……………」

ヨルコの言葉に真剣に耳を傾ける2人。そして一呼吸置くと、ヨルコは話し始めた

「そのギルドの名前は『黄金リング』という名前でした。メンバーは私も含めて全員で8人。半年前、たまたま倒したレアモンスターが、『敏捷力』を20もアップさせる指輪をドロップしたんです」

「敏捷力を20!?すごいわね…」

「それで、その指輪をギルドで使おうっていう意見と売り払ってお金にして儲けを分配しようという意見が出ました。結局最後は、多数決で決めることになって、結果は5対3で売ることになりました。前線の大きい街で競売屋さんに委託する為にリーダーの『グリセルダ』さんという人がみんなを代表して一泊する予定で出かけました」
「なるほど…」

「でも、グリセルダさんは帰って来なかったんです。その後になって、私たちはグリセルダさんが死んでいた事を知りました…どうして死んでしまったのか、未だに分かっていません」

「そんなレアアイテムを抱えて圏外に出るとはまず考えにくいわね…って事は、睡眠PKかしら？」

「いや半年前なら、睡眠PKが出回り始める直前だ。可能性はあまり高いとは思えない」

「にしても、手口は別として偶然とは考えにくいわね…となると、グリセルダさんを狙ったのは、指輪のことを知っているギルドのメンバーの誰かだと見てまず間違いないでしょうね…」

「……………」

ヨルコの表情がその言葉を聞いてなおさら暗いものになる

「中でも、その指輪の売却に反対した3人の誰かが怪しいと思うわ」

「売却する前に指輪を奪おうとして、グリセルダさんを襲った…ってことか？」

「おそらくね…それで、武器の所持者のグリムロックさんっていう人は？」

「彼は、グリセルダさんの旦那さんでした…もちろん、このゲーム内の事ですけど…」

「旦那さん…ですか…」

「グリセルダさんは、とても強い剣士で、頭も良くて…グリムロックさんは、いつもニコニコしているような、優しい方でした。2人はとってもお似合いで、仲の良い夫婦でした…もし昨日の事件の犯人がグリ

ムロックさんだとしたら…指輪の売却に反対した3人を狙っている
んでしよう…」

「つまり、カインズさんは指輪の反対に手を挙げた1人ってことですか？」

「ええ、というかむしろ…指輪の売却に反対した3人の内2人は…カインズと私なんです」

「!?」

「じゃーじゃあもう1人は!?」

「シユミットという『タンク』です。今は攻略組の『聖竜連合』というギルドに所属していると聞きました…」

「シユミット…?聞いたことあるな」

「聖竜連合のデイフェンダー隊のリーダーだよ。デツカイランス使いの人」

「ああ、あのツンツン頭のアイツか…って俺が言えることじゃないか」「シユミットを知っているのですか？」

「まあ、ボス攻略で顔を合わせた事があるくらいだが…」

「なら、シユミットに会わせてもらおう事は出来ないでしょうか?彼はまだ、今回の事件のことを知らないかもしれないかもしれません。だとしたら彼も…もしかしたら…カインズのように…」

「…シユミットさんと呼んでみましょう。聖竜連合に知り合いがいるから、本部に行けばどうにかなると思うわ」

「だったらまずは、ヨルコさんを宿屋に送らないと…彼女もおそらくその内狙われる。ヨルコさん、シユミットさん呼びに行ってる間、宿屋で待つておいてもらえませんか?そして俺たちが戻ってくるまで、絶対に宿屋から外に出ないでくれ」

「はい…」

「グリムロックの武器でカインズが殺されたと言うのは本当なのか？」

その後、聖竜連合の本部を訪れた2人は、事情を大まかに話しシユミットを呼び出す事ができ、まだ57層のヨルコのいる宿屋へと戻ってきた。しかし、そのヨルコと話しているシユミットの足は貧乏ゆすりをしており、苛立ちからなのか自分も狙われるかもしれないという焦りからなのか、どうにも落ち着きがない

「・・・本当よ」

「ッ!?何で今さらカインズが殺されるんだ!?アイツが：アイツが指輪を奪ったのか!?グリセルダを殺したのはアイツだったのか：グリムロックは売却に反対した3人を全員しらみ潰しに殺すつもりなのか：？俺やお前も狙われているのか：」

「グリムロックさんに槍を作ってもらった他のメンバーの仕業かもしれないし、もしかしたらグリセルダさん自身の復讐なのかもしれない」

「えっ!?」

「だって、圏内で人を殺すなんてこと：幽霊でもない限りは不可能だわ」

「ああっ!?ああああ・・・」

「私、昨夜寝ないで考えた・・・」

するとヨルコは突然立ち上がり、恐怖を込めたような声で語り始めた

「結局のところ！グリセルダさんを殺したのはメンバー全員でもあるのよ!?あの指輪がドロップした時！投票なんかしないで！グリセルダさんの指示に従えば良かったんだわああああ!!!」

「ッ・・・」

もはやほとんど蚊帳の外となってしまうている上条と美琴。しかしヨルコさんはその2人を気にせず、窓際に腰掛けまた語り始める

「でもただ1人、グリムロックさんだけは…グリセルダさんに任せる
と言った…だから、あの人には私たち全員に復讐して、グリセルダさ
んの敵を討つ権利があるんだわ…」

「冗談じゃねえ…冗談じゃねえそ…今さら…半年も前のことなんだぞ
…何を今さらッ…!」

「お前はそれでいいのかよヨルコ!?こんな訳の分からない方法で!殺
されていいのかよッ…!?っあ…」

「………」

つい感情的になり席を立ちヨルコの方へ寄ろうとするシユミツト
を上条と美琴が止める。するとその直後

ドスッ……………

「!!!」
「!!!」

どこからか飛んできた茨の形をした武器が、ヨルコの背中へと突き
刺さった。ヨルコはその反動から体が180度回り、背中には赤い血
のようなエフエクトが広がっていた。そして、墮ちる…まるで根元か
ら生えていた茨が、ヨルコごと地に吸い込んでいくかのようにヨルコ
を地へと墮としていく

「ッ!?ヨルコさん!!」

ガシャアアアアアン!!!

キンッ!…カキッ……キン……

上条が窓から呼びかけるが、ヨルコは光のオブジェクトとなり消え
た。そして彼女の背中を貫いていた緑色の茨の形をしている短剣だ
けがそこに残された

第32話 真相

「ヨルコさん!!?」

ガシヤアアアアアン!

「ツ!!!クソツ!!!」

ダンッ!! 「Immortal Object」

ずっと目の前にいたヨルコを守ることが出来なかったという不甲斐なさから上条当麻は覗き込んだ窓の淵に右拳を叩きつける。しかし、そんな感情的な上条当麻とは裏腹にSAOのシステムは機械的にその設備が『破壊不能オブジェクト』であることを示す

「アンター!そこ退きなさい!シユミットさんのこと頼むわよ!!」

「おわっ!?どうした美琴!?!」

「見えてなかったの!?!その家の屋根の上にローブを被ったいかにも犯人ですって奴がいたでしょ!?!」

「なっ!?!」

「とりあえず後よろしく!」

バツ!!スタタタタタタツ!!!

その場で落胆する上条を気にも止めず、犯人らしき人影に気づいた御坂美琴は窓から外に向かって飛び出す。そしてローブを被った怪しい人物を追い家の屋根から屋根に飛び移りそのローブの人物に追いつく

「止まりなさい!!」

「ツ!!!」

カチャ

(転移結晶!?!このままどこかの街に飛ぶつもり!?!だけどその街の名前さえ聞けば...!)

ゴーン！ゴーン！ゴーン！！

(!?こんな時に鐘の音!?これじゃローブの奴の転移する場所が聞こえない!!)

「……………」

ローブの人間が取り出した転移結晶に向かって転移する場所を指示する。しかしその声は鐘の音に掻き消され美琴の耳には届かない

(ならせめて唇の動き!…って分かるわけないじゃない!)

シユン!

転移結晶が作用しローブの人間はその場から消え去る

「ツ!!逃げられた……………」

—————

ガチャ

「美琴ツ!どうだった!?!」

「ダメ、逃げられたわ…」

「……………そうか…」

「…………あのローブは…グリセルダの物だ…あれはグリセルダの幽霊だ…俺たち全員に復讐に来たんだ…!は、ははっ、そりやそうか…幽霊だったら圏内で人を殺すぐらいワケないもんな…あははっ…はははは…」

シユミットはすっかりあのフードの人間がグリセルダの幽霊だと思いきんでしまい、頭を抱えてその身体は恐怖によって細かく震えている

「…………アンタ、後で少し話があるわ」

「え？あ、ああ…」

「シュミットさん、一先ずは聖竜連合の本部に戻って下さい。あそこの方が人が多いですし、何より手練れも多いです。ここよりは安全かと」

「あ、ああ…」

美琴が上条に何か耳打ちすると、その後震えるシュミットを聖竜連合に戻るように指示した

—————

「圏内PKの手口とその犯人と真相が分かっただつて!!」

「あーもうっさいわね、そうだつて言つてんでしょ」

シュミットさんを聖竜連合の本部へ送った後、2人はもう一度57層に戻り、レストランで飲み物のみを注文し、話し始めた。だが、話を始めるなり御坂美琴の口から飛び出たのは、今回の事件のやり口とその真相が全て分かったという驚愕のものだった

「い、一体誰が!?!どうやって!?!」

「そうね…いちいち口で説明するより見せた方が早いわ。ちよつと見て下さい」

そう言うと美琴は自分のメニューを開き、ウィンドウを操作して自分が装備している鎧の装備を普通の道具屋などで買えるような貧相なものに変え、自分の腰の鞘に収めているレイピアを引き抜いた

「?」

「ほっ!!」

ドスツ!!

「!?!?お、おい美琴お前!何やってんだ!?!HP0になって死ぬぞ!?!」

「うっさいわね、見とけて言ったでしょ?…そろそろかしら…」
「バアアアアアン!!」

美琴の身体が上条当麻の前でいくつものポリゴンの欠片となって消えた

「!? 美琴おおおお!!!」

ガチャ

「呼んだ?」

「へ?」

上条が叫んだすぐ後、まるで何事もなかったかのように美琴がレストランのドアを開けて店内に入ってきた。何がなんだか状況の掴めない上条は思わず素っ頓狂な声をあげた

「どう?今ので全部分かったでしょ?」

「…?いや全く」

「なっ…!はああああく〜こんなだったら最初から実演なんかせず
に口で説明した方が早かったわ…」

「誰も死んでない!」

「そうよ、一連の事件であるの武器が削ってたのはプレイヤーのHP
じゃない、防具の耐久値だったの」

「防具の耐久値…:…そうか!なるほど!じゃあ防具の耐久値が0に
なって壊れるタイミングを見計らって!」

「そう、本人が結晶で転移してたの。圏内でHPは減らないのに防具
の耐久値は減って、まるでプレイヤーが死んだかのように見せかけた
のよ」

「…お前それいつから気付いてたんだよ」

「最初っから」

「最初から!?!なんで言ってくれなかったんだよ!?!」

「確証がなかったのよ。でも引つかかる所は何個かあったわ。カインズさんの時は、アンタが槍を抜けて言ったのに最初、抜くことを躊躇したわ。そしてヨルコさん、彼女はシュミットさんと話している時、私たちに背中を一切見せていなかった。あれは多分、予め自分の背中に武器を刺しておいて、タイミングを見計らってまるで窓の外から狙われて刺されたように見せかけたのよ」

「な、なるほど…」

「そして、その後のローブの人を追いかけて、向こうが転移した時、全ての点が繋がった。ああ、こういうタネだったのか。ってね」

「す、すげえなお前…」

「これでも学園都市が誇る第3位の頭脳ですから」

「それ久々に聞いたな…」

「おそらくあのローブの人はカインズさんよ。彼はずっとヨルコさんとこの圏内PKを予め計画していた」

「そして、ヨルコさんとカインズさんの目的は最初っからシュミットさんを脅してこの事件は自分を含めた3人へのグリセルダさんの復讐劇だと思いこませる為だった…ってことか?」

「そ。多分2人は、最初からある程度シュミットさんの事を疑ってたんだと思うわ。そのシュミットさんはまんまと騙されてこの事件をグリセルダさんの幽霊がやったことだと信じ込んだみたいだけどね。今ごろ、グリセルダさんのお墓にでも行って自分の罪を自白しながら、『自分は殺さないでくれ』って土下座してんじゃないかしら?そして、その場所には彼を待ち伏せしているカインズさんとヨルコさんも…」

「なるほどな…2人は最初っからシュミットさんの口から事件の真相を聞きたいだけだったのか…」

「そゆこと。ま、結局のところ私たちはまんまとヨルコさん達の芝居に付き合わされちゃった訳だけど、私は悪い気はしないわ。どう?分かった?」

「ああ、分かった。…でも、でもよお美琴？」

「？　でも何よ？　まだ何か分かんないことでもあんの？」

「結局、最終的に指輪は誰が持ってた？」

「はあ？　そんなの、この後シュミットさんが語るであろう犯人が奪つたに決まってるでしょ？」

「でも、グリセルダさんはグリムロックさんと結婚してアイテムストレージ共有してたんだぞ？　確か共有してるアイテムって確か持ち主が死んでももう片方の相手のストレージに消えずにそのまま残るんじゃないのか？」

「!?　た、たしかに…まさか…ってことは!?」

「これからシュミットさんが語るであろう自分に指示を出していた事件の真犯人は…グリムロックさん！」

「ちよつと！　あの3人はまだその事知らないわよ！」

「でもグリムロックさんは今の3人の事情を知ってる！」

「だとしたら…グリムロックさんは真実を後々に知ってしまう3人を口封じの為に…!!」

「まずいわ！　シュミットさんとカインズさんとヨルコさんが危ない！」

第33話 十字の丘

ここは第19層の主街区から少し外れた場所にある「十字の丘」。辺りには常に暗雲と霧がかかっており、どこか不気味な雰囲気になっている。その暗雲の中で、シュミットはグリセルダの墓に頭を下げ、必死に許しを請っていたところ、ローブを身につけたヨルコとカインズの2人がシュミットの前に現れ、事件の真相を問いただしていた

「ち、違うんだ！俺は、俺はただ！指輪の売却が決まった日、いつの間にかベルトポーチにメモと未接続の回廊結晶が入っていて、そこに指示が書いてあって！」

「それに従って行動しただけなんだ！メモには、グリセルダが泊まった部屋に忍び込めるよう回廊結晶に位置セーブをしておいて、それをギルド共有ストレージに入れるとだけ！だから誰の指示かなんてのは書かれてなかったんだ！俺がしたのは本当にそれだけなんだ！殺しの手伝いなんてするつもりはなかったんだ！頼む！信じてくれ！」

「……全部録音させてもらったわよ、シュミット」

「……へ？」

ローブの2人組が被ったフードを取るとその顔が明らかになる。フードを取ったその2人は、死んだはずのヨルコとシュミットだった

「……ろく：おん？そうか：そうだったのか：お前達、そこまでグリセルダのことを…」

「アンタだって、グリセルダのことを憎んでた訳じゃないんだろ？」

ヨルコの声を聞いた途端、まるで全身の力が抜けたかのように安心するシュミットにカインズが問いかける

「も、もちろんだ！信じてくれ：！そりや、メモの差出人からもらった

金で買ったレア武器のおかげで、聖竜連合の入団基準をクリア出来たのは確かだが…」

ザシュツ!!!

「ッ!?!」

「!?!」

「・・・麻痺…毒?」

いきなり暗闇の中から飛んできたナイフがシュミットの肩に刺さり、その肩に付属していた麻痺毒の効果で痺れたシュミットは地面に這いつくばる。それを見て驚くヨルコとカインズの2人を取り囲む怪しいローブを身につけた者が2人。その2人は剣をヨルコとカインズに向け、その剣は暗に「動くな」という意味を示していた。そして、十字の丘の奥からさらにもう1人、ローブを被った人間が1人現れた

「お〜いおい、こりや大した獲物だなく? 聖竜連合の幹部様じゃねえか」

「ッ!?!こいつら…殺人ギルド…『ラフィンコフィン』!」

「さ〜て、どうやって殺してやろうかにや〜?」

「アレ!アレやりましょうリーダー! 『殺し合って残ったヤツだけ助けてやるぜゲーム』!」

最後に登場したローブの人物は他の仲間から「リーダー」と呼ばれ慕われていた

「え〜?この前アンタそれやって最後結局殺したんじゃなくい?」

リーダーと呼ばれる人物は、その口調とローブを被った上からでも分かるような細い線の身体の女性だった

「もおー!やる前にそれ言っちゃったらゲームにならないっすよリー

ダー！」

「ヒヒッ！」

「!!!」

ラフィンコフィンの3人の狂気に恐怖し縮こまってしまおうヨルコ達

「ま、『とりあえず殺すか』」

ギランツ!!

リーダーと呼ばれる女の手に出刃庖丁のような大きめのダガーが握られており、怪しげにフィールドの月の光を反射して光っていた

「あれ？リーダー、今日はスキルで殺さないんすか？」

「ん、そうね？今日はなんかスキルでプチっと殺すんじゃないかって自分の手で殺したい感じ？」

「かっつ！いいっすねえ！遊びとかじゃなく殺し方も自由自在！そこに痺れる憧れるうっ！」

「ま、とりあえず殺しとくわよ。後々面倒なことになるし、まずは麻痺毒入れたコイツからかにやっくん？」

「ひひひひひひひひ!?待て！待て！待て！待て！死にたくない…死にたくないひひひひひひ!!」

「あはははははは!!アンタ最ツ高！じゃ、死んで？」

ブオオンツ!!!

リーダーの持つダガーがシュミット目がけて振り下ろされる。しかし、その瞬間、ラフコフのリーダーとシュミットの間には盾が割って入った

ガキイイイイン!!

「…ああん？」

「間一髪で間に合ったみたいだな。でも流石にアンタの剣は簡単に折れちゃくれないか」

ズザザザッ!

「テメエ…私の『友切包丁』を弾くとは…一体何モンだ?」

「『ただの平凡な高校生』さ」

シュミットとリーダーの間に割って入ったのは上条当麻だった。リーダーの振り下ろしたダガーを盾で防ぐと、リーダーは後ろに下がりに上条と距離を取った

「ヨルコさん!カインズさん!大丈夫ですか!?!」

「え!?!み、ミコトさん!?!」

「ど、どうしてここが!?!」

「説明は後です!ここは危険です!シュミットさんを連れて早くどこかに転移して下さい!」

「は、はい!行くぞシュミット!」

「あ、ああ…」

麻痺毒に侵され動けないシュミットにカインズが触れ、その反対の手をヨルコが握る

「て、転移!マーテン!」

シュン!!

「あー!ー!ー!?!獲物が!?!リーダー、どうしますう?」

「…ククククツ…」

「り、リーダー?」

ローブの女は対象であった3人を逃したが、何ら問題はないかのようになにに笑う。まるで何か新しい獲物を見つけて嬉々とした興奮が抑えきれないような、そんな感情がフードで隠れていても滲み出ていた

「あつははははははは!!こいつぁいいや!あつははははは!!よもやこんなどこで再会出来るとはなあ!」

「り、リーダー…?」

「な、何よ…アイツ、いきなり笑い出してどうしたつの…?」

「殺人ギルド、ラフィンコフィンのリーダー『P o h』。まさかこんなところで出会うハメになるとはな…」

「ありやりやく?どうやらそつちのツンツン頭の方は私のこと知ってるみたいね?どうせならそつちの血盟騎士団のお嬢様に紹介してくれないかにやくん?」

「な、何よアンタ…この殺人鬼と面識あったわけ?」

「いや、俺もアルゴから情報を聞いたことがあるだけだ。アバター名とそのユニークスキルの名称だけな。名前は『P o H』。そして扱うユニークスキルの名は…」

『『原子崩し』』

「!? めっ、『原子崩し』!?ってことはつまりアイツは!?!」

「ああああ!!そういうことだよ!久しぶりだなあ!『超電磁砲』!?!」

そう叫ぶとリーダーの女は自らローブを全て剥ぎ取り、その姿の全容が明らかになる

「改めて自己紹介だ。能力名『原子崩し』学園都市序列第4位のレベル5…『麦野沈利』だよおおおお!!」

第34話 原子崩し

「原子…崩し…!」

「よお…超電磁砲。あん時の決着を今ここでつけようかあ!!」

ブオン!ブオン!ブオン!

麦野の頭上に3つの緑色に発光する球体が現れる。粒子、または波形を状況に応じて示す電子をどちらでもない「曖昧な状態」に保ち、それを強制的に操り、球体にしたり光線として発射することで周囲に絶大な破壊をもたらすのが彼女の能力「原子崩し」である

「出たー!!リーダーのユニークスキル!原子崩しー!」

「…あんた達はそっちのツンツン頭を殺しな。私はこっちの女を殺す」

「了解」

2人の手下が上条当麻に襲いかかってくる

「来るぞ美琴!あつちが言ってるように俺がこの2人を引き受ける!

お前はリーダーの方を頼む!」

「ちよっ!ちよつと待ってよ!わたs…」

「お前も持つてんだろ!?お前の能力をユニークスキルとして!!口外はしねえしここじゃ誰も見てねえからここでは遠慮なく使え!じやなきや本当に殺されるぞ!」

「!!アンタ…知ってて…」

「お前のこと考えてずっと黙ってたんだ!この後で何か奢ってくれなきや割に合わねえぞ!」

「う、うんっ…!」

「お喋りしてる場合かあっ!」

「どりゃああつ!!」

ギンツ!!

「チッ！」

「ひよおー！硬ったい盾だねー!?」

「お前らの相手はこっちだ！美琴！後を頼むぞっ！」

1人の手下の男が振り下ろす刀を盾で弾く上条。そして美琴が戦いやすくするためにわざと2人の敵を引きつけ距離を取った

「さあーで、邪魔もいなくなったみたいだしこっちも始めるとすつか、超電磁砲。悪いけどあん時と同じようにはいかねーぞ?」

「・・・そうね。私も同じようにはいかないかも知れないわ。自分の本来の能力を使うのが久しぶりすぎて・・・」

バリバリバリッ!!!

美琴が自分のスキルスロットに封印し続けていた現実世界と同様の自身の能力「超電磁砲」を解放する。その途端に彼女の身体の周りには、最大10億ボルトの電力を誇る紫電がバチバチと音を立てて駆け巡る

「加減をミスってアンタを黒焦げ通り越してチリにしちやうかもしれないわよっ!?」

「ほざいてろやお子ちやまがあああああ!!!」

ゴウツ!!

「でやあっ!!」

バチイン!!

麦野の放った原子崩しのビームを美琴が電撃で弾き飛ばす。2人の能力に根差す物は、美琴はもちろんのこと、麦野の能力も突き詰めれば「電子」である。そこに電子があるならば2人の能力は互いに干渉し合うことが出来る。以前の戦いでそれを学んでいた美琴は躊躇うことなく麦野の光線を電気を帯びた右手で弾き飛ばした

「チツ！干渉できることを覚えてやがったのか…」

「お生憎様！頭も良けりや記憶力もいいもんでね！」

（実際、『STUDY』の作った『擬似メルトダウン』の時も同じことやったしね）

「今度はこっちから行くわよ！」

バチバチツ！ズザザザ！！

「…？砂鉄の嵐か…趣味悪いいな…折角の服が汚れるじゃねえかよ」
「服ぐらいで済めばいいけど…ねっ！！」

ゾンツ！！

美琴が自身の電力で発生させた磁力で辺り一帯の砂鉄を操ると、麦野の周囲に砂鉄の嵐を発生させ、それを一斉に振り下ろす。砂鉄は高速振動しているため、直撃すればひとたまりもなく、文字通りグシャグシャになる

「しゃあねえ…面倒臭えがシールド貼るか…防御は領分じゃねえから癩に触るんだがな…」

ブオン！

麦野は3つの原子崩しの球体を薄く広げ、ドームのように自身を包み込み、即席の原子崩しのシールドを作る。そのシールドに触れた瞬間に砂鉄は焼け焦げてしまった

「流石にそんな一枚岩じゃ倒されてくれないわね…」

「当たり前だろうが、お互いこのデスゲームで生きてんだ。簡単に死ぬんじゃねえぞ、もっと私を楽しませろ」

「確かにゲームは楽しむものだけど、この世界じゃあんまり楽しめそうにないわね。でも今の戦場はこのゲームで、あの時とは違う。だから今はここのシステムに甘えさせてもらおうわー！」

シャキーン！

「…レイピア？んなもんが私の能力に届くと思ってるのか？」

「やってみれば分かるわよ！」

ビュビュビュビュビュビュ!!

(ツ!?速ええっ!?こいつ、どんだけ敏捷力を!?だがそれ以上に、こいつの剣先のスピードが並みじゃねえ!)

「どう!?避けてばかりで防戦一方かしら!?」

「ツ!調子のんな売女ア!だったらテメエのそのレイピアごと焼き尽くしてやるよお!!」

ビュンツ!!

「残念!!」

バジンツ!!

「んだとおおっ!?」

「あのね、レイピアの材料は鉄で出来てんのよ。そこに鉄があるなら、私の能力が上乗せ出来る。アンタの能力だって弾き飛ばせるわ!まだまだ行くわよ!」

ビュビュビュツ!!ビシュツ!

何度も高速で突きを繰り出す美琴のレイピアが麦野の頬を掠め、赤い切り込みを入れる。ほんの微かにHPが減る

「ツ!?チツ!オラアツ!!」

ガギイン!ギリギリツ!!

麦野が腰に下げていた友切包丁を抜き放ち、美琴のレイピア目掛けて振り下ろし、その刀身が火花を上げてぶつかり合う

「ツ!? 真似、しないでくれる?アンタどうせこの世界でも能力に頼って生きて来たんでしょ?アンタのその武器の性能とソードスキルなんてたかが知れてるわよ?」

「けっ、余裕でいられんのも今のうちだ…その状態でもこれを弾けんのかよお!」

ドウツ!ドウツ!!ドウツ!!!

「ッ!？」

キンッ! チュイン! チュイン! ビッ!

「つちよ!? あつぶな…!」

ゼロ距離からの3連原子崩し。麦野のダガーとのつばぜり合いを押し退けてから電撃を纏わせたレイピアを振り回して2つのビームの軌道を変えることに成功するが、残った1つが美琴の頬を掠め、HPを少し削った

「安心して暇なんかねえぞコラアア!!」

「ヤバッ!!」

ガギイン!! ギリギリッ!

「おらおら! どうすんだあ!?! このままだとテメエはその可愛い顔から真っ二つだぞお!?!」

「クッ! ウッ!!」

体勢を崩して仰向けに倒れた御坂美琴に麦野の友切包丁が襲いかかる。咄嗟に美琴はレイピアを横に構え、包丁をその刃で受け止め、2つの武器が十字にぶつかり合い互いの金属を削り合う

「あはははははっ!! 安心してなあ? テメエを殺した後であのツンツン頭の野郎もちゃんんと殺してやるからよお。天国でも寂しくなることだねえ…もつとも…2人とも地獄行きかもしれないねえがなああ!!」
「…へえ、アンタの『ソレ』、ご丁寧に柄まで鉄で出来てる訳ね…」
「? ああ? 何か言ったか?」

美琴の細いレイピアとは対照的な麦野が振るう巨大なダガーは、両手で持つ柄までもその刀身と同じく金属で作られていた

「そのバカデツカい包丁…しっかり持って離すんじゃないわよ!!」
「ッ!?! ク s …!」

「遅いッ!!!」

バリバリバリバリッ!!!!

「ギャアアアアアアアア!!」

美琴が自分のレイピアに向けて電撃を放つ。するとそのレイピアに接している友切包丁にも電流が流れ、それを持つ麦野にも感電する。最高で10億ボルトの電圧を誇る彼女の電撃は麦野のHPを一瞬で赤ゲージまで削った

「どうやら勝負あったみたいね」

「く、クソが…まだ…終わってねえぞコラア!おいテメエら!ツンツン頭はいい!こつちを助けn…」

「悪いけど、お前の仲間はまだここにはいねえよ。POH」

麦野の呼びかけに応じるラフィンコフィンの手下の姿はもうなく、十字の丘の濃霧の中から姿を見せたのは上条のみだった

「んだと!?アイツらはウチの組織の中じゃ上層のヤツらだぞ!?一体どうやって…!!」

「アイツら麻痺毒の付加属性がある武器ばつか振り回すからよお、マジで危なかったぜ。でもま、ちゃんと盾で守りながらアイツらの武器をお返ししてやったら2人も痺れちまったから回廊結晶で牢獄送りにしてやったよ」

「なっ…!このクソがアアア…!!」

「さあ、いよいよ手詰まりみたいね。ここらで観念するならアンタも牢獄送りで観念してあげるわ」

「舐めてんじやねえぞコラアアア!」

ズドンッ!!!!

「フンッ!!」

パキイイイン!!!

「なっ!?私の原子崩しが掻き消されただど!?」

「悪いな。俺の右手は幻想殺しって言うてな、定義はまだまだ俺にも分からんことだらけだが、この世界のありとあらゆるスキルを打ち消すんだ。ちなみに現実世界じゃどんな異能の力も打ち消す」

「ッ!? 現実世界…そうかさては teme エも学園都市の…」

「ま、そんなとこだ」

「さ、分かったら大人しく観念なさい。今もうこの状況じゃアンタの能力は私たち2人にはロクに当たりもしないわ」

もはや詰み。この2人に対してもう麦野の切れる札は存在しない。そう上条と美琴は思い込んでいた。しかし、それはとんだ思い違いだった。麦野は右手を振って自分のメニューを開くと、ウィンドウを操作しフレンド項目からとある人物を選択し「コール」のボタンを押す

「!? 動かないで！これ以上動いたら容赦無く殺すわよ！」

美琴がレイピアの切っ先を麦野に向ける

「ははは、もう遅えよ。油断したな超電磁砲。コイツに頼るのはムカつくがこうなった以上は仕方ねえ…」

麦野のウィンドウがコールを終え、麦野がコールを掛けた人物との通話が繋がる

「第1位！手え貸せ！少々癪にさわるがここで死ぬよりやずつとマシだ！この私に『貸し』を作らせてやる！悪い条件じゃねえはずだ！分かったら今すぐ転移結晶使つて来い！ついでに面白えモンが見られんぞ！19層の十字の丘だ！」

「!? だ、第1位ですって!?」

「ま、まさかアイツまでこっちの世界に来てるってのか…あの…一方通行が…！」

「ははは…もう後悔しても遅えぞ…私としてもアイツになんぞ頼りたくはなかったが、これでも同じギルドのメンバーなんでな…一応腹は

割った仲だ…こんなところで死ぬぐらいならどんな手を使ってでもメエらを殺してやるよおおお!!」

シュン!

「!?!」

「…来たわね」

「…つたくよオ、面白エモンが見られるっつーから来てみれば…一体何なんですかア?このクソツタレな状況はよオ?」

上条当麻と御坂美琴の因縁の相手とも言えるであろう、学園都市最強の男。こともあろうにこのSAOの世界で再び両者は相見えた

第35話 世界の法則

「一方通行……！」

「……オリジナルと……あん時の……」

「まさかお前までこっちに来てるなんて……」

麦野がコールで呼び出したのは学園都市最強の男、一方通行だった。御坂美琴はその男の顔を見るだけで怒りが頂点に達しているかのような表情を浮かべ、上条当麻は真剣な瞳で一方通行の赤い眼を見据える

「でエ？ババア、俺アこれからどうすりやいいんだ？」

「……相変わらずクソムカつく野郎だなテムエは……まあいい、そこはこの際後回しだ。そっちのツンツン頭を殺れ。手段は問わねえ。私は超電磁砲の相手をする」

「……殺すのか？」

「当然だ」

「……」

麦野の言葉に数秒黙り込む一方通行。その胸の中には何があるのか、躊躇なのか、迷いなのか、それとも狂気なのか。それを知る者は一方通行のみだ

「……なら条件が1つある」

「条件？なんだよ」

「2人とも俺にも殺させろ」

「!？」

「おいおいマジかよ、2人とも自分で殺してえだなんて随分な悪党だなテムエも」

「オマエの目的はあくまで超電磁砲を痛ぶることなんだろう？だったら

別にそれは止めやしねエが、殺しは俺にやらせろ。その条件が飲めねエンなら俺は降りる」

「・・・しゃーねえがそれでいいだろう。じゃあ私はお前がああ男を殺るまでの間、超電磁砲の相手をする」

「あア」

そう言うとも一方通行は片足をほんの少しだけ上げる

「ツ!!ヤベエ!美琴!来るぞ!」

「分かってるわよ!死ぬんじゃないわよ!互いに!」

「ほらよオ!!」

ゴパアアアアアアア!!!

地面が音を立って割れる。一方通行が足の爪先で地面を軽く小突いただけで。コレこそが学園都市最強である彼の能力。ありとあらゆる力の向きを変える能力「ベクトル操作」である。地面を分けた衝撃が上条と美琴を分断させる。そして2人の前にそれぞれの相手が正面に立つ

「ほおらあ!ちゃんと回復したし第2ラウンドと行くこうぜえ!?!超電磁砲!」

「ちっ!来なさい!」

「言つとくけど、さっきはあんな風に話してたけど私、アンタを痛ぶる気はあっても、あいつに殺しを譲る気はないからな」

「なっ!?!」

「テメエが私を見下してる時点で、テメエはブ・チ・コ・ロ・シ確定なんだよクソがアアア!!」

—————

「クソツ!!持ってて当然だとは思っちゃいたけど、やっぱアイツもちゃんと自分の能力をユニークスキルで再現してんのかよっ!」

「よオ三下ア。テメエと闘り合うのは『アイツら』ン時以来かア?つ

つーこたア1年ぶりだなあ…お前も少しは強くなってるのか？一丁前に盾なんか構えちまつてよオ」

「この世界のシステムでならお前に負けない強さを持つてるつもりだ……ん？待てよ？お前『も』？…つてことは…!?」

「まあ流石にいきなり切り札は出したりしねエがよオ…どうせ闘うんなら楽しもうぜエ？まあもつとも、あん時みてエなハマは二度としねエけどなア！三下ア!!」

ダンッ!!ギユンッツツ!!!

「ッ!!早っ!?!」

「ウルアアアアアア!!!」

バゴンッツツ!!!

(ツゝゝゝ!?!ちやんと盾で防いだのにパンチの衝撃がっ!?!)

「ゲヒヤハア!今のは辛うじて盾で防いだか…だけど次は気をつけるよオ?この世界は血流や生体電気なんてモンがねエからそうゆう殺しは出来ねエが…ベクトル操作したパンチは死ぬほど痛エぞオ?それこそ一発でテメエのHP削りきつちまうかもなア!?!」

ゴウツツツツツ!!!

「どわっ!?!」

次いで上条を襲うのは一方通行が操作した烈風。風速40mは超えているであろう烈風にたまらず上条の身体は紙切れのように後ろに吹き飛ばされ、HPを削られながら尻もちをつく

「オラオラどしたア!?!この世界のシステムでなら俺に負けねえ強さを持つてんだろオ!?!だったら見してくれよその強さをよオー!」

「ッ!!オラアッ!!」

ブンッ!!

ギイイン!!

上条は自分の盾の持ち手から左手を引き抜くと、一方通行に向けて投げ飛ばすが、一方通行の誇る「反射」の前に呆気なく弾き飛ばされ

た

「遅っせエなア!!そんなの当たるわけねエだろうがア!!」

ドゴツツツ!!!

「?!?!ガハッ?!」

「盾に気を取られすぎだ。『あつち』じゃそうも行かなかつたが、『こつち』じゃ早さなんてスキルが上がればでどうとでもなるんだよ、最強」

敏捷力にモノを言わせたスピードで一方通行の懐に飛び込む上条。そしてその右ボディブローが一方通行の反射を潜り抜け、脇腹に突き刺さりHPを半分ほど減らす

「チツ!クソがツ!!ウネウネ動いてんじゃねエ!!」

ガボンツ!!!

「うおおっ?!」

一方通行の足が地面を踏みつけると地面が爆散し辺りに大量の土煙が上がり、辺り一帯が見えなくなる。確かにこここのフィールドには土と枯葉ばかりで殺傷力のある石はないが、一方通行のベクトル操作ならばなにも石などで直接の攻撃を狙わなくてもこうして相手の目くらましに使うことも出来る

(これでヤツの視界は封じた!それは俺もだが、俺はテメエの位置をしっかりと記憶してンだよオ!これでテメエに一撃:~!)

バキイイイイイツ!!!

(ツ?!なんっ?!)

「残念だったな、俺にぶつけられるような石ころがなくて」

上条の死角から襲いかかったはずの一方通行を逆に襲ったのは、彼の右手による幻想殺しの一撃だった。彼の底上げされた筋力から繰り出される一撃はまたも一方通行の反射を無効にしその顔面を捉え、

二発目の攻撃にして一方通行のHPバーを赤ゾーンまで削った

「ガハアアツ!? な、何でだクソツ!?」

「索敵スキルだよ。お前は上手く俺の視界を塞いで隙を作ったと思っ
たかもしれないが、索敵スキルを使えばお前の姿は例え土煙の中から
でも透けて見えちゃうんだよ」

「チイッ! クソが!! たかがゲームのシステムを使いこなしてるぐれエ
で調子に乗りやがってエ!!」

「悪いが、ここは学園都市じゃない。お前が最強でいられるのは学園
都市の中だけなんだよ」

「ッ!!! このクソツタレがアアアア!!! テメエだけは絶対にブツ殺し
てヤンよオ! 三下アア!!!」

ズ オ オ オ オ オ オ オ オ オ オ オ オ オ オ オ オ オ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
!!!
「なっ!?!」

その瞬間、世界が殺意で塗り潰された

第36話 黒い翼

一方通行の背中が弾ける。その直後、上条が見たのは一面を覆い尽くさんばかりの「闇」「漆黒」「悪」だった。一方通行の背中からはそれを象徴する一对の「黒い翼」が顕現しており、たちまち100メートル以上に膨れ上がり十字の丘の全てを闇に包んだ

(こ、この黒い翼も一方通行の能力なのか?!?それとも何か別の…だけれどこれが異能の力だっつーならこの右手で…!)

「i h b f 殺 w q」

バゴオオオオオオオオオオ!!!

一方通行の黒翼が振り下ろされる。どこまでも理不尽に何もかもを破壊し尽くす最凶の一撃。上条はそれを真正面から幻想殺しで受け止めるが、不幸なことに、一方通行の黒翼の中でも「最大の威力を誇る層」に当たってしまった

「ごぼあつ?!?ぶつはあああああああああああああああああ
!?!」

その翼は幻想殺しでも打ち消し切れないほどの威力をほこり、黒翼は上条のHPバーを赤ゾーンまで削る。幻想殺しで打ち消しておいてこれだ。常人がこれを受ければまさに「一撃必殺」であろう。そして、黒翼を真正面から受け止めた彼の幻想殺しは右腕ごと肩から弾け飛ばされ、血こそ吹き出さないもののその断面は赤く染まっていた

「……………y j r p 殺 q w」

もはやなんの意味を持つのかも理解できないノイズ混じりの言葉を一方通行が発する。全ての意思と行動を殺意に任せていた

「テメエの右手は落ちた！なのに…なのになンで！テメエはどうやってアレを打ち消したんだよオオオ!!」

その疑問に、上条当麻の返答はなかった。ただ俯いていた。その姿に一方通行は怯えていた。自分の能力も、黒い翼も、もはや見劣りした。目の前の上条当麻に宿る莫大な「何か」の前では

(見えねエ…まるで見えねエが確かにある…コイツの…コイツの右手の奥には…俺の力なンぎ比べ物になンねエほどの…透明な『何か』がある!!)

「……………」

上条当麻が顔を上げる。それだけで一方通行は自分の額から冷や汗が滴ったのが分かった。生きた心地などもはや実感出来なかった

「……………『テメエ』が」

上条当麻の口が動く

「『テメエ』がどこの誰かなんてしらねえ」

決して大声ではない。だが一方通行の耳の奥に突き刺さるような声だった。頬の動き、指先の動きという細かい動作まで見入ってしまった

「『テメエ』が何をやろうとしていたのかも知ったことじゃねえ」

上条当麻は目の前の一方通行を見ていなかった。彼が「何か」に対して語りかけている。一方通行はそれだけを感じ取った

「ただ」

その「何か」は上条当麻本人にしか分からないのかもしれない。とにかく彼はこう告げた

「……………ここでは黙ってる。こいつは俺が片付ける」

何よりも深く、重い一言だった。その瞬間、莫大な力を食い潰しながら彼の右手が戻り「何か」が押さえ込まれた。そして彼の表情に彼らしさが戻ってきた

(…戻した…のか?それともシステマ的にただ勝手に腕が回復したただけか…?)

(あんなだけの力があるのを自分で自覚するときながら…コイツは…それでも自分の右手に執着してんのか?)

「どうした?もう…終わりか…?」

「ッ?!?!」

そんな一言を上条が放つ。自分のHPバーはとづくに危険域に達しているのに、まるで自分はここで負けることはないかのように自信に満ちた口調だった

「なんツでだよ!?!なんでテメエはそんなだけの力を持っておいてわざわざそれを他人の為に使うんだよ!自分の為に使えばいいだろうが!なぜそうまでして他人に固執すんだよテメエはああああ!!」

「別に俺は他人の為だけに『コイツ』を使った覚えなんざねえよ」

「…はア?」

第37話 結末

「何よ…アレ…」

御坂美琴は彼らの戦いの一部始終を見ていた。一度は自分達も含めて辺り一帯を覆った一方通行の黒い翼も、上条当麻の肩口から飛び出した「何か」も

(分からない…何も見えない…けど…でも、感じる…多分『アレ』はあの時のものと同質のもの…大覇星祭の時の私の暴走を最後に止めた『何か』と…)

「アイツは一体…なんなの…?」

「…アイツの事でテメエが知らねえ事を…私が知るわけねえだろうが」

麦野も自分の戦いの手を止めて彼らを見入ってしまった。目の前には憎らしくて仕方ない美琴がいるはずなのに、彼らを見ずにはいられなかった。それほどまでに異質だった。一方通行の黒翼が。そしてそれを超えるほど凄まじいと感じた。上条当麻の中から出てきた「何か」が

ドサリ…

そして2人が倒れた。上条当麻が最後の一撃を放ってうつ伏せに。一方通行が上条の一撃を食らって仰向けに。まるで、以前自分と瓜二つの顔をした妹を最後まで守り抜いた時と同じように

「!?ヤバい!!」

倒れた上条を助け出す為、美琴が彼の元へと全速力で駆け出した

「!?チツ!みすみす逃すと思ってんのかよお!!」
ドゥン!!!

彼らに気を取られていた麦野の敵意が美琴に戻る。緑の閃光が美琴に向けて放たれた

「邪魔すんじゃないわよ!!!」
バヂッ!!!

だが美琴が電撃でその軌道を逸らした。そしてベルトポーチから転移結晶を素早く取り出し、上条当麻の体に触れた

「転移!マーテン!!」
シュン!!

「ツ!チツ!!クソがつ!!」

麦野が怒りに身を任せて地面を蹴ると枯葉が寂しく舞った。そして少し周りを見渡してから一方通行に近寄った

「おい、第1位。テメエはいつから天体観測なんかが趣味になったんだ?」

「.....」
「:..つたく、せめてHPぐらいは回復しとけ。今のテメエの残りじや小石に蹴つまずいたただけであの世行きだぞ」

「.....」
「おい、せめて返事ぐらいしろつつの。死にたきや死ぬでさつさとしろ」

「.....おいババア」
「ああ?」

「俺は正真正銘負けたんだぞ?何も言わねエのか」

「別に。そもそも私なんざ超電磁砲とやり合って勝ち目がねえとアンタを呼んだんだ。それに私があの男とやり合っても多分結果は同じだ。今さら何も言う気にはなれねえよ」

「・・・そオカ」

「・・・だがありや一体なんだ？私にも見えなかったぞ。テメエの翼の時もそれなりに面食らったが、ありやもう人間の出来る範疇を超えている。そういう意味じゃ、あのクソツタレないつかの『天使』と同じだ」
「アイツのアレに関しちや俺にも分からねエ：ヤツとは一度、学園都市でも鬭りあつたがあんなのは出てこなかった」

「つたく、本当に学園都市の奴らはどんだけの事を隠してやがんだよ・・・」

そう言つて麦野は呆れたようにため息混じりに自分の頭を搔きむしった

「・・・テメエは俺に貸しを作らせてやると言つたな」

「ああ、言つたわね」

「なら今その貸りを返せ」

「どうやって？」

「俺はこの組織を抜ける」

「・・・」

「・・・」

「はん。まあそんなとこだらうと思つたわ」

「止めねエのか？」

「何？止めて欲しかったわけ？ま、お生憎様だけど組織を辞めようと思つてる人間をいつまでも置いておけるほど私はお人好しじゃねーんだよ。そういう奴が1人いるだけでそれは組織全体の士気に影響すんだよ」

「・・・あア」

「それに、ウチの組織は元々『そういう組織』だ。心に一抹の迷いでもあれば成り立ねえんだよ」

「そオカ」

「・・・アンタも見つけられると良いわね、自分の守りたいモンが」

「あア？」

「ったく、こんな私のガラじゃねーつつの・・・」

「・・・」

「まあとりあえず、アンタはアンタでやるべき事があんだろ？だったら精々頑張りな」

「・・・テメエにはあンのか？守りてえモンが」

「さあ？あつたとしてもとつくに忘れちまつてるよ。そんなもん」

「・・・」

「それじゃ、精々頑張んなさい」

スタスタスタスタ・・・

麦野のはそう言い残すと、ゆっくりと歩きながら十字の丘から姿を消した。もう彼女が振り返ることはなかった。それはもう彼女と一方通行の歩む道が別々の物だと理解するのが容易い事だったからだろう

「・・・とりあえず回復だなア・・・」

そう言う一方で一方通行は自分のアイテムストレージから回復アイテムを取り出して飲む

ゴクツゴクツ・・・

「・・・ツハア。・・・なア、クソガキ」

一方通行は月に右手を伸ばし、現実世界で自分が守り抜くと誓った小さな少女を思い浮かべる

「俺なんかが・・・アイツを守るって誓っていいのかよ・・・アイツにはもう・・・アイツを守るだけの力を持った野郎がいんじゃないか・・・」

「俺は…テメエだから一緒にいてエって思えたのかよ…なア…打ち止
め…」

第38話 生還

「・・・ここ・・・は・・・？」

「!!上やんさん!?上やんさん!ミコトさん!上やんさんが目を覚ました!!」

(ヨルコさんの声・・・ああ、そっかここヨルコさんの泊まってた宿か・・・道理で見たことあると思っただけかそうだったな・・・そういや俺らヨルコさん達の圈内事件追ってたんだっただけは、一方通行との激闘がすぎすぎてすっかり忘れ・・・)

ガチャ!

「もう!バカッ!!」

ギョッ!

「ぐえっ!?!」

「バカ!バカバカバカ!!本当に・・・本当に死んじゃったかと思っただからあ!!」

「ぐ、苦しい・・・じぬ・・・」

「あ、あのー?ミコトさん?上やんさん本当に絞め落とされそうですけど・・・?」

「はっ!?!／／な、なななにやんでもないんです!なんでも!／／」

「ゲホッ!げほっ!おえっ!あー死んだかと思っただけ・・・」

「上やんさん、あなた3日間寝たきりだったんですよ?」

「・・・え?3日も?いやそんなバカな・・・」

「嘘だと思うんなら自分のメニュー開いて日付け見てみなさいよ」

「・・・マジかよ!?!本当にあの日から3日も経ってやがる!?!」

「だから言ってるんでしょうが。あの原子崩しの攻撃をなんとか電撃で弾き飛ばしながらアンタの体を私と一緒に転移させたんだから。もう生きた心地なんてしなかったわよ」

「・・・原子崩し?電撃?」

「!!あーいやいや!なんでも!なんでもないんですヨルコさん!こつち側の話ですから!」

「は、はあ…」

「でも本当にアンタ、HP回復させてもちつとも起きてこなかったんだから。エギルさんもクラインさんも話聞いただけですっ飛んで来て心配してたわよ。後でお礼言つときなさい」

「そっか…やっぱいいヤツらだなあいつら。エギルの店には後でちゃんと儲け出してやらねえとな。クラインは…まあ狩りでも手伝ってやるか」

「改めまして上やんさん。この度は本当にありがとうございました。ミコトさんにお聞きしました。何やら大変なことに巻き込んでしまったようで、申し訳ございませんでした」

「ああ、別に気にしないで下さい。特にあんまり問題はありませんでしたから。それでえーつと…3日も経ったからどんな事件か忘れちゃってんな…えーつと事件の黒幕…そうだ！『グリルチキン』さん！『グリムロックよ…』『グリ』しか合っていないじゃない…グリムロックさんはヨルコさん達がフレンド登録したまんまだったからそこから足取りを掴んで私の部下の血盟騎士団の人たちがとりあえず捕まえたわ」

「やはりあの場にラフィンコフィンを仕向けたのもグリムロックだったみたいです。グリセルダさん殺害の時からパイプがあったみたいで…」

「殺害の動機についても同情なんて出来たもんじゃないわ。指輪やお金なんてそもそも関係なかったみたい」

「元々二人はゲームだけでなく、現実世界でも夫婦だったみたいなんです。でもグリセルダさんはこのゲームの中で変わってしまった。グリムロックさんにとつての理想の人ではなくなってしまった」

「それが許せなくて、だったらいつそ殺してしまつて自分の思い出の中にあの時のままのグリセルダさんを封じ込めてしまいたいと願つて今回の犯行に及んだらしいわ。まあそんなの、グリムロックさんのただの所有欲でしかないしそんなの愛情の形じゃないと私は思うけどね」

「そうか…そうだったのか…」

「グリムロックの処遇については、シユミットとカインズが黄金リンゴのメンバーと会わせて、話し合ってから決めることにしたようです。これから先は私たちが決めます。重ねてのお礼になりますが…上やんさん、ミコトさん、本当にどうもありがとうございます！」

「いえいえ、どういたしまして。てか、結局全部推理してあそこに辿りつけたのはほとんど美琴のおかげですから。お礼なら美琴に言っただけです。俺なんかこうして3日も宿屋のベッド独占しちゃったみたいで…後でちゃんとお金払います」

「いえいえそんな！それぐらいのことはさせて下さい！危険な目に合わせてしまったのはこちら側なんですから！」

「そ、そうですか…じゃあお言葉に甘えて…」

「え、ええつと…それでなんだけどアンタ…わ、私からも一つお礼というか…謝らないといけないことがあって…」

「え？謝らないといけないこと？」

「実は……」

第50層 アルゲードにて

「よお、エギル！」

「おお！上やん！無事だったのか！心配したぞ！」

「ははは、クラインと一緒に見舞い来てくれたんだろ？サンキューな！」

「なーに、いいってことよ。で、さてはお礼がてらウチに儲けを出しに来てくれたってことでもいいんだな？」

「ははは…まあ当たらずも遠からずなんだが…なんか良い盾置いてないか？出来れば円形で、前の俺の盾と同等かそれ以上の性能のやつ」

「盾？なんでまたそんなもんを？」

「実はだな……」

そう、上条当麻には愛用の盾があった。良き時を共にし、良き時も悪しき時も、長く苦しい戦いも潜り抜けて来た愛着のある盾が。しかし、そんな上条当麻があししげくエギルの店を訪れ、新しい盾を求めのにはある理由があった

『実は……逃げるのに必死で……アンタの盾、十字の丘に置いて来ちゃったのよ……』

『……へ?』

『あ、後で気づいてもう一回あそこに行つて隈なく探したんだけど……やっぱりなかったの……ごめん!』

美琴が両手を合わせて平謝りする

『は、はあ!?あの盾50層のボスのLAボーナスだぞ!?めっちゃめっちゃ良い性能ですつげえ気に入ってたのに!』

『し、仕方ないじゃない!命助けてあげたの私なのよ!?あの状況で命あるだけお釣り来ると思いなさいよ!』

『ほくく?じゃ俺としてもお前の『あの能力』をアルゴに話してもいいんだなく?さーてアルゴいくらくれるかな?それを元手にして新しく新調するのもいいかもなく?』

『!!あ、アンタそれは卑怯よ!他言しないって言つてたじゃない!私の純情を弄ぶつもりな訳!』

『それはなんか俺に誤解が生じるってか違うだろ!でも……そうだな……美琴、お前なんかいい盾持っていないか?』

『私はそもそも盾無しレイピア使いだから……盾なんていいのがドロップしてもお金欲しさにすぐ売り払っちゃうわよ。辛うじて持つてるって言つても、アンタが使つてた盾には遠く及ばないわ』

『だよなあ……あ!じゃあれだ!お前んとこのギルドの団長さんに口聞いてくれよ!いい盾余っていないかって!』

『多分結果は同じだと思うわよ？性能はまだしも、団長がいつも使ってるの十字盾だし。アンタやたら丸いタイプのやつにこだわってたじゃない』

『そりや上やんさんには攻撃のリーチと幅が少ねえからな。相手を殴りやすくして、いざという時には投げ飛ばせる円形が必須条件だ』

『あの、じゃあ私がお礼でそのお金出しましょうか？』

『あーいやいや、ヨルコさんは宿代出してくてるのに悪いですよ。それに元々悪いのこイツなんで』

『はあああああ!?!それは反論するわよ！敢えて投げるんだつたらそういうリスクは頭の内に入ってるでしょうが！すぐに自分で回収しなかったアンタの自業自得よー!』

『あーもう分かった分かった。別にお前に金やら媚びろうなんて思っちゃねえよ。いい盾持ったりや貰ってたが金となりや話は別だ。いさぎよく見舞いのお礼も兼ねてエギルの店にたかりに行くよ』

—————

「……って訳なんだ」

「……なあ上やん、お前今の話の大半が惚気話だつて分かって俺に話してんのか?」

「はあ?今の話のどこに惚気があるんだよ。上やんさんには惚気るそもそものネタがありませんのことよ」

「はあ~~~~、ミコトのやつも苦労してんだなあ~~~~」

エギルが頭を抱えてわざと大きめにため息をついた

「?」

「まあいい。話を戻すが、お前が以前まで使ってた盾と同等の性能で円形の盾…だったな?」

「ああ、いいのないか?金ならそこまで困ってねえから問題なく払えると思うんだが」

「金うんぬんの前に、ウチみたいな雑貨屋に求める条件が高すぎるぜ。お前の要望はそりやもう武器屋レベルだ。だが今攻略が進んでる最前線の層の街のNPC武器屋でもお前の出す条件を満たす盾を置いてるとは思えねえけどな」

「だよなあ…はあ…しようがねえ…妥協するか…」

だが、そこでエギルがニヤリと笑う

『NPCの武器屋』…だったらな」

「え？」

（「あ、あーいやでもな…コイツに紹介してもいいもんか…コイツ誰彼構わずすぐにフラグ立てるからな…あいつが例外とは限らんし…そもそもコイツがそれでまたフラグ立てたらまたクラインのヤケ酒に付き合わされるしな…どうしたもんか…」）

「?どうしたんだよエギル。いきなりブツブツ1人で呟いて独り言か?」

「まあいいか…アイツも結構勝ち気なところあるからな。お前が行っても大丈夫だろ」

「?だから何だつてんだよ」

「実は商売人繋がりで、鍛冶スキルが結構高いヤツが個人で営んでる武器屋があるんだ。NPCじゃない武器屋、いわゆるプレイヤー武器屋つてヤツだな」

「お!いいじゃねえか!」

「場所は第48層の主街区『リンダース』だ。『リズベット』という歳は丁度お前ぐらいの女が経営してる。俺みたいに片手間に店やってる訳じゃなくて専門でやってるから腕は確かなハズだ」

「なるほど。じゃあそこに行ってみるか」

「まあ、その店主のリズベットつて女が中々のじゃじゃ馬だからな。扱いには気をつけるよ」

「なんだ?職人気質つてやつか?」

「いやまあそうとも言切れんが…ともかく俺が連絡を入れておいてやるよ。急ぎじゃねえんだろ?」

「ああ、まあ今すぐにも欲しいって訳ではねえよ」

「なら明日の午前中辺りに行くといい。ある程度なら話を通しておい
てやる」

「サンキューー！恩にやるぜエギル！」

「・・・てかよお上やん、お前その様子を見る限り防具も丸ごと新調し
た方がいんじゃないやねえか？」

「え？何でだよ？」

「いや流石にそういうカッコつけたがる歳だつてのは分からなくもな
いんだが・・・流石に黒一色つてのは・・・」

「うるせえな！仕方ねーんだよ！俺だつて分かつてるよこの格好が他
人から見りゃ痛い奴に見えることぐらい！でも今の手持ちで最高の
パラメータの防具選んだらこうなつたんだよー！」

そういう上条の身を包む防具は、少し生地の厚い所々に銀色の刺繍
の入った黒のコートに、下も黒のズボン。おまけにコートの中に着て
いるシャツも黒なため、まさに黒一色。それは側から見れば中二病患
者かV系バンドの衣装にしか見えない

「まあお前は元から防御力が高い代わりにスピードの落ちる鎧系装備
よりも、ある程度の防御の代わりにスピードを保てる洋服系装備を使
うからな。まあ仕方ねーっちゃ仕方ねーか」

「でもこれ見た目はもうちよいどうにかして欲しいけど案外気に入つ
てんだよな。なんつーか学ランみたいで・・・まあ現実の学ランとかほ
とんど着てねーからまだツルツルなだけだよ・・・」

「俺は流石にそんな学ラン制服にしてる学校なんか通いたくねーがな
・・・」

「ま、性能には代えらんねーさ。前線で命張つて戦うのに一々見た目
なんか気にしてらんねーよ」

「ま。それもそうか」

「ま、とりあえず盾の件は助かったぜ！ありがとなエギル！また何か
いい素材が手に入ったら売りに来るぜ！」

「っしや！そういう訳で上やん！今日は何を買いに来たんだ!？」

「え、いやだから盾がないなら……」
「な・に・を・買・う・ん・だ・？」
「……不幸だ」

第39話 リズベット武具店

「えっと…『リズベット武具店』…ここでもいいんだよね？」

上条当麻は今、昨日のエギルからの紹介を受け47層の主街区リンダースをしばらく歩きいくつもの家が立ち並ぶ中、少しの緑に囲まれたどこか味わいのある佇まいの武具屋に辿り着いていた

「な、なんか予めプレイヤーがやってる店って分かってて入るってのは緊張するな…元々よく行く店のほとんどがNPCだからな…まあここでウジウジしてもしょうがねえし行くか！」

そう言つて上条はドアノブに手をかけ入り口のドアを引いた

カランコロンカラン！

「…あれ？誰もいねーのか？すいませーん、昨日エギルの紹介で伺つた上やんですけどー？」

くはいはい！ただいまー！

「お、なんだ工房にいたのか。仕事熱心だな、感心感心」

キィ！バタン！

「リズベット武具店へようこそ！」

そう店の奥の扉から元気な声と共に出て来たのは、およそ工房の服とは思えない服装に、ピンク色の髪と頬のそばかすが特徴的でエギルの言う通り、歳は上条と変わらないくらいの1人の女の子だった

「あ、えっと…昨日エギルの紹介があつて来た上やんって者なんすけど…」

「あ、分かりました！ほんの少々お待ち下さい！えーつと…」

そう言うとりズベツトは自分のメニューを開いてウインドウを操作しメモ欄を確認し始めた

(何だエギルのやつ、じゃじゃ馬だから気をつけるなんて言っただけど、案外接客もちゃんと出来る良い女の子じゃないか)

「あつ！お待たせしました！上やんさんですね！はい！確かに昨日エギルからお話は伺っております！今日は何をご希望ですか？」

「えーつと、とりあえず盾が欲しいんだけど」

「!?た、盾ですか…?」

「?は、はい盾が…」

上条が盾を求めていると聞くと、リズベツトは何やら頬をひくつかせ怪訝そうな顔をする

(盾ねえ…武器の方がよく売れるし値段も良いから最近盾はあんまり鍛えてないのよねえ…)

「えつと…盾の形はどう言ったものをご所望でしょうか？」

(つてか改めてよく見たら何この人の装備!?ほぼ初期の段階の片手剣じゃない!!しかも全身真っ黒!なんかヤバイ人掴まされたわね…エギルのやつ覚えときなさい…まあアイツも違う意味で黒いけど…肌とか)

「円形のやつがあればいいんだけど…あ、でもバックラーは性に合わねえんだ。金には困ってないから円形の盾の中で一番性能良いヤツを頼むよ」

(し、しかも円形…あたしが最後に作ったヤツNPCの性能超えてたかしら…)

「わ、分かりました。少々お待ちを…」

そう言っつてリズベツトは店の奥の工房へと続く扉に入っつていった

「…にしても色々な武器が置いてあるんだなあ…片手剣に両手剣、

ダガー、片手斧、両手斧、メイス、槍もか…はあく、こういう武器見ると久々に使いたくなってくるぜ…まあどうせ右手の方が強いから使っても仕方ねえんだけど…」

店に展示されている様々な武器に見惚れる上条。そんな武器の数々を見ているだけで、片手剣を装備しソードスキルを使いこなしていた頃の自分を思い出してしまい、あの頃に戻りたくなってしまふ

「お待たせしましたー！」

「お？」

そんな事を考えていると、リズベットが工房から一枚の白い円形の盾を抱えて戻って来た

「これなんかどうです？値段を気にしなければウチで作った物の中では最高の耐久値の盾ですが」

リズベットが上条に盾を手渡し、その手渡された盾の重さや性能を上条が確認する

「うーん、こんなもんか…ちよつとイマイチだな…前のよりも軽いし若干耐久値も防御力も低いし…」

（ですよね。まあそれで当然だし仕方ないんだけど…まあ盾を鍛えている店は他にもあるし、今回は諦めて帰ってもらって…）

「いやー、エギルが良い店だって言うから結構期待してたんだけどな…無駄足だったか…」

「…」

かっちゃん☆

「はあああああ!?!何ですって!?!よーし良いわよそこまで言うんだったら試してみなさいよ!アンタの拳で殴るでも剣で叩き斬るでも何でもいいわよ!その盾に思いつきり一発かましてみなさいよ!」

「え？いややめといた方がいいと思うぞ？」

「ふーん？怖いよね？あたしの作った盾を散々見くびっておいた後でその性能を思い知るのが！」

「いやお前が良いなら良いけど…本当にどうなっても知らねえからな？」

「そつちこそ！やった後で後悔するんじゃないわよ!?そんな初期の剣じゃビクともしないんだからね!?それでまんまとアンタの剣がポツキリ折れてもあたしは知らないんだk…」

「ベゴンツツ!!!」

上条の右拳が盾に向けて振り下ろされると、盾の耐久値が上条の右手に劣っていた為、音を立てて凹んだ

「な？だから言っただろ？どうなっても知らねえからなつt…」

「ちよつと!?どーしてくれんのよこれウチの商品なのよ!?こんなに凹むなんて聞いてないわよ!」

「ええええええ!?殴っていいって言ったのはそつちだろ!」

「凹ませて良いとは言っていないわよ!!」

「んな横暴な!」

「どつちがよ!!」

(なるほどな…エギルが言ってたじゃじゃ馬つてのはこういう所のこと言ってたのか)

ガシヤアアアアアン!!

2人がそんな風に口論していると、その横で上条が凹ませた盾の耐久値が0になり崩れ去った

「あああああ…壊れちゃった…」

「な、なんつーかごめんな。ここまで簡単に凹むとは思わなくて…」

「それはつまりあたしの鍛えた盾が思ってたよりも弱つちかつたって

わけ!？」

「あー、まあそうとも言うう…」

リズベットが上条の服の襟に掴みかかり強い口調で言い放つ。それに対して上条は目を逸らして気まずそうに言い返す

「ああそう!?!言っとくけど!材料さえあればアンタの殴打なんか問題にならないくらいに盾、いくらでも鍛えられるんだからね!!」

「へえ、俺のコイツがね…ソイツあ是非見てみたいもんだ…」

自分の右手を少し見てから、まるで煽るようにリズベットの言葉が「信じられない」と語っているような態度で喋る。その上条の言葉と態度に羞恥と怒りを覚えたリズベットの顔は、見る見るうちに赤くなり我慢しきれずに言った

「そこまで言うんだったらこつから先全部付き合ってもらおうよ!？」

「全部?」

「そう!金属取るところからね!」

「あー…それはなんだ、アレか? 鉱石採掘系のクエストか?」

「ふん! そんな生半可なヤツじや済まさないわよ! 55層にある西の山に水晶を餌にするドラゴンがいるらしいの! ソイツがレアな金属を体内に溜め込んでるってもっぱら噂になってんだから!」

「ってなると…討伐系クエストか…それもボスモンスター級の…しかも55層でドラゴンか…なら俺1人で行くよ。付いて来て足手まといになられても困るしな」

「ふん! あんまり甘く見ないでくれる? あたしこれでも『マスターメイサー』なのよ?」

「って言ってもなあ…お前はずっと素材取りに行く以外はこの鍛冶屋にいるわけだろ? だったら戦いの感覚も鈍ってるだろうし、やっぱり俺が…」

「そのドラゴンから金属を入手するには『マスターミス』が必要かも

しれないらしいわよ？それでも1人で行くつもり？」

リズベツトが「私がいなきや何も出来ないでしょ？」とでも言いたげなドヤ顔で上条の方を見る

「・・・しようがねえなあ、危ないと思っただらすぐに逃げるんだぞ？」

「バカにしすぎだからあー！」

「じゃあまあとりあえず行くか、盾が出来るまでの間よろしく」

「ふんっ！よろしく上やん！」

「はいはい、リズベツト様」

第40話 白竜

「へっくしょん！」

上条当麻とリズベツトが訪れているここは第55層の西の山。例えどんな季節だろうとこの層から雪がなくなることはなく、所によっては年間通して猛吹雪が吹き荒れている氷雪地帯だ。気温は氷点下に至ることはもはや当たり前で、生半可な装備ではその寒さを凌ぐことは出来なかった

「ううう、フィールドがまるごと氷雪地帯だなんて聞いてないわよ……
ああ〜寒う〜……」

「おーい？大丈夫かーリズベツト？」

「大丈夫よ！それと呼ぶなら『リズ』だけでいいわよ！みんなそう呼んでるしその方が慣れてんの！」

「はいはい分かったよリズ」

「調子に乗るなあ！」

（う〜でもやつぱ寒う〜……）

（……まったく本当に素直じゃねーな〜……エギルの言ってた通りだぜ……
寒いなら寒いって素直に言えればいいのに）

リズベツトを見ながらそんな風に思い、上条は自分のメニューを開きウインドウを操作し毛皮のコートを取り出してそれをリズベツトに向けて投げ渡した

「わぷっ!？」

「それ着とけよ。少しは寒くなくなると思うぞ」

「あ、アンタは大丈夫なの？」

「大丈夫だよ。いいから早く着とけ。ここでお前に凍えられても後で俺が困っちゃうんだよ」

(つたく…コイツ一体どこの御坂さんなんですかね…何で上条さんの周りにはこう素直じゃない子ばかり集まるんですかね…はあく不幸だ…)

「…暖かいなあ」

――

「わああああく…きれ〜!」

かくして上条とリズベットの2人は山の頂上にたどり着き噂のドラゴンが現れる場所にたどり着いていた。2人を出迎えたのは一面を覆い尽くさんばかりのクリスタルだった

「あはははっ!ははははっ!」

リズベットは水晶に反射して写る自分の顔が面白いのか、水晶で遊んでばかりだった

「おいなあ、リズ」

「ん〜?なくに〜?」

「転移結晶の準備しとけよ」

「…もう、分かってるわよ」

リズベットはむすつとした表情をしながらもその手に転移結晶を持った

「それと、敵が来たらどこかその辺の水晶に隠れて出てくるなよ。分かったか?」

「なによ!あたしだって素人じゃないんだから手伝うわよ!大体アンタ!何考えてるか知らないけどそんな初期の武器で勝てると思ってんの!?!」

「・・・はあ、俺の闘い方はそもそも誰かとコンビネーション組むのに向いてねえんだよ。まあこの後見てりや分かるさ。見てからでも遅くねえからどうしても不安だったら出て来い」

「・・・分かったわよ。じゃあとくと見せてもらおうかしら？そのアンタの闘い方ってやつを。もっともどうせその武器じゃあつという間にやられてあたしに頼らざるを得なくなるでしょうけどね！」

「分かった分かった。分かったからとりあえずその辺の水晶に隠れとけ」

「はいはい！精々頑張りなさい！」

そう言って辺りの水晶の裏に隠れるリズベット。それを見届けると上条は自分のメニューを開きウインドウを操作し盾を取り出す

「ま、とりあえずは前まで使ってたコイツでいいか・・・念の為残しておいて良かったな・・・」

<グオオオオオオオオオオ>

「!!!」

「上やん！来るわよ！」

「よく響くいい鳴き声してやがるぜ・・・ちゃんと隠れて出て来るなよりズ！」

「分かったわよ！」

バサツ！バサバサツ!!

「ギャオオオオオオオオ!!!」

上条の前に凄まじい咆哮と共に、身体のほとんどが水晶で覆われた白いドラゴンが現れた。そしてまるで挨拶と言わんばかりにブレス攻撃の構えを取る

「ブレスよ！避けて！」

ゴゴゴゴゴオオオ!!!

「なんだこういう攻撃か。なら楽勝だな」

そう言う上条は盾を構えた左手を降ろし、右手の平を目の前に突き出す。すると彼の右手に触れた瞬間、白竜のブレスが消え去った

パキイイイン!!!

「……え?」

(元々ブレス系攻撃はスキルに分類されるからな。この右手で触れれば打ち消せない訳じゃない。さて、じゃあ次はこっちからいきますかね…)

「オラアアア!!」

バツゴオオオン!!

「ギャオオオオオオ!!」

あくまでも肉弾戦で白竜と渡り合う上条。物理攻撃は盾で防ぎ、ブレスは右手で打ち消しながら、敵の隙を見つけては右手の拳を叩き込む。もはや白竜は上条に手も足も出せず、上条のワンサイドゲームである事は火を見るよりも明らかだった

(戦ってる…あんな大きいドラゴンと…素手で?すごい…まるで無駄も隙もない洗練された立ち回りも…あの重い一撃を盾で防ぐ筋力も…ブレスを打ち消しながらパンチを打つあの右手も…)
「よっしゃ!後もうちょっとだ!」

そうこうしている内にもうドラゴンのHPは残りわずか。後もう何発か上条の攻撃が決まれば倒せるという段階まで来ていた

「ほら!さっさとカタを付けちゃいなさいよ!」

「ツ!ばっ、バカ!まだ出て来るなりズ!」

「何よ!もう終わりじやn…」

水晶の影から出て来たリズに気づいた白竜の目が赤くひかり、ター

ゲットの対象を上条からリズベットへと変更した

「ギオオオオオオオオ!!」

「ゴオオオオオオオ!!!」

「!?きやああああああ!!」

白竜が翼をはためかせるとリズベットに烈風が襲いかかる。リズベットの軽い体はあっという間に烈風に流され、その先の下にぽっかりと空いていた穴へと吸い込まれていく

「リズ!!!」

「うそ?!うそおお!!!」

「リズ!俺に掴まれ!!」

「きやああああああ!!」

「うわああああああ!!」

上条がリズベットの元へと走り、穴の中に飛び込んでリズベットの体を辛うじてキャッチし離さないようにキツく抱き締める。そして2人は悲鳴と共に底の見えない穴の闇へと消えていった

第41話 心の温度

「・・・うん・・・」

「・・・生きてたか：ははは、不幸中の幸いってヤツかな・・・」

「・・・うん、生きてた」

「とりあえず回復だな・・・これ飲んでけよ。一応だけど」

「あ、ありがと・・・」

ゴクツゴクツゴクツ

上条が自分の回復アイテムをリズベットにも渡すと2人でそれを飲み、穴に落ちた衝撃で減ったHPを回復した

「・・・あの、ありがと。助けてくれて」

「ツプハア：礼を言うのはまだ早いと思いますよー？さて、落ちたはいいがめちやめちや深いな・・・どうやって抜け出したもんか・・・」

「え？簡単よ。テレポートすればいいじゃない」

「あ、なるほど」

そう言ってリズベットは自分のベルトポーチから転移結晶を取り出した

「転移！リンダース！」

・・・シーン

「あ、あれ・・・？」

「よりにもよって結晶無効化エリアか：不幸だ・・・」

「だ、大丈夫よ！転移出来ないってことはどこかに自力で脱出する為の方法があるはずよ・・・」

「落ちた人が100%死ぬって想定した罠だったら？」

「な、なるほど。それなら確かに脱出は無理だわ：って！アンタね！

こう言う時はもう少し元気づけなさいよ・・・」

「上やんさんは普段そうした不幸の中心で生きている訳ですから、もはやそういう理不尽も慣れっこなんですよ？ま、確かに方法が無いわけじゃない」

「えっ!?ほ、本当!?なーんだ!そういうことは早く言いなさいよ!」
「壁を走って登るんだ」

「・・・バカ?」

「バカかどうか試してみましようかあ?ふんっ!」

シユルルルルルル：ザクツ!

上条が自分の左手に装備した盾を上崖に向かって投げると、穴の底から地上までの中間辺りに盾が突き刺さった

「わあゝゝ、よくあんな高いところまで投げられるわね・・・」

「投げるだけなら誰だって出来ますよ・・・問題はとりあえずあの盾までたどり着けるかどうか・・・あの盾を中継点にして盾を足場にしてもう一回ジャンプして・・・まあ行けるか。盾までたどり着けば上やんさんの勝ち：だっ!!」

バビユン!タタタツ!!

上条は不安定な雪の足場で思いつきり踏み切ると、陸上選手バリの大ジャンプで壁に向かって飛ぶと、垂直な壁を走って登っていった

「が、頑張つて!後少しよ!」

「おっしやあ!いただき!」

ツルツ!

「・・・え?」

ヒユウウウウウウウ...

「嘘だろおおおお!?あーもう!不幸だああああa・・・」

ドボooooooooon!!

「うわっ!?ちよっ!?だ、大丈夫!?うわあ・・・綺麗な人間スタンプだこと・・・」

穴の底には雪がクッションとなつていて、大事には至らなかつたが、そこにはくつきりと上条の身体で雪が押し退けられた跡が残っていた。ツンツン頭も健在である

「いつてて、ありやダメだあ：壁が氷でツルツルすぎてあの盾までもたどり着けねえや：つてことはあの盾も事実上お陀仏か：不幸だ：」

「まあしょうがないわね、ここで誰かの救助が来るのを待ちましょ？ どうせこのゲームじゃ餓死はしないんだし」
「そうだな：今はそれしかないか：」

結局2人は現状を打破する方法が思いつかず誰かの救助を待つている内に日は完全に沈み、やがて夜が訪れた。2人は暗闇と寒さから身を守る為に焚き火を起こし、そのすぐそばに寝袋を出しその寝袋に潜り込んで睡眠を取ろうとしていた

「なんか：普通だったらありえないよ：こんなところで、今日初めて会った人と2人きりで並んで寝るなんて：しかも走って壁登るとか言い出しちゃうし：本当、バカなヤツだね」

「うるせえなあ：アレはちゃんと条件を満たせば成功できるつていう見通しがあつてやったことであつてだな：」

「それでも：バカすぎ：ふふっ」

「はいはいそうですか：」

「・・・ねえ、上やん」

「？なんだよリズ、急に改まって」

「・・・あたしたち、このまま死んじゃうのかな：？」

リズベットの声のトーンが下がり、重苦しい言葉をその口から吐き

出す

「・・・どうしてそう思うんだよ」

「だってこんなところ・・・そうそう人なんか来ないし、来たとしても気づかないよ・・・あたし達はこの穴から外は見えても、穴に落ちた時はこの穴の底なんて見えなかった。そのくらい暗い底にいるんだよあたし達・・・他の人が見つけられるはずないよ・・・」

「・・・」

「したらあたしたち・・・こんな穴の中で黙ってこの世界が終わるのを待ってるしかないんだよ？もし誰も100層にたどり着けなかったら、私たちはずっと一生このまま・・・もしそうになったらあたしだって上やんだって・・・自殺とか考える日が来るよ・・・」

「・・・」

「・・・ごめんね・・・ごめんね上やん・・・あたしを助けたばかりにこんな事になって・・・」

自責の念に堪えられなくなったリズベットの瞳から大粒の涙が溢れる。次から次へとポロポロ流れる彼女の涙を寝袋から出てきた上条の手が拭き取った

「？かみ、やん・・・？」

「死にやあしねえよ。リズムも俺も」

「でも・・・だって・・・」

「でももだってもクソもあるか。絶対に希望はある。それにこのゲームもいつか必ず終わらせる。何があってもだ。リズムみたいな女の子とはまたいつか現実でも会ってみたいしな」

「・・・ふふつ、バカだね本当。そんな奴・・・アンタの他にいないわよ」
「・・・そっか」

そう言つて上条はリズムに向かって優しく微笑んだ

そう言つて上条は降り積もつた雪の中から掘り出した蒼く透明な水晶のようなものをリズベットに見せる。差し出された水晶をリズが指でタッチすると、彼女の目の前にポップアップウィンドウが表示された

「クリスタライト・インゴット」

「!!これって…!」

「ああ、多分俺たちが探してたお目当の金属なんだろうな…上がダメなら下になんかないかと思つて掘つてみたら見つけたんだよ。ほら、こんなに」

そう言つて上条は自分のアイテムストレージをリズに見せる

「うわっ!?5個も!?こんなだったらドロップなんて狙うのもバカらしくなつてくるわね…でも一体なんで?」

「あー、多分だがここはこの縦穴はドラゴンの巣なんだよ。ドラゴンは水晶を餌にして、この金属を腹の中で精製して外に出す。ちよつと考えれば分かる簡単な話だ…多分ドロップアイテムでもないんだろ…まあ一概には言えないけど…」

「…それつつまり」

「ああ、要するにコイツはあのドラゴンのウ○コだ」

「…アンタそれ持つてんのよ?」

「ああ、それに気づいたのは3個目採つた時ぐらいだ。つまり、もう触れていた。手遅れだ。不幸だ」

「…お粗末さま」

「言うな。悲しくなる。てか言つとくけどこのウ○コ加工するのにお前だからな?」

「だったらその加工したウ○コの盾で身を守るのアンタだからね?」

「た、たしかに…てか今さらだけどウ○コウ○コ言うなよ!俺もたださあ!」

「・・・でもちよつと待って。ここドラゴンの巣だつて言つたわよね？
確かドラゴンは夜行性…つてことはもうそろそろ…」
へギャオオオオオオオオ!!

白竜が自分の巣を荒らす侵入者に対する威嚇の意味を含む咆哮と
共に自分の巣へと帰還してきた

「き、来たああああ!!」

「!!いいや違う!来てくれたのさ!」

「は、はあ!」

「アレがそもそもその脱出の方法なんだよ!しっかり掴まつとけよ!」

「えっ!?わっ!?ちよつと!」

上条は戸惑うリズベットの事などお構いなしに彼女の腰のあたりに
手をかけて彼女を担ぎ上げた

「ギャオオオオオオオ!!」

「どりゃあああああ!!」

周囲の壁を垂直に駆け登り、ドラゴンの背中に回ると、上条は壁を
蹴つてドラゴンの背中に飛び乗った

「クソツ!頼むから外に出るまで持ち堪えてくれよ!」

キンツ!ザクツツ
!!!!

第1層のあの日から、一度としてその背負った鞘から抜いたこと
のない剣を抜き放ち、白竜の背中に思い切り突き刺す。すると白竜は呻
き声と共にもう一度巣の外へと飛び出していく。上条はそのスピー
ドに振り落とされまいと突き刺した剣をしっかりと握った

「リズ!しっかり俺に掴まって離れるなよ!」

「う、うん!!」

ビュオオオオオオオ!!

「!!やったぞー!外だ!」

バキイイイイン!!!

「うわああああああ!!」

2人は白竜と共に巢の中から外へと飛び出す。遙か上空へと到達した瞬間に上条の武器の耐久値が0になり砕け散った。そして2人は白竜の背中から振り落とされ、まだ朝焼けの眩しい寒空へと投げ出された

「ねー!上条!あたしねー!!」

「あー!?!何!?!」

「アンタのこと!好き!?!」

「なんだって!?!風で声が飛ばされて聞こえねーんだよ!?!」

ギョツ!

すると不意に風で煽られる上条の身体をリズベツトが空中で抱き締めた

「お、おおお!?!」

「えへへへ!?!何でもない!?!」

第42話 想い

あれからドラゴンの巣を抜けた2人は無事に生還し、リズベット武器店に戻り彼女の工房で手に入れた金属で盾のオーダーメイドを頼んでいた

「えっと、円形の盾でいいのよね？」

「ああ、飛びつきりのを頼むぜ？」

「任せなさい！」

釜に入れられ高温で熱せられた金属は赤く発光しており、形が変わりやすくなっている。ここからが彼女、リズベットの本当の仕事である

「ふう~~~~~………ッ!!」

キーン!キーン!キーンツ!

熱せられた金属に向けて何度もリズベットの鍛治用ハンマーが振り下ろされる。金属はみるみる内に潰れていき、段々と形が変わっていく

(あの時のあたしの気持ちはきつと…錯覚なんかじゃない!満足の行く物が出来上がったら…気持ちを告白しよう!)

そして彼女の最後の鉄槌が金属を叩く。すると金属はみるみる内にその形を変えて行き、円の形をしたエメラルドのような鮮やかに緑色で光る盾が完成した

「おおおおお!!」

「ふいふ、一丁上がり。どう?装備して確かめてみたら?」

「いや、そんな一々確認なんてしなくても大丈夫さ。この盾は一目見ただけで分かる。リズの魂が籠ってる。本当にいい盾だ。大切に使用させてもらうよ」

「そっか…うん！ありがとう！」

そう言つて上条は出来て間もない盾を装備してその背に背負つた

「じゃあこの盾の代金を払うよ。いくらだ？まあ結果的にオーダーメイドなつちまつたから高値は避けられないだろうけど…リズの言い値で払うよ」

「あつ…えつと…お金は…いらない」

「えつ？」

「その代わり…あたしを…上やんの専属スミスにしてほしいの！」

「せ、専属…？それってどういう…？」

何かを言いたげに両手を重ねて頬を赤く染めモジモジしていたリズベツトだったが、決意が固まったのか、モジモジするのをやめ、上条に向けて言い放つた

「ふい！フィールドから戻つたら！毎日ここに来て装備のメンテをさせて！毎日！これからずっと！／＼／＼」

「…！？り、リズ…！そ、それはつまり…」

「上やん…あたし…あたしね…！」

リズベツトが上条に向けて手を伸ばし、彼の右手を掴もうとする。すると、後少しでその手が触れるというところで上条の口が開いた

「それはつまり、俺に『居候』になれということですか？」

「…は？」

「いや〜！それはバカにしすぎだぜリズー。流石に上やんさんだつて宿を転々とする流れ者なんてせずに、帰るべきホームの1つぐらい構

リズベットが何かを言いかけた途端、御坂美琴が絶叫しながら工房のドアを破壊して飛び込んできた。あまりの出来事にその現場には事実を掴めない者しかおらず、長い沈黙がその場を支配した

「……………」

「え、え〜つと…これはですね…や、やつほ〜リズ久しぶり〜…元気にしてたく〜?」

「え?み…ミコト?ひ、久しぶり〜?え、どゆこと?」

「あ、あの?美琴さん?こ、こんなところで何をしてるんでせうか?」

「あ、アンタこそこんなところで何してんのよ!な、何か急に(リズベットが)プロポーズしてるし／＼!!」

「は、はあああああ!!してねーよ!(俺が)いつプロポーズなんかしてたんだよ!」

「してたわよ!／＼／」

「してねーよ!!」

(あ、あれ?ひよつとしてあたし置いていかれてる…?)

「つてか何よアンタ!エギルさんのとこで盾買うんじゃないの!?なんでリズの店にいのよ!」

「いやそれはエギルの店に行った時にあんまりいい盾がなくてエギルに紹介されてだな…」

「言ってくれりや私もリズの店紹介したし一緒に行つてあげてたわよ!」

「お前がリズと知り合いだったなんて知らねーよ!てか!だったら盾無くした時に一緒に教えろつての!!」

「あ、あれ?ひよつとして2人とも知り合いなの…?」

今まで話題の蚊帳の外にいたリズベットがおそるおそる2人に尋ねた

「ん?あ、ああ。攻略組なんだ俺たち」

「!!!」

(同じ攻略組の…仲間…命を預け合う仲間…それにさっきのミコトの

…あの反応…)

「……そっか…そういうことね…」

全てを察したりズベツトはその瞳に涙を浮かべていたが、それに自分で気づくと素早く拭き取って俯いていた顔を上げた

「……おい、リズ？」

「もおー！それならそうと早く言いなさいよー！2人ともー！ちよつと聞いてよミコトー！コイツってばいきなりあたしの作った1番の盾を拳でぶっ壊したんだから！もう失礼以外の何者でもなかったのよー!？」

そういうリズベツトの声はやはり少し震えていて、話している内に堪えていた涙も次から次へと流れ出してきた

「!!ちよ、ちよつ…リズ…アンタ…分かって…」

「ご、ごめん2人とも！仕入れの約束がある人が来てたの忘れてた！ちよつと出てくるから留守番よろしく！」

「え!?!お、おいリズ!!」

上条の止める声を無視しながらも、決して2人にその表情は見せず
に先ほど美琴が破壊した工房の出口から外に向かって飛び出した

「おいおいリズのやつ…一体どうしたって言うんだよ…」

「……アンタ」

「ん?どうした?」

「私は後でちゃんとリズと話すから、今はアンタがリズの所に行つてあげて」

「?え、いやだって今リズは仕入れに行くって…」

「それは嘘よ」

「え!?!」

「今きつとリズはどこかで一人で泣いてる…その原因はきつと大半が私にある。でもほんの一端はアンタにもあるの。だから、今はアンタがリズのそばにいてあげて…お願い」

「え？それってどういう…」

「いいから早く行けッ!!」

「は、はいいいいいい!!」

たたたたたたた!!

美琴に一喝されると上条はリズの後を追うように破壊されたドアから工房の外に出た。その後、美琴は工房の階段に腰掛け涙を流し始めた

ヒック…グスツ…エグツ…

「ごめんね…ごめんねリズ…私は…私は泣いていい権利なんてない…こんなの…100%私が悪いって分かってる…アイツにも少しは原因があるって言ったけど…そんなことないって分かってる…」

美琴はうずくまりながら一人で語り始める。その声は誰に届くでもなく、誰に聞かれるでもなく、ただひたすらに寂しく、虚しく、彼女の親友の全てが詰まっている工房の中に響いていた

「リズはすごいよ…私がずっと言えなかったこと…あんな簡単に言えて…もうあの時点で私の負けなんてことは分かっている…あんな所で自分の想いだけ優先して止めに入ることが最低だなんて…分かっている…でも…でも…」

「…・・・転移。ノルフレット」

(せめて私の諦めが付くまでは…同じ想いの舞台に立たせて…)

シユーン……………

自分の中の罪悪感と自らの内に秘める淡い感情に想いを馳せながら、御坂美琴は工房からその姿を消した

「……リズ、探したぞ」

「……ダメだよ、今来ちゃ」

夕暮れに染まる街の中、上条当麻とリズベットの2人は、小川に架かる橋の手すりを隔てて再会していた

「もうちよつとで……いつもの元気なリズベットに戻れたのに……」

「リズ……」

「どうしてここが分かったの?」

「必死に走り回ったんだ、街中。そしたらやつとのことで見つけた」

「もう……本当にバカなんだからアンタ……どこまでいつでも……」

「そりやどーも……」

「……ごめん。あたしは大丈夫だから。慣れない冒険で心がビククリしただけだと思う……だからあたしが言ったこと……全部忘れて」

そう言うリズベットは、小川に流れる水に写った自分の今のこちやまぜな感情が表れてしまっていた表情の顔を隠すように、そして流れる涙を必死に抑え込むように、手で顔を隠した

「……忘れねえよ。約束したろ、絶対に現実で会いに行くって」

「……え?」

「俺、絶対にこのゲーム終わらせて、お前に会いに行くって約束したろ。だからその為に協力してくれよ。確かにそりや毎日は行けないと思う。でも、これからたまにはリズの店に顔を出すからさ、ちゃんと生きているぞって意味も含めて。だから、俺が1日でも早くゲームをクリアする為に、俺の装備の面倒、見てくれよ」

そう言つて上条はリズベットに優しく微笑んだ

(もう、本当にコイツは…分かつて言つてんのか分かつてないのか……ごめんねミコト。これはあたしの…あたしにしか言えない、最後のワガママだから)

「…っもう！仕方ないわね！じゃあ遠慮なくいらつしやい！いきなり居候してとかワガママ言い出したあたしも悪かったわ！」

「…ああ、ありがとう」

「うん。それで、なんだけどね上やん…じゃあ、私の最後のワガママに付き合つてくれる？」

「ん？」

「アンタの…あの剣の代わりをあたしに作らせて」

「ええっ!?!いやそれは悪いぜ！それにあんな剣ほとんど飾りで役になんて立たなかつたし！」

「でも、今回あたしと上やん自身を最後にあの状況から助けたのは、あの剣だった」

「そ、そりやそうだが…」

「だからね、あたしに作らせて欲しいの。あの剣の代わりを。また同じように背中の飾りになつても構わない。またいつかどこかであたしの作った剣が上やんの背中を守ってくれて、上やんのそばに置いてくれるなら、それでいいの。言つてみればお守りみたいなもんよ！お守り！」

「そうか…じゃあお願いするよ」

「任せなさい！じゃ！行くわよ！」

そう言つてリズベットは立ち上がり、上条はそれを見ると安心したようにリズベットの店に向けて歩き出した。その背中を追つて歩き出そうとしたリズベットの元に一通のメッセージが届いた

[Message]

今日のごめんねリズ。後日、日を改めてまた詳しく話しましょう？
リズは私にとつて大切な友達だから、このままもやもやにして終わ
らせたくないの

M i k o t o

「・・・ふふ、全く素直じゃないわね・・・」

「?どうしたリズ?何かあったか?」

「ううん!何でもない!」

「Message」

分かったわ。なら後日、改めて話し合いましょ!私にとつてもミコ
トは大切な友達なんだから!

よ!
だから今はこれだけ言っておくわ。女として!正々堂々と勝負

L i s b e t h

P . S .

でも、とりあえずドアの修理代はちゃんともらうわよ?

キインツ!キイン!キイン!

工房へと戻った上条とリズベツト。リズベツトは早速工房へ戻る
なりクリスタライト・インゴットを窯に入れ、加工できる温度まで熱
した後、その金属に向けてハンマーを何度も振り下ろしていた。そし

て…

「・・・出来たわ」

「おおおおおお〜」

リズベットが打ち続けた金属は片手剣に変わり、その剣は先ほど上条に作った盾と同じく、エメラルドグリーンに輝く刀身をしていた

「言つとくけど、アンタがこの前まで持ってたやつとはもはや比にすらならないわよ?」

「ははは、分かってるさ。ありがとう、大切にするよ」

そう言うの上条は剣を新しい鞘に収め、自分の背中と盾の間に差した

「まいど!これからも!リズベット武具店をよろしく!」

「ああ、世話になったな!」

「これからもお世話になるんでしようがっ!」

「ああ、それじゃ行ってきます。リズ」

「ええ!行ってらっしゃい!上やん!」

暖かい夕暮れの陽射しがドアから出て行く彼を照らす。そんな彼を見るリズベットの頬はまるで夕焼けのように暖かく、赤く染まっていた

第43話 電撃姫とぼったくり鍛冶屋

「まったく…遅いわねミコトのやつ…」

「ごめんごめんお待たせ〜!」

「やーっと来たわね。あともう少し遅かったら帰ってやろうかと思っ
たわよ」

「いやー、思ったよりもギルド内五役会議が長引いちやつて…」

「血盟騎士団さんも大変ね〜」

「本当最近激務すぎて嫌になるわよ…はあく肩凝った…」

そう言いながらパキパキと肩を回して骨を鳴らす純白に赤の刺繍が入った装備を身につけている彼女、御坂美琴と個人で鍛冶屋を営む彼女、リズベットの二人はアインクラッドの第57層の主街区マーテ
ンのとあるカフェで待ち合わせていた

「ご注文は?」

「あ、いえ大丈夫です」

「失礼いたしました」

オーダーを求めたNPCの店員を美琴は片手で制した

「あ、ひつどーい。いくらNPCとはいえどそれじゃ営業妨害じゃない
」

「そういうリズこそ、そのテーブルに出てるレモンティーこの店のメ
ニューじゃないでしょ?」

「ぎくつ…」

「ははは、だからおあいこ様ってことよ」

「ま、それもそうね」

「…ねえリズ、覚えてる? 私たちが最初に出会った日のこと」

「え? どうしたのよ急にそんな改まって」

「いいから。今は少し昔話に浸りたい気分なの」

そう言つて美琴は右手を振り下ろすと、自分のウィンドウを呼び出しアイテムストレージから作り置きしていた紅茶をオブジェクト化させ、テーブルに置いた

「そういう気分ねえ…不思議ね。なんだかあたしも今はミコトと思ひ出話をしたい気分だわ」

「そつか…そりやまたタイムリーだったわね」

「…そりや忘れるわけじゃない…あの日は店を構えて営業を始めた最初の日だった…」

「そんな不安と期待に胸躍らせた営業初日から血盟騎士団の…それも副団長様が来たんだもの。そりやもうビックリたまげたわよ」

「いやいや、本当に綺麗な店構えだったから小洒落たカフェかと思つて入つてみたら鍛冶屋だったってだけなのよ」

「そういう意味でも、あんな失礼な客アンタが初めてだったわよ」

「そ、その節はごめんつていつも言つてるじゃない…」

「ごめんて済むことか！あの時のあたしの最高傑作をあんな簡単にポツキリ折つてくれちゃつて！」

「いやだから私の剣をぶつけただけで折れるなんて思わなくて…ごめんつて言つてるじゃない…」

「…でも、おかげで新しい最高傑作が出来た」

「…そうね、私とリズにとつての愛刀：『ランベントライト』が」

そう言つて美琴は自分の腰に据えた宝石のように輝く細剣に視線を落とした

「でも、第一印象がアレだったからつきり武器の扱いは雑なんだと思つて2本目を作る準備さえしかけてたのに、ソレは随分と長持ちよね」

「当たり前じゃない。そんな簡単にこんなレアな細剣折つたらそれこ

そりズどころかSAOプレイヤー全員と神様から恨まれるわよ」

「でもあの時の鍛冶は神がかったわね〜：あんなに鍛冶クリティカルが出たのは後にも先にもあの時だけよ」

「素材もあんなに手に入ると思わなかったし〜：」

「本当よ。クエスト達成でしか手に入らない鉱石なのに」

「そのクエスト達成条件の為に要求されるフロアボスのレアドロップアイテムがもう私のアイテムストレージに入ってて一瞬でクリアとはね〜：」

「流石に面食らったわよ〜：あたしも興味本意で手に入ったら一度ぐらい鍛えてみたいって思っただけなのに〜：」

「ねえそういえば知ってる？あのクエスト実は続きがあつて〜：」

「え!?!嘘!続きってなにに!?!」

「実はそれがさあ〜：」

こうしてリズベットと美琴はお互いの思い出話や世間話に花を咲かせ、いつの間にか時計の長針は1周半していた

「でねでね!そしたらそこで『アイツ』が〜：〜：ツ!?!」

「〜：〜：あくも〜やつと出たわね。ミコトが言うその『アイツ』の名前が」

「あ〜：〜：つめん〜：私としたことが今日集まった本題を忘れてこんな時間まで関係のない話をベラベラと〜：」

「本当よ。いつもなら話し始めてすぐに美琴の『アイツ話』になるんだから」

「そ、そんなことないわよ!／／／」

「いや、あるわね」

「うぐつ〜：」

返す言葉がなくなった美琴はひとまず落ち着こうとテーブルに置かれた紅茶を口に運んだが、そんな彼女にリズベットが囁いたような顔で追い討ちをかけた

「ねえミコト、あんた上条のこと好きなんでしょ?」

「ぶはっ!!!」

「汚」

「ゲホッ…!ゲホッ!だ、誰があんなやつのこと…!ていうか!なんでリズの方こそアイツの名前を…!」

「まあまあそんな細かいこと気にしなくたっていいじゃない」

「細かくないわよ!」

「で、どうなの?」

「だから…アイツのことなんてなんとも思っ t…」

「…本当に?」

「ッ!?!」

戸惑いながら喋る美琴の言葉を遮ってリズベツトは真剣な眼差しと声で美琴にそう聞いた

「なら、あたしが上やんのこと貰っても…なにも文句言わないわよね?」

「……ッ」

続けて真剣な表情で美琴に問いただしたリズベツト。そんな彼女の言葉に答える事が出来ず、しばらく考え込んだ美琴は重苦しく口を開いた

「…だから言ってるでしょ…私はアイツのことなんか何とも思っていないし、リズがアイツを貰うって言っても別に私には関係のないことだし、それはリズの好きにすればいいわよ」

「……呆れた…」

「……え?」

ガタッ!ガシッ!

「表出なさいミコト。友人として、女としてここであたしと白黒はっ

きりつけなさい」

「え？ちよ、ちよつと!?!」

リズベットは急に椅子から立つと、美琴の腕を乱雑に掴み、店の外へと連れ出した

—————

「ちよ、ちよつとリズ！一体どこ目指してるのよ!?!」

店から外へと出たリズベットと美琴は街はずれにある拓けた野原に来ていた

「うん、まあここなら多少暴れても問題ないわね」

「へ?」

「美琴、あたしとデュエルしなさい」

「はあ!?!いきなりなんで!?!」

「いいから早く。騙されたと思つてデュエル申請出してみなさい。早くしないと二度とウチの店の敷居跨がせないわよ」

「・・・まあいいけど・・・」

リズベットに言われるがまま美琴は右手を振つてウィンドウを開いて操作すると、リズベットにデュエル申請を送った。しかし、リズベットは送られたデュエル申請を対戦者のどちらかのHPが0になった時点で勝敗が決する「完全決着モード」で承認し、デュエル開始までの60秒のカウントダウンが始まった

「なっ!?!か、完全決着モードって・・・!アンタ分かってんのリズ!?!これ決着ついたらどっちかが死ぬのよ!?!」

「言つとくけど『リザイン』なんてしたら縁切るから」

そう言いながらリズは愛用のメイスを装備スロットからオブジェクト化して右手に装備し、左手にバックラーを装備し、デュエル開始のために美琴から距離を取った

「い、嫌よ！初撃決着モードならまだしもなんで完全決着モードで…！」

「別にアンタが手加減するならそれでいいけど…あたしだって仮にもマスターメイサーよ、いつまでもそんな引け腰でいる気なら…」

「——死ぬわよ」
「!!!」
「!!!」

そう美琴に向けて言い放ったリズベットの視線は、彼女の親友である美琴でさえも見たことがないような冷たく、恐怖を感じざるを得ない視線で、アインクラッドで数々の死線を潜ってきた美琴でさえも思わず唾を飲み込んだ

「5…4…3…2…1…Start！」

「はああああああ!!!」

デュエルスタートの合図が切った瞬間、リズベットが気合いの叫びと共にメイスを構え、美琴に向かって突進した

「ッ!!やるしか…!!」

「はあっ!!」

「くっ!!」

「シャキーン！ガキーン!!」

「やあっ！」

「ガアンツ!!」

「きゃっ!?!」

突進してきたリズベットのメイスを反射的に鞘から抜いたレイピアで受け止めたが、そこから更にリズベットはメイスを押し込み、美琴は思わず後ろに仰け反った

「いい加減正直になりなさいよ美琴ッ!!」

「ちよっ!?!あぶなっ!?!」

ガキイン!!

「アンタも上条のことが好きなんですよ!?!だからあの日アンタはあたしたちが話してた時にドアをぶち壊してまで工房に入ってきた!?!」

「ッ!?!」

ガアンツ!!

リズベットは美琴にそう問答しつつ、メイスを振り下ろす。その攻撃には一抹の迷いもなく、本気で美琴にぶつかっていた

「どうせ自分には告白する勇氣も持てなかった!?!だから上条のことは私に譲ろうとか!?!この気持ちはなかったことにしようとか思ってたでしょ!?!」

「~~~~ッ!!」

ギインツ!!!

「そんな心遣いはお門違いにも程があるわよ!?!告白の邪魔をした!?!上等よそんなもん!?!同じ人を好きになったならそんなくらいが普通よ!?!それなのにアンタは自分の気持ちに嘘ついて全部譲ろうとして!?!そんな生半可な気持ちなら最初っから告白の邪魔なんてしてくれてんじゃ:~!!」

「うるっさいわねえ!!!」

ガッ!キイイイン!!

「私だって:~私だって邪魔なんてしたくなかったわよ!?!でもあの時の二人の会話がドア越しに聞こえてきて!?!アイツがまた私から離れて遠くに行っちゃうかもしれないって思ったら:~体が勝手に動いてたのよ!?!」

ズバンツ!!

「づっ…!?!」

鬼のような気迫で迫るリズベットの言葉に耐えられなくなった美琴は、振り下ろされる彼女のメイスをレイピアで押し返し激怒の言葉と共に彼女の身体を切り裂き、HPを削った

「もう嫌なのよ！アイツがこれ以上私から離れていくのは！第1層で別れた時からずっと…一緒にいたいと思ってるのよ！でもアイツは私の気持ちなんて知りもしないでいつも一人で無茶して！」

ガギンツ!!

「私はいつも守られてばかりで…私だって一緒にいてアイツを守ってあげたいのに！どうしても素直になれなくて！今この気持ちを素直に伝えられない自分が大つつ嫌いよ!!!」

ガアンツ!!

「だったら伝えなさいよ！百歩譲って本人に伝えられないのはまだ分かるわよ！告白するってのはそれほど勇気が必要なのは分かるわよ！でもね…同じ女のあたしにさえその気持ち隠してんじやないわよ！そんなんだからいつまでたっても素直になれないし本人に伝えられないままなのよこのバカツ!!!」

キインツ!!ガキインツ!!

二人の打撃、そして斬撃に力が入り、押し問答もそれに比例してどんどんと激化していく。いつしか二人はデュエルであることすら忘れ、互いの気持ちを吐き出しあっていた

「だから私はリズが羨ましかつたのよ！私はずつと言えなかつたことを…自分の気持ちを正直に言えるリズが！あの後人知れず一人で涙だって流したわよ！いつまで経ってもアイツの隣に立つ覚悟も決められない自分の弱さに心底腹が立ったわよ!!!」

バキイイイツ!!

「羨ましい!?笑わせんじやないわよ!あたしだってね…ミコトが心底羨ましいわよ!同じ攻略組で命を預け合える二人をあの時どれだけ羨ましいと思っただか!それがどうよ…あたしが気利かせて店から出て行ってあげたくせにすることは自分の身を引いて他人の応援ってわけ!?だつたらまず譲りなさいよ…上条と命を預け合つて戦えるその強さと場所を譲りなさいよ!!」

ドゴオオオオオオオツツツ!!!

「がっ!?」

ゴロゴロゴロ…ドサツ…

リズベツト渾身の一撃が美琴のレイピアを掻い潜り、彼女の腹部に直撃した。その衝撃に美琴の体が吹っ飛び地面を二転、三転とした

「はあ…はあ…はあ…」

「負けて…たまるもんですか…」

ググツ…グググ…

地面に這いつくばっていた美琴はレイピアを杖代わりにして無理矢理立ち上がり、リズベツトに向けてその切っ先を構えると、その刀身が光り輝いた

「フラッシュング…」

ダンツ!!!

「ペネトレイター!!!」

ズバババババババババババツツ!!!

「~~~~~ツ!!!」

目にも留まらぬ光速のソードスキルとともに美琴がリズベツトに向かつて突進していく。細剣の最上位スキルであるこのソードスキルをバツクラー一つで防ぎ切れる訳もなくリズベツトの身体は切り裂かれ赤く染まつていき、HPバーの色さえも赤く染まつた

「そうよ…そうじゃないと…こうして言い争う意味もないわ…行くわよミコトー!」

「ええ!…とことんぶつかって来なさい!…さっきはああ言ったけど…撤回させてもらおうわ!…絶対誰にもアイツは譲らない!」

「やああああああああ!!!」

「はああああああああ!!!」

キンツ! キンツ!! ギン! ギンツ! ガンツ! ギンツ! ……………

—————

「はあ…はあ…はあ…も、無理…」

「ぜえ…ぜえ…ぜえ…私も…無理…」

細剣とメイスのぶつかる金属音が聞こえなくなった時には既に日が沈みかけ、夕暮れが訪れていた。二人は野原に仰向けになって倒れ、そのHPはほとんど残っていなかった

「も、もういいわよね…リザイン…」

「WINNER M i k o t o !」

リズベットが自ら敗北を認めるリザインを宣言すると、二人の間にデュエルの勝者を告げる表示が現れた

「ぜえ…リザインしたら…縁切るんじゃないの…?」

「何を分かりきったことを今さら…このデュエルの意味分かってんでしようが…それに言い出しっぺはあたしだからいいのよ…はあ…ああもう…こんなに汗かいたのいつぶりって感じよ…」

「あはは…それもそうね…ありがと…リズ…」

「お礼を言う前に、何かあたしに言うことがあるんじゃないかしら？」
「・・・そうね」

そう言いながら仰向けのままりズベツトは美琴へと視線を向け、その視線と言葉の意味を理解した美琴は一呼吸置いて言った

「私は・・・アイツが好きよ・・・デュエルの時も言ったけど・・・誰にも譲りたくない・・・これから先も・・・アイツと同じ場所で一緒に戦って・・・守っていききたい」

「・・・そっか・・・それが聞ければ・・・もうあたしは十分よ・・・このデュエルも無意味じゃなかったと思えるわ・・・」

「ははは、本当にありがとね・・・リズ。今思ってみれば、私こんな風に友達に誰かと思いつき言葉で喧嘩してぶつかり合ったの初めてかも・・・」

「え、そうなの？アンタの性格上そんなのしよっちゅうだと思ってたけど・・・」

「ううん、私ねリアルじゃちよつと色々あって周りから浮いてるっていうか・・・みんな私のこと特別視しすぎなのよ。確かに気の許せる友達はあるんだけど、こんな風に思いつきり喧嘩して言い合うわけじゃないし、ましてや殴り合うなんて以ての外だわ・・・」

「ははは、なにそれ・・・でもそうね・・・あたしもなんだかんだここまで激しく言い合って殴り合ったのは初めてかしら・・・」

「だからね・・・そういう意味でも、リズは私にとって本物の親友よ」

「そりゃどーも・・・よいしよつと！ほら！ニコトもいつまでも寝そべってないでいい加減立ちなさいー！」

「ええ、ありがと・・・よつと・・・」

リズベツトはまるで年寄りのようにそう言いながら膝に手を置いて立ち上がると、美琴に手を貸し立ち上がらせた

「さて・・・まあ、本当に殺し合って決着つけるわけにもいかないし・・・ど

うしたもんか…」

「そうね…確かに私はリズのお陰もあって正直になれたけど…それでリズの気持ちが変わるわけじゃないし…」

「…じゃあ、こういうのはどう？いつか現実で再会して、その時に今度はちゃんとルールを決めた何かで勝負して決着つけましょう！」

「現実で…か…うん、いいわよ。私もリズとは現実であってみたいし、それにこの世界だけで決着つけるってのも癪だしね」

「じゃあ、現実で会えるようにあたしの名前教えとくわね。あたしの名前は篠崎里香。歳は16…現実なら今ごろ高校生になってたよね」

「篠崎里香…うん、いい名前ね。私の名前は御坂美琴。歳は15。まだ中3だから私はリズの後輩ね」

「え、ええっ!?御坂美琴って…アバターネームと名前変わんないじゃない!?てか年下!?てつきりタメかと思ってたのに!」

「ははは!まあいいのよ細かいことは。気を使う必要なんてないし、なにしろ私だつて年上のリズに対しても敬語使うどころかさっきのデュエルじゃ暴言もいいとこだったじゃない」

「それもそうね…まあ…このゲームが終わったらきちんと現実で再会して顔合わせしましょ?その為にも…これからも上条のこと、頼んだわよ。あたしが作ったそのレイピアで…これからもアイツを守ってあげて」

「ええ…リズの方こそ、これからも私の装備のメンテナンスよろしく!」

「もちろん!任しときなさい!」

ギョツ!

こうして真名を明かしあつた二人は互いの健闘を祈り、これからより強固なものとなっていく友情を誓って握手を交わした。この仮想世界でも自らの恋心に向き合い、懸命に生きた二人の少女の物語はまだ始まったばかりである

第44話 影の物語

「お、探したゾ。上やん」

「おお？何だアルゴか」

「何だとは酷いな。いい情報あげないゾ？」

「言つとくけど、ラフィンコフィンのリーダーのユニークスキルの詳細が判明した話なら新聞に出てたからとつくに知ってるぞ」

「えっ!？」

「ほら」

ピラッ

「ほ、本当ダ…や、野郎ども…オネーサンが上やんに伝えるのより先…!？」

「お前はどんだけ俺にこだわりがあんだよ…」

「ほ、ほつとケ!／／でもしかしなんだ、こんな表向きに公開してしまうんだナ。アイツらは曲がりなりにも殺人ギルドなんだから下手をすれば情報漏洩防止の為に殺しをやるかもしれないというのニ」

「どうかなー？そもそもそのネタの発信源は俺と美琴だし。もっとも、リーダーのPOHと美琴は知り合いだったみたいだけどな」

「え、そうなのカ？」

「ああ、現実の名前も知ってた。でもあれはなんつーか…仲よさそうではなかったな…俺もあんなヒステリックな女と仲良く友達に…なんてことは出来そうにないかな…」

「女!?ラフィンコフィンのリーダーって女だったの力!？」

「なんだ、知らなかったのか？」

「逆になんで上やんはなんでそんなに知ってるんだヨ!？」

「いやだって、この前、圈内事件解決する時にラフィンコフィンのリーダー達と直接対決したし」

「ええ!?てゆうか圈内事件も解決したの上やんだったの力!？」

「まあ正確に言えば美琴の協力もあったからだけどな。謎解きしたのほとんどアイツだし。でもまあ正直、あんなことあった後じや圈内事

件なんて霞んで見えただけだな」

「もうやめて！聞きたくない！情報屋である私の価値がどんどん霞んでいってるヨ!？」

「・・・なんつーか、お前の喋り方って地味にあいつに似てるな」

「あいつ？あいつって誰だヨ」

「あー、何て表現すりやいいんだ？白いヤツ」

「アバウトすぎるゾ!？」

「まあそんな深く聞くなよ、情報だけが世の中の全てじゃありませんの事よ?」

「情報屋にとっては情報が食となり情報が命になるんだ！さあー洗いなざらい吐いてもらおうか上やんー!」

「5000コル」

「私でもそんなぼったくりはしないゾ!？」

「まあ知らぬが仏って言うしたまには知らないことも作つとけよー」

「それじゃ情報屋は名乗れないんだヨー!!」

そう、これはどんな情報屋も、上条当麻でさえも知らない：誰も知らない彼らだけの物語

白い少年と、後に殺人ギルドのリーダーという大罪人として世間に知れ渡る少女(?)

彼、彼女はいかにしてこの世界を歩んできたのか、どうやって2人は出会い、なぜ殺人ギルドのメンバーとして仲を共にしたのか、これは誰も知らない彼らだけの物語である

第45話 白人

時は遡ること約1年ほど。デスゲームと化したSAOが始まってから2ヶ月が経過した頃。場所は全てのプレイヤーの出発の地である始まりの街。いつの日かゲームが終わるその日まで待ち続けると決めた人間の集まる街となっていた。そんな街のベンチの上で仰向けに寝転がりながら1人ごちるプレイヤーがいた

「・・・チツ」

そう、この白い少年。一方通行。そのユーザー名を「Accelerator」と名乗るこの少年。なぜ彼が学園都市の暗部の思惑があると知っていても、色んな人物の協力もあつてここに来れたという自覚があつても、ここから動きたくても動けない理由があつた

「・・・暇だア・・・」

そう、彼はこのゲームのそもそもの目的、遊び方を知らなかった。というか彼の実験施設をたらい回しにされていたというこれまでの生い立ち故、ゲームという類の物にあまり触れて来なかったため、右も左も分からず、SAOにログインしてからこの1ヶ月、モンスターと戦うどころかもはやこの始まりの街から出られずにいた

「まったくよオ・・・人を旅行に出すつてんなら現地のパンフレットぐらい先に読ませろつつウンだよなア・・・あのクソども・・・これじゃ最初にご行つてなにすりやいいかも分かんねえじゃねエか」

「頭の中じやいい加減何か行動を起こさねエとダメだと分かっちゃいるんだが・・・どうにもなア・・・」

もはやニートが「仕事をやる気はあつてもする仕事がないからニ―

トやってます」という言い訳と大差ない言葉を口にする始末。SAOにログインする前までは同じ家で過ごしていたニートの女性についてもはやとやかに言える彼ではないだろう

「唯一分かつちやいるのは…」

ガヤガヤガヤガヤ

「こんにちは」「どうも」「こんにちは」「あら、ありがとうございます」

「・・・遮断」

.....

そう彼が意識すると、始まりの街の喧騒は彼の耳には届かなくなる。音の遮断。音波のベクトルを操る演算を脳で行うことで全ての音が彼にだけ聞こえなくなり、無音の空間が完成する

(能力は使えんだよなア：M N Wの演算補助なしだよオ：ゲームなのに演算が必要なのは面倒な話だが：まアイイヤ、昼寝すつかなア
…)

自身の能力であるベクトル操作で周囲の音波を全て遮断し、無音の空間を作り出した一方通行は、仰向けになっていたベンチで昼寝を始める。無音の空間とは確かに睡眠にとってはこれ以上ない好環境だが、視線は反射出来ない。もはや側から見た彼は家のないニートである。だがそんなことは気にもせず、次第に時間は過ぎ、日は暮れていく。彼はこうしてこの1ヶ月を棒に振って過ごしてきた

「Z Z Z Z Z Z Z Z」

「Z Z Z Z Z Z Z Z」

「Z Z Z Z Z Z Z Z」

「・・・くアアア」

始まりの街に夕日が差し込む。その柔らかかで暖かい陽射しで一方通行は少し長い昼寝から目覚め、大きく欠伸をした

(・・・ああ、そおいや音を遮断してたんだっただな：クソガキを助けた以来音の遮断になんざ能力を使ってなかったからなア：忘れちゃったぜ：)

「・・・解除つと」

「ようやくお目覚めですか？一方通行さん」

「・・・ああ？」

気づけば誰かが横に座っていた。しかし、まだ寝起きなせいだからか、その誰かの顔がイマイチ認識出来なかった。1ヶ月前から着替えていない衣服の袖で顔を擦ってから目を凝らして自分の隣に座っている者の顔を見る

「・・・誰だア？お前」

『『未元物質』を操る学園都市第2位の超能力者、垣根帝督です』

「・・・死ねやアアアアア!!!」

ドガアアアアアアアアアアン!!!

垣根と名乗る少年が自分の隣にいと分かった瞬間、一方通行はすぐさまベンチを離れ、そのベンチをベクトル操作により音速で蹴飛ばした。その後、右足で地面を踏みつけると地面が爆発し、垣根と名乗る少年へと破片が飛んでいく

「ちよっ！ちよっ！と待って下さい！一方通行さん！私はあなたの敵ではありませんし危害を加えるつもりはありません！よく見て！よく見て下さい！」

「ああ!?!よく見えてンよオ!!オマエのその背中から生えてる白い翼がなによりの証拠だろオが!!」

「わ、私は垣根帝督であつても以前までの垣根帝督ではありませんから!ほ、ほら顔とか色とかよく見て下さい!」

「・・・ああ?」

「ほ、ほら!翼もちやんとしましますから!」

フアサ...

「ど、どうですか?とりあえず以前までの私ではないと分かりましたか?」

「・・・アホみてエに白いな・・・」

「あなたに言われると何か少し複雑ですね」

「ああ!?!」

「す、すいません!違うんです!ごめんなさい!悪気があつて言ったわけではないんです!」

一方通行が垣根と名乗る少年をよく見てみると、自分が1ヶ月前に倒した垣根帝督とは似ても似つかなかった。もはや自分より白かった。顔も肌も服も何もかも全て白い。唯一の例外は緑色の輝きを宿す優しい瞳だ。まるで以前の垣根帝督から悪意を取り除いたような、そんな真っ白で純粋な少年だった

「・・・チツ、なんか調子狂うな・・・」

「まあ、ひとまず落ち着いたところでやはりお互い分からないことだらけだと思えますし、お話がてらお食事などどうですか?」

「あアン?この世界でも飯が食えんのか?」

「えっ!?!ご、ご存知無かつたんですか!?!」

「ああ。何でか知らねエが腹はずつと減つてたまに腹の虫が鳴いてよオ、流石に仮想世界で餓死なんざしねエとは分かつてたから特に飯は気にしなかつたんだが...本当に飯なんか食えんのか?」

「・・・ま、まあそこも追々お話致しましょう。とりあえず参りましたよ。ご案内します」

第46話 垣根帝督

「・・・クソ不味いな。作り方をさして置けば黄泉川の炊飯器料理の方が100倍マシだ」

「ま、まあまあここはまだ第1層の始まりの街ですし、そもそものご飯のお代が安いですから味は期待は出来ませんよ」

「オマエもオマエで中々気持ち悪イがなア」

一方通行はとりあえず垣根と名乗る少年と共にはじまりの街のレストランを訪れていた。一方通行にとっては実に1ヶ月ぶりの食事となる訳だが、目の前にいる見るだけで胸糞の悪くなる青年のせいなのか元々の料理が悪いのか、ともかく1ヶ月ぶりの食事はとても満足のいくものではなかった

「え?ど、どこかお気に召さない所がございましたか?」

「・・・オマエ本当に『あの』垣根帝督かよ?」

『あの』というのが何を指すのかにもよりますが、少なくとも私は以前の垣根帝督ではありません」

バァンツ!!

「だアからそれがどオいう意味かって聞いてンだよオ!」

一方通行が机を叩いて垣根と名乗る少年に向けて怒鳴る

「す、すいません!今すぐ分かりやすく説明致します!」

「・・・チツ、マジで調子狂うぜ!」

「まあ私が本当は何者かを分かりやすく語る為には、最初にここまでの経緯を話した方が早いのですが、それからお話ししてもよろしいでしょうか?」

「もオいちいちツツコまねエからさつさと話しやがれ」

「では・・・」

そう言うのと垣根と名乗る白い少年はその緑の瞳を閉じ一呼吸おく。一方通行は頼杖を突いて話を聞く態勢を取る。そして白い少年は落ち着いた声と表情で話し始めた

「私は1ヶ月前の学園都市で起こった暗部同士の抗争時、あなたに殺されました」

「・・・あア」

「ですがあの後、私は学園都市の人間によって『演算能力を持つ脳』だけを回収され、冷蔵庫のような器具を取り付けられその意思だけが生き永らうことが出来ました」

「・・・」

「そして学園都市の人間は脳だけになった私をどうにかして利用出来ないかと考えたところ、既に稼働していたこのSAOのクエストの自動生成やゲームバランスを自動で制御する『カーディナルシステム』のデータの一括管理、制御、演算を私の脳に接続してその仕事の一切を私の脳でやりくりしようとしたんです」

「ほオ・・・？」

「気づけば私はSAOに関する電子情報の波の中にいました。全ての情報を処理していく中で私はひとまず脳だけになってしまった自分の身体を自分の未元物質で形作ろうと思いました」

「・・・」

「しかし、私の能力は少し特殊なんです」

「特殊？」

「はい。私の未元物質で生み出した肉体には様々な意思が宿るので。ですので言うなれば、1ヶ月前にあなたが倒した『垣根帝督』もその当時の垣根帝督に近かったというだけで、本物の垣根帝督ではありません」

「・・・」

「そして今回、脳だけが残り、そこからまた蘇った肉体に宿った垣根帝督としての意思が今の私です」

「要するに、今の teme エも前の teme エも『垣根帝督』であってそうじゃなく、未元物質が肉体を作っていく中で宿る意思こそがその時の『垣根帝督』になる訳だ」

「概ねそのような理解で結構です。実は隠れているだけで本当は色々あるものなんですよ。自分の意思というものは」

「見栄っ張りな自分や短気な自分、臆病な自分……そして『優しい自分』」

「……………」

「誰かを殺したいという心よりも、誰かを守りたいという心が勝った」「何かを壊したいと思う心よりも、何かを作りたいと思う心が勝った」「戦いを進めたいと思う心よりも、戦いを止めたいと思う心が勝った」「そういった意思が積み重なって肉体に宿ったのが今の私です。詰まるところ、これも私という『垣根帝督』の1つの側面であり、優しさが表面に出てきた個体とも言えます」

「なるほどなア…」

「そして新たな肉体も作り出せましたので、カーディナルを通して S A O 全体のプログラムを本格的に取り仕切るホストコンピュータのような役割を担うようになったのです」

「元からホスト崩れみてエなナリしてたが、まさか別の意味で本当のホストになっちまうとはなア」

「あははは、耳が痛い限りです…そして私は S A O のプログラムを管理している中である日…一方通行さん、あなたを見つけたんです」

「……………」

「この肉体に今の私の意思が宿ってから、私はあなたにずっと恩を返したいと思っていました」

「恩だア？」

「はい、過去の私を消し飛ばし、今の私を生み出す最初の起因を作ったのは間違いなく一方通行さんです。だから私は、私を生まれ変わらせてくれた一方通行さんにずっと恩返しをしたいと思っていました」

「ったく、鶴の恩返しかよ…やったことは鶴を助けるンじゃなく跡形もなくぶっ殺しただけの本当に真逆の事だけだなア…」

「そして私はこのSAOで一方通行さんを見つけ、いても立ってもいられなくなり、はじまりの街に飛んできた。という話です」

「はア? おいおい、それじゃあホストコンピュータとしての仕事が出来ねエだろオが。それに、それこそオマエがゲームバランスを無視してんだろ」

「いえ、大丈夫ですよ。基本的には情報処理は私の頭の脳の中で行われているので。管理するべきデータの内容を脳にインプットしてしまえば結果的にどこにいても仕事が出来ますし、私という存在をカーディナルに認識させ、最適化すればゲームバランスの害として弾き出されることはありませんから」

「なるほどな」

「まあ、先ほどのように能力を使用する場合は演算処理能力だけは能力使用に大半を費やしてしまうので、コンピュータ同士を繋げる為の演算は一時的に中断することになりますが、束の間の休憩みたいなものですから、大した問題にはなりません」

「・・・それで? オマエはこれから具体的に俺にどんな恩返しがしてエンだよ?」

「ええ、そもそも私が良かれと思って一方通行さんに何かを施したとしても、一方通行さんが嫌がってしまえばそれまでですので: 一方通行さんが今してほしいことがあれば何なりと申して下さい!」

「・・・してほしいことねエ・・・」

垣根の提案に少し考え込む一方通行。しかしその提案を聞いた時から既に、もう自分の中で何を願うかという答えは出ていた

「なら、1つ頼みてエ事がある」

「はい! 何でしょう!?!」

一方通行は頬杖を突くのをやめ、その腕をテーブルの上に戻すと、垣根の緑の目を真っ直ぐに見て言った

「俺にこのゲームのやり方を教えろ」

一方通行がSAOにログインしてから約1年が経過した。初めてはじまりの街で出会ったあの日から、一方通行は垣根帝督に手解き(ゲームの)を受け、もはやこのゲームで知らないことはほとんどなく、無難にプレイ出来る立派なSAOプレイヤーへと成長していた

「では、朝ごはんが出来ているので早めに食べてしまってください。今日は黒パンとサラダとコーンスープですよ」

(・・・ヤベエ：ヤベエのは頭では分かってンだが：面倒臭せエエエ)

しかし問題があったのはそれからで、一通りのゲームの仕組みや操作方法を教えてもらった一方通行は世話になったと言って別れようとしたのだが、垣根がしつこいぐらいに食い下がってきたのでしばらく行動を共にすることになったのだが、巡り巡って今となっては第2層の湖の近くにログハウスを垣根が建て、そこに2人で住んでいるという状況だ

(まア正直、垣根のホストの権限のおかげで超電磁砲の監視には困ってねエし、願ったり叶ったりっちゃあそうナンだけどよオ：)

「いただきます」

(・・・いただきます)

(これじゃただのホモじゃねエか：)

モグモグモグモグ

(・・・いつものことながら美味エし)

「さて一方通行さん、今日はどう致しましょうか」

「寝て過ごしいいだろ」

「またそれですか：たまには外に出て運動などされてはどうですか？SAOでは現実世界のスポーツはもちろん、この世界でしか出来ないようなスポーツもあるんですよ？」

「興味ねエなア」

「では最前線の攻略にでも参加されてはどうですか？一方通行さんのような強者なら攻略組も喉から手を出して欲しがると思いますよ」

「それはオマエも同じだろう」

「私はそもそもがホストコンピュータなので。あまりモンスターと進んで戦うことや攻略に加担することは推奨されていません」

「そのモンスターが私の管理するデータの一部に含まれていればそれはもう過度の干渉ですから。そもそも一方通行さんとこうして一緒にいることさえもグレーゾーンです」

「ですので一方通行さんが攻略に…」

「俺は別にこのゲームを楽しんでやる気はねエよ…攻略なンギ興味ねエしそもそも…」

「自分をここに送り込んだ学園都市の人間の思惑通りに行動するのが癪にさわるから…ですか？」

「……」

「確かにそれもそうかもしれませんが、私の推測が正しければ一方通行さん…あなたは…」

「あア？」

「あなたは戦うことに躊躇を覚え…死ぬ事に、そしてそれと同じくして誰かを失い続ける中で自分だけが生き残ることに恐怖しているのではありませんk…?」

ドゴオオオオオオオオオ!!

「ッ!?!」

垣根の言葉が終わるとほぼ同時に一方通行の拳が食べかけの朝食ごとテーブルを粉砕した

「テメエ垣根…誰に向かって口聞いてると思ってるやガンだ…第一、俺なんか死んだところで悲しむ人間なンギ向こうの世界にや誰一人としていねエだろオが!!!」

「一方通行さん、それは別に恥ずかしい事ではありませんよ」

「あア!?!」

「この世界ではHPを一度失ってしまえばそれっきり。自分は痛みを感じずとも減っていくのは己の命ではなくただの数字。夢中で戦っ

ていたら死んでいるなんていうのもあり得なくはない話でしょう」

「……」

「だからあなたは恐れているんです。いつか自分がそうやって死んでしまえば、御坂美琴さんを守れなくなる。そして、彼女は攻略組です。最前線は言うまでもなくこの世界で一番危険です。一緒に戦って守ろうとしても、守り切れなくて自分だけ生き残って彼女だけを失うのが何よりも怖い。違いますか？一方通行さん」

「……」

「……音波の遮断ですか：便利な物ですよ。その能力は自分の世界に閉じこめることが出来ますから。ですがその能力の使い方であるが守れているのは、他でもないあなた自身だけです」

「……」

「あなたは誓ったんじゃないですか？自分をこの世界に送り込んだ人たちに、自分の帰りを待つ人に。その能力で、その力で、守るべき人を守ると。それなのにあなたは今では私のホストの権力としての監視にあやかっているだけで自分の役目を果たしている気になっていく。そんなので：そんなのであなたはいいんですか!?!一方通行さん!!」

「……」

ガタツ：

一方通行は何も言わずに席を立ち、垣根から視線を外し、リビングを離れ自室に戻ろうとした

「待ってください！一方通行さん！一方通行さん!!」

ガチャ：

(別に音の遮断なンギ最初からしてねエよ：最初から最後まで全部分かって聞いてんだよ、クソが。：ああそうさ、テメエに言われなくたって全部自分で分かってんだよ、俺は……)

キィ：

(・・・あいつらのいる『光』の世界に全員で生きて戻ることを・・・諦め切れねエでいるなんてことはな・・・)

・・・ボタンツ・・・

――――

「zzzz・・・くあ・・・もう夜か・・・」

自分の部屋に戻った後、一方通行は思うところを考え尽くした後、惰眠を貪っていた。おかげで昼食は取っていないどころか、垣根との朝の一件の後、部屋から一步も出ずに部屋から月明かりを眺めていた。どこか寂しげに光る月明かりが一方通行の白い肌をより白く光らせる

「・・・あア？」

「zzzzzz」

自分の足元の違和感に気づいてそちらに目を向けると、自分と同じように、その白い肌を月明かりに照らされる少年がもう一人いた。その少年は椅子に座ったまま前のめりになって自分のベッドに上半身だけをうつ伏せて眠っていた

「・・・コイツ・・・まさかずっと俺が寝てから俺のところにいたっつーのか？」

「zzzzzz・・・」

「・・・チツ」

ゴツンツ!!

「zzzz・・・痛あ!？」

「とつと俺の寝床から降りろクソが」

「あ…も、申し訳ありません…つい眠くなってしまったようで…」
「つたくよオ…」

「…あの、一方通行さん？」
「あアン？」

「先ほどは数々の失言、申し訳ありませんでした…一方通行さんの事情であり、思いであり、考えでありながら私はそこに土足で上がり込みすぎてしまいました…申し訳ありません…」

「…別にンなモン最初から聞こえてねエよ」
「それでも…申し訳ありません…」

垣根は一方通行に俯きながら謝罪の意思を示していた

「…そオ言えばまだ今日は体を動かしてなかったなア」
「…えっ？」

「気分転換に散歩すンぞ。別に夜に出歩くぐらいテメエだって慣れっこだろうが」

「は、はい！ぜひ！」
「分かったらとつとと行くぞ」

月明かりに照らされながらログハウスを出た二人は、秋の虫が鳴く幻想的な森の中へとゆっくり歩いて行った

第48話 月下の暗殺者

「月が綺麗ですね。一方通行さん」

「この場合死んでもいいのはテムエだよなア？本気でそういう意味を含んで言ってるんだったらぶっ殺すぞ」

一方通行なりに気を使ったのか、気まづくなってお互いの空気を交えるために二人はログハウスを出て、22層の森の夜道を散歩していた

「しかし、この道は普段からよく歩いてはいますが日の出ている時間ばかりなものですから、こう言った夜道の散歩というのも良いものですね一方通行さん」

「そおかよ」

「しかし、まるで肝試しのような不気味さがあるのも確かですね、どこかに幽霊さんでもいるんでしょうか」

「この世界にいる幽霊なンギ所詮アストラル系のモンスターだろオが。それに今のテムエのナリだと白光しすぎてテムエが幽霊に間違われンぞ」

「・・・細い身なりに白いという部分を見れば一方通行さんもそこまで違わないのでは？」

「本当にホストの権限なくなったら秒で殺すぞオマエ」

ガサガサツ……

「ところで、丁度外に出たわけですし丁度良いので夕食の材料を採取したり食材になりそうなモンスターを狩って帰りませんか？」

ガサガサツ……

「別に構わねエが、狩りは俺がやるから採取はオマエがやれ。採取オブリジェクトを一々探すのが面倒くせエ」

ガサガサガサガサツ……

「・・・一方通行さん」

「囲まれてやがるな」

「おや、既に気づいておいででしたか」

「舐めんな。リアルでもここでも生粋の悪党なのに変わりはない」

「なるほど…でも確か、一方通行さんは自分には反射があるからって索敵スキルはほとんど上げていませんでしたよね？どうやってお気づきに？」

「そんなんじゃないよ…こっちの世界も向こうの世界も大差ねえだけだ。人間の殺気ってのはなあ」

「まあ私の索敵スキルによれば、さしずめ人数は7人と言ったところでしょうか」

「ハッ、人数なんか今さら関係ねえよ。さてとオ…」

「まあ、少し目的の対象は変わってしまいました」

「狩りの始まりだなア（ですね）」

バツ！ババツ！！バババツ！！

一方通行と垣根の二人が臨戦体勢に入ると、闇夜の森の木陰からロープを被った怪しげな集団が飛び出して来た

「「死ねえええええ!!」」

「ひとまずは6人ですか…一方通行さん、左の3人は私がやります。右の3人をよろしくお願いします」

「人数分けたところで瞬殺なのは変わんねえけどなあ。ってかオマエこそ能力使って大丈夫なのかよ？システムの演算が少し遅れんじゃないのか？」

「平気ですよ。一方通行さんも言った通り、瞬殺です」

「それもそオカ」

「あ、カーソルの色は気にしなくても大丈夫ですよ。後で私がグリーンに戻しますから」

「お喋りもそこまでだ!!」

ロープ集団の1人が垣根へと手に持ったダガーで切りかかる。し

かし、その刃が垣根に届く事はない

ゴウツツツ!!!

「ぎやああああああ!!!?」

バリエイイン!!

垣根の背中の片側から3枚の純白の翼が現れた。その翼がただ一度羽ばたいただけでローブのプレイヤーのHPを全て削り切り、無数の光の欠片となつて散つた

「お、おい嘘だろ!!!?」

「すみませんがそちらの2人もすぐにこうなつてもらいます」
「?!?!?」

「おいそこの陰険ローブ3人、いちいち1人ずつ潰すのだりイから早いとこ全員まとめてかかつて来い」

「言われなくてもそうしてやるよお!」

「オラア!!」

「死ねえ!!」

一方通行の前に飛び出して来た3人が一斉に彼に飛びかかる。斧、槍、剣がそれぞれ一方通行に襲いかかる。しかし、それら全ては彼の前にある見えない壁に阻まれた

グシャアアアアア!!!

「なっ!?!」

「ぐえっ!?!」

「ぎやす!!」

「あばよオ」

バオオオオオオオオオツ!!!

3人の手が一方通行の反射によってその力をそのまま返され、武器と共に3人の腕がおかしな方向に歪曲した。そして一方通行の別れの言葉の後に見えたのは彼が左手を横に薙ぐ動作。その左手が起こした烈風が3人を襲い、HPが全損しその姿が光となって消えた

「おい垣根、こっちは終わったぞ」

「はい、こちらも終わりました」

「・・・おい、暗殺ごっこなら他所でやりやがれ、そこにいるあと1人。死なね工程度に殺してやるから素直に出て来い。じやなきやコイツらと同じ道辿ることになンぞ」

「・・・」

ザツザツザツ：

一方通行が一本の大木に向けて呼びかけると、その木の影から最後の1人となったローブを被った人間が出てきた

「さアて、面接と行こうかア？オマエはムカつくジジイとババアに人と話すときはマスクとローブを取れって教わらなかつたンですかア？」

「生憎だけど、そんな親はいなかつたわね」

「ハッハア！この後に及んでいい度胸だア！なら丁度いいやア：俺が教育してやるよオー！」

「お断りだね。だけどまさかお前らがカップルだとは思わなかつたわねえ。こんな夜更けにデートとは随分とロマンチストなんだなあ彼氏役の方は・・・なあ？第1位、第2位!?」

「・・・あア？」

「その呼び方を知っているという事は貴方は学園都市の人間：しかもそれが私達だと分かっているということは、限りなく暗部に精通している証拠に他ならない：一体何者ですか!?!そのローブを取って素顔を見せなさい!!」

「ああいいぜえ、お披露目というか：あまりにも美女だからって惚

れんじやねえぞ？悪いが私はホモと付き合う趣味は持ち合わせちゃいねんだ」

バサツ!!

そう言つて自分を美女と語る謎の人物はローブのフードを取り払い、その素顔を2人に見せた

「ハロー。第1位、第2位。学園都市序列第4位の超能力者『原子崩し』。暗部組織『アイテム』の麦野沈利だ」

第49話 『ドラゴン』

「なるほど…暗部に精通してるところか暗部の中でもさらに深いところろにいたようですね…」

「まあ今もやってることは変わんねえよ。殺人ギルド『ラフィンコフィン』のリーダー『POH』ってのも私のことだ」

「なるほど…では今私たちに向かつて来たのもラフィンコフィンのメンバー…ということですか」

「はっ、そういう事だ。どうだ第1位？さっきから何も言っただけえよ。うだが、驚きすぎて声も出ねえか？」

麦野が一方通行に聞くと、彼は一呼吸置き、首に片手を当てると関節をコキコキと鳴らしてからその口を開いた

「…誰？オマエ」

「…」

「…」

「…なあ、誰なn…」

「はあああああああああ!!？」

「うっせエないきなり…今は音遮断してねエンだからもつと小せエ声で話せよオバキン」

「おま、お前だつて暗部にいただろうが!?なんで知らねえんだよ!?言つとくけど暗部だけじゃなくてアンタと同じレベル5だぞ!?顔ぐらい見た事あんだろ!？」

「…ああ、そーいや何か一回土御門の野郎が写真とで見せてきた事があったっけなア…実写で見るのは初めてだけだなア」

「実写とか言っただけじゃねえよ!こちとら映画じゃねえんだぞ!？」

「この世界を実写と表現していいかは果たして謎ですけどね…」

「うっせえな!ぶつ殺すぞ!」

「…でエ?その第4位様も俺らにケンカ売るつもりかア?言つとく

がこの状況でオマエに勝ち目はねエと思うぜエ？」

「私も同意見ですが、どう致しますか？ 麦野さん」

「ああ、ああ。分かっているっつーの、さっきの見てただけでも分かった。いつもならムカついて今すぐにでも殺してえところだが、今の私じゃアンタらには勝てねーよ」

「往生際が良くもいいことだなア。その度量を評価してHP―10000で勘弁してやんよ」

「それがそうは行かないのよ。アンタらはこれから私と一緒に行動を共にしてもらおうわ」

「あア？ 何を根拠にんなことぬかしてやがんだ？」

「これを見な、今朝私のとこに届いたメールだ」

そう言うとき麦野は自分のメニューを開きメールを開くと、そのウィンドウを一方通行と垣根に見せた

「・・・これは…要するに内容としては一方通行さんの暗殺…と言う事ですか？」

「そういうことだ。でもまさかその第1位のすぐそばに第2位までいるとは大誤算だ。とりあえず部下だけ特攻させて実力を見たが無理そうだって分かったわよ」

「・・・人の命を軽く見るところは相変わらずですね」

「テメエらだって似たようなもんだろ。それより現実世界で私が見聞きして知った第2位と大分差があるようだがどうなってるんだ？」

「色々あったんですよ」

「あア、こいつの場合は色々ありすぎて説明すんのが一々面倒だ」

「あつそ…まあいいわ。とりあえず本題に移るわ」

そう言うとき麦野はメールのウィンドウを2、3回指で小突く

「この暗殺依頼のメールの差し出し人は不明だ。名前も名乗らなかつた。だがコイツは間違いなく私の素性とアンタの素性も知ってる上

でメールしてきたハズだ」

「・・・つまりこのメールの差し出し人は・・・」

「学園都市の人間・・・それも上層に関わる方の人間か・・・恐らく統括理事会レベルの」

「ああ。アンタらもどうせこの世界に来たのは何かしらの命令なんだろう？」

「『も』ってこたアオマエもか？」

「まあな。ナーヴギアとSAOの発売日にアジトにその二つと手紙が入ってた荷物が届きやがった。手紙にはただ一言しか書いてなかったがな」

「『このゲームを一度プレイしろ。それが今回の仕事だ』ってな。そしてたらまんまと嵌められた。って話だ」

「なるほど・・・招かれざるして招かれた・・・と言う事ですね」

「だから私は元から考えてたのさ。『この世界に私を送り込んだ誰かしらがこの世界に跡を残してるハズだ』ってな。だったら話は簡単だ。100層までクリアするなんつー目標は二の次だ。100000人のプレイヤーの中にこのゲームの真の目的を知ってる誰かがいるか、その情報、データの在り拠がこの世界のどっかにある」

「だからオマエはそれを目的として標的をプレイヤーに絞った殺人ギルドを結成した。って事か」

「そう。人を殺せば人の依頼、そして人の情報が入る。それがどんな派生すればいつか何かに辿り着く。それに賭けた」

「そして今まさに辿り着いた。というわけですね？」

「ああ、このメールの発信者こそがその鍵だと私は思ってる」

「それで、ソイツを探して殺すのに協力しろって事かア？」

「そうよ。当然やるでしょ？アイツらの思惑にハマりっぱなしで良いのかにゃくん？第1位様？」

「・・・面白エ」

「話は決まったわね。ならまずはメールの差出人を探さないと・・・」

「垣根、出来るか？」

「もちろんです、一方通行さん」

「なら早速やれ」

「はい」

「な、なんだお前ら主語も無しに会話しやがって…マジでもう言葉に
しなくても通じ合ってるとかそういう関係なわけ？」

「失礼ですが麦野さん。そのメールを私に転送してもらえませんか？
こちらが私のIDです」

「ああ？アンタに？…まあ別に転送ぐらいなら構わないけど本当に
メッセージ以外なにも載ってないから差出人は分かんないわよ？」

そう言いながら麦野はウインドウを操作し、件のメールを垣根のI
Dにメールを転送した

「いいんですよ、もうこれで全部分かりますから」

すると垣根はメールとは別のウインドウを何枚も開き、それらを同
時に操作し始めた

ピッピッピッピッピッピッ…

「アクセスコード：D a r k M a t t e r。システム始動。探知プ
ログラム…起動。SAO内全メールストレージの探知、開始します」
「…なあ第1位、第2位は一体何なんだ？あれもアイツの能力の内
か？」

「アイツはホストなんだよ」

「…はあ？」

「俺もその全貌は未だに分からねえが、SAOの世界を構築するコン
ピューターの一部のデータの一括管理、制御、演算がヤツの脳を介し
て行われてる」

「…なるほど、ホストってのはホストコンピュータってことか」

「だが、実際には情報量は一部どころじゃねエ。ヤツの管理するデー
タに少しでも触れたり、アクセスした履歴さえあればその情報を元手
に辿ることが出来る。まあ分かりやすく言えば逆探知みてエなもの

だ」

「あんたも大概すごいやつと一緒に生活してたわね」

「難癖は数え切れねエよ。まあだからアイツにかかりやメールの差出人の逆探ぐらい朝飯前だろ。詰まる所、電子のやり取りであるメールは必ずこの世界のコンピュータを一度は通る。ならその履歴を辿れば…」

「見つけました。後は辿るだけです」

「ほら、本人もあア言ってるだろ？」

「こりや捲るわね…ウチのギルドにぜひ欲しい…あつとごめん、もう第1位のモノだったわね」

「マジでやめる気色悪イ」

「メールを差し出したサーバー、及びプレイヤーを発見しました！」

「よくやった。ンで、結果は？」

「サーバーは私という存在の構造と似通っています。まず間違いなく学園都市の差し金でしょう」

「やっぱりね…」

「そして、差出人は…ツ?!?!」

垣根は自分が探し出したメールの差出人のデータの名前を見るなり、その白い顔からさらに血の気が引いていったような表情をした

「?おい、どうした垣根、一体何があつた？」

「…『ドラゴン』…」

「ドラゴン?んなもんこの世界じゃちっとも珍しくないじゃない」

「ちっ、違うんです…この『ドラゴン』というのは…」

「ああ?何だつてんださっさと答えろ垣根」

「ある日、SAOの膨大なデータ量の中から、この名を見つけました。しかし、この世界のホストを務める私でもその詳細を知ることが許されなかった…学園都市の最重要機密…もはや名前だけでも知っていれば良い方です…恐らくその詳細を知り得るのは統括理事会クラス

の最高幹部のみ……」

「!! やっぱり統括理事会が絡んでやがったか……!」

「もはや誰かを指す名前なのか、作戦コードなのか、組織の名前なのかすらも分かりませんが、これだけは言えます……」

「学園都市が隠す真相の謎を紐解く存在であり……このSAOという世界の……根源的な何かに関わっている物であるということに間違いはありません」

「この世界の根源だア？」

『左様』

その瞬間、一方通行達の背後に新たな月夜を照らす使者が舞い降りた

第50話 エイワス

金色の長い髪、光り輝く長身と、その身体を包む白い装束。女性のような外見でありながら、その頭上にはまるで輪廻を象徴しているが如く回る輪があった。喜怒哀楽の全てが読み取れる表情であり、それでいて人の感情とは明らかに異なる物を根幹に秘めたフラットな顔つき。そう、それはまるで…

「……天、使…?」

ソレを見た麦野が無意識の内に呟いていた。そして、その視界が一瞬で闇に覆われた

ドサツ……

「?!麦野さん!!」

垣根が倒れた麦野を抱き抱えるが返事はない。目の前の天使によつて完全に意識を奪われていた

「気絶させたただけだ。今の彼女ではここに在る資格すらない」

「……あん時の……」

一方通行はある物を思い浮かべていた。9月30日の学園都市の中で光り輝き渦巻いていた翼。『天使』とでも言うべきもの。目の前に立っていたそれはまさにその時見たものと酷似していた

『『ビューズIIカザキリ』ではない。あれはそもそも、私を形成する為に用いられた、単なる製造ラインに過ぎない』

「……『ドラゴン』か」

一方通行は直感でそう感じ口を開いた。目の前にいるヒトの形をした物に向けて呟くように

「ふむ、その呼び名も決して間違いではない。『天使』という記号にも対応はしている。だが、私という存在は既存の聖書に記述される天使とは少し概念が異なる。もはや『この世界』において私という存在の法則性も異なるようだ…よって私という存在をより一層的確に表現するのなら、このような単語を選ぶべきであろう」

「コードネーム『ドラゴン』改め、かつてクロウリーと呼ばれた変わり者の魔術師に、必要な知識を必要な分だけ授けた者……」
「『エイワス』と」

ソレはゆつくりと告げた

「…でエ？そのエイワスが俺らに何の用だ？俺に何の恨みがあつて殺しを差し向けた？」

「そうだな…君に一定の価値があると認め、それによつて少し興味が湧いたから…だよ」

「悪いが、俺はテメエに興味なんざねエ」

「くつくつくつ、分かつているさ私とてここに来たのは君が本題ではない。君とはいずれ、そう遠くないいつかに出会う手筈になっていたからね…今回、元々が不鮮明な存在である私がこうして現出し、ここを訪れた真の目的は……」

「君と『彼』を引き剥がす為さ……」

バチツ!!バチチツ!ヂチツ!

「!?なっ!…xにq…がっ!f?」

エイワスが言い終わると垣根の体がブラウン管テレビの砂嵐のように音を立てて少しずつ崩れ、そして言葉にノイズが走り始めた

「ごっ……ぼ、ガアアアアアアあああああああああ!??!?!?」

爆風が起こった後、「異様な力」が一方通行の上半身を斜め一直線に貫いた。単純な金色とは違い、白の芯を含むそれは青ざめた輝きを放つプラチナの翼だった。エイワスの翼は一方通行の黒翼を一撃で根元から消し飛ばし、続く二撃目で一方通行ごと完全に分断した

「まだまだ未熟……完全とは程遠いな。やはり寄り道とはよくないものだ。アレイスターも回りくどい方法ばかりを取る。その結果がこれか……」

「く、クソが……ガハッ!」

一方通行のHPはもはや0に等しかった。だがそれはエイワスが狙ってそうしたのだろう。ここで死なれるのは本意ではない、だから彼をギリギリの所で生かしたのだった

「……さて、そろそろ私は行こう。次に会えるのはそう遠くないか……その時になれば私がこの世界に存在する理由、私は何たるかを全て知ることになる。それではまた会おう……君にはまだ可能性がある。その可能性が何かまでは語らないがね……」

「まっ……待ちやがれッ!!!」

シユンツ……とエイワスは一瞬でその姿を消した。去り際のその表情はまるで何かを楽しむようっていて、彼らを見下すような余裕の表情だった

「クソがああああああああああああああああつっつ!!!」

一方通行が月の下で叫ぶ。誰に届くわけでもなく、ただ己の無力さを痛感し、ただ叫んだ

一方通行の叫びが消えた。1年という月日を共にした彼に、自分の声は、手は、届かなかった。もはやもう一度話しかけることも、もう一度伸ばすことも、出来なかつた。この世界で最も多くの時間を共にした彼の最期は、今まで経験したどんな別れよりも、残る物がなかつた。

第51話 決意

「っ…うん…ん…?」

「…よオ、目エ覚めたか?」

ずっと気絶していた麦野が目を覚ました場所は最後に記憶のある闇夜の森ではなく、フカフカの布団を掛けられたベッドの上だった。まだ醒めきっていない頭の中を何とか起こし周囲を見渡す。するともう1人いるべきはずの者がいないことに気づく

「…第1位だけか」

「あア」

「ここは?」

「俺らの家『だった』トコだ」

「そうか…そりや残念だったな」

「口先だけだったら何とでも言えんだろ。特にオマエの場合はな」

「…で?あのクソ天使は何だったわけ?」

「…あれが『ドラゴン』だ」

「なるほど…で、そのドラゴン天使は倒せたわけ?」

「この浮かねエテンション見てもそう思うのかよテムエは」

「それもそうか」

「全く歯が立たなかつた…次元が違エつてなアあアいうの言うンだつてのがよく分かつた…その気になりや一瞬で俺を殺せたのにも関わらず、手加減されて生かされた…ただボコボコにされるならともかく、ここまでコケにされたのは初めてだ…ムカつくぜ…」

「…まあ相手が悪かつたんだろ。垣根が言つてた通りの存在だったなら、ホストだった垣根も消されて当然だし、まともに相対出来るはずもねえ。私に関しちや見ただけで気絶したんだしな」

「実際こんなものさ…学園都市最強つて言つてもそりや能力者の中だけの話だ…どこの馬の骨とも知れねエ三下に伸されるわ、ただの一端

の研究者の銃弾だろうが拳だつて喰らう…だが、それでもな」

一方通行は何かを決意したように項垂れた頭を上げ、その拳を握り締めた

「守りてエモンだつてある、壊されたくねエモンがある。その為だつたら最強なんて肩書きはいくらでも捨ててやるさ。だが何を引き換えにしても徹底的に殺す。ぶつ壊す。その為の能力だ、その為のこつから先だ」

「…へえ、あの暗闇にいたアンタでも、そんな顔が出来るとはね」

「…第4位、頼みがある」

「何よ、改まつて」

「俺をオマエのギルドに入れろ」

「はあ？」

「オマエが自分で言つたら、この世界の俺らの敵はモンスターじゃねエ。プレイヤーを含めたこの世界そのものだ。だつたらテムエらのもとに身を置くのが1番の近道になンだろオが」

「…へえ…」

「どオなんだ？」

「…まさかアンタと本格的に組むことになるとは思ひもしなかつたわ」

「決まりだな。だが言つとが下になるつもりはねエし、目的を達したらとつと出て行く。もし組織の中で俺に逆らうヤツがいたら…」

「…いたら？」

「なりふり構わず全員殺す」

「…ハッ、それでいんだよ。元々ウチの組織はそういう組織だ」

「俺が関わるだけで増える恨みも敵も段違いだぞ」

「あら？此の期に及んで他人の心配？優しいのね。でも生憎だけど、んなもん怖がつてたら人なんざどこでも殺せねえよ」

「言つとくが俺に逆らつて殺されんのはテムエも例外じゃねエぞ」

「何よ。今さらながらまるで入れるなどでも言いたげな口調ばかり

じやなくい？もしかして怖気づいちゃったかにゃくん？」

「死ぬまで言ってる」

「はいはい、肝に命じておくよ。とりあえずは歓迎してやるよ。殺人ギルド『ラフィンコフィン』へようこそ」

スツ…

「よろしくなア、せめて解散まで互いが死なねエことを祈ってやるよ」
ガシツ！

（…精々首を洗って待ってやがれ学園都市、エイワス、そしてアレイスター…。今はテムエらの思い通りになってるってのも癪だが、いつかはそれも全部ぶっ潰す。だからここで、もオ一度だけ誓ってやる…）

こうして彼らは出会い、同じギルドの仲間となった。彼ら以外の誰もが知り得ない物語はこれで終わり、そして始まる。学園都市の裏側で起こっていた血みどろの戦いは、奇しくもこのアインクラッドで…

（最も救いから遠い方法で何もかもを血みどろに救ってやるよ）

もう一度始まりを告げたのだった

第52話 暴露

「大変だ大変だ大変だ大変だ大変だ大変だ大変だ大変だ大変だ〜
!!!」

SAOがデスゲームと化してから2年以上が経過した。ここはア
インクラッド第50層主街区アルゲード。全100層あるアインク
ラッドの丁度折り返し地点であるこの層も最前線だったのはもう半
年以上も前のこと。街は人が行き交い、様々な物が溢れる豊かな街。
そんな街の喧騒を無視してある店を目指して一目散に街を駆け抜け
る者が1人。SAOでは確かな情報屋として多くのプレイヤーから
信頼を寄せる「鼠のアルゴ」だ。そんな彼女は目的地の店に着いた瞬
間、その入り口のドアを勢い良く開け放った

バァン!!!

「大変だゾ!上やん!!!」

「いらっしやい!今日は何の用だい!」

「チツ!エギルだけかクソツ!!」

「そりゃあねえだろ!」

「この際エギルでもいい!上やんがどこにいるか知らないカ!?情報を
くれるなら金を払ってやってもいい!」

「お、マジか?」

「知ってるんだナ!?教えろ!」

「じゃあ500コルで、先払い」

「チツ!流石商人同士侮れないナ!ほら!さあ早く教えろ!」

「まいど!それで、上やんならもうそろそろこの店に来るぞ」

「なっ!?何い〜!?詐欺だ詐欺!私の500コル返せ!」

「やなこった。お?ほら、そうしているうちにお出ましたぞ」

「ムッ!」

「おーっすエギルー!...と...アルゴ?珍しいな、こんなゴミ溜めに顔

出すなんて」

「どこがゴミ溜めだ!？」

「そんなことより上やん! 大変なんだゾ 大変なんだゾ 大変なんだゾ
!!」

「落ちて落ち着け、インテックスさんかお前は。で、どした?」

「み、みこっちゃんガ! みこっちゃんが新たにユニークスキルを取得
したって公言したんだゾ!!」

「!!!」

アルゴが口にした話を聞いた途端、上条とエギルは驚愕の表情を見
せた

「おく…ミコトも遂にユニークスキル持ちか! 流石は血盟騎士団の副
団長、『閃光のミコト』様ってどこか?」

そんな呑気なことを言うエギルとは裏腹に上条は血相を変えてア
ルゴの肩に勢いよく掴みかかった

「お、おいアルゴ!! お前それ本当なのか!?! す、スキルの名前! そのスキ
ルの名前なんだ!?!」

「い、痛い痛い上やん! 一応オネーサンだって女の子なんだからもつ
と優しくしてくれヨー!」

「あ…す、すまん…そ、それでそのスキルの名前は…!?!」

「た、確かスキルの名前は…れ、レース…?」

「ツ!? レールガン! 『超電磁砲』なのか!?!」

「あ、ああそれダ! 『超電磁砲』! …あれ? でもなんで上やんがそれ
知ってるんだ?」

「ちきしょう! 何考えてんだ美琴のヤツ!」

勢いの落ちない口調のまま上条はメニューを開き、フレンド欄から
美琴の現在地を調べる

「えつとここは…血盟騎士団の本部か！転移！グランザム！」

シユン！

「あーちよー上やん情報料！…行っちゃった…でも知ってたからお金取れないのか？」

「お、おい上やん！『ラグーラビットの肉』売ってくれるんじゃないの？」
k…行っちゃった…」

良いのか悪いのか、上条当麻は今日も人気者である事にあまり変わりはないようだ

—————

第55層 グランザム 血盟騎士団本部

「美琴に会いたんですけど！通してもらってもいいですか!？」

「ただ今、ミコト様は普段よりも多くの来客がある為、ご本人の許可を得ているかそういった証拠がない限りはお通し出来ません」

「上やんだ！俺の名前で確認とれば分かるハズだ！」

「…ご本人に確認を取りますので少々お待ち下さい」

上条は55層にある血盟騎士団本部に来るなり、受付嬢にエギルの店の時の勢いそのままに問いただし、上条の切羽詰まった顔を一瞥すると、本人に確認を取る為に受付のカウンターに設置されているギルド内直通電話で美琴に連絡を取った

「もしもし失礼致しますミコト様。上やんと名乗るお方が面会を希望しておられます。いかが致しますでしょうか？…はい…はい…承知いたしました。では失礼します」

「上やんさん、ミコト様に確認が取れました。お通ししてよろしいそうです。ミコト様のお部屋はそちらを真っ直ぐに行って右手にあり

ます突き当たりにございます」

「ありがとうございますー」

受付嬢の言葉を聞くなり、上条は美琴の部屋へと駆け足で向かい、美琴の部屋にたどり着くとその部屋の戸をノックした

コンコン！

くどうぞー

ガチャ！バタン！

「おい美琴！お前能力のこと打ち明けちゃまっていいのかよ!?今まで隠してきたんだろ!」

「もー何よ。珍しくアンタの方から来てくれたと思ったたらアンタまでスキルの話?それ話してからホームの方にまで情報屋とかが押しかけて来て大変なんだから。今お茶煎れるからとりあえずそこ座んなさいよ」

「んな呑気なこと言ってる場合か!」

「いいから早く座れこのバカ!!」

「は、はいいいい!!!」

夫婦喧嘩もとい口喧嘩の勝敗は一瞬にして決した。結果は美琴の圧勝である。それを機にようやく上条は落ち着きを取り戻し、平常心に戻り、美琴の部屋にある応接の為のフカフカのソファーに腰掛けた

「うわ、すっげえ…フカフカだ…」

「はい、紅茶」

「あ、スマン」

美琴が差し出した紅茶を飲む上条。豊かな香りが鼻腔をくすぐり、スツキリとした口当たりの中に味わい深い紅茶本来のkokoroが口の中に広が…

「熱つつう!?何だこれ熱っ!」

「あら?そうかしら?同じポットで注いだ私の紅茶は普通の温度なのに...バグかしら?」

「お前絶対わざとやってるだろ!」

「さあ?何のことやら?」

「かあ!ムカつく!!」

「あつはつは!...で?何で今さらになって能力公開したのか?って感じかしら?」

「そうだよ!何で今さら!?詳しくは知らねえけどやっぱ知られたくねえもんじゃなかったのか!」

「それがもうそうも言ってるんじゃないとこまで来てんのよ。周りの人から嫉妬の目で見られるとかそういうこと抜きにしないと、正直こつから先はなおさらキツイわよ」

「...へ?」

「...アンタはこの前の74層のボス攻略の時いなかったわね。ボスの名前は『The Gloom Eyes』。両手剣を持ったデカイ悪魔型のモンスターだったわ。クラインさん達のギルドと軍の人と攻略に当たったんだけど、そこは結晶無効化エリアだったのよ」

「なっ!?ぼつ、ボス部屋がまるごと結晶無効化エリアなのか!」

「そうよ。その時そこにいる人達も少し覗いて様子見るくらい感覚だったから面食らったなんてもんじゃないわ。人数も満足にいなかったからかなり苦戦したわ。だから使ったのよ、多分あのままだったら死者も出たわ」

「そ、そんなに強かったのか...」

「まあ正直前々から火力不足は痛感してたわ。レベルを上げても、レイピアの性能を上げてても、ソードスキルを鍛えても現状はあまり変わらない。もう出し惜しみしてる暇はないわ。もはや能力を使ってもボスは中々倒れなかった。最後なんかレイピア一本まるごと犠牲にした超電磁砲まで撃ったのよ!」

「そ、そうか...」

「だからもう素直に公開したわ。少し前から気づかない内にスキル項目の中に追加されてた。ってね。嘘は言っていないでしょ?」

「お前…その少し前ってどうせ最初っからだろ……」

「まあそこは置いといて。クラインさんも何となく分かってくれたからアンタと同じようにユニークスキルとして一介の情報屋に話した。って訳よ」

「なるほどな…まあ心強いよ。これからはお前も一切の加減がない全力で戦えるってんだからな!」

「心強いかどうかはまだ分かんないわよ。確かに火力不足は補えたけど、ボスが強いのは変わりない訳だし。まあボスと同じくらい規格外なのは団長もだけどね」

「ああ…あの人も中々すごいよな。アレは俺らみたいな現実の能力じゃなくて、本当にこの世界オリジナルのユニークスキルなんだろうけど」

「団長が扱う攻防自在のユニークスキル『神聖剣』。剣術もさることながら圧倒的なのはあの防御力。ギルドの中ではおろか、全プレイヤーの中で団長のHPバーが緑を跨いだところを見たことがある人はいないとまで言われてるからね」

「あの人の盾は俺と違って防御専門の盾だからな…それに引き換え俺のスキルは右手だけ…とほほ…」

「そんなこと言って、全スキルを無効化出来るだけアンタの右手だって重宝してるわよ。純粹な攻撃で押してくる敵には意味ないけど」

「それに、敵でも人でもソードスキルは打ち消してもその剣は消せねえからダメージはどっちにしろ受けるからな…弱点だらけなのは変わんねえよ…」

コンコン!

2人の会話を遮るように美琴のドアをノックする音が部屋に響いた

「誰かしら?…はい!どちら様ですか?」

へ私だミコト君。失礼だが上げてもらってもいいかね？上やん君も来ているんだろう？

「だ、団長!? すいません今開けます!」

ガチャ!

「どうぞ!」

「どうも失礼するよ。やあ、こうして攻略会議以外で顔を合わせるのは初めてだったかな? 上やん君」

「・・・ヒースクリフさん・・・」

突如として2人の前に現れたのはSAO最強プレイヤーの呼び声高い、最強ギルド血盟騎士団の団長「ヒースクリフ」だった

第53話 勧誘

「こちらへおかけ下さい」

「ああ悪いね、失礼するよ」

美琴の部屋を訪れたヒースクリフは上条当麻が座る向かい側のソファーに座った

「今紅茶をお淹れします」

「あーいや気にしないでくれたまえ…いや、やはり貰っておこうかな。状況によつては話が長引きそうだ」

「……」

そう言いながらヒースクリフは上条の顔を横目で見た

「どうぞ」

「うむ、悪いね。ありがとう」

スーツと飲む音を立てないように静かに紅茶を口にするヒースクリフ。そしてカップを置き直すとゆつたりとした口調で話し始めた

「さて、上やん君。物は相談なんだがいいかね？」

「は、はあ…」

「ああ、ミコト君も気にせず座りたまえ。そんなところでの立ち話もなんだろう、上やん君の横でも私の隣でもどちらでも」

「いえ、私はこれで平気ですのでご心配なく」

「そうか、悪いね。さて…話を戻そうか上やん君」

「はい。何ですか？一体」

「血盟騎士団に入ってみる気はないかね？」

「……へ？」

ヒースクリフのあまりにも突拍子な提案につい素っ頓狂な声を上げてしまう美琴。そしてその提案に対して上条は一切の迷いなく告げた

「ありません」

「即答!？」

「ははは…そこまで明確に拒絶されると堪えるな…理由は何かあるのかな？」

「そちらこそ、急に俺を誘った理由はなんですか？」

「何、単純に優秀な仲間が欲しいだけさ。私の神聖剣に新しくユニークスキルを得たミコト君、そして上やん君の幻想殺しが揃えば血盟騎士団は名実共に最強ギルドだ。どうかね？ウチのギルドならやり方はいくらでもあるが…」

「いや、何もユニークスキルがあれば強いって訳じゃないでしょう？そもそも俺の幻想殺しは弱点だらけですし、ギルドやパーティーでやることにこだわりを感じないんで…唯一死ぬ確率がグンと上がるボス攻略でさえも挑むのは何人かのレイドな訳で…」

「だが、ミコト君は今回それでも苦戦をしいられ、少し前に取得し隠していたユニークスキルを使わざるを得ないまでに至った。違うかね？」

「………」

「上やん君。事態は我々が想像しているよりも遙かに良くない。今はより多くの戦力が必要なのだよ。確かに前線に出ることが増えることで危険は増えるかも知れないが、君が前線に出ることで救える人が増えるというのもまた事実だと思っただが」

「……なら一つ試してみませんか？」

「試す？何をだね？」

「俺とデュエルしませんか？」

「なっ!？」

上条の提案に思わず美琴は仰天して声を上げた

「……ほお?」

「条件は無論1対1。団長と俺の『半減決着モード』のデュエルで」
「はあ!?!」

「……理由を尋ねてもいいかね?」

「いえ、簡単なことですよ。もし俺がギルドに入ったとしたら、前線に出る事が増えた時に俺を守ってくれるのは血盟騎士団の人達ですよ
ね? だったら勿論のことその人達は俺より強くないと困る。それを
試す為のデュエルです」

「なるほど……ではなぜ半減決着モードでのデュエルを望むのかな?」

「初撃決着じゃ単純に実力を見極め切れないと思っただからですよ」

「ふむ……だがデュエルまでするのに上やん君が勝った時の利益がない
と思うのだが?」

「その時は、団長は俺からの『ある質問』について答えてもらいます」

「し、質問……? ちよつとアンタ、質問って何よ? 別にそんなの今すれば
いいじゃない」

「いやいや美琴君、それこそ野暮というものだよ。せつかく上やん君
の方からこうして対等に何かを賭けて戦える条件を提示してくれて
いるんだ。私は甘んじてそれを受け入れる所存だよ」

「そりゃありがたい限りです。じゃあデュエルの場所は どうしますか
?」

「最前線の75層の主街区『コリニア』の転移門前に大きめのコロシア
ムがある。そこならどうかかな?」

「いいですよ」

「では今から1時間後、そこで待っているよ」

「わかりました。それじゃ」

そう言い残すと上条は美琴の煎れた紅茶もそのままに腰掛けてい
たソファーから立ち上がった

「ああ、楽しもうじやないか。この一度きりの真剣勝負を」

「ちよーちよつと待ちなさいよアンタ！」

「じゃーなー美琴、紅茶美味しかったぞー。熱かったけどー」

「コラー!!」

ガチャ、バタン

そう言うとお上条は部屋を出て行き、美琴は上条を目の敵のように見て齒ぎしりした。そしてヒースクリフは何故かその様子を見ながら不敵に笑っていた

第54話 決闘

ワアアアアアアアアアア!!!

「うっひょー、すげー人だな…」

「すまなかつたな上やん君。まさかコロシウムでやるというだけでこんな事になっているとは…まあNPCが何人が混ざってはいるんだろうが、知らなかったよ」

ここ75層の主街区コリニアは古代ローマ風の構造をした街になつており、街の中には豪華なコロシウムまで建設されていた。そのコロシウムで今まさに、数え切れないほどの観客の声援の中心にいる者が2人いた

「まあ、それを見れるだけの価値があるってことでしよう？神聖剣」

「いや？案外目当ては君の方かも知れないのではないかな？幻想殺し」

「そりやどーも…後できちんとギャラをもらいますのことよ？」

「その心配はないさ。君は試合後は我がギルドの団員だ。任務扱いにさせてもらおうよ」

「・・・そりやなおさら本気でやらないとだな…」

「はははっ…さて、ではそろそろ始めようか」

そう言つてヒースクリフは自分の腕を下へと振つてメニュー画面を開き、デュエル申請を上条に送る。上条は自分の目の前に現れたデュエル申請のウインドウの「半減決着モード」を選択すると、デュエル開始までの60秒のカウントダウンが始まった。そして、そんな2人の勇姿をフィールドの入場口から見守る者がまた2人…

「ミコト様はこの戦い、どちらが勝利すると予想されますか？」

「そうね…あなたはと思う？クラディールさん」

フィールドの入場口の壁に寄りかかりながら血盟騎士団副団長として戦いを見守る美琴と、その美琴の護衛を務める全体的に痩せ細った血盟騎士騎士団のプレイヤー「クラディール」の2人である

「そうですね…おそらく単純な筋力と敏捷ならば上やんさんに圧倒的な分がありますが…なにせ彼のユニークスキルはああいった代物ですし、それが団長の防御を掻い潜れるかどうかでしょうな」

「…そうね」

「？」

(…アイツの本当の力はあんな右手なんて外面じゃない…「アレ」を感じたのは過去に大覇星祭の時と、十字の丘の一方通行との戦いの二回。あの右手の奥に隠されてる見えない「何か」がアイツの真の能力…方が一にも団長がアイツのHPを半分削る前に右腕を切り落としたりしなきゃいいけど…)

「7…6…5…4…」

「……………」

「……………」

カウントダウンが0に近づくにつれ上条とヒースクリフの顔が強張っていき互いを睨み合う。上条当麻は左手に盾を備え右手で拳を握る。一方のヒースクリフは十字盾に通していた剣を抜いた。そして、鬨いの火蓋が切って落とされた

「3…2…1…Start！」

「ッ!!!」

ダダダダダッ!!

「フッ!!」

バゴンッ!!!

「ッ!!俺の盾より全然硬いな…」

「君の方こそ、私の盾を素手でここまで押し込んだのは君が初めてさ」

開始の合図と共に上条がヒースクリフの懐へと駆け出し距離を詰めた。そしてその必殺の右手の拳を叩き込むが、それは相手の最大の長所である盾に阻まれた

「もう一度…!」

ダッ!!

(・・・パンチ特攻の一辺倒か…それでは私の盾は崩せんぞ)

ダンッ!ガッ!バンッ!!

「ほっ!」

「なっ!」

ヒースクリフがパンチの衝撃に備え構えた十字盾の前で上条が跳躍した。すると十字盾の角を足場にしてもう一度高く跳躍し、ヒースクリフの頭上を取った

「パンチだけが俺の体術じゃねえんだぜ!」

バキッ!

「づッ!」

上条当麻の踵落としがヒースクリフの肩に直撃した。彼が身に纏う真紅の鎧がガチガチと悲鳴をあげ、HPが減少を見せた

「まだまだあ!!」

ガンッ!ガンガンッ!ガンッ!

「ふむ、素晴らしい連打だ。だが…」

ザンッ!

「!?クッ…!」

「やはり、私の盾を崩すには至らないな」

着地後の上条の怒涛の右手の連打を全て盾で防ぐと、ヒースクリフがお返しとばかりに肩から斜めに剣で上条の体を切り裂いた

「では今度は私の剣術を披露するのでしょうか」

ブオンツ！ギンギンツ！キキキン！！

「おっと、よっ。ほっ」

上条は自分に襲いかかるヒースクリフの流れるように繰り出される連続斬撃を冷静に一太刀ずつ盾で捌いた

「ほお、君も中々良い盾を持っているじゃないか」

「お世辞ならいりません…よっ！！」

ズシヤア！！

「?!?!」

「失礼ですが、足下がお留守でございますのことよ?」

上条が繰り出したのは足払い。何とも古典的な格闘術だが、この世界ではそもそも純粋な体術を使うのは一部例外のモンスターを含め無論、上条当麻のみである。つまり、ほとんどのプレイヤーは足場に気を配ることはない。上条の策略で見事にヒースクリフの体は宙を泳ぎ、それは確かな隙へと変わる

「ぐおっ!?!」

「どおりやああああっ!!!」

ドゴツ!!ゴツシヤアアア!!!

「ぐはっ!?!」

体勢を崩し宙を泳ぐヒースクリフの顔面を上条の右手が確実に捉え、全力で地面へと叩き伏せる。上条の全力の右拳を受けたヒースク

リフのHPはガリガリと削れていき、あとほんの少いで半分かというところで止まる

「ヤバイ!!マトモに入ったわ!」

「あ、あと軽く一撃でももらえば団長の負けです!!」

バツ!

「ここだあっ!!」

「ツツ…!!」

ドゴツ!!

(ツ!?盾で直接!?)

「ぐふあっ!?!」

ズシヤア!

倒れたヒースクリフに上条が飛びかかるが、ヒースクリフが上条の身体ごと盾の縁で押し退けた。その圧力と鈍い衝撃に押し負け、上条は軽く後ずさりした

「ぜあっ!!」

「あぶねっ!?!」

ギンギンツギンツギンツ!

ヒースクリフが立ち上ったのとほぼ同時に、上条を再びその剣が連続攻撃を見舞い、それを上条が盾で防いだ

ギンツ!ギンギンギンツ!

(くそっ!守ってばかりじゃ勝てねえ!どっかで隙を突いて反撃を…!)

「甘いっ!!」

カキインツ!!

(なっ!?!切り上げ!?!ヤッベ!!)

「やりましたねミコト様。終わってみれば団長の完勝です」

「……」

「……ミコト様？」

「あ、いや……なんでもないわ……」

（本当にアイツの方が遅かったのかしら……ていうかむしろあの瞬間は早い遅いじゃない……もしかして団長のHPバーは……「減っていない」？）

「はあく……負けちまったか……」

上条は深くため息を吐きながら膝に手をつけて立ち上がり、尻に付いた土埃を払って盾を背負い直した。そしてヒースクリフは剣を十字盾と腕の間に納め、上条の方へ歩み寄った

「いや～上やん君、久々の団員以外とのデュエルだったが本当に良い勝負だったよ。あ、すまない訂正しよう。もう君はこの瞬間から血盟騎士団のメンバーだったな。だが最高の勝負だった事に変わりはない、ありがとう」

「へっ、ほんと良い性格してるぜ……ああ、俺としても良い勝負だったよ」

「改めて、血盟騎士団へようこそ。全ての団員に代わってここで歓迎するでしょう。上やん君」

そう言つてヒースクリフは上条の前に右手を差し出し、握手を求め
る

「……ああ」

ギョッ！

上条は差し出された右手を取り、固く握手を交わした

「・・・だけど、ヒースクリフさん。その歓迎は残念だけど受け取ることは出来ないな」

「・・・なに？」

「勢力は手元に集中させておいて自分は高みの見物決めこもうって・・・
そいつは流石におこがましすぎると思いやしないか？ヒースクリフさん・・・いや・・・」

『『茅場 晶彦』』

次の瞬間、真紅の鎧を緑の閃光と強烈な爆風が襲った

第55話 証明

「今だッ！麦野！一方通行ッ！」

「ッ!？」

ズドオオオッ！ビシャアアアン!!

上条がその名を叫ぶと、ヒースクリフを緑色に輝く光線と凄まじい爆風が襲うが、それはヒースクリフの周りに突如として発生した「見えない防御壁」によって阻まれた

「?!? な、なんであいつらがこんなところにいんのよ?!?」

御坂美琴はコロシウムで突如起きた事態を見るなり、コロシアムの中心に向かって走り出した

「あっ!?!み、ミコト様!？」

「チッ、やっぱり通んなかったか」

「当たり前だ。デュエル中も『不死属性』を解除しなかったタマ無し野郎がデュエルが終わってから解除すると思ってるのかア?」

ザザンッ！と麦野沈利と一方通行がどこからともなくコロシアムのフィールドに現れた

「・・・上やん君、これは一体どういうつもりかな?」

「どういうつもりかどうか、一番分かってんのはここにいる他の誰でもない、アンタなんじゃないか?」

「はて?何のことだかさっぱりだな」

「おいおい、此の期に及んでシラ切ってるじゃねえぞクソジジイ」

「オマエの頭上に浮いてる『ソレ』が全部物語ってんだろオが」

そうやって一方通行はヒースクリフの丁度頭の上に浮かんでいる
「ある表示」を指差した

「ちよつとアンタ達！なんでこんなどこに来て……………え？」

その場に駆けつけた御坂美琴が何よりも疑問に思ったのは、目の前に現れた自分にとって因縁のある2人ではなく、ヒースクリフの頭上に浮かぶ「紫色の表示」だった。その表示にはこう記されていた

「i m m o r t a l o b j e c
t」

『システム的不死』…って…どういうことですか…？団長…」

「…なぜ気づいたのか、参考までに教えてもらえるかな？上やん君」
「俺は最初からずっと疑問に思ってただけだった。…『アイツ』は今、どこで俺たちのことを監視して、世界を調整してるんだろう…ってな。でも、俺が考えてたのはそこまでだ。大半の疑問を解き明かしたのは、ここにいる一方通行と麦野だ」

「ほお…では聞き手を変えようか、なぜ気づいたのかな？アクセラレータ君、POH君」

「なアに、簡単な心理だ。俺もよく分かるぜエ？ゲームみてエな遊びは見るより自分でやる方がよっぽど面白エってな。もつともここまでタチの悪い遊びも中々ねエがな」

「私は元々、アンタは臭えと思って疑ってたんだよ。『生ける伝説』だとか『最強ギルドの団長』だとか『ヒースクリフのHPバーが緑ゾーンを跨いだところを見た者はいない』とかな。鼻を高くしすぎなんだよ。少なくともアンタが何かしらのカラクリを持つてるのは間違いないねえと噂を聞いた時から思ってた」

「そしたら大当たりだ。アンタのHPは俺との最後のクロスカウ

ターでも減らなかつた。あれは例え本当にアンタの剣が早かつたとしても、デュエルが決着した後のフィールドが安全圏内に戻ろうが関係なく俺の右手が当たればアンタのHPは緑を跨ぐはずだ」

「なるほど…君の右手は安全圏内をも無効に出来るのだつたな…」

「それに加え、アンタは安全圏内を無効にする俺の右手を握った状態で麦野と一方通行の奇襲を受けたのにHPが減らなかつた。そのHPで減つてるとは流石に言わせねえぞ」

「ちよーちよつと待ちなさいよアンタ達！何言ってるか全然分かんないわよ!?団長を疑つてるとか何とか大当たりとかつて！それに、デュエルが終わったならここは安全圏内になるんだからそもそも何をどうしたってHPが減るわけが…!」

「それがあるんだよ美琴。俺の右手は安全圏内でもHPを減らすことが出来る。第1層でキバオウさんを殴ったとき、お前も見てただろ？」

「え？……あつ………」

『いいぜ…お前がそこまでβテスターが許せねえってんなら…』

『まずは！その惨めな『幻想』をぶち殺す!!』

バキイイイイイイ!!!

『どわあああああつ!!!』

「だけど、『システムの不死』は純粋なこのゲームのオブジェクトだから壊すことは出来ない。石とか木とか窓の淵とかな」

「…・圈内事件のヨルコさんが窓から落ちた時!!」

『ツ!!!クソツ!!!』

ダンッ!! 「Immortal Object」

「そうだ。記憶力が良くて助かるよ」

「だから俺達はオマエが完全に油断してコイツの手を取った瞬間を狙って奇襲をかけた。だがオマエのHPは1ダメージも減ることなくオマエの頭上には『システムの不死』が表示された…って訳だ。簡単だろ?」

「つまり、アンタのHPバーはどうなっても黄色ゾーンまで落ちないようにシステムの的に保護された。そういうことだろ? 団長さん」

「なるほど…見事な連携と推察だ。賞賛に値するよ。だが、そんな確証もないことをよくもまあ実行出来たじゃないか。ヘタをすれば君達はこのゲーム内では罪人か永遠の嫌われ者だぞ?」

「確証なら最初からあつたぜエ?」

一方通行がヒースクリフを嘲笑うかのような目線と口調で言った

「なに?」

「団長さんよお…このゲームの管理人であるアンタなら、この私がラフィンコフィンのリーダーだって当然知ってるよなあ?」

「…ああ、存じ上げているよ」

「私は疑ったヤツは無罪潔白証明するまでとことん疑う性格でね。悪いけどちよつと前からアンタんとこのギルドにウチの組織のネズミを忍びこまさせてもらったわ」

「なんだと?」

「ほら、そのヤツだよ。折角だし紹介してやるわ」

ザツザツザツ…

「…P O H様、お勤めご苦労様です」

「え、えええええつ!」

「ああ、そういや今は超電磁砲の護衛やってるとか言ってたな。まあその辺含めて、表向きは血盟騎士団の団員、しかしその裏はラフィンコフィンの優秀なスパイ…『クラディール』だ」

「えええええええ!? く、クラディールさんってラフコフのメンバー

だったの!？」

「お褒めに預かり光栄でございます」

そう言ってクラデイルは手袋を捲り自分の腕に刻まれている『笑う棺桶』の刺青を見せた

「!?笑う棺桶：ラフィンコフィンのトレードマークの刺青!!」

「はっはっはー!参ったな…まさか身内に既にスパイがいたとはな…組織が大きすぎるというのも考えものかな」

「言っておくが、テメエのミスはそれだけじゃねえんだぜエ?」

「超電磁砲の護衛をしながらもクラデイルはアンタの身辺の監視を怠らなかつた。そしたらつい1週間くらい前の夜に、クラデイルはアンタを団長室の窓から監視してたところ、ある場面を見ちまったのさ」

「ヒースクリフ。アンタが自分のメニューを開いてこの世界から『ログアウト』するところをなあ!!」

上条がヒースクリフに向けて強い口調で言い放った

「ろ、ログアウトって…!どういふことですか団長!？」

「…なるほど…誰にも見られないよう常に気を配っていたのだが見られてしまったのか…それはこちら側の落ち度と反省するしかないな」

「もう遅エよバアカ。いい加減全部話してくれませんかねエ? 『茅場晶彦』キアン?」

「はっはっは、そこまでバレてしまっているとは。もうこれでは隠しなくても仕方がないな」

「確かに私は『茅場晶彦』だ。付け加えるなら、最上層で君達を待つハズだった最終ボスでもある」

!?!?!? ザワザワザワザワザワ…

ようやくフィールドにいる上条達の話の全貌を理解出来たコロシ
アムの観客達も、その事態にどよめきを隠すことが出来なかった

「そ、そんな…だ、団長が…このゲームの創設者の茅場晶彦…?」

「分かっちゃいたけど趣味悪いわねえアンタ。最強のプレイヤーが一
転、最悪のラスボスって訳か」

「中々いいシナリオだろう? ついでに言えば私も学園都市の人間だ。
だから君達の素性も知っているし、向こうではこれまでにどういう事
があったのかも全て知っている」

「やっぱりかくソツタレ。俺もこの世界に来る直前まではアンタを
追ってたんだぜエ? もっとも、最終的な目標だったデータは既に訳の
分かんねエ花女の手元に渡ってたんだけどなア」

「はっはっは! 初春君のことかな? 確かに彼女には何か惹かれる物が
あってね。つい彼女にデータを渡したくなってしまったのだよ。
まあそんな日ももう遠い昔のことに感じるね…なにせもう2年も
経ってしまっているわけだ」

「ツ!? 初春さんまでっ…!」

御坂美琴は自分の知らないところで友人が巻き込まれてしまつて
いたことに対して、自分が助けられなかった不甲斐なさと、目の前の
男に対する怒りでその身を震わせていた

「最終的に私の目の前に立つのも君達だと予想していた。だが教えて
くれないか? なぜこの段階で君達はそこまで分かり合えているのか
ね? 私の覚えでは君達の間にはとても割り切れる因縁はなかったと
思うのだが」

「はん、私だって最初はそこのツンツン頭が来るとは思ってたなかつた
わよ。最初に誘ったのは第1位だけだ。1人でこの規模の計画をや
れるとは思わなかったし、コイツの腹の内は前から見えてたからな」
「ほほづ…」

「ところがその第1位に全てを話したら、どうしてもそこの『ヒーロー』が必要だと言って聞かなくてな。だからそこは第1位の自由にさせてやったわ」

「ケツ…」

「そうかそうか…ならば上やん君。その誘いを受けたのは何故かな？」

「それはな……………」

そう言って上条当麻は今日ここに至るまでの経緯を話し始めた

第56話 ヒーロー

3日前

「その話・・・全部本当なのか？」

「ああ。アクセラっちに信頼されて私は上やん以外に他言しないという条件でこの話を伝えるように頼まれタ」

ここは50層の上条当麻のホーム。上条は3日後のスタジアムで明かされる事実を既にアルゴから聞いていた。そのアルゴは一方通行から予めその情報を確かな信頼を戻に上条にと伝言を頼まれていたのだ

「・・・これ、その時アクセラっちに渡された回廊結晶。自分の話を信頼して協力するなら、これに設定されてる場所に今日中に来いッテ」
「・・・さんきゅ」

そう言われ、上条はアルゴから手渡された回廊結晶をじつと見つめた

「それと、コレ」

「?これは…メッセージ録音クリスタルか？」

「アクセラっちから上やんへの直接のメッセージが入ってるみたいダ。気が向いたら聞けてサ」

「・・・分かった。ありがとう」

「なあ、上やん？」

「ん?どしたアルゴ」

「・・・行っちゃうんだロ？」

アルゴが少し涙目に俯きながら、今にも消えてしまいそうな声で上

条に疑問を投げた

「・・・はははっ、バレてたか…情報屋の読心技術は伊達じゃないな…」
「罨なんじゃないかとは思わないのか?」

「アルゴを介してると時点で嘘じゃないんだろ? アルゴは信頼出来る情報しか渡さないし、話さないからな」

「・・・たしかに、この事実が本当ならこのゲームの真実にグツと近づくと思う。でも、存在がバレたから上やん達の事を口封じの為に殺すかもしれない! そうなったらもうこのゲームをクリア出来る人なんて…!」

「心配すんなアルゴ、俺は死なねえよ。絶対に元の世界に帰らなくちやいけないんだ」

「上…やん…」

ポンツ…ポン…

上条を潤った目で心配そうに見つめるアルゴだったが、上条はそんな彼女に対し笑顔を見せ、その頭を軽く撫でた

「そんな心配そうな顔するな。これからの作戦とかはまだ行ってみないと分かんないけど、この戦いが終わったら必ずお前にも現実で会いに行くから」

「そんなこと分からないじゃないか! 相手はゲームマスターなんだゾ! その気になれば勝負なんかしなくたって指先一本で上やん達を一瞬で殺せるんだゾ!」

「そうかもな…でも、これを知っちゃった以上、やらない訳にもいかないんだ。そうじゃないと、これまでに俺たちと一緒に戦ってくれた人、俺たちのゲームクリアを信じてこの世界で待ってくれてる人、現実で待ってくれてる人、全員の思いを無駄にしちまうじゃねえか!!」
「・・・どこまでも真っ直ぐだな、上やんは…」

「あはははっ…だから心配しないでくれアルゴ。俺は大丈夫だから。いつもどうもありがとうな」

「ああ、無茶だけはしてくれるなヨ」

「おう…それじゃあな」

「ああ、またいつか必ず会おう。上やん」

ガチャ…ボタン…

そう言い残し、アルゴは上条の家を後にした

「……さて…」

上条はアルゴの後ろ姿を見届けると、自分の椅子に座った

「……一方通行のメッセージか…」

そして、先ほどアルゴから譲り受けた一方通行のメッセージが入っているというメッセージ録音クリスタルを眺めていた

「聞いてみるか…」

スツ…ピコンツ…

上条の指先がクリスタルに軽く触れた。すると、クリスタルの中心に明るい光りが灯り、内蔵されているメッセージが再生され始めた

『……なア第4位、これ本当に録音出来てンのかア?……あア!?制限時間あんのかよ!?何でそれを先に言わねェンだ!!』

「ははは、本当に一方通行の声だ。なんだこれ、不器用なお父さんが娘に送るビデオレターみたいだ」

（……一方通行も意外と人間らしくて可愛いところもあるんだな…知らなかったな…）

一方通行が録音している当時の向こう側ではきつと誰かと揉めているのだろう。そんな風に考えながら、自分が今まで見ることの出来

なかった一方通行の一面を見ただけでも、この録音を聞いた価値があったなと思う上条であった

『チツ…まあいい。ンで…あのクソネズミから大体は聞くとは思うが…「誰がクソネズミだとアクセラっちー」テメエはそのムカつく呼び方がいい加減やめろっつってんだろオが！次そう呼んだらぶっ殺すぞテメエエエエ!!』

「はははははーなんだこれ、もはやただの仲良しな家族のホームビデオとほとんど変わらないじゃないか」

上条は一方通行のメッセージ録音結晶に記録された彼らのやりとりに声を出して笑わずにはいられなかった。自分には見えない、クリスタルの向こう側の楽しそうな雰囲気想像するのはそう難しいことではなかった

『調子狂うぜ…つたく…それで制限時間もあるみてエだから本題に移るんだがよオ、こんなこと言うのは俺のタチじゃねエンだが、クソn…チツ…アルゴがこの作戦にはテメエもいた方が良いつて言うから誘う事にした「最初に言ってたのはアクセラっちだゾ」うるせエ引っ込んでろ』

「………」

『それでよオ、俺とテメエの間にはまだ解決してねエ色々があんだろ。まあ俺も俺なりにだが、アレから自分の負債と向き合い続けてんだ。それについては今さら許されるとは思ってたねエ、だから俺はこの十字架を一生背負い続けて生きて行く責任があんだ』

『だから、手を組む組まねエの前に、とりあえずだがテメエにも謝罪しておくことにした。悪かったな』

「……一方通行」

『……お前にも現実に帰らなきゃならねエ理由が何かしらあんだろ？少なくともテメエは俺よりも居場所があるはずだ。だが、その居場所の数なンぎ関係ねエ。俺も約束しちゃったことがあんだ。だからど

うしてもアイツを生きてこの世界から返して、俺も帰ってクソガキの面倒を見てやらなきゃならねェんだ』

「……」

『その辺はテメエも自覚あんだろ。あの十字の丘ン時の最後の一発、明らかに手加減したよなア？ どうせ俺が死んだ時の事でも考えて手加減したんだろ？ バレてんだよクソツタレ』

「……」

『……その辺の借りを返す為にも協力しやがれ。作戦も予め考えてある。今のところ落ち度はねエ。後はテメエの戦う意志だ。……まあ精々期待して待つといてヤンよ……「ヒーロー」……』

『ぎやはははははは!! 第1位顔真っ赤……こいつぁ傑作だ! ぎやはははははははははは!!』

『アクセラっち結局、結局、素直じゃなすぎ! あははははははははは!!』

『……テメエらだけは今ここで愉快的死体に変えてヤンよオオオ!!』

『ドゴオオオ!! ズドオオオ!! ワーワーギャーギャー!! ……』

ピコンツ…フォン…コトツ…

録音時間の限界が来たのか、メッセージ録音クリスタルの中心に灯る光が消え、机の上に落ちた

「俺…なんかずっと一方通行のこと勘違いしてたんだな…根っからの悪いヤツって訳じゃないんだな…」

上条は少しだけそんな風に自分の中で感傷に浸り、今まで自分の見て来た心の内の一方通行とメッセージ録音クリスタルを見比べ一瞥し、クリスタルをアイテムストレージへとしまい、椅子から立ち上がった

「……行くか」

上条は先ほど譲り受けた回廊結晶を手にとって自身の前に突き出

し、結晶に記録された行き先と現地を繋げた

「コリドー、オープン！」

第22層 ログハウス

「あら、案外早かったわね」

「・・・POHか」

上条が回廊を渡りきってたどり着いた場所は、22層に建てられたとある木造のログハウスの中だった。目の前には麦野沈利が椅子に腰掛け、テーブルに置かれた紅茶と茶菓子を嗜んでいた

「ちよつと待ってな、今アイツを呼んで来てやるわ」

そう言つて麦野は椅子から立ち上がった

「・・・ここ、お前らのホームなのか？」

「違えよバカ。第1位と一緒のホームに住むとか生理的に受け付けねえよ。ここは元々第1位と第2位の家だったのよ。まあ色々あつて、今はラフィンコフィンの隠れアジトだ。今は第1位も作戦まではここに置いておく事にしてる。まあ元々の家主だしな」

「・・・一見すればただの平和な家じゃねえか」

「バカかお前? 『隠れアジト』だつて言つてんだろが。いかにもつて場所に建てたらそりゃ隠れアジトとは言わねえんだよ。むしろこういう『まさかこんな平和でのどかな場所に血に飢えた殺人集団がいるはずない』つて思えるような場所の方がそういう心理も働いて身を隠しやすいんだよ」

「なるほど・・・一理ある」

「はん…テメエにはやっぱ私らみたいな『闇の仕事』は向いてねえみてえだな…まあ第1位のヤツは、だからこそテメエが必要だ。的なこと言ってみてえだが」

「…お前のことも勘違いしてた」

「はあ？」

「殺人ギルドのリーダーだって言うから『そういうヤツ』なんだとばかり思ってた。でも、アンタにもアンタの願いと信念があったんだろ？ だったら今となってはちゃんと分かり合える気がする」

「…勝手に勘違いしてんじゃないわよ。別に私は殺人ギルドのリーダーだし、アンタの言う『そういうヤツ』で間違いない。けどアンタは私達という人間の溝まで知ろうとして正しく理解した…そんなけよ」

「…ああ」

バンバンバンバン！

「おい！起きろ第1位！テメエが大ファンのヒーローが来たぞオイ！」

〈誰がファンだったア!!？〉

「これで出てくるわ。少し待つときなさい」

「はは、分かった」

ガチャ…バタン…

「チツ、最悪の目覚めだクソツタレが…」

「よっ、一方通行」

「…おオ」

「つたく、これから曲がりなりにも仕事仲間なんだからもう少し社交的になりなさいっての」

「いや、仕事仲間じゃねえよ」

「あん？」

「真正正銘の仲間さ」

「…チツ、マジでお人好しすぎてこっちが心配になってくるわね」
「だから言ってるんだろ、コイツはそういうヤツなんだよ。まあもつとも、ソイツを心配してやってる時点でテメエもお人好しだと思うが」

なア」

「ああん？焼き殺すぞ teme エ」

「あア？うつせエな、足太エんだよオバキン」

「・・・仲良いなお前ら」

「どこをどう見たらそうなん（ン）のよ（だよ）」

（息ぴったりだし・・・）

「ま、とりあえずもう仲間になったんだ。俺の名前を覚えておくよ。

俺の本当の名前は『上条当麻』だ」

「はっ、『麦野沈利』よ」

「・・・『一方通行』だ。それしか覚えてねエ」

「思い出したら教えてくれればいいさ、よろしくな一方通行」

スツ……

「・・・」

上条は仲間の印にと握手を求める。一方通行はその右手を一瞥すると、頭をガシガシと搔いてその手を取った

「・・・よろしくなア」

「もう『反射』はないんだな」

「オマエの右手が消してるだけだろ」

「いや、分かるんだよ」

「・・・そオカ」

「・・・さ、時間もそんなにあるわけじゃないしさつさと始めるわよ。まずは茅場の話と…まあひいては学園都市の思惑と…アレイスターの話だな」

微笑みながら一方通行の手を取る上条当麻。この世界に来てから初めて誰かの手を取った一方通行は、この仮想世界というデータの奥にある、その手の暖かさを、温もりを感じ取っていた

第57話 黒幕

「ちよつとーなんで私には何も話してくれなかったのよ!？」

「い、いやお前は血盟騎士団の中でも上層部の人間だし、ヒースクリフにもめちやめちや近い方の人間だからバレやすいかもしれないし、もしお前が知ってるってバレたら、一番最初に狙われるのはお前だから秘密にしておこうって一方通行が…」

「え? 一方通行が…?」

「だから言つたら、実は結構良いヤツなんだって」

「・・・チツ」

「なるほど…そんなことがあつたとはね。世の中何が起こるか分からないものだ」

「その通りさクソジジイ。テメエがその正体を最後まで隠しきれなかったのと同じようにな」

やれやれと言つた風に喋りながら首を振るヒースクリフに勝ち誇っているかのように麦野が言い放つた

「全く以つて驚きだよ。君たちは私の予想を越える力を見せた：まあ、この想定外の展開というのも、ネットワークRPGの醍醐味と云うべきかな」

「でエ? どオスンですか? この場で全員ぶつ殺してこの事実も全部隠蔽しとくか?」

「まさか。そんな理不尽な事はしないよ。だが、こうなつては致し方ない：私は最上層の『紅玉宮』にて君たちの訪れを待つことにするよ。ここまで育てて来た血盟騎士団、そして上やん君たちのような攻略組プレイヤーの諸君を途中で放り出すのは不本意だが仕方あるまい。なあに、君たちの力ならきつと辿り着けるさ」

「おおつと、ここまで追い詰めてんに逃すわけありませんのことよ?」

「私たちを殺して隠蔽しようとするならともかく、逃げるってんなら話は別だ。アンタは今ここで、私たちの手でなんとしてでも殺す」
「覚悟は出来てんだろうなア!? さア! スクラップの時間だぜエ!」

そう3人が意気込むと、どこからともなく声が聞こえてきた

『そう。そこの3人の言う通り君を逃す訳にはいかない。茅場晶彦、君の役目はここで終わりだ』

「えっ…だ、誰よ? 今の声…」

「なっ…なにつ!? 貴様っ!? なぜ今ここに!」

その声を聞いた瞬間、ヒースクリフの余裕の表情が目に見えて焦りに変わる

『全く…君には失望したよ。やはり君には少しばかり荷が重すぎたよ
うだ…さて、ではそろそろ返してもらおうか…「私の世界」を』

そう声が聞こえた瞬間、ヒースクリフの前に上条たちにとって見慣れないウインドウが表示された

『システムコマンド。管理者権限変更。IDヒースクリフをレベル1
に』

「なっ!? 私からGM権限を…っ!? 一体どうやって…! これでは約束と違うぞ! 『アレイスター』!」

「!!!」

「ここ! その名前が出るか…」

「もうここで顔を見せてくれるってんなら上等じゃねエか」

「ラスボスもすっ飛ばして裏ボスって訳かしら? 本来予想してた展開とは違うけど、こうなったらとことんやってやろうじゃねえか」

スタジオAMに空より一筋の光が差し込む。そしてその透明な光の

柱から1人の「人間」が舞い降りて来た

「さて…もはやこうなってしまった以上『計画』は意味をなさないな。ここまで苦労したところ実に勿体のない話だが、ここで最終段階に移るとしようか」

「出やがったな…学園都市統括理事長『アレイスターⅡクロウリー』」
「と、統括理事長!? な、なんだってそんな人がこんな所に!? ていうか、学園都市の噂じゃそんな人存在するかどうかもマユツバものだったじゃない!!」

「詳しい事情を説明してねえところ悪イがオリジナル。このSAOにオマエも含めた俺たち4人をログインさせるように促したのは学園都市の人間だ。その辺の理由は詳しく知らねエが、コイツは茅場の上司でもあるみてエだ。つまりこれは、最初っから今こうして俺らの目の前にいる、訳わかんねえ病人服のヤツの仕業なんだよ」

「な、なんですって…!!」

「だが、あいつさえ倒せば私らは晴れてSAOから解放されるどころか、学園都市のクソツタレの能力開発みてえな醜い部分ともオサラバって話だ。どうだ? 悪くねーだろ超電磁砲! お前もこの戦いに片棒担ぎやがれ!!」

「…当たり前よっ!! 現実世界でも私の可愛い妹達が世話になったわねえ!? このゲームも含めて何もかも全部倍にして返してやるわよ!!!」
バチバチバチバチバチツツ!!!

アレイスターの正体に加えて学園都市の思惑を知るやいなや、激昂した美琴の周りに紫電が走った

「ふふふ、第4位の原子崩しと第3位の超電磁砲か…計画の中ではもう既に君達は用済みだ…だが…第1位にはまだ用事が残っている。そして…」

「……………」

「どオしたヒーロー?」

上条はアレイスターの声を聞き、彼が自分たちの前に姿を現したその後からずっとその眼孔で目の前の人間を見続けていた。まるで品定めするかのようになり、まるで自分の根幹に眠っている何かを感じ取ったように

「やはりどうしても分かっちゃったか、やはり必要なかったか」
「……………」

「今さら言葉など。私と君の仲だったな。上条当麻」
「アレイスター…クロウリー…」

「さて、お喋りもここまでにしようかね。こうなっちゃえばいささか上の層が目障りだな…手始めに消し飛ばすでしょうか。システムコマンド認証。消去作業(デリートコード)…承認。加えて、オブジェクトID『衝撃の杖』をジェネレート」

そう言うと、アレイスターは何も持っていない右手を広げる。するとその広げた右手を中心に、ずらずつ！と空間が渦を巻き、そこに現実には存在するはずのない、杖の先が咲きかけの花のように別れ、そこに青緑に光る球体の宿る振くれた銀色の杖が現れる。アレイスターはその自分の為にこうして現れた「伝説の杖」をその手で掴んだ

『『衝撃の杖』』

ビキビキビキビキツツ!!!バゴオオオオオオオオオオツツ!!!

「なっ?!嘘だろ!?!」

「!!全員衝撃に備えろ!」

アレイスターが小さく呟き、手に持った杖をコンコン…と二度つくと、上条達の頭上に合ったアインクラッドの75層より上の層が全てヒビ割れて崩れ落ちようとしていた。その場にいる者はその光景をにわかには信じられないが、ゲームの開発者であるヒースクリフだけは冷静に対処しようと皆に指示を出した

美琴がその能力を解放すると、砂埃の中に無数に散らばっている砂鉄を操り、瞬く間に砂鉄の大嵐が吹き荒んだ。そして全てのオブジェクトが粒子レベルにまで細かくすり潰された

「上出来だア、後は任せな」

「シャアアアアアアアアン……………」

一方通行が能力を行使しようとする、まだ何もしていないにも関わらず全ての砂埃と粒子のように細かく砕かれたオブジェクトが破砕音と共に光となって消えた

「……ああ？」

「……くくくつ…一方通行、残念だが君の仕事はもうないよ。超電磁砲が1人で全てのオブジェクトの耐久値を0にしてしまったようだ」
「……なるほどね…いくら76層から100層全てとは言っても所詮はシステムのオブジェクト。耐久値減らしまくれればその内0になつて消えるって訳か」

「そっか、何も一方通行が別に風で飛ばさなくても勝手に消えんのか」
「……フンッ」

「おい、オリジナル。テメエそのドヤ顔ヤメろ。腹立つ」

「さて、一度空でも見上げてみてはどうかかな？元々は君達が100層までたどり着いた時に見上げるはずだった本物の青空だぞ？」

「はあ？『本物』だあ？ふざけたこと言つてんじゃねえよ。私らにとつちやこの世界自体が『偽物』なんだよ。テメエを今からとつとどぶつ倒してこの世界から出て行かせてもらおうぞ」

「……………」

「ザツザツザツ……………」

「ヒースクリフ？」

「ザツザツ…ザツ！」

まるで亡霊であるかのようにゆらゆらと揺れながら上条達の前を

の横切りながらアレイスターの目の前に躍り出るヒースクリフ。そしてアレイスターの目の前に出ると、俯いた顔を上げ、その表情に怒りを浮かべ、目の前のアレイスターを睨みつけて低い声で告げる

「許さん…許さんぞアレイスター…」

「茅場晶彦か…君には失望したよ。まさかこんな中途半端なところでこんな失態を晒してくれるとはね。おかげで計画の歯車は大きく狂ってしまった。だが君への感謝は忘れていないさ、ここまで私にとって都合の良い『位相』を作ってくれたことにはね」

「…みんな、ここは一旦逃げたまえ」

「ああ？何でだよ？ここまでヤツを追い詰めたんだぞ？」

「いいや、それは逆さ…今やアレイスターは私の所持していたGM権限さえも手に入れた。先ほども見ていたように今のヤツに出来ないことはない。この世界をまるごと消し飛ばすことも出来る。だからせめてここは私に時間を稼がせてくれたまえ、君達というまだ若い命たちを巻き込んでしまったせめてもの罪滅ぼしだ…」

「おいおいクソジジイ、テメエそれじゃ説得になってねえんだよ。この世界まるごと消し飛ばせんだったらこの後どこに逃げても結果は同じだろうが。だったらなおさら逃げずにここで戦う方が良いだろうが。申し訳ねえと思っただったらテメエも協力しやがれ。まあそれも、自分の命が惜しくなけりやの話だけだな」

「…なら言い方を変えよう、私は今ここで、アレイスターと一騎打ちで戦いたいのだよ」

「はあ!?な、何言っただよ茅場！俺や他のみんなと戦った方が絶対勝てる確率が上がる！だから…！」

「いいや違うさ、上やん君…いや、上条当麻君」

「茅場……」

「これは私の引き起こした不始末だ。私は…例えここで死のうとも、この世界に最後まで責任を取らねばならないのだよ」

「…団長…」

「御坂美琴君、同じギルドとして世話になったな。君の腕は、意志は…」

球が宿り、目の前のアレイスターに向けて光線を放とうとした瞬間

「やめたまえ麦野君ッ!!」

「ッ!!」

ヒースクリフの声にハツとなつてその手を止める麦野。掌に発動させていた原子崩しを解除し、自分を止めたヒースクリフを見つめた

「これは、私の戦いだ」

「・・・チツ、どうなつても私は知らねえからな・・・」

「すまないね、こればかりは譲れないんだ」

そう自分の胸に決意をおくと、ヒースクリフは一步前に出て盾に差していた剣を抜き放った。そして、全プレイヤー中最強と呼ばれたその剣の切っ先を目の前の宿敵に向けて言い放つ

「これ以上私が作り上げた理想の鋼鉄の城を…アインクラッドを貴様の好きにはさせんぞアレイスター!!!」

「・・・勇んだところ申し訳ないが、GM権限を失った今の君は一介のプレイヤーと何も変わらぬ。ナーヴギアをつけている以上、私の権限で君も本当に死ぬぞ?それでも、その実力が私の足下にも及ばないと分かっていてなおその剣を向けるかね?」

「当然だああああああ!!!」

咆哮と共にヒースクリフは駆け出す。そしてソードスキルで赤く光り輝くその剣をアレイスターに振り下ろした…だが……

「・・・出る、エイワス。思考を縛る鎖を逆手に取ってガイドとなし、我が目的を完遂せよ」

ズドオオオオオオオオオオ!!!

「ッ?!?!」

ガシヤアアアアアアアア……

「かつ?!茅場ああ?!」

「そつ!そんな…ッ!?!」

一瞬の激しい閃光が煌めいた直後のことだった。正体不明の衝撃がヒースクリフを襲い、一瞬で全てのHPが消失し、その身体が無数の光の欠片となって散った。彼を蹴散らした極太の光はまるで、青ざめたプラチナとでも呼ぶべき冷たい光を放っていた

「おい…出やがったぞ第1位」

「ああ、言われなくても分かってンよオ…あん時以来だなア…『ドラゴン』…いや…『エイワス』」

第58話 最終決戦へ

光臨。長い黄金の髪に白い肌。青光りするプラチナの翼。聖守護天使。その者の名を『エイワス』

「なるほど…アレイスターよ、状況から察するに君はどうやらまた1つ失敗したようだな」

エイワスはどこかアクシデントを楽しむような口振りでそんなことを呟く

「今さら失敗など気に病む人生を歩んではいけないさ。計画はここで終わる。ここに完成させる。君が悩まされていた長い長い退屈も今日ここで終わる」

「なるほどなるほど。此度の私の姿形はほぼ完璧に近いようだな。この世界もバカには出来ん」

「す、すげえ……」

「……綺麗……」

上条当麻と御坂美琴は思わずそんなことを口に出してしまっていた。思わず見惚れてしまうほどのまばゆい光を放つその存在。まさに天使。そんなものがあるはずがないと分かっている、その存在を頭の中でそう理解していた

「おい超電磁砲、見惚れてる暇なんかねえぞ。アイツはヤベエ。一瞬でも気抜いてみる、その瞬間に死ぬぞ。私がコイツに初めて会った時は一瞥しただけで気絶させられた」

「はっ!?そ、そうね!今は何にしても気を抜くべき時じゃないわね…」
「おや、今回は妹達の生みの親もいるようだな…もつとも、その対極にいる人間もいるようだが」

「・・・チツ、相変わらずムカつくぜ・・・そのデタラメな強さと余裕ぶつた態度がよオ・・・」

「さて、ここよりどうするかね？アレイスター」

「計画の終結はもう目前まで迫ってきている。加減してやる必要はない。存分にやりたまえ」

「ほお？『彼ら』の本質はどうするつもりだ？」

「片方は私が受け持つ。元々そうなる運命だったからな。もう片方は君が相對するといひ・・・こうなった以上、もう成り振り構う必要はないさ」

「彼らを使ってこの世界を本当の意味で定着させるのが君の本来の計画ではなかったのかね？」

「この世界を肯定するピースを嵌めてやる必要もないさ。元々君がある時を含め、この世界にこうして姿を現せている時点で魔術を滅ぼす条件は十分に満たせている。もし彼らがこの最終決戦で本来の顔を出すなら、それは嬉しい誤算としてその時に対処するでしょう」

「はははははっ！確かに成長はしているようだがまだまだ青いな。しかも純度も甘い。どこぞで寄り道でもしたのかねアレイスターっ！」「喋りすぎだ」

「了解」

「バサアッ!!」

まるで旧知の中であるかのようにアレイスターとエイワスは会話する。そして会話を打ち切るとエイワスはその翼を一度大きく広げ、はためかせた

「ッ!!来るぞッ!!」

「ええっ！」

「全員死ぬんじゃないぞー！」

「チッ！」

「くくくっ、そう血気盛んになるな。まだ戦局が整っていないのだよ」
「・・・なに？」

身構える4人をアレイスターがくつくつと笑う。すると、アレイスターの口からある言葉が紡ぎ出された

「コリドー、オープン」

ズズズズ…

た
アレイスターがそう呟くと、彼の横に回廊結晶の光のゲートが開いた

「回廊を開いた!? 回廊結晶もなしにどうやって!？」

「だからいちいちビビんな超電磁砲。もはやこの世界でアイツらに出来ねえことあねえんだよ。まあ、あの回廊がどこに繋がってるかなんてのは知ったこっちゃねえがな」

「私の後に付いてきたまえ、上条当麻。君とは語るべき全てを語り尽くしてから手を交えるのが、この運命という線路を引いた私たちの礼儀ではないかな？」

「!!!」

「…望むところだ」

上条当麻がその足で地を踏みしめアレイスターの元へと向かう

「だっ！ダメよ！あんなの罠に決まってるわ！」

示唆した
そんな上条の右手を美琴が強引に引っ張り、その場に留まるように

「止めないでくれ美琴。アイツは多分、俺が倒さなくちゃいけないんだ。お前はここで一方通行と麦野と協力してアイツを倒してくれ」

「で、でもっ!!」

「大丈夫さ。何もハナっから死ぬつもりで行くわけじゃない。最後は

ちゃんと帰ってくるさ、約束する」

「嫌っ！アンタだけじゃ絶対に行かせない！私は絶対にこの手離さないんだからっ!!」

「・・・一方通行、麦野。美琴をよろしく頼む」

「・・・いいンかよ」

「ああ」

「悪いわね。本来なら二人一組に分かれてやるのが定石なんだろうが、どうにも向こうが出してる提案でやるのが私らにとっても一番都合がいいらしい」

「大丈夫だ麦野。気にしてない」

そう言う上条は2人に向けていた視線を美琴に戻すと気まずそうにその目線を落とし暗い声で告げた

「・・・ごめん、美琴」

「・・・え？」

ザクツ...

「悪く思うなよ超電磁砲。こうでもしないとテメエはソイツの腕を離さないだろうからな」

「ツ!!麻痺...毒...そっか...アンタの右手は安全圏を打ち消すから...」
バタツ.....

美琴の肩に一本の短刀が刺さる。麦野の短刀には麻痺属性が予め付与されており、美琴の身体がたちまち痺れて動かなくなった。上条の右手を掴む力も入らなくなり、地面に吸い込まれるようにヘタレこむ。そして彼女の身体を上条が軽く抱き起こした

「悪い一方通行。これ、解毒結晶だ。後で美琴に使ってやってくれ」

そう言う上条は一方通行に小さな緑色の結晶を手渡した

「・・・コイツも言ってたが、死ぬンじゃねエぞ」
「お前の方こそ、ちゃんと美琴を守ってくれよ？」
「チツ、さっさと行けヒーロー」
「ありがとな」

最後に上条は一方通行と美琴に向けて微笑んで、支えていた美琴の身体を一方通行に預けると、すっと立ち上がった

(行っちゃう…アイツが…第1層の時みたい…また1人で無茶して…自分の事なんて省みないで…)

「待たせたな、アレイスター」

「ふむ、別れの挨拶は済んだのかな？」

「これは別れじゃねえ。だからそんなもんは必要ねえよ」

「それはそれは…野暮なことを聞いてしまったようだな。では、行くか」

「ああ」

アレイスターが先に回廊をくぐる。そしてそれに次いで上条が回廊をくぐる直前で振り向いた

「美琴…」

「と、当麻…」

「ツ!?お、お前…」

「えへへ…名前、呼んじやった…」

美琴が初めて上条の名を呼び、驚いた上条の肩がビクツと跳ねた。それとは反対に上条の名前を呼んだ美琴は悪戯っぽく笑った

「・・・美琴、あの時…お前を…置いて行って悪かった…」

「・・・うん」

「この世界に来た時、最初にお前に会えなきやきつと、俺はここまで強

くなれなかつたと思う」

「・・・うん」

「俺はお前に感謝しなきゃいけないことでは？ いっぱいのはずなんだ・・・それなのに俺がお前にしてやれた事なんて・・・お前を置いて行って・・・突き放して・・・本当にすべきことはこんなことじゃないって分かっている・・・でもまた今こうして、同じことをやろうとしている」

「・・・うん」

「すまん・・・美琴の意志には反するかもしれないけど・・・！」

「今謝ってんじゃないわよっ!!」

「!!!」

静かに上条の話に頷いていた美琴が急に声を荒げた

「絶対に許さないんだから!!」

「ッ・・・」

美琴の「許さない」という言葉が胸に刺さり、苦虫を噛み潰したような表情を浮かべる上条。そんな彼に向けて、美琴はこう続けた

「許さないんだから! 向こうでご飯の一回でも奢ってくれなきゃ絶対に許してあげないんだから!!」

「!!!」

「約束・・・したからね?」

そう言って美琴は最後に上条に優しく微笑んだ

「・・・ああ! 向こう側でな!」

そう言って上条は仲間たちに背を向けてサムズアップを見せると、そのままアレイスターの開いた回廊の奥へと消えていった

第59話 世界

「……ここは？」

アレイスターが出現させた回廊をくぐった上条当麻は今、ただただ広大な空間にきていた。床や階段もなく、無限に広がる星空。そこは「宇宙」であつた。中と外でどのような次元が歪んでいるのかは分からない。だが、その足元一面には巨大な青い星がどこまでも広がっていた

「本来ならばこの世界の誰もたどり着けない場所さ。アインクラッド第100層のさらにその上、前人未踏の私たちだけの為の空間さ」

「……宇宙に足場があるってのもなんか変な感じだな」

「じきに慣れるさ」

「……とりあえず聞きてえ事が山のようにある」

上条がアレイスターと真剣な表情で向き合い、芯のある声で言った「ふむ、君には知る権利があつて然るべきだろう。好きなことを聞くといい」

アレイスターはどこか余裕が見れるような表情で上条と向き合つて語る

「なんでこんなことをした？」

「全ての魔術を根こそぎ滅ぼす為さ」

「なんでそんなに魔術を恨むんだよ？アンタが科学の人間だからか？」

「いいや、私は本来は魔術側の人間さ。この件は単なる私の個人的な恨みを含めた仕返しのようなものさ。その恨みについては君が理解できるものではない。今この場では聞かないでおくことを推奨するよ。『科学サイド』なんてものはその為の計画の過程で生まれた副産

物にすぎない」

アレイスターは微かに笑いながら、まるで上条の疑問そのものを見限ったように語った

「なら……この世界は一体何の為に作ったんだ？」

「ふむ……それを語る為には少し話の時間が遡るが平気かな？」

「構わねえ、全部話せ」

『0930事件』。現実では今から2年ほど前の話になるかな？学園都市にローマ正教暗部『神の右席』の1人である『前方のヴェント』が侵入し、君と交戦した」

「……ああ」

「だが、この事件の着眼点を置くべき場所はそこではない。『量産能力者』が全世界に散らばり『AIM拡散力場』が世界中に分布した。そして学園都市の第七学区を該当座標に置くことで部分的に『虚数学区・五行機関』を展開し、それを制御するにまで至った」

「……虚数学区・五行機関ってのは知らないな、一体何のことだ？」

『風斬氷華』さ
?????
」

何のことかさっぱり分からない上条の頭の中にはいくつものマークが泳ぎ回る。それに助け舟を出すかのようにアレイスターが話の続きを語る

「風斬氷華はAIM拡散力場そのもの……ひいてはAIM拡散力場の集合体であるということは君も知っているな？」

「ああ」

「虚数学区・五行機関とは風斬氷華を示していると言えば分かるかな？」

「……AIM拡散力場の集合体の風斬をお前らがそう呼んでるってことか」

「まあ概ねそれでいい。『人工天使・ヒューズⅡカザキリ』：A I M 拡散力場に方向性を持たせ、A I M 拡散力場の集合体である虚数学区・五行機関を展開しそこに魔術理論を組み込むことで現出した天使：例えるなら『科学の天使』と言ったところだな」

「で、それが一体何になるんだって言うんだよ？」

「ヒューズⅡカザキリが出来るということは：それすなわち、A I M 拡散力場という人工の界を基盤とした『現実世界を再現した異世界』が出来上がっていたということだ」

「異世界？」

「そう。そこに魔術理論を組み込むことでヒューズⅡカザキリという人口天使が顕在化できる。その現出時にあの時の学園都市は『異世界が混ざり込んだ既存のものとは異なる空間』となり、天界と現実世界にあつた法則が歪んだ為に魔術の循環不全が引き起こり、君は前方のヴェントを退けることが出来た：理解できたかな？」

「・・・まああん時ばかりは風斬に助けられたからな。実感はあるし理解もしてる」

「ふむ、いいだろう。そしてこのアインクラッドはその『現実世界を再現した異世界』そのものであり、それを拡張した世界であるということき」

「!？」

「これで答えになったかな？」

「ちよつ！ちよつと待て！お前はさつきコロシアムで魔術を使つたら！だったらその循環不全とかいうのが起こるんじゃないのか!？」

「伝え方が悪かったかな：ここは決してヒューズⅡカザキリを展開した世界ではない。展開すれば私も魔術を使えなくなるからな：つまり、ここはヒューズⅡカザキリを現実にも顕在化できる世界ではあるが、ただ異世界である段階に留まっているだけさ」

「????」

「バカに話を通すのは骨が折れるな：つまりこの世界はA I M 拡散力場を基盤とした『現実世界を再現した異世界』ではあるが、そこに魔術理論を組み込んでヒューズⅡカザキリが現出した『異世界が混ざり

込んだ既存のものとは異なる空間』ではないということだ」

「分かりやすく例えるなら、世界を包んだA I M拡散力場という『現実世界を再現した異世界』でも魔術は存在できるが、その法則を崩し魔術の循環不全を起こせるのが『異世界が混ざり込んだ既存のものとは異なる空間』という訳だ」

「つまり、風斬が魔術を根絶する為の鍵ってことか!？」

「まあ概ねその理解で齟齬はないが、あくまでヒューズⅡカザキリが現出し法則が歪んだのは学園都市のみ。それを今度は全世界の法則を歪められるよう『現実世界を再現した異世界』を引き伸ばしたのがこの『ソードアース・オンラインの世界』…ということだ。すでにヒューズⅡカザキリが現出した世界を再現してしまえば私が魔術を使えなくなり『彼』の現出にもいくつか手違いが生じてしまうからな」

「なっ…なんでそんなことが出来んだよ!?!ここは仮想世界だぞ!?!」

「仮想世界だからこそさ。ありとあらゆる万象を数字とデータのみに再現できるこの世界だからこそ、それを成すことが出来る。現実世界でどんなに小規模でも、元となる事象がおれば後はこの世界でデータとして編集し引き落とすだけ。簡単な話さ」

「でもそれはこの世界だけの話だろ!?!こっちではそんなことがあっても現実世界には何も影響が…!」

「それを可能にするのが先ほど述べた『彼』なのさ」

「…あの『エイワス』ってやつか?…今コロシウムで美琴達の相手してるあの金色の天使…」

「その通り。君は超電磁砲とは違って一方通行達から予め話を聞いていたかな?」

「…まあザックリとそういう奴がいるってだけなら聞いた」

「では彼の説明に移ろう。コードネーム『ドラゴン』。その名をエイワス。彼はヒューズⅡカザキリをその『核』とすることで初めて姿を現すことが出来る」

「風斬を『核』に…?」

「A I M拡散力場を『高い濃度の食塩水』と例えるなら、エイワスはその食塩水の『結晶体』だ。だがその結晶体を現出させるにはその為の

『核』が要る。その核がヒューズIIカザキリ…ということさ」

「なるほどな……元々この世界はA I M拡散力場で満たされた異世界になってる…後はそこに現実世界でデータとして採取した天使の風斬を核として置けばアイツが現出するってことか」

「その通り。だが彼という存在は既存の天使とは少し法則が異なる」

「またそれかよ……」

「まあそう言うな。私の計画を語るにはこの話は避けて通れない。それに、ゆくゆくは君の話もせねばならんからな」

「……」

「私は元々、科学的という言葉を使っていた。霊的、物理的を問わず、美しく順序立てて因果を説明できるものを科学的だとな」

「……」

「そうした理論の頂点にるのがエイワスだ。彼の名はどこにも出てこない。どんなカテゴリーの宗教にも収まらない。天使ならばどこかしらに出てくるであろう聖書、神話にも登場せず、存在しない」

「そう、この『世界は物理法則の上』に幾重にも魔術サイドの位相を折り重ねることによって成立している」

「つまりエイワスとは、その一番下層…『純粋な物理法則の世界に佇む天使』なのだよ。だからこそ、私は重宝した。エイワスの制御法を確立し、その莫大な力でもってエイワス以外の全てのフィルターを破壊してしまえば、後には魔術のない世界しか残らないからな……」

『位相』ってのはなんだ？」

「人の意識の中で構築される世界は、決して科学の法則だけが支配するまっさらな世界だけではない。十字教を含む様々な宗教、それぞれに準ずる神話に登場する世界そのものを『位相』という」

「…それはさっきの理論で言うなら、そのエイワスが支配して一番下層の物理法則の世界の上に…例えば『天国』とか『地獄』とか『神様たちの世界』みたいな神話の世界があるってことか？」

「概ねその解釈で間違いない。そして、この世界こそがエイワスの為に作られた『純粋な物理法則の世界』なのだよ」

「・・・なるほどな。つまりこの世界を肯定しちまえば後に残るのは魔術のない世界ってことか」

「そう。そしてこの世界を作るのにはどうしても『必要な物』があった」

「必要な物？」

「私と同じほどに科学をポジティブに捉える者、そしてその『世界』を純粋な意識のままに求め、その新たな位相を構築できる手段を持つ者……」

「・・・おい、待てよ…それってつまりは……」

「そう…『茅場 晶彦』さ」

「!!!」

「現実世界の枠組みや法則を超越した世界を作り出すことだけを欲して生きてきた…それがまぎれもない茅場晶彦という『人間』だ」

「・・・現実世界の枠組みや法則を超越するなら、それはお前らのやりたい事に沿ってねえじゃねえか」

「なら君はこの世界が、魔術や超能力が飛び交うあの世界よりも法則を超越していると感じるかね？」

「そ、それは……」

「我々学園都市の協力を経て、茅場晶彦はこの世界を創り出した…そしてこのSAOという世界の枠組みに満足した。そして私は交渉しただけさ。協力したからこちらにも協力しろ…とね。簡単な話だろう？」

「・・・なるほどな、茅場はお前らにとっていい手駒だった…って訳か。この学園都市に来るまでは超能力も魔術も知らない。そしてその技術でこの世界を創り上げられるって分かってたから…!!」

「だからこそ…さ。この世界には純粋な魔術も、超能力も存在しない。あるのは数字で決められた『スキル』や『アイテム』といった『システム』のみ。そしてそれは君の『右手』も例外ではない」

「・・・つまり、俺たちのユニークスキルはこの世界に来た最初っからアンタ達の想定内の機能を持ってたってことか」

「そう。現実世界の君ではあり得ない『空間移動』を可能にする転移結

晶が使えることも、安全圏内では君だけがその法則をうち破ることも、システムの不死は崩せないことも、相手のスキルを無効に出来ることも、全て私達が決めたことだ」

「・・・それも全て、この状況を作り出す為の布石ってことか……」

「それも含めての計画さ。まあ本来はこの状況は100層にたどり着いた時に話す予定だった。だが、君たちはわずか75層にしてこの世界を誰が創り出したのかを見抜いてしまった。そこが誤算だった」

「誤算だった…？」

「本来ならアインクラッド第100層で真のボスとなった茅場晶彦を相手とすることで、君と第1位である一方通行はその力の『本質』を見せ、この世界を本当の意味で肯定する為の最後のピースとなるはずだった」

「俺と一方通行…が……？」

「だがこうなってしまうた以上は仕方がない。100層での目的は諦め、この段階での魔術の殲滅を決した。此の期に及んでなお、一方通行と君がその本質を見せるなら、それを利用しない手はないがね……」

上条はその言葉を聞くと、黙ったまま自分の右手を見る、まるでこの話をいつか聞くことになるかと分かっていたかのように、ただただ自分の右手の「幻想殺し」を見つめていた

「君も自分の力の本質には薄々勘付いているのだろうか？『幻想殺し』など単なる付属物でしかない……『上条当麻』……いや……」

『神浄の討魔』

第60話 神浄の討魔

「・・・1つ聞いてもいいか？」

「何かな？」

右手を見つめるのをやめると、上条当麻は真剣な面持ちでアレイスターと向き直り、自分の右手を目の前に突き出しその疑問を問うた

「俺の『コイツ』は一体なんだ？」

「・・・ふむ、どこから説明したら良いものかな・・・」

アレイスターが衝撃の杖を持つ手とは逆の左手を顎に当てて考え始めた

『全ての男女は星である』

そう言っただけアレイスターは今自分達を取り囲んでいる宇宙の星々を見上げながら呟いた

「・・・それは元々お前の残した言葉だろ」

「おや、既に存じ上げてくれているとは光栄だな」

「詳しい意味は小萌先生も教えてなかったけどな」

「言ってしまうはこの世界に無駄はなく、全ての物事が絡み合っ組み上げられている・・・ということの説明しているだけさ」

「・・・」

「そう：君の幻想殺しが、今ここで私の前にまた現れたようにね・・・」

「・・・『また』？」

「ソレは元々は私の持ち物だったのだよ」

「なっ!？」

「・・・『鏃は骨、矢羽は革、矢柄は蠟・・・それもまた、血肉が蠟と化し

た死蠟』……」

そう言うとアレイスターは杖を二度軽く突く。すると上条当麻の目の前にホログラムが現れる。それは『たった一本の矢』であった。しかし、それは矢というにはあまりにも異質で、矢先は本来の役目を放棄し、先端が歪な五つ又に分かれていた。まるで何かを掴もうとする掌のような矢だった

『『幻想殺し』。とある聖者の右手を素材に製造された究極の追儼霊装』
!!!」

その言葉を聞いた瞬間、少年は思わず自分の右の掌へ目を落としていた

「その効果は、元は『召喚失敗の際に退却せぬ者を魔法陣の向こうへ追い返す』…という代物だ」

アレイスターがまた杖を突くとホログラムは一瞬で消え、歪な手の形をした矢は消え去った

「……コイツが…霊装…?」

上条当麻はそれと同じ「霊装」の名を称する物を何度か耳にし、時には目の当たりにしてきた。リドヴィアの「使徒十字」、そして魔術に関わる日々のきっかけとなった少女が身につけていた「歩く教会」。しかし、それらとは似ても似つかない。なぜなら、今その霊装はこうして自分の右手に宿っているからだ

「そう、前世の幻想殺しは私の持ち物だった。だがそれは次第に失われた。時代の流れと共にね……」

「・・・そりや嫌でも運命感じちまうわな・・・こんな運命の赤い糸でも打ち消しちまうようなモンにこうしてまた巡り会えるってんならなおさら・・・」

「だが、霊装なんて物は所詮は効果をもたらず形でしかない。幻想殺しにはそれを形づくらせる相応の意味とその役割が込められている」

「・・・意味と・・・役割？」

「幻想殺し・・・その正体は『この世に存在する全ての魔術師達の怯えと願いが集約したもの』だ」

「魔術を極めれば世界を思いのままに歪めることが出来る。一見すれば魅力的な話だ。だが、もしかしたらその世界を歪めた時に弊害が生じるかもしれない。そしてその時に元に戻そうとしても『元の世界』を思い出せなくなってしまうかもしれない」

「・・・」

「だがもしそこに、『魔術の影響』を受けない物があれば、例えば世界が元の影も形もないほどに変貌していたとしても、ソレだけは元の姿を保ったままだ・・・だからソレを基準にして元の世界を思い出していくことが出来る」

「・・・それが『コイツ』か」

「そう・・・それが幻想殺し本来の役割。」

『世界の基準点』とでも言うべき力・・・かな」

「世界の・・・基準点・・・」

「その役割はいつどんな時代も変わらなかつた。幻想殺しが矢に宿った時でも、壁面に宿った時も、英傑達の武器として手に取られた時も、洞窟という形で試練として宿った時も、それが誰かの『右手』であった時でも」

「・・・」

「そう、今世の幻想殺しは君を『選んだ』んだよ。そこにただ役割として存在するのではなく、徐々に徐々に主観が歪んでしまったこの世界を救えると感じた・・・それをもってあらゆる魔術師の願いが君に集約した。君の『魂の輝き』に惹かれてね・・・」

「俺の・・・魂の輝き・・・？」

「その通りさ。『神浄の討魔』」

アレイスターはその指で空中に何かを書く。するとその指先でなぞった空間に火花がほとぼしり、書かれた文字が形を作る。それは上条当麻の元へと浮遊していき、そこには自分の名前と同じ読み方であるのに全く違うある名が書かれていた

「神浄の討魔……」

「それが君の真名…魂の輝きであり、君の本質さ……」

アレイスターの言葉の終わりと共に、火花の文字がフツと消えた

「先ほども述べたが、既に自分で気づいているのだろうか？自身の持つ能力の本質とも呼ぶべき『モノ』と『もう一つの能力』について……」

「十字の丘での一方通行との戦いの中には右腕をもぎ取られ、その肩口から噴出したその『莫大な力』を他の何でもない自らの『意志』でもって抑え込んだ」

「……ああ、俺の中に幻想殺し以外の『何か』があるってのは確かに自覚はしてる。でも『ソレ』が一体何なのかは知らねえ」

「……元々、君という存在は『十字教程度』の尺度で説明のいく代物ではない……」

「……俺の存在……？」

「……古来より……」

ほんの一瞬の沈黙を置き、語り始めるアレイスターの様子と口調が今までとは異なるものになる。妙に古めかしく己にとつて疎遠な話のようで、しかしそれでいて何処か身近に思ってしまうような、そんな前置きの言葉から話し始めた

「神話とは、神々を中心とした話であり、その物語の舞台のほとんどが

神々の住む『神界』をはじめとした位相の中で起こったものだ…」

「しかし、今日まで伝わる全ての神話の中でただ一度だけ、神界を含む全ての位相から我々の住む『人間の世界』に身を落とした文字通りの『神』が存在した」

「………」

「その神の名を…『素盞鳴尊』」

「……スサノオノミコト?」

「神話においてスサノオは一度人間界に落ちたものの、人間界での功績を認められ、もう一度神界へと戻った」

「…しかし、スサノオが人間界に一度落ちたことで、そこにスサノオの残留思念が残った。『神』という存在は無限の容量を持つ存在だ。本人が意図せずともただそこに『在る』だけで世界に多大な影響を残してしまう」

「そして永遠とも言える時の流れの中で、スサノオがこの世に残した思念はやがて『生まれ変わった』。そう、その魂を……」

「『神浄の討魔』として」

「?!?!?」

「つまり、今の君の魂には紛れも無い神話の存在の『神』が宿っていると言っている」

「は、はあああ!?!」

上条当麻にとってはあまりにも突拍子のない話だった。自分が神と同義だと言われたのと同じだったからだ。まるでいきなり顔に水をぶちまけられたような気分だった

「そう…君はこの世界で唯一、その身に『神』を宿した存在なのだよ」

「じよ、冗談だろ…?」

「自分でもにわかには信じがたい話であろう?だが、それは紛れも無い真実であり、運命の歯車はこんなことでは止まりはしないのだよ」

「……」

「スサノオはこの人間界である偉業を成し遂げた。その身体を8つの竜頭に分けた自然の化身『八岐大蛇』をその手で討ち果たした」

「……日本神話だろ？何となくなら聞いたことある」

「そのヤマタノオロチとの戦いでスサノオが自身の武器として用いた剣は『十握の剣』の一振り：通称『天羽々斬』と呼ばれる霊装だった」
「……霊装……」

その言葉にまた上条は無意識に自分の右手に視線を落とす

「その名前こそ違えど、当時の『幻想殺し』はこの『天羽々斬』に宿っていた」

「!!!」

「その天羽々斬でスサノオはヤマタノオロチを討ち果たした。だが、天羽々斬に宿った幻想殺しがヤマタノオロチの尾に当たった瞬間に刃先がこぼれ、天羽々斬もまた壊れてしまった」

「こ、壊れた？霊装ってそんな簡単に壊れちゃうもんだったか？」

「壊れたというよりも、その力の質が『変わった』という方がむしろ正しいな。天羽々斬の刃が通らなかつたヤマタノオロチの尾をスサノオが調べたところ、そこからまた新たな剣……もとい霊装が現れた。その剣の名は……」

「……『天叢雲剣』」

「おや、既に名前を知っていたか……まあ有名な神話だからな……その通りだ。その剣の名は『天叢雲剣』。天羽々斬に次ぐ新たな『幻想殺し』であり、その力の奥に新たな『もう一つの能力』を宿した究極の霊装」
「も、もう一つの能力……?」

「そう、幻想殺しの効力をそのままに『ヤマタノオロチそのもの』をその奥に封じ込めた新たな力の法則を持った幻想殺し。その新たな力の正体は至ってシンプルで分かりやすい」

「……」

『異能の力』のみならずこの世の全て『森羅万象の力』を喰らい尽く

す圧倒的な力…その姿形、力は世界の神話や伝承と同義…
「……『アレ』か…」

「その名を『竜王の顎』…と、我々はその力をそう呼んでいる」

「……『竜王の顎』…」

そう呟いて上条当麻はその右手をまるで何かを掴むようにして握りしめた

第61話 上条当麻

「それ以後、幻想殺しの奥には竜王の顎が宿り、幻想殺しは時の流れと共に様々な物に移り変わったが、竜王の顎は決して表に出ることはなかった」

「・・・お前がコイツを持つてた時とか？」

「無論だ。そもそも幻想殺しの中から竜王の顎を取り出そうなどと考えること自体がナンセンスだ」

「・・・大体察しはついてきた」

「ほお？」

「必要なんだろ、その竜王の顎が出てくるには。他でもない俺の『魂』が」

「うむ、見事だ上条当麻。その解釈で間違いはない」

「・・・」

「そう、竜王の顎が発動する為の鍵は幻想殺しを取り除くことではない。神浄の討魔と竜王の顎が共に存在し得ることだ」

「でも竜王の顎そのものが異能の力だから幻想殺しはその力に蓋をし続けてきた」

「謙遜はやめたまえ」

「・・・は？」

「確かに幻想殺しも君の言う蓋の役割の一端だが、竜王の顎を押さえ込んでいたのは君の魂と意志そのものだ。違うかね？」

「・・・」

「君はやろうと思えばその力を自分から使うことも出来ただろう？」

「・・・知ってたのか」

「十字の丘で一方通行の黒い翼で右手を吹き飛ばされた時、既に『現実世界を再現した異世界』となっているこの世界では、君の魂に宿るスサノオが元々の己があるべき神界を想像する余り、幻想殺しの奥の竜王の顎よりも先に出てきてしまった」

「・・・」

「心当たりがあるようだな。そして君はその莫大な『神』を抑え込み、自分の体に押し戻す為に竜王の顎でそれを制した。そして幻想殺しが君の右手に戻った」

「だが、こともあろうに君はスサノオの力を竜王の顎で飲み込んでしまった。おかげで君の身体の中では『神浄の討魔』と『竜王の顎』の力が互いに干渉しあい、二つの力が入り混じった新たな『別の力』が出来上がってしまった」

「だから君はその力を持って余した。制御法が確立出来ていないからだ。アウレオルス・イザード、大覇星祭での御坂美琴、一方通行との戦いでやっとの事で自分の力に大雑把な理解が追いついたというのに、またその力が変わってしまった。だから迂闊に手を出せなかった」

「……」

「だが、それもここで終わりだ」

低い声と共にアレイスターは衝撃の杖を構える。そしてその眼光に確かな殺意が宿る。かの最強の魔術師の本領がここで発揮されようとしていた

「戦え、上条当麻。君の持つ全てを解放しろ。そんなちっぽけな右手では私は倒せん。未知の力を恐れるな。私との戦いの中でその制御法を確立させれば良い。誰が何と言おうと、真正正銘ここが終着点だ」

「……」

上条当麻はもう一度右手を握り締め、そして握り拳を解く。そして、その口からありつたけの言葉を紡ぎ出す

「関係ねえよ……」

「……何がかな？」

「右手とか魂とか生まれ変わりとか神様だとか！そんなもんは関係

ねえって言ってるんだ!!!」

「……」

「俺は！『神浄の討魔』じゃねえ！『上条当麻』だ!!俺の『本質』なんて他人が勝手に決めてくれてんじゃねえ!!俺は俺だ！お前らの価値観だけ勝手に押し付けてんじゃねえ！本当の自分が何かなんて…そんなん自分が一番よく分かってんだよっ!!!」

「……」

「確かに記憶喪失でロクなことなんざほとんど覚えてねえよ！でも…それでも分かることだっっていくらでもあんだよ!!俺はただの『人間』だ！ちよつと周りより不幸だけの『どこにでもいる平凡な1人の高校生』だ!!」

「俺の名前は正真正銘、俺の父さんと母さんが、俺の為に必死になって考えて俺につけてくれた大切な名前だ！俺は『上条刀夜』と『上条詩菜』の息子だ!!これだけは何があっても変わらねえ！変えさせねえ!!」

「俺の何かが間違っていると否定されようと、どんな論理でねじ伏せられたようと！俺は俺の道を突き進むって決めたんだ!!なんか文句あるかクソツタレ!!!」

「……言いたいことは言ったか？」

「……ああ」

「成る程。心得た。だが私とて容赦はしないぞ。君がそう結論づけた以上、全ての基準点となる幻想殺しはもはやこれから先の私の世界にとっては邪魔でしかない」

「んなもん、俺だっつて同じだ。俺たちの世界は譲れない。この世界はここで終わりにしてやる」

そう言っつて上条当麻は左手に盾を構え、その右手に「剣」を携えた

「……それはなんのつもりかな？」

「俺は『コレ』で戦う」

上条の剣の切っ先がアレイスターに向けられる。アレイスターは、ふつと嘲笑するように軽く息を吐くと納得したかのように上条に向けて言った

「自分自身の最大のアイデンティティーたる右手を自ら捨てるとは：君らしいといえれば君らしいが…それでいいのかな？」

「さつきも言ったら、自分の進む道は自分で決める。それに『コレ』は俺だけの意志じゃねえ」

「では何だと言うのかな？」

「コレはこの世界で生きてる人…この世界で死んでいった人…そのみんなの『願い』だ。この『剣の世界』で生きたみんなの強さの象徴と願いの結晶だ。それを無下にしない為にも、俺はここで自分の『拳』じゃなく、この『剣』で戦わないといけないんだ」

「…ふむ、それもまた一興か…では見せてみる、この偽りだらけの仮想の世界の力とやらをな」

「……………」

「いくぞ」

互いの運命に左右されながら世界を渡り歩いてきた2人がついに激突した。そこには一切の偶然はなかった。現実世界ではなく、この世界でこうしてぶつかり合うことはこの2人の運命だったのだ。果たして勝つのはどちらの「人間」か。「新たな世界を望む者」と「今ある世界を望む者」。地球を見下ろす星々の中で、運命の戦いの火蓋が切って落とされた

第62話 激戦

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラアアアア
!!!」

ズドドドドドドドドドツツツ!!!

「ちよつと原子崩し！撃つならもつとちやんと狙って撃ちなさいよ
！」

「うっせえなあ！照準ならちやんと合わせてんだよ!!じゃねえとアタ
シの能力はそもそも危険なんだっつもの！っつーかアイツに当たって
も碌にダメージ通らねえどころか本当に当たってるかどうかも分か
らねんだからもうとりあえず撃つしかねーだろうが!!」

「五月蠅い羽虫だ」

「ああもうっ！だったらこれでどうだつてのよおっ!!」

御坂美琴は自分のメニューを表示しアイテムストレージを開くと
ストレージ内の全ての武器をオブジェクト化した

「超電磁砲！こつちも使え!!」

「こんなモン俺には元から必要ねエ!!遠慮せずに全部ぶっ放せ！操作
は全部俺がやる!!」

「任せなさいっ！アンタらの武器全部もらい受けるわよっ!!」

バチバチバチバチバチツ!!

麦野と一方通行も美琴と同じように自分が所持していた武器をオ
ブジェクト化させた。そして美琴が全ての武器を自らの電気が発す
る磁力で自身の支配下に置く。剣を始めとし、短剣、斧、片手斧、槍
などの無数の武器の刃がエイワスを囲い込んだ

「ふむ、『剣の舞』と言ったところか…なんともこの世界らしいがな」

「それだけじゃないわよ！全部残さず当てなさいよ一方通行！」

「偉そうに俺に指図してンじゃねエ！いいからとつと撃てつてンだよオ！後先のことばつか考えてねエでぶちかませエエエ!!!」

「いっくわよおおおお!!喰らいなさい!!!」

ドゴオオオオオオオオオオ!!!

美琴が自分の目の前にある一本の片手剣を己の電撃で撃ち出す。

彼女の能力名であり、真骨頂の「超電磁砲」である

「ついでに全部もらつとけクソツタレがアアアア!!!」

バリバリバリ!!!ズドオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!

さしずめ『方位型超電磁砲』と呼ぶのが相応しいだろうか。美琴が放った超電磁砲の磁場と電力の向きを一方通行が変換することで、エイワスを包囲した全ての武器へと美琴の放った雷電を伝達させ、全ての武器が超電磁砲の弾丸となって火を噴き、エイワスに襲いかかった

「なるほど、これでは確かに逃げ場がないな……だが……」

バオオオオオオオオオオオオツツ!!!

「?!?!?!」

「それでも今の君たちは私の足下には届かない」

エイワスの背中から生えている青ざめたプラチナに輝く両翼が横一文字に薙ぎ払われる。それだけで己を取り囲んだ全ての超電磁砲をかき消し、美琴に向けて莫大な衝撃波が襲いかかった

「きやあああああつ!!!」

「ツ?!超電磁砲!!!」

「チイツ!!」

一方通行がエイワスの引き起こした衝撃波で起こった風の向きを操作する。おかげで美琴の身体は段々と失速していきダメージは最

小限で済んだ

「あ、ありがと……」

「礼なんて一々言ってる暇はねエぞ。このままじゃ十中八九こっちのジリ貧だ。ヤツは多分まだ本気の半分の力も出してねえ」

「その癖して第1位の反射をくぐり抜けるわ、私と超電磁砲の攻撃を喰らってもHPが本当に減ってるのかも分からねえわ……何より今の包围型超電磁砲は今までの中で最高の攻撃って言って差し支えねえだろ。それをあんな簡単に台無しにしてくれやがって……これ本当に私らで勝てるのか……?」

「どうした?もう終わりかな?」

「……あの余裕綽々の態度を見る限り本当にアイツは本気でやってないみたいね……参ったわね……こっちはもう最初っから本気の全開でやってるって言うのに……」

「おい第1位、テメエの『黒いアレ』ならどうなんだよ」

「オマエと垣根がいた時のヤツとの戦いで叩き込んではみたが一瞬で吹っ飛ばされた。それを考えつと今やったとこで結果は多分同じだ」

75層のコロシウムでは一方通行、麦野沈利、御坂美琴とエイワスによる激闘が繰り広げられていた。しかし、戦況は明らかにエイワスの優勢。エイワスのHPバーは依然として満タンを保っているのに対し、美琴達はみな回復結晶や回復ポーションをフル活用してやつのことで相対していた

「原子崩し、今アンタ回復結晶いくつ残ってる?」

「ポーションはまだ何個かあるが……結晶はさっき使ったのでスツカラカんだ……テメエはどうなんだ?超電磁砲」

「後2つ……でも私はポーションがもうほとんどないわ……一方通行は?」

「……結晶は1つ、ポーションはもオほとんどないとか言うレベルじゃなく数字的な0だ」

「……つかあ…絶望だな……」

「正直、ここまで強いとは予想してなかったわ……」

圧倒的な力の差を見せつけられ、三人の表情、精神から段々と疲れと絶望感が顔を出す。勝利を諦めてはいえないと分かってはいてもどうにも勝ち目が見えてこない。そうなれば後はモチベーションが低くなっていく一方であることは自明の事だった。そんな中、一方通行が2人より一歩前に出て言葉を切り出した

「……オマエらはこっから逃げろ」

「……ああ？」

「コイツは俺が殺る。だからオマエらは転移結晶使つてどっか適当な場所に逃げろ。恐らくだがあのヒーローがアレイスターをぶっ飛ばせばこの世界は終わる。それまでオマエらはどっかに隠れとけ」

「なっ…何言ってるのよ！アンタだけでコイツに勝てるハズないじゃない！それに此の期に及んで逃げられる訳ないじゃない！！アンタだってもう回復結晶1つしかないのよ!？」

「…テメエと同じよオナ顔したヤツを1万人も殺した殺人鬼を今度俺は庇ってくれるとはねエ…：…どんだけおめでたい頭してんだよ、オマエ。俺のこと許してねエンじゃなかったのかよ」

「そっ！それは今は関係ないでしょ！私が今言ってるのは…!!」

「関係なくねエよ。こういう仕事にや俺が一番向いてるって言うてんだよ。いいからとつとと……」

「バツチイイイン!!!」

「!?!?!」

一方通行の頬を突然に平手打ちが襲った。彼はエイワスに反射が効かないと分かった瞬間から反射を切っていたため平手打ちをマトモに喰らってしまった。しかしその平手打ちはエイワスのものではなかった。それは彼の隣に躍り出ていた麦野沈理によるものだった

「さつきから黙って聞いてりゃあよお……ふざけた事言うのも大概にしろってんだ teme エ!!」

「原子…崩し…?」

呆然とする一方通行なんぞお構いなしに麦野は彼の襟首を両手で掴みかかり、続けてなお一方通行に向けて怒号を飛ばした

「何が『こういう仕事にや俺が一番向いてる』だ!アホか teme エは!!まるつきり逆なんだよ!いいかよく聞けクソボケ!『この場において』その役割は teme エに一番向いてねえよ!!」

「!!!」

「 teme エにはあんだろ!?!他でもねえ帰りたい場所と守りたいヤツが!今までの行いについてこの騒動が収まったら話し合うって超電磁砲と今さつき決めたばっかなんだろうが!1人でカツコつけてんじやねえ!自分の事ばっか後回しにしてんじやねえぞ!!!」

己の内にある感情を全て吐き出し終わると、麦野は掴んだ襟首ごと乱雑に一方通行を投げ飛ばした。予期せぬ衝撃にたまらず一方通行は尻餅をついて倒れた

「ツツ!!」

「ちよっ!ちよっ!と原子崩し!!」

「おやおや、仲間割れかな?見つともない」

「ああ!?!うっせえぞクソ天使!今から teme エの目にも見せつけてやっからその目かっ開いてよく見とけ!」

そう言うとき麦野は一方通行と美琴を見向きもせず、エイワスの目の前へと1人歩み寄った

「ほお?君1人でやると言うのかね?まさかまだ君と私との力の差を認知していないとしたらそれはどうにも救えないぞ?」

「ムカつくがその通りだよ、私がこのままやっても teme エには永遠に勝てねえだろうな」

「では、なぜk」

「あくまで『このまま』やればな」

「・・・ほお?」

(あー。。。。。。。。。。。。よりにもよってこんな方法しか思いつかねえとはな。。。あくあ、私らしくねえなあ。。。いつだって自分の事を第一に最優先して、他のヤツなんかお構いなしって。。。。。。。。。そういうキャラだろうが。。。私はよお。。。。。。)

「ちよつと。。。原子崩し。。。アンタ何する気?」

「。。。第1位、悪いがテメエの『守りてえヤツ』の面倒までは見切れねえからな、ちゃんと反射の膜は使つとけ。こつから先は何が起こつか分かんねえからな。。。」

「お、おいテメエ原子崩し!まさかアレやるつもりじゃねエだろうな!?!ツザケンじゃねエぞ!テメエの方こそそれじゃ言ってる事とやろうとしてる事が違エンだよ!それにアイツにやそもそも通用しねえかもしれねエンだぞ!?!」

「んーなもんやってみなきや分からんでしょうが。少なくとも、さつき元から勝つつもりもなく啖呵切ったどつかの白うさぎよりはずつとマシだと私は思うけどね」

(。。。ああ、そういや何かいつかクラデイルが言ってたわね。。。)

そう心の中で呟きながら、麦野沈利は自分の記憶の中へと思いを飛ばした

第63話 悪人

「POH様、少々お時間よろしいでしょうか？」

「ああ？いきなりどうした？クラディール」

時は5ヶ月ほど遡る。ここは第22層のとあるログハウス。一見すれば平和という言葉が他のどの場所よりも似合いそうな場所だが、何を隠そうここは殺人ギルド「ラフィンコフィン」の隠れアジトである。湖が一望でき、心地の良い風が共に吹くログハウスのバルコニーに麦野沈利とその部下、クラディールはいた

「・・・少しお話しても致しませんか？紅茶をお淹れしますので」

「・・・ハッ、別に構わないけど、私の求める水準は結構高いわよ？付け加えると、今は紅茶の中でもレモンティーの気分ね」

「か、かしこまりました：直ちに」

クラディールは麦野の要望を聞くと順当に作業をこなしていきレモンティーを入れると、バルコニーのテーブルに置き、麦野が座っている向かいの座椅子に腰かけた

「・・・あら？アンタは何も飲まなくていいわけ？」

「元より私から持ちかけた話ですので。そのような畏れ多い事は出来ません」

「ほくくん…ま、いいけど」

麦野はレモンティーの注がれたティーカップを、普段の口調にはそぐわない程の上品な手つきでソーサーと共にティーカップを口元に運び、音を立てずにそっと一口飲んだ

「・・・へえく…悪くはないわね」

「お褒めに預かり光栄でございます」

「・・・で？どうした？血盟騎士団にスパイとして入り込む件か？私としてはこのギルドの中じゃ一番マトモに社会常識が備わってるアンタこそスパイとしては適任だと思っただけだ」

「いえ、その件に関しては異存はございません。P.O.H様のご意向とあらば最後までやり遂げる所存でございます」

「はあ？だったら何ですよ？」

「・・・以前から疑問に思っていた事があるのです」

「勿体振らずに言ってみなさい」

「では、無礼を承知でお聞きしますが・・・」

クラデイルは深く息を吐き、ゆっくりと一度だけ瞬きすると、その目で麦野を真っ直ぐに見つめ、その疑問を打ち明けた

「・・・P.O.H様は、現実世界では一体どのようなお人だったのでしょうか？」

「・・・はあ？」

余りにも突拍子もなく、予想外の疑問に学園都市の最先端の科学が誇る第4位の頭脳を持つ麦野沈利の頭の中では「？」マークが右往左往していた

「現実世界の事についてこのゲームの世界で聞くのはマナー違反だとは重々承知の上です。ですが、同じギルドにいる以上、どうしても気掛かりになってしまう部分があるのです」

「な、何を今さら・・・まあいい、どうせ話し始めたんだから言ってみな」

「この殺人ギルドを結成して以降、ずっとこの集団を牽引し続けているP.O.H様の『本来の人柄』が知りたいのです」

「・・・私の本来の人柄：ねえ・・・」

「はい」

麦野はティーカップとソーサーをテーブルに置き直すと、腕を組んだ後、片手を顎に当てて考え込むように唸った

「・・・まあとりあえず、現実世界じゃ高校生やってたわ」

「んなっ!? こ、高校生!?!」

クラデイルは信じられないといった様子で瞳孔を開いて驚愕していた

「・・・テメエ今『高校生にしてはえらくババアだな』とか考えてなかっただろっうな?」

「めっ! 滅相もございけません! 私自身まさか高校生の下に仕えているとは思わなかったものですから!」

「テンメエエエエ!! クラデイル! そりゃよーするに私の容姿が『とても高校生には見えなかった』って事言ってるのと同義だろうが!!」
「そっ! それは言葉の綾というものです! まさかここまで行動力があり、団体指揮を取るのが上手い人が高校生だとは思わないではありませんか!」

「はっ、どうだか。別にこのご時世、自分よりも年下のヤツが自分の上司なんてザラにあんだらうが。悪かったな年上に見える上司で」

「よっ、容姿に関しても良いではありませんか! まだまだお若いのですからこれからまた一段と魅力的になれるはずですから!!」

「うわあ・・・テメエそういうロリコンみてえな感性してたのかよ・・・正直ちよつと引いたわ。これからはあんまり話しかけんなよ?」

「そういう事でもなくてですね!! あーもうなんと申し上げれば・・・!!」

「ま、冗談はこの辺にしといて話を戻しましょうか」
「冗談だったんですか!? タチが悪すぎます! 仮にもここ殺人ギルドですよ!?!」

「・・・つつつてもよお、なんで今更そんなこと聞いてんだ? なんで私のリアルな事を聞きてえと?」

「・・・では、単刀直入に聞かせていただきます」

「ああ」

「POH様はMMOをプレイなさったのはこのSAOが初めてでございますか?」

「・・・まあな」

「では、こういったらオンラインゲームでキャラクターに身を宿すと人格が変わり、自分から進んで善人も然り、悪人を演じるような輩が多少なりとも存在する・・・という事実はご存知でしょうか?」

「別に聞いたことあねえが、ここの連中を見てりや何となく分かるわよ。このギルドの全員が全員、現実でも殺人鬼やってるなんざそもそもありえないだろうしな。むしろここの連中もほとんどが現実じやただの一般人だろ」

「おそらくはそうでしょうな・・・ですがだからこそ、私は気になるので」

「・・・アタシの現実世界の人格はこのSAOの世界とは違って善人で、こつちの世界じゃ自分から進んで悪人を演じてるんじゃないか・・・ってか?」

「はい」

「・・・なら、テメエ的にはどう思ってるんだ?」

「どう思ってる・・・と言いますと?」

「テメエから見て私は自分から進んで悪人を演じてるか、または現実でも変わらず悪人やってるように見えるかって聞いてんのよ」

「・・・なるほど」

「返答次第によっては現実の私について教えてやってもいいわ」

「・・・私の見る目が確かならば・・・」

「・・・」

「POH様は自分から進んで悪役を演じているようには見えません」
「・・・つまり、私は現実でも悪人だと思ってるか・・・」

そのクラデイルの言葉を聞くと、麦野は視線をティーカップのレモンティーが描く波紋に落とした。クラデイルからは麦野のその

表情の全ては見えないが、麦野の表情はどこか憂いに満ちているようで、それでいてどこか喜びに頬を緩めているようだった

「しかし……」

「あ？しかし？しかしなんだ？」

麦野はクラデイルがまだ話を続けると分かると、ティーカップへと落としていた視線を上げ、クラデイルの方へと視線を戻し、その麦野に向けてクラデイルは告げた

「この世界でのP.O.H様の『悪』は『信念のある悪』だと思っております」

「信念のある悪…ねえ…」

ハア…とため息を吐いた麦野はクラデイルに告げられた言葉を復唱しながら呟いた

「まあ…そんなのはこの世界だけでの話…かもな…つたく…どこぞの第1位に感化されたのか…らしくねえなあ…」

「…えっ？すみませんP.O.H様、聞き取ることがませんでした。よろしければもう一度お聞きしてもよろしいでしょうか？」

「あんまり乙女の独り言に口出すもんじゃないわよ。結婚できないわよそんなんだと」

「しっ、失礼しました」

「…話してやるわ」

「…はい？」

「私が現実世界じゃどんな人間だったか、どんな人生送ってきたのか…ってのをね。アンタなら話してやってもいいわ」

「ほっ！本当でございますか!？」

「ただし、これを聞くからには今回の任務を必ず完璧に遂行しろ。この話をしちまうと、メエを何で血盟騎士団に送り込むかも話さなく

ちやならねえ。テメエ自身の任務に関わる話なんだからよおく聞きなさい」

「はっ！ありがたき幸せ！」

すると麦野はレモンティーを全て飲み干し、自分の話を始めるための喉を潤した。麦野という1人の人間が自分という人格を他の誰かに打ち明けたのは、彼女が最も忌み嫌ったこの世界の部下が初めてだった

「ちよつ！ちよつと一方通行！原子崩しは今から何するつもりなのよ！？ねえってば！！」

「ツ！！伏せてろオオオオ！！」

「きゃあああああつ！！」

一方通行が御坂美琴を仰向けに倒し彼女の目の前に跪いて右手を目の前に突き出し、その周辺に彼の能力であり、ありとあらゆる力をはね返す『反射の膜』を作り出す。そして麦野はエイワスの目の前に躍り出ると片足で踏み切り、彼の身体の目の前へと跳躍した

「よおクソ天使。こつちの世界は楽しんでるかよ？」

「・・・嗜む程度にはな」

「そいつあ良かった：だけどこれからもつと楽しませてやるからその目でよく見とくことをオススメしといてやるわ」

学園都市の誰かが言った。学園都市序列第4位に位置する「原子崩し」という能力があると。そして誰かがふと疑問に思った。「なぜあれほどの能力が超電磁砲を上回らずに第4位に位置しているのか？」と。その答えは能力の「利便性」だ。原子崩しはその能力の性質上、絶大な破壊力を誇る反面、細かな応用及び制御においては超電磁砲に劣り、第4位に格付けされている

「一年前もそうだったが：テメエは私を下に見過ぎで第1位ばっかエゴ鼻負しすぎなんだよ」

「なに、ただ事実に沿った事を述べているだけさ」

麦野沈利は分かっていた。いつか学園都市の研究者に「原子崩しの能力を持つ君は、そのありあまる破壊力を生存本能がセーブを掛けている為、出力が普段から抑えられている」と言われた事があったからだ

「はん、今はそれでいいがあんま私を舐めてつと……」
「……………」

では…もしその「セーブ」がなかったら？

「後悔すんぜ？」

キュイイイイイイイイイイイ!!!

「……………ほお」

麦野の身体が内側から緑色の光を発し、明滅する。まるで自分の内側から「原子崩し」の能力を大爆発させようとしているかのように

「生存本能つつつても所詮は脳内の思考回路だ。だが、この世界じゃ私らの五感は全てナーヴギアに支配されてる上に、能力もただの数字で決められた『スキル』だ」

「……………なるほど」

「つまりこの世界じゃセーブを外すのなんざ簡単な話だ。能力使用の演算にただ思いつきり馬鹿げた出力叩き込むだけなんだからなああああ!!!」

麦野が発する緑色の閃光は明滅を止め、眩く光り輝く。そして麦野は空中で両手を目一杯に広げ、エイワスの目の前で浮かび上がった

（……………ああ、私も分かってんだよ。私もずっと…自分の居場所が欲しかったなんてことぐらい……）

（……………まさかこんなクソツタレな世界でアンタ達といった時の楽しさが分かるとはね…出来ればこの気持ちは現実に戻ってちゃんと伝えたかったんだけどな……）

（滝壺、フレンダ、絹旗…悪かったな…なんの断りもなくこっちの世界に勝手に行っちゃまって…大して気にしてねえのか？怒ってんのか？呆れてんのか？私的には少しぐらいは気にかけて欲しいとこなんだ

がな…)

(今アンタ達はちゃんとそっちの世界で生きてんのか？もしそうなら、私はただでさえババアに間違われるからこれ以上歳食う前にあっちに逝つとくぞ…多分地獄行きだけどな…だけど！アンタ達は現実で精一杯生きなさい！願うなら誰よりも幸せに！そんな人生を目指して！誰よりも力強く生きなさい!!)

(…今まで、ありがとね)

ズ ド オ オ オ オ オ オ オ オ オ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
!!!!

爆裂した。麦野沈利の身体が内側から幾千もの緑の閃光が飛び出した。彼女を中心として辺り一面が原子崩しの衝撃に襲われた。このコロシウムも、大地も、この75層そのものも、システムの不死の恩恵を受けていなければ一瞬で全てを更地に変えられていたであろう

「ぎゃあああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああ?!?!」

「クソがあああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああああああああ
!!!!!!」

麦野のHPバーが一瞬で亡くなり、その身体が爆裂したその最後の瞬間を見届けると、一方通行と美琴にも制御不能となった無数の緑の閃光が襲いかかる。美琴の体の前に盾となって立ち塞がった一方通行がその反射の膜で全ての閃光を跳ね返す。これ以上犠牲を払ってなるものか、今ここで失うのは麦野沈利だけではない。そう心に刻み一

第65話 衝撃の杖

ダンッ！ダンッ！

その手に剣と盾を構えた上条当麻とアレイスターが互いに向かつて宇宙空間の地面を蹴って駆け出す。するとアレイスターは自分の右手の人差し指をスイツと上条に差し向けた

「ッ!!」

上条はコロシアムの一件でアレイスターの魔術を目の当たりにしていた。だからこそ初撃でやられる心配はしていなかった。自分の目の前に身を守るように盾を突き出す

「Beast666」

アレイスターが律儀にも己の魔法名を呟く。するとその親指と人差し指を立て手で拳銃のジェスチャーを作る。その手で数字の花が散る。32、30、10。

ドガドガドガッ!!!

「ッ!?!」

立て続けに上条の盾に不可視の銃弾が炸裂し上条の身体が仰け反った。しかし、リズベットが鍛え上げ、上条が愛用していたその盾は幻の銃弾を見事に全て防ぎ切った

「なるほど…フリントロック銃では役不足か…では、これならどうかな?」

「…?」

上条が弾丸を防ぎ切ったのを見ると、アレイスターは既に己の構えを変え、銀色のねじくれた杖を左手に持ち替えて空いた右手で空間を緩く握って前へ突き出していた

(クソツッ! さっきのヤツじゃねえってことか!! 今度は何だ!?! あの構え的に剣術か!?! 多分アレは美琴と同じレイピア! だったらこっちも剣で!!)

構えたアレイスターの右手の上でまたも数字の火花が散る。13、5、32と。しかし、次はそれで終わらなかつた

『衝撃の杖』

ドスツ!!!

「ツッ!?!?」

アレイスターの短い宣告の直後、上条の構えた盾から少し外れ、彼の左肩に見えざる刃が突き刺さった。そして突き刺さった見えざる刃をそのまま押し込み、上条を突き飛ばした

「ぐはあっ!?! なっ…何がっ…どうなって…!」

上条の脳内は理解が追いついていなかった。アレイスターの手から伸びた『剣のような得物』は上条がイメージしていた細剣よりも遙かにその射程が長かった。そもそもがまず彼の魔術の仕組みが分からない。その時点で上条の不利は目に見えていた

「不思議かな?」

「ぎっ! ああっ…不思議でたまんねえぜっ…ヒール!」

上条の言葉を合図に、彼がベルトポーチから取り出した回復結晶が

パキンと割れ、半分ほどまで減っていた彼のHPが全回復させ、赤く染まりながら丸く開いていた左肩の傷口があつという間に塞がった

『靈的蹴たぐり』という代物でね。言ってみれば魔術師達の究極のごっこ遊びさ。平たく言えば、術者がジエスチャーした武器とその威力を相手に伝える。という物さ」

「・・・なるほど：連想ゲームみたいなものか」

「まあ概ねそのようなものだ」

（・・・だけど、銃弾に関しちやまだしもレイピアは射程が：）

「レイピアは射程があまりにも長すぎる：とでも考えているのかな？」

「・・・人の思考を盗み見るのはあんまり行儀が良いとは言えないな」
「いやなに、別に盗み見たつもりはないさ。『コレ』を経験した者の大半は最初に今の君と同じ思考を通る」

そう言うときアレイスターは左手に持つ「ねじくれた銀の杖」に視線を落とした

「・・・その杖か」

『衝撃の杖』：元々は我が師である『アランⅡベネット』が愛用していた伝説の杖だ」

「で？そいつは一体どういう霊装なんだよ？」

「いや、霊装という観点は悪くはないが：コレはそもそも霊装ではない」
「なに？」

「我が師アランもそうだったが、この杖に明確な実体は存在しない。その正体は靈的蹴たぐりの応用。君たちがそこにまるでこの杖があるかのように』想像する上で成立する：言うならば偽装の杖さ」

「・・・ってことは要するに別に必要なはその靈的蹴たぐりって術式だけで、杖は見せかけだけのオマケってことか」

「そういうことになるな。禁書目録がないにせよ中々の観察眼と魔

術知識じゃないか」

「・・・？待てよ、でも拳銃やレイピアはまだしも、杖なんて言われなきや想像出来ねえよ」

「そこはシステムの補助き。私はシステムからこの杖の素体をジェネレートしただけだ。つまりこのゲームそのものが、衝撃の杖がそこに『在る』と認知すれば私の手に杖は現れる」

「・・・なるほど。そういや確かにコロシウムでお前最初に言ってたっけな・・・『衝撃の杖をジェネレート』ってな具合で」

「そういうことだ。『杖』という概念をシステムが認知するだけで後は私の術式である霊的蹴たぐりが補完し、その姿形を偽装し、第三者であり、同じSAOのシステムに介在する君達もその杖を認識する・・・というカラクリだ」

「言うなればこれは霊装ではなく単なる補助術式でしかない。その効果は『魔術の威力を標的が思う10倍に増幅する』というものだ」

「じゅっ！10倍!」

「つまり、先ほどの物を例に挙げるなら、君が私のジェスチャーによって想像したレイピアの刃渡りは君の想像の10倍の長さを実現した・・・ということになる」

「・・・反則だろ・・・」

（だけど・・・そういうことだってんなら銃弾もレイピアもあの杖も魔術だ・・・だったら後は一度でもこの右手で・・・）

「右手で触れれば打ち消せる。とでも言いたげだな顔だな？良いのか？君はその剣で戦い抜いてみせると啖呵を切ってくれたじゃないか」

「ッ!?!」
「まあ当然といえば当然だがね。なにせ君は今日という日まで自分に襲いかかる脅威のほぼ全てをその右手一つで叩き伏せてきたのだから」

上条当麻の唯一の武器であり最強の切り札、幻想殺し。それを放棄し剣で戦うという断固たる決意のままに挑んだとはいえ、やはりどうしてもこれまでの自分本来の強みがそこに「在る」だけでその力がチ

ラついでしまつていた

「・・・へっ、いつ誰がそんな顔したよ?」

だが、上条当麻は選ばない。自分がどんなに不利な逆境に置かれようと、それを乗り越え続けて来た。それは必ずしも自分の右手に幻想殺しがあるからではない、いつだって上条当麻はそうだった。そこにどうしても曲げられない「信念」があるからこそ、自分にとって圧倒的に不利な状況を覆し、その幻想を殺し続けて来た

「あくまでもそう来るか…ならば良いだろう…だが次の攻撃を君のその貧弱な盾が受け切れるかな?」

「生憎だが、この盾の耐久値は伊達じゃないぞ?」

「それも結構…だが、君が想像する『次の10倍』によつては話も変わってくるだろうな」

「・・・は?」

「さて、続けようか」

そう言うときアレイスターはその右手の人差し指と親指を立て、拳銃を模倣し手の上で火花が散った

(ツ!!来るっ!!)

ダツ!!

そう直感し、上条は衝撃に備え自分の前に盾を構え、アレイスター目掛けて走り出した…しかし…

「衝撃の杖」

ドゴオオオオオオオツツツ!!!

バキイイイインツツツ!!!

「どわあああああああああああああつっつ
!?!?!?!」

もはやそれは大砲だった。その細い指先には不釣り合いな程の威力の銃弾が上条の盾に向かって爆裂した。弾の威力を相殺し切れなかった上条の身体はゆうに10メートルは吹っ飛び、盾の耐久値はゼロになり、欠片も残らず光のチリになって消えた

「さて、問題だ。なぜ今の攻撃は君のご自慢の盾でも防ぎ切れなかったか分かるかな？」

「げほっ…知るかよ…」

余りもの衝撃に飛ばされた身体を上条は咳き込みながら無理矢理に起こした。盾で防いでおいてなおダメージが伝わり、HPもいくらか減少し緑ゾーンを跨いでいた

「なに、簡単な話さ。拳銃の威力が10倍だと考たならば、衝撃の杖はそこを基準に更なる10倍の増幅を実現する。すなわち、今のフリントロック銃の威力は元の100倍だな」

「て、天井知らずってことかよ…クツソ…こんなところで…へばってんじゃねえぞおおお!!上条当麻ああああ!!!」

上条は自分を鼓舞する雄叫びと共に膝についた手を離し、しっかりとその右手で片手剣を握り直した

「…『クレイモア』」

アレイスターが右手で何かを握りこむような仕草をした途端、その手から火打ち石を擦った火花のような数字が散る。1、27、5と。気づけば彼の手の中には両刃の剣が握られており、それはまるで絵本に出て来るような偉大な王が持つ鋼の剣だった

「くれない、もあ…っ」

「ふむ、ソレをここで使うか…それもまた一興だが、ソレが私に通用しないと理解し、そこまでして自分を見失うか…いや、そもそも自分を確立させてすらいないだけか…」

「i h b 無 d g f r p 殺 w q !!!」

ノイズ混じりの言葉が放たれた直後に莫大な殺意の塊が振り下ろされる。感情任せにソレを振り回す彼以外の誰にもその言葉の真意は読み取れない

「全く、品のない…」

バゴオオオオオオオオオオオ!!!

「があああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああああ
!?!?」

エイワスのプラチナの翼が一方通行の黒翼を一撃で叩き伏せた。もはや力の次元が違った。一方通行の身体は軽々と吹き飛ばされ、HPが完全になくなるすんでのところで止まった

「一方通行!!!」

美琴が吹っ飛ばされた一方通行の元に駆けつけ、自分の残り少ない回復ポーションを一方通行の口に無理矢理突っ込んだ。みるみる内にHPバーが回復し、なんとか危険域を脱した

「ゲホツ…チツ…」

「君の翼の威力は確かに認められるべき代物だ。洗練されれば私の翼にも相対できることだろう…だが、今の君の翼は単に『重い木の棍棒』を振り回しているだけだ。対して私の物は『徹底的に鍛え上げた鋭い刃を持つ剣』といったところか…無論、SAOの剣などと比較されても困るのだがな」

己の惨めさから御坂美琴は地べたにへたり込み、その瞳から留めなく涙が溢れ始めた。一滴、また一滴と滴る涙のしずくが美琴の手の甲に、地面にいくつもの染みを作る

「・・・おい、勝手に勘違いしてンじゃねエぞテメエら」

「・・・グスツ・・・？」

「勘違いとは何かな？ 一方通行」

「足手まといだア？ 邪魔にしかなくてねエだア？ いいか、一つ教えといてやる：俺ア最初っから一緒に戦ってやってるつもりなんかねエよ。俺からすりや超電磁砲も原子崩しもあのヒーローも全員足手まといだ」

「・・・」

「アクセラ・・・レータ・・・」

「所詮テメエらなンギ3位とか、4位とか、果てはレベル0だろオが：バカにしてンのか？ 俺は最強だぞ」

「くつくくつ、この状況でもなお自分を最強と疑わないか」

「ああ」

嘲笑するエイワスに向けて、一方通行は幻想殺しの少年よりも真っ直ぐな瞳で、真っ直ぐな言葉で言い放った

「確かに俺みてエな最強の周りじゃオマエらは足手まといだ」

「・・・」

「だがなア、たとえ足手まといでも、今この場所で、何一つ、どれ一つ取っても、俺の力になってンだよ!!!」

「!!!」

「あ! あそオだ!! 守りてエンだ! 失いたくねエンだ!! そんなことを想像したくもねエンだ!! ただ壊す為のモンじゃねエンだ!! 大切な物を守る為の『最強』になりてエンだ!! その為なら俺は：何度だってテメエに立ち向かってやるよオオオオオオオ!!!」

その右手に反射の力を携えた拳を握りしめ、一方通行が地面を蹴った。その瞬間に一方通行の体が音速を超え、エイワスに襲いかかる

(また反射か…芸がないな…所詮その拳は私には届かないと何度試せば…)

「バッキイイイイイ!!!」

「ツ?!?!」

「…!?!…あア?」

ズザザザザアアアア!!!

「当たっ…た…?…?」

「な、何がツ…?!」

エイワスに初めて明確な拳が当たったという感触があった。エイワスのHPが僅かながらも初めて減少を見せた。エイワスはその翼があるにも関わらず、初めてその足で地面に立たされた

「へ、減らした?一方通行が…?あの黒い翼でも減らなかったアイツのHPを…ただの能力使った拳で…?」

「い、一体何が…?」

もはや拳を当てた張本人である一方通行にも訳が分からなかった。あり得ない物を見るような視線で自分の右手をまじまじと見つめた

「コードネーム『ドラゴン』純粋な物理法則の世界に佇む天使。その名をエイワス…」

「…?!?!テっ!テメエ!!何でこんなところに!?!」

気がつけば新たな天使が舞い降りていた。いや、それを天使と呼ぶべきなのかは分からなかった。頭上にエイワスのような光輪はなく、翼は一对ではなく三対。その全てがどこまでも純白で、その瞳に『碧』

を宿した少年…

「あなたが司る純粋な物理法則の世界に…私の『未元物質』は通用する
のでしょうか？」

「…学園都市序列第2位…『未元物質』…垣根帝督か…」

第67話 トップ3

「か、垣根…!？」

「お久しぶりです、一方通行さん。そしてそちらは初めましてですね、御坂美琴さん。私は学園都市序列第2位の垣根帝督といいます」

純白の少年、垣根帝督は屈託のない笑顔で2人に告げた

「アンタが…学園都市第2位…」

「はい。誠に恐縮ながらも御坂さんの一つ上の順位にこの身を置かせていただいております…」

「何ていうか…白いわね…人格破綻者の集まりの超能力者の一人にしては随分と礼儀正しいみたいだし…」

「まあここにいる私は能力を発現した当初の私とは少し法則が異なるのでそう思われるのもごもっともかと」

「なるほど…君の『未元物質』が作用し、私の位置する物理法則を君達の理解の通ずる段階にまで引き落とすことで一方通行の反射が適応した…という訳か…」

エイワスは殴られた頬をさすりながら自分なりの分析を語った

「まあ的確にはこのSAOのシステムがそういう風に誤認するように私の能力で働きかけただけなのですがね」

「…?」

「お気づきではありませんか?この仮想世界に存在する以上、あなた方もGM側にいるとはいえどHPを持つ電脳化されたプレイヤー。ならばその根底を今一度覆してしまえば良いというだけの事です」
「くつくつくつ…これはとんだ抜け道を突かれてしまったようだな…まさかそこまで見抜いているとは…」

「これでも一応、他でもないあなたに存在を消されたホスト崩れです

ので」

「!!そ、そオだろうが垣根! テメエはあの時コイツに殺されてんだろオが!! どうやってここに:!!」

「初春飾利さんですよ」

「...ええっ!? う、初春さん!? な、ななな、何でそこで初春さんの名前が出てくるわけ!」

「御坂美琴さんには後で説明するとして、私は存在が消えるほんの寸前に、私という『意志』を宿したデータをS A Oのデータ回線に残留させることに成功したんです」

「...なるほどそオいうことか。そうやってS A O内のデータの海を漂っている内に俺のユーザーデータに辿り着き、そこから俺たち『グループ』が使った俺をS A Oに送り出したパソコンのデータに辿り着いた: つつーことか」

「相変わらず理解が早くて説明の手間が省けます。その通りです。一番最初にその異変に気づいたのは土御門さんでした。一連の事情を説明するなり、そこから連絡を取って下さり、初春さんが再び限定的な期間ではあるもののグループに再加入。私のデータの復元を快く引き受けて下さり、S A Oのデータ解析と同時進行で私を再び『プレイヤー』としてこの世界に送り出してくれました。タイミング的には本当にギリギリのところでしたがね」

「あの花女がなア:」

「ええ。初春さんは一方通行さんからS A Oのデータを託されてからずっと独力でデータの解析やアクセス方法を探っていました。そのおかげもあり、私の中に残存していたデータを提供したところ、後の作業はとてもスムーズに進みました」

「...別に俺自身が託した覚えはねエよ。しかし訳が分かんねエな。あん時のテメエとは別のテメエとは言えど、テメエはあの花女を痛ぶった過去があんだろオが」

「まあ最終的に私があそこに辿り着いたのは消滅してから半年後ですし: 私か初春さんとその騒動を起こしてから約一年半が経つてますから、それだけの時があれば嫌でも人は変わりますよ。みんな必死な

んです。自分から何かの力になろうと、始まりから2年経ってしまっ
た今でも」

「・・・そオカ」

「さて、ここまで聞いてしまったのなら、流石にやるしかなかったで
しょう?」

「あア?」

「初春さんにもここに来る時に約束したようですし、先ほども自分で
宣言してましたでしょう?」

「・・・」

「光の世界で一片の曇りなく笑える日を迎える為に、戦いましょう。
一方通行さん」

「・・・当たり前だ。クソツタレ」

「ちよつと?」

「あア?」

「いくらそこまで詳しい事情を知らないからって私を置いてかないで
くれる?一応、この世界のプレイヤーとしては私を知らない人はほと
んどいないんだから。それに・・・」

「あア?それになンだ?」

「私が一緒にいてあげるだけで、力になれるんでしょう?」

「・・・さアな」

「アンタが言ったのよ。だから自分の言動には少しは責任持ちなさ
い」

「分かった分かった。今責任感してるつつウの」

「どうやらとても心強い味方そうですね。一方通行さん」

「・・・ケツ、まさかこんな日が来るたアな」

一方通行はそう言うと、改めてエイワスに向き直り、垣根帝督が一
方通行の左隣に降り立ち、右隣に御坂美琴が彼らに並んで立った

「まさか学園都市のトップ3が…手を組むことになるとはなア」

第68話 天使の力

「みなさん急いで下さい！エイワスが私の未元物質に対応し始めたらもう間に合いません！」

「上等！」

フアサアツ！バチバチバチツ！

垣根帝督が6枚の翼を広げ、御坂美琴の身体の周りから紫電の閃光がほとばしった

「さて、仕切り直しといこうか」

エイワスも二枚のプラチナの翼をあおぎ、再び空中へと浮かび上がった

「行くぞオラア!!!」

一方通行の右手が振り下ろされる。その瞬間大気の向きが操作され、土煙を巻き上げながら風と大気の塊がエイワスを襲った

「君たちは1つ忘れてるようだな」

ゴウツツツツツ!!!

エイワスの青ざめたプラチナの翼がはためくと一方通行の放った大気の塊は霧散し、一方通行を強烈な爆風が襲った

「チイツ!!」

「確かに私に攻撃は通るようになったようだが、まだ私の力そのものは健在だぞ?」

「別に忘れてるつもりなどありませんよ」

余裕の表情で語るエイワスの背後には既に垣根が回り込んでいた

「・・・いつの間に後ろに」

「私のスピードを侮らないでいただきたいものですね？」

ドゴンツ
!!!!

垣根の三枚の翼が強烈な衝撃を伴ってエイワスの後頭部を殴りつけた

「ふむ……」

エイワスのHPバーが微かに減少する。しかし特に慌てる様子もなく、すぐさま体勢を立て直した

「ゆとりを持ちすぎるというのも考えものだな…いかんせんHPという視覚的な物でも注意が疎かになる…」

「そうね、だから今アンタは自分の真上で何が起こってるのかも気づけないのよ」

今度は背面ではなく正面から声が聞こえた

「？ 御坂美琴か…」

「その『いたの？』みたいな反応やめてくれないかしら？まあ、その名刺代わりに今から嫌というほど私の存在感を知らしめてあげるわよ！」

そういうと美琴は片手を上げ自分の頭上の空を指差し、その指先を追うようにエイワスも空を見上げた。すると自分の頬をパリパリと乾いた空気に撫でられたのを感じた

美琴の怒号と共に莫大な電力を帯びた高電離気体が降り注いだ。現実世界で起こる雷を全て一度に集めても足りないのではないのかと思うほどの雷の究極を追い求めた末の一撃。その『神の雷』にも酷似した制御不能の力はエイワスを中心として、高電離気体を発生させた張本人である三人にも牙を剥いた

オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

.....

「ゲホッ！エホッ！あ、ありがと垣根さん……」

ファサ……

「いえ、礼には及びませんよ」

御坂美琴と垣根帝督は巻き添えを喰らうことなくその身の安全を辛うじて確保していた。高電離気体が降り注いだ直後、垣根の翼が垣根自身と美琴の身体を包み込み事なきを得た

「はははっ……ああしんどいわね……これ本格的に電池切れね……もう0.1Vも出せる気しないわ……」

「ぺっ……アア死ぬかと思った……」

「アンタは反射があるんだし、元々はアンタの能力で作ったものなんだから平気じゃないとおかしいでしょうが」

「ちげエよバカ、酸素一気に奪われつとコツチも辛いんだつつの」

「元々この世界では生きていくのに酸素は必要ありませんが？」

「……ああ、アレだよ……要は気持ちの問題なんだよ。気分だ気分」

「まあ……こんだけの電撃を真上からぶちかませば流石の相手も……」

「そうですね……これならばきつと……」

「それは所謂『フラグ』というものではないかな？諸君」

バオオオオオオオツツツ!!!

「!!!」

!!!

翼をはためかせて生じた烈風が辺り一面の砂埃を一掃し、奥からエ
イワスが姿を現した

「ふむ、流石の私でも今のは少々焦りを覚えたな…HPも半分を切つ
た頃合いか…途中で未元物質に対応しなければ確実にやられていた
な」

「!?こ、ここまで早い段階で対応されるとは…ツ!!」

「…ははっ…アンタのHPバーが緑またいだだけで…私はもう…ま
ん…ぞく…かし…r……」

バタツ……

「ツ！御坂さん！御坂さん!!」

美琴がうつ伏せにバツタリと倒れ、垣根が美琴の体を揺さぶって意
識の回復を試みるが、美琴の瞼は少しも開かず、うんともすんとも
言っていないかった

「安心しろ垣根。超電磁砲は能力の使い過ぎで気絶しただけだ。所詮
は俺らも脳の五感でこのゲームやってんだ、演算のし過ぎで脳に負荷
がかかりやそりやア無理もたたる」

「安心か…果たしてそれが出来るのかな？この状況で」
「くっ……」

「奇しくも『あの22層の時』と同じ光景だな？役者は原子崩しと超電
磁砲の違いがあれど、姫君は眠りにつき、残るは君たち2人…まあ
もつとも…これから先もあの時と同じ光景が広がるのだろうか？」

「……」

ザツ…ザツ…ザツ……

「……？」

一方通行が突然向き合っていたエイワスから視線を切り背を向け
て歩き出した。その足取りの先には、垣根の介抱で仰向けになり静か

に眠る御坂美琴がいた

「安心して眠ってろ、オリジナル」

一方通行はしゃがみ込み、赤子を寝かしつけるように御坂美琴の額に優しく手を当てて話しかけた。その口角は少し上がり、強張っていた表情は綻び、どこか暖かで柔らかな顔立ちだった

「お前にとってのヒーローは、アイツだけでいい…こつから先の俺は見なくていい……」

一方通行の翼から小さな黒い翼が渦を巻く。一方通行の不安定な感情が表れているような…広がることのない翼が織りなす、小さな、小さな渦だった

「次に目エ開けた時は…何もかも終わってつからよ」

バキバキバキバキバキバキ
!!!!

氷に亀裂を入れるような音と共に、一方通行の翼の色が変わっている。殺意に満ちた暗黒の色から、汚れのない純白の翼。根元から先端まで、ものの一瞬で外見の色彩から内面の本質まで、その全てが切り替わっていく

「!!!」

(私と同じ純白の翼…でも性質が全く違う…一方通行さん…信じていましたよ…!あなたならいつか必ずと…!)

それは同じ純白の翼を持つ垣根とも違う代物だった。一方通行の頭部のすぐ上にはエイワスの物にも近い、純白の小さな輪が生じていた。それが彼の変化。この仮想世界に特異な力を吐き出す源となっ

「ていた、精神の変異」

「・・・『過去に大きな過ちを犯し、その罪に苦しみながらも正しい道を歩もうとする者』・・・か・・・」

一方通行は紛れもない素質の持ち主だった。そう、まさにこの瞬間。どんな理不尽な展開も覆しうる無限の可能性を持つ「ヒーロー」になったのだ

「ギア・・・エンドロールの時間だクソ天使」

第69話 最強

御坂美琴の額から手を離し、再びエイワスと一方通行は向き直ると、その身体をゆつくりと浮かび上がらせた

「・・・悪くねエモンだな」

「そうかね」

一方通行の劇的な変化にも、エイワスは一切の動揺を見せなかった。それどころかまるで新しい楽しみを見つけたかのようにその表情は嬉々の色に満ちていた

「これでようやく君は…この世界を肯定し得るピースになった訳か…」

「ンだよ、もオ少しぐらい驚いてもいいンじゃねエか？」

「元々『人間』でない私に人間味を求める方がナンセンスというものさ」

「・・・まあやつとこさつとこだが、テメエの言う『徹底的に鍛え上げた鋭い刃を持つ剣』ってのに俺もたどり着いた」

「ふむ…ここまで来ると『ソードアート・オンライン』とは名ばかりだな…まあ一筋に馬鹿に出来んが…」

「ハッ……………」

「フッ……………」

バサツツツツ
!!!!!!

純白の翼と青ざめたプラチナの翼が一瞬で100メートル以上に広がった。両翼の羽根が舞い散り、その輝きが反射し合い、万華鏡のように光彩が移り変わり、終劇の舞台を飾る

「・・・終わりだ。一方通行」

エイワスのプラチナの翼が横薙ぎに振るわれた。エイワスが司る『ありとあらゆる物理法則』の全てを無に帰す終末の一撃。もはやその滅びの一撃から逃れる術はない。しかし……

ギイイイイイインツツ
!!!!

「?????
」

エイワスが抱いたのは疑問だった。気づけば自分の翼が一方通行の純白の翼によって軽々と弾き返されていた

「『解析完了』だ。クソツタレ」

「ばッ……バカな!?!『反射』だど?!一体どうやって……未元物質には既に対応しているハズ……これ以上私の攻撃をやり過ぎす術など……!!」

「簡単な話だ。要はただの言葉遊びなんだよ」

「言葉……遊び……?」

「……やつとこさつとこだが、テメエの言う『徹底的に鍛え上げた鋭い刃を持つ剣』ってのに俺もたどり着いた」
「ふむ……ここまで来ると『ソードアート・オンライン』とは名ばかりだな……まあ一筋に馬鹿には出来んが……」

「テメエは……今時、俺の言葉を否定しなかった。つーこたアそれは俺の力がテメエの力とほぼ『同質』の次元にたどり着いてるって事に他

ぜながら、まるでこの仮想世界に溶け込むように、終わりを告げる閃
光となって消えた

第70話 幻想

「……んん、は……？」

上条が目を開けると、辺りは先ほどまでいた宇宙ではなく不思議な空間が広がっていた。夕暮れに包まれる天空に、透明な分厚い水晶の床が浮いていてそこに二本の足で立っていた。その透明な床の下には夕焼けで赤く染まった雲海が広がっており、その雲一つ一つがゆっくりと流れていた

「なんか記憶が曖昧だな…確か俺はアレイスターの剣で右腕を切られて…それで…ってひよっとしてここが天国ってヤツか？まっ！まさか俺死んだってことなのか!？」

上条は自分の身体中をペタペタと触り自分という存在の有無を確かめた

「……実体はあるな…てか切られた右手もあるし…いやなきやダメか？幽霊だって自分の身体ぐらい触れるもんか？ってか世間一般で言う幽霊のイメージってもんは足がなくて宙に浮いててもっとこう……」

「なかなか絶景だな」

「……へ？」

いきなりどこかから話しかけられ、思わず素っ頓狂な声が出るが、そんなことは気にせず自分の周りを見渡すと、自分の右側の少し離れたところに、研究室で着るような白衣を身に纏った男がいた

「……誰だ？お前」

「この姿での対面は初めてだったか…改めて自己紹介をしておこう。」

ヒースクリフ改め、本名『茅場晶彦』。そう言えば伝わるかな？上やん君…いや…上条当麻君」

「かや、ば…？アンタがヒースクリフの中の人か？」
「いかにも」

上条は自身を茅場だと名乗る男を神妙な面持ちでじっと見つめた

「…そうか…この世界の人たちはみんなアバターの顔が現実世界そのままなのにアンタは違うみたいだから全然分かんなかったぜ」

「私は現実世界での顔が大半の人間に知られているからな。そのままの顔でプレイしてしまうと正体が一目でバレてしまうのだよ。まあ君は違ったようだがな」

「はははっ、正直なところ上条さんはこの手のゲームの話題にや疎かつたし、発売当初のニュースとかで一回ぐらいはアンタの顔も見てるんだろうけど、なにせ二年以上も前の話だ。逆に覚えてる方がスゲエってモンだろ？」

「そうか…そのゲームがまさかこんなことになるうとは、思いもしなかっただろうな…」

「…まあな。でも、アンタは悪くねえよ。ちよつとだけ自分の願望に純粹過ぎただけだ」

「…すまなかった」

「気にすんな。こんな不幸に巻き込まれるのは慣れてる」

「ふっ…一歩間違えば死に直結するこの世界を不幸の一言で片付けられるほど凶太い人間も君くらいだろう」

「…で、だ。さつきやられちゃったアンタがいるってことは、やっぱりここは天国なのか？」

「下を見たまえ」

「…下？」

上条が視線を下に向けると、足場から遠く離れた空に何かが浮かんでいた。円錐形の先端を切り落としたような形をし、薄い層が無数に

積み重なって全体を構成する、鋼鉄の城

「アレは…アインクラッドか？」

「全体の外観を見るのは初めてかな？そう、ここは天国ではない。しかしアインクラッドでも、SAOの世界でもない。君が先ほどまでアレイスターと戦っていた宇宙空間と似たようなもの…言うなればそれらと異なる世界ではあるものの、それらと同列に存在する『位相』だ」

「なるほどな…で、俺とお前はなんでここにいるんだ？」

「…この鋼鉄の城を…終わらせる時が来たようだ」

「…は？」

「大方の話はアレイスターに聞いたのだろう？」

「え？あ、ああ…一応な」

「君は偶然このゲームに…ひいてはこの世界に来たわけではない。この世界に来るべくして来た。いわばこの世界に君が来ることは最初から決まっていた。いわば運命のようなものだ」

「…ああ、そうみたいだな」

「私もアレイスターの『計画』には薄々勘づいていた。そして君の存在を知るに至った。アレイスターの計画に君は必要不可欠だからな」

「ああ」

「だからこそ、私はこの世界に1つ細工をしておいた。遠からず来るべきこの時の為にこの位相を作り出した。つまり、この空間は私と君だけの為のものだ」

「…ひよとしてアンタって『ソツチ系』か？」

「真面目な話だ。それと勘違いするな、私にも現実世界に恋人ぐらいはいる」

「いやだからそれはソツチの恋人…」

「真面目な話だと言ってるのが分からないのか君は」

「す、すみません」

「まあいい、話を戻すでしょう。要するに君と私はゲームオーバーになる時にここを訪れるように設定されていたのさ」

「ゲームオーバー？ってことはやっぱり俺はアレイスターのあのデツカ
い剣で切られた時に…」

「だが、君の『中の存在』は新たな『別の物』として既に外で動いてい
る。君というシステムの意志とは別にね」

「は、はあ!? それじゃアレイスターの思う壺じゃねえか! こうしちや
いられねえ! 早く俺をインクラッドに戻してくれ!」

「慌てるな、この空間で過ぐす1時間はインクラッドの0.01秒
にも満たない」

「へ? そ、そら便利なこつて…」

「さて、ここからが本題だ」

「………」

「…いつだったか、君はこの世界でこんなことを言っていたな。『こ
の世界での強さなんて単なる『幻想』だ。そんなものよりも、もつと
大切なものがある』…と」

「ああ、覚えてる」

「本当にそう思っているのかい? この世界での強さなんて単なる『幻
想』だと」

「………」

上条当麻は茅場の問いにすぐ答えることが出来なかった。少し下
に俯くとインクラッドがその視界に写った。すると苦虫を潰した
ような後味の悪い顔を浮かべ、思考を巡らせた

「どうかな?」

「……あん時は…」

上条は重りがのしかかったような口を開き、暗い表情で話し始めた

「シリカにその言葉を言った時は、本気でそう思ってた」

「………」

「でも、今は違う」

上条は俯いていた顔を上げ、その瞳に確かな光を宿し、真つ直ぐな言葉でそう言い放った。

「俺は今までずっと、この『右手』で戦って来た。この右手だけが強さだった。現実世界でも、このSAOの世界でもそれは変わらなかった」

「だから、知らず知らずの内にずっとそう思っちまってたんだ。でも、それは違った」

「……」

「ここは学園都市じゃない。能力を持つ人なんていない。異能の力を打ち消す能力を持つてる人なんていないんだよ」

「確かにこの世界の『強さ』は所詮数値のパラメータだ。現実世界には何も生かされない。けど……この世界で生きる人にとっては、今いるこの世界で手にした強さも、立派なその人の強さなんだよ」

「だってそうだろ……そうじゃなきゃ、それはこの世界で生きてきたみんなの頑張りを否定することに他ならねえじゃねえか!!!」

「死んだら終わりのこの世界で、みんな強くあろうとしたんだ!だからここまで来たんだ!生きたいと思ったから、帰りたいと思う場所があったから、守りたいと思った物があるから強くあろうと思えたんだよ!!!」

「だったらそれは紛れもない『強さ』なんだ!理由なんてなんだっていいじゃねえか!!それは決して数字で語れるもんじゃない、その人だけの強さなんだ!!!」

「なあそうだろ!上条当麻……この世界の強さが幻想だって言うなら……その幻想はぶち殺すしかねえだろ!!!」

「……そう思ってくれているなら、何よりだよ」

「……そうか」

「だが、その後の君の意見まで否定する気はないさ」
「?」

「覚えていないかね?君が『そんな物よりももっと大切なものがある』」

とその後と言った言葉を」

「・・・『人との繋がり』」

「そう。人との繋がりだけは、強さやパラメータでは測り切れない。私が言うのもなんだが、それはSAOも含めたオンラインゲームの醍醐味の1つであるが故に、人との繋がりというのも時に強さとなり得る」

「そしてそれは決して『幻想』ではないさ・・・君の幻想殺しでもきつと打ち消すことはできない、唯一無二の強さだろう」

「・・・」

「それを顕著に証明し、語っているのが、君が今まさに背負っている結果的に最後まで捨てきれなかったその剣ではないのかね？」

「・・・ははっ、そうかもな」

微笑を浮かべ、上条当麻は自分の背中の剣の柄に手を伸ばした。軽くその手になじませるように一度握ると、照れ臭そうにその腕を下ろした

「・・・行きたまえ、上条当麻。ヤツに・・・アレイスターIIクロウリーにこの世界の強さを見せる時だ」

「ああ」

「あくまで当事者の1人として願う。この世界を・・・いや、現実世界やひいてはあらゆる位相の枠や法則を超越するこの世界の法則をさらに超える力を・・・見せてくれ」

「・・・ああ」

「さて、そろそろ君をタイムラグなしにアインクラッドに戻すことの出来る限界の時間のようだな」

「アンタは来ないのか？」

「ああ、すまないね。ここにいる私はあくまでも『茅場晶彦』という意識のエコー・・・『残像』だ。君があちらに戻った後、間も無く私という意識は、現実世界からも、この仮想世界からも残らず消える」

「・・・そうか」

第71話 願い

「？」

アレイスターは目の前の光景に疑問を抱いていた。上条当麻の右腕を落とした瞬間、彼の肩口から自分が求めた『何か』を引き出すことに成功したと思えば、まるで世界が静止画のように固まって何も動かなくなっていた

「・・・テメエが」

静止した世界の中で最初に動いたのは上条当麻の口だった。右腕を飛ばされHPも底を突いたはずの人間が明確な声を発していた

「どうして魔術をそこまで恨んでるのか深い理由は知らねえけどな
…」

パァン！と、地に落ちた上条の右腕と剣が金色の光の粒になって弾けた。すると次の瞬間、光の粒が上条の肩口に集まっていき右腕が蘇り、その手の中に一本の剣が握られていた

「人の命があるこの世界を…まるで自分の所有物みたいに扱ってんじやねえよ…この世界で生きてきた俺たちの…みんなの生き様を…踏みにじってくれてんじやねえ!!!」

上条が横薙ぎに振るった剣が、彼の肩口から飛び出していた莫大な力を持つ「見えざる何か」をいとも簡単に切り裂くと、ポリゴンの欠片に変え粉々に四散させた

「!? 『事象の上書き』か? いや…それだけでは……ないツ!」

粉々になったポリゴンの欠片が上条の持つ剣を包み込むように集束し、黄金に光り始めた。その光はやがてエメラルドの剣を覆い、その色を変えるだけでなく、その形を、剣そのものの本質を変えていった

「まさかつ…まさかその剣はっ…!」

アレイスターはただ驚愕していた。眼前で起こる想像以上の現象に動揺するあまり、唇が震えていた

『幻想殺し』：『竜王の顎』：『神浄の討魔』という存在概念の確立…!そして『剣』という『象徴武器』足り得る器…!!」

「まさか…ここで…あの『天叢雲剣』を再現したというのか?!?!」

上条の手に収まっている剣は、アレイスターが手に持っている大剣よりもずつと小さく、細い剣だった。かつてその身を人間界に落とされた和の神がその手で振るい、強大な魔物をその刀身に封じ込めた黄金に輝く神剣

「関係ねえよ」

動揺を未だに隠しきれていないアレイスターに向けて、上条当麻は重く深く、短い言葉を告げた

「アンタからすりゃ『コイツ』はそんなご大層立派なモンに見えてんだろうけどな…重要なのはそんなんじゃないやねえんだよ」

「なん…だと…?」

「コレを作り出したのは…そんな堅苦しい能書き提げたモンだけじゃねえ…この世界で生きていたみんなが作り出したんだ…さつきまで俺が持ってた剣とまるで違う」

「この剣はな…『この世界に生きたみんなの意志』そのものなんだ!!!」
「!!!」

「だからテメエには絶対に負けねえ…1人よがりの『願い』でこの世界を作ったテメエなんか…この世界を生きてきた俺たち10000人の『願い』が負けるハズがねえだろうが!!!」

「こ、この…このクソガキが! あああああ
あああああああああああああああああああああああ
!!!!!!」

怒り狂ったような絶叫と共に、アレイスターの持つ大剣クレイモアが上条目掛けて振り下ろされた

「衝撃の杖オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
!!!!!!」

先に上条の右腕を吹き飛ばしたクレイモアの威力は10000倍。曰く、その10倍。この大剣の持つ威力は100000倍にまで増幅していた。しかし…

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおお
!!!!!!」

バキイイイイイイイン
!!!!!!

上条の咆哮と共に振るわれた天叢雲剣がクレイモアの刀身を真っ二つに叩き切った。100000倍の力を持つ剣を100000人の願いを持つ剣が上回った

「ツ!? そ、そんなハズが…そんなハズがあつてたまるかああああ
ああああああ!!!!!!」

ガランツ! ガランガランツ!

アレイスターは折れたクレイモアを投げ捨て、左手に持つ衝撃の杖を乱雑に地面に叩きつけた。手持ち無沙汰になった両手で自分の怒りのままに自らの頭を掻きむしった

「システムコマンド！対象のIDをオールデリート！！！！」

アレイスターがGM権限を行使しSAOのシステムに命令を下した。すると上条当麻の足元に宇宙空間で発生するブラックホールのような巨大な穴が出現し、上条の身体を吸い込み始めた

ゴオオオオオオオオオオオ！！！！

「消えろおおおおお！！！！上条当麻ああああああ！！！！！！」

「・・・効かねえよ、こんなもん」

短い宣告の後に、上条は天叢雲剣を逆手に握りそのまま足下のブラックホールに一直線に突き刺した。するとバキバキバキバキイ！！という音を立てながら足下のブラックホールは粉々に消えてなくなった

「なっ!?この世界のシステムの力さえも上回っただと!?あり得ない！一体何をどうやって…!?」

「どうした?もう打つ手なしか?」

ザツ…ザツ…ザツ…ザツ…

上条は逆手に持った黄金の剣を持ち直すと、ゆっくりと一步一步を踏みしめながらアレイスターに近づいていった

「シツ…システムコマンド！IDアレイスターIIクロウリーを強制口グアウト…！」

「逃げるなよ」

「ッ！！」

上条当麻の放った一言は、まるでナイフのように鋭く、突き刺さる言葉だった

「テメエだけがやりたい放題やって、ピンチになったら逃げようなんて言っただけでそうはいかねえんだよ」

「あ、ああ……」

（考えろ……あの天叢雲剣をどうにかするにはどうすればいい……！システムの手すら上回るアレをどうやって……！）

アレイスターは後ずさりしていた。衝撃の杖による100000倍の魔術を打ち消し、システムの力をも打ち消した上条当麻に純粹な恐怖を抱いていた

「目障りなんだよ……どいつもこいつもヒーロー面しやがって……私にはもうないんだよ……帰る場所も……守りたい場所も……生きる理由も……たった今君がぶち壊そうとしてるじゃないか……」

アレイスターの声は震えていた。アレイスターはエイワスとは違いくらいどこまで魔術を極めても、どこまでいっても真正銘ただの「人間」。自分の失敗を目の前にして、上条当麻を目の前にして、自分の後悔の念を振り絞るさまは、誰よりも人間味に溢れていた

「私にだってあつたさ!!守りたいものも!場所も!人も!理由も!何故なんだ!私にだって『選ばれる素質』なんて幾らでもあつたはずだ!!なぜ……なぜ『幻想殺し』は君を選んだ!?!なぜ君はそこまで真っ直ぐな『ヒーロー』になれるんだ!?!それだけ多くの物を持っているなら……少しぐらい……少しぐらい私にとって何よりも大切な『娘』を守る力ぐらい分けてくれたって良かったじゃないかああああああああああ!!!」

「大切な何かを守るのに右手もヒーローも素質も理由もヘツタクレも

ねえだろうがっ!!!
!!!」

「自分で守りたいものがあるなら、そこにヒーローなんて必要ねえ！
幻想殺しなんて必要ねえ！そこにお前の意志があればそれで十分な
んだ！守ってくれた結果が全てじゃねえよ…守ろうと思ってくれた、
守ろうとして盾になってくれてたなら…もうお前の守ろうとしたヤ
ツはきつと…」

「きつと救われてるんだ!!きつと世界のどこかで誰よりもお前の幸せ
を願って笑ってくれてるんだよ!!」

「あ、ああ…ああああ…あああああああ…!!!」

「それを今から教えてやる！証明してやる！ここに居る俺だけじゃ
ねえ…この世界にいる全員で協力してやる…もう一回やり直してこ
い!!!」

キウイイイイイイイイイイイ
!!!!!!

上条当麻が天叢雲剣を高く掲げた。黄金の輝きを持つ剣がさらに
光り輝いた。そしてどこからともなく無数の光が剣を中心にして集
まり始めた。それはまるで1つの光る星に、正しき世界を求める
「人々の意志」という無数の星が集まりながら黄金の柱を成した

(力を借りるぜ…美琴、一方通行、麦野)

上条当麻が思い浮かべたのは、学園都市から訪れ、自分と共にこの
世界で戦った仲間

(力を借りるぜ…クライン、エギル、アルゴ、シリカ、リズ、キバオウ、
ヨルコさん、カインズさん、シュミットさん、グリムロックさん)

上条当麻が思い浮かべたのは、この世界で初めて知り合い、共に世
界を生き、戦った仲間

(力を借りるぜ：ディアベル、クラデイル、ヒースクリフ)

上条当麻が思い浮かべたのは、この世界で共に戦い、その命を燃やし尽くすまで戦った仲間

(敵とか味方とか！そんな小っせえ事情なんざどうだっていい！確かにみんな、それぞれ思うことは違ってたはずだ！思い描く未来も道も違ってたはずだ！)

(だけど、今日ここでそれも終わりにする！『仮想の自分』はここで終わりだ！思い返せば色々あったさ：全部キャラになんて出来るほどヤワな世界じゃなかった！)

(だから！みんな現実に戻ったら飽きるほど語り明かそうぜ！日が沈むまでだって、日が昇るまでだっていい！楽しかったことも、嬉しかったことも、悲しかったことも、この世界を生きたその全てに意味があるんだ！)

上条当麻は迷わなかった。この世界を終わらせることに。そう決意すれば後は簡単だった。その両手で、どこまでも強く固く、その剣を握り直した

「だけでもし、こんな世界に意味なんてなかったなんて言うヤツがいるなら：例えソイツがどんな神様だったとしても：俺は立ち向かってやる…」

「いいぜ…この世界の全てが所詮：仮想の世界だって言うんなら：そんなふざけた幻想は…!!」

「この『剣』でぶち殺す!!!!!!」

轟音と一筋の閃光を伴ってS A Oの世界そのものとも言える最強の剣が放つ光の柱が宇宙空間を縦一文字に切り裂いた

「・・・フツ・・・」

あまりもの眩しさゆえ、剣を振った上条当麻自身も目を瞑ってしまい、アレイスターの最期を見ることは叶わなかった。しかし、光の中に消えてゆく彼の表情はどこか安心したように綻んでいた

《ゲームはクリアされました…ゲームはクリアされました…ゲームは…》

そして次第に薄れゆく光の中で聞こえてきたのは、この世界の終結を告げる機械的な音声だった

第72話 帰還

「……………」パチツ…

目を覚ました上条当麻が辺りを見渡すと、そこは病室のベットの
上だった。2年前はしよっちゅう世話になっていたカエルによく似た
医者のある病院の一室だと気付いた。ようやくあの世界から帰って
きたのだと実感し、深く息を吸い、空気の味を堪能し、深く息を吐い
た

「……………ンツ…」

ベットから上半身を起こして誰かを呼ぼうとするが、2年以上も現
実で口を動かしていなかったせい、喉が思うように鳴らせなかった

(あ、そうだ。ナースコール……………)

ジャアアアアアア……………キュツ…

「？」

ナースコールのボタンに手を伸ばした上条の動きに静止をかけた
のは静かな音だった。まだどこか遠く聞こえる上条当麻の耳に入っ
て来たそれは、水の音と水道の蛇口を閉める音。そしてコツコツと誰
かが足音を立てながらこちらに近づいてくるのが分かった

コツコツコツ……………パリーーン!!!

次の瞬間に聞こえたのは耳をつんざくような鋭い音。様々な彩の
花が添えられた花瓶が割れた音だった。花卉がパラパラと床に落ち、
割れた花瓶の破片が床に散らばり、その花瓶の中に入った水がとめど
なく広がって床に歪な円を描いた

「かみ…じょう…?」

目の前にいたのは見覚えのある女の子だった。この2年間で少しばかり容姿が大人びているが、自分を通っていた高校の制服に身を包んだ、真っ直ぐな性格で、曲がった事が大嫌いな世話好きな女の子。その女の子の表情はまるで亡霊でも見ているかのようで、上条当麻はまだ上手く動かせない喉を唸らせ、絞り出すような声でその女の子の名を呼んだ

「ふき…よせ…?」

「ッ?!?せつ、先生!!上条が!!上条当麻が目を…!!!」

割れた花瓶など構いもせず吹寄制理は上条当麻の病室を飛び出した。そして病院の廊下の方が少しばかり騒がしくなり始めた

(ははっ…まさかこっちの世界に帰って来てから最初に見る顔が吹寄の顔とはな…この2年でちよつと美人になったかな…まあ当然ちや当然か…)

この2年以上ずっと寝たきりで少し遠く聞こえる上条当麻の耳には廊下の方の音はほとんど聞こえていなかったが、そこであることに気がついた

(…?ああそつか、なんで音がよく聞こえないのかと思ったら…確かに身体が鈍ってるのもあるんだろうけど『コレ』被ってたらそりや聞こえるわけないか…)

ガポツ…と上条当麻が頭に装着していたナーヴギアを外した。おかげで頭がいくらか軽くなり、聞こえる音も少し鮮明になった

(みんなも…今頃目を覚ましてんのかな…)

開いた病室の窓からカーテンを揺らしながら風が吹き込んだ。上条の顔を撫でたそれはどこか冷たい風で、今の季節が冬のだろうと予想するのはさほど難しい事ではなかった

「…ただいま」

窓の外一面に広がる世界に向けて、上条当麻はそんな言葉を告げた

最終話 卒業式

「はい！チーズ！にやー！」

カシャ！

「イエーイ！三人ともとびっきりの笑顔が撮れましたぜよ！」

「あらあら、どうもありがとう土御門君」

「サンキューな、土御門」

「いやいや、この程度お安い御用ですたい。じゃ、カメラお返しします
ぜいお父さま」

「ああ、すまないね土御門君」

SAO事件終結から3ヶ月が過ぎ、時は3月の中頃。上条当麻やその同期生達は満開になった桜の木々の中で高校の卒業式を迎えていた。そして、はるばる学園都市の外から上条当麻の両親も彼の卒業を祝いに来ていた

「それじゃあ当麻、父さん達は一足先に体育館の保護者席に行ってるからな」

「ああ。また後でな」

「それじゃあまたね当麻さん。土御門君と青ピ君も当麻をこれからもよろしくね」

「はいはいにや〜」

「任せといて下さい〜」

そう言つて手を振つてから上条夫妻は3人に背を向け、学校の体育館へと向かつていった

「いや〜、しっかしほんま上やんのお母さんって美人さんなんやなく、人妻も守備範囲の僕としてはこれだけの逸材は他には……」

「青ピ、それは流石の俺でも引くぜよ」

「しっかし、上やんホンマによく卒業出来たもんやな〜…」

「いやいや、正直この数ヶ月は生きた心地がしませんでしたのことも…」

「それでも小萌先生には感謝しなきゃダメぜよ〜？ただでさえSAO事件のせいで足りなくなつた出席日数を帳消しにして貰うために学校の関係各所に頼み込んだ上に卒業判定試験の為に毎日学校終わった後は付きっ切りで上やんの面倒見てたんだからにや〜」

「くっ…！小萌先生と2人で愛のマンツーマン授業なんて…羨ましい！羨ましすぎるで上やん!!」

「まあな、そういう意味じゃ本当に小萌先生にはこれから先ずっと頭が上がらんねーよ」

「そんなことはないですよ。上条ちゃん」

「え？あ、先生」

「卒業式おめでとうございます、3人も。いつの間にかここに入学した時とは見違えるようような立派な生徒になって先生も鼻が高いのですよ」

「ホンマありがとうございます！小萌せんせ！」

「…なんか小萌先生が和服着てると七五三みたいぜよ」

「もー!!土御門ちゃんまでそんなことを言うのですかー!!さつき吹寄ちゃんと姫神ちゃんにも全く同じことを言われたのですー!!」

「ま、そんなことより、上条ちゃんはそんなにかしこまる事はないのです。この数ヶ月、ちゃんと勉強して自力で卒業判定試験に受かって大入試に受かったのは間違いないのですから」

「いえ、本当にありがとうございます先生」

「本当に上条ちゃんが卒業出来て良かったのですよー。ただでさえ1年生の時から問題児だったのに2年も休んで一体どうなることかと冷や汗止まらなかつたのですー」

「てかそもそも上やんその制服着てたの1年もないんとかやう？」

「本当だよ。おかげで学ランなんてまだツルツルですのことよ？」

「それじゃ、先生も色々と準備があるので先に戻るのですー。三人もちゃんと式までに教室に戻るんですよ？」

「はい、それじゃまた後で」

「じゃ、俺たちも行くぜよ」

「ほな、上やんも行きますでー」

「おう、2人もありがとな」

「??」

「いや『??』じゃなくて。あの二年間、ずっと来てくれてたんだろ？俺のお見舞い。本当ありがとな」

「なーにを今さら。ねー青髪さん？」

「本当ですよ。ねー土御門くん？」

「？」

「上やんがおらんと」

「俺たちデルタフォー스는始まらないんぜよー」

「・・・そうか」

桜の花びらが舞う校庭で、2人とともに歩みを進める上条当麻の表情は、恥ずかしさからか、嬉しさからなのか、とても幸せそうで柔らかな表情だった

—————

「青…ひつく…えぐ…青髪…ピアス」

「は、はい…」

どよどよどよどよ……………

上条の高校の卒業式が始まり、そのまま滞りなくプログラム通り式が執り行われる…かに思われた。クラスの担任が生徒の名前を読み上げる卒業式では恒例の場面で、上条たちのクラスの担任である月詠小萌がもはや最初の生徒の名前を呼ぶ段階でボロボロと涙を流していた

「い、いくらなんでも小萌先生泣きすぎぜよ…」

「う、噂には聞いてたけど…もはやまだ1人目よ？これ全員呼び終わ

るのにどれだけ時間かかるのか分かったもんじやないわ…」

「それもそうなんだけどよ…上条さんはそれ以上に気になることが…」

「…ああ、それは俺もだ上やん」

「ええ、多分私も考えてる事は貴様と同じよ。上条当麻」

「それでは心の中でご唱和下さい。みなさんご一緒に、せーの…」

（（青髪ピアスは名前なのかよ…））

「ひっく、ぐしゅ…か、上条ちゃ…ひぐ…上条当麻…うわ…ん!!!」

「は、はい」

「っ、ついに上やんで号泣して机に突っ伏したにや…」

「いつぞやの県議会議員の号泣会見を思い出すほどの泣きっぷりね」

（てか今呼ぶ時、地味に俺の名前「上条ちゃん」って言いかけたけどな…まあいつか）

「zzzzzz」

「あなた…!!起きろ…!!朝ごはんだよ…!!ってミサカはミサカはベットで寝ているあなたにダー…イブ!!!」

「zzz…ぐおお!!」

「えへへー／／おはようあなた、ってミサカはミサカはほっぺをすりすり…」

「があああ…朝っぱらからこのクソガキはあああ…」

「はいはい、打ち止めもその辺にしといてやるじゃん。二年前と違ってそれなりに体重増えてんだから一方通行の骨が折れちゃうじゃんよ」

「やーん!せっかくあなたの温もりを肌で感じてたのにー!ってミサカはミサカは人肌恋しさを訴えてみたり!」

「…おい、黄泉川」

「?どうしたじゃん?一方通行」

「??.気が変わった、ガキを寄越せ」

「?!?!」

「そ、それはいわゆる抱きつきOKサインなのでしょうか??.と、ミサカはミサカは確認を取ってみたり…」

「...チツ:好きに解釈しろオ」

「!!わーい!!突撃ー!!」

「ただしあんま暴れんじゃねーぞ」

「えへへー!すりすりー!」

「あーりやりやく。これは一体どういう風の吹きまわしじゃん?」

「...別に:ただコイツらも思うところがあるンじゃねエかと思つて
氣イ使つただけだ」

「...」

「...ま、お前もなんだかんだ2年以上寝たきりだったんだし、そういう気持ちにもなるってことじゃん?」

「...」

「へー?そういう態度取るじゃん?素直じゃない少年は教師として見過ごせないじゃん?」

「うつせエな:だったらなんだ?」

「私も抱きついてやるじゃーん!!」

「は、ハア!?!グオオオ!!」

「キヤーー!!あなたと黄泉川のサンドイッチー!つてミサカはミサカは2人の肌心地を実感してみたりー!」

「こんの...!重ッ...!」

「こんな朝早くから何やってるのよ3人とも:朝ごはん出来てるんでしよう?」

「おー、おはよう桔梗。お前も混ぜるじゃん?」

「私は遠慮しておくわ、眠いし」

「テメエは俺がいなかった2年間ずっとそんなンじゃなかっただろうなアアアアア!?!」

「まさか、ちゃんと働いてたわよ...自宅警備員として」

「ソレを世の中じゃニートつつうんだよクソがアアアア!!」

「おっと、もうこんな時間じゃん。じゃー私は朝ご飯食べたらさっさと行ってくるじゃん、流石に自分の学年じゃないとはいえ、自分の高校の卒業式は顔を出さないとマズイじゃん」

「・・・黄泉川」

「どうしたじゃん?」

「・・・いや、なんでもねエ」

「・・・今さらになってこれ以上何が出来るつつーんだ・・・クソが・・・」

「えー、おほん。みなさん、先ほどの卒業式ではお見苦しいところをお見せして申し訳ないのですー。いやー、先生卒業式の時はいつもああなってしまうのですよー、あはは」

小萌はそう言いながら後ろ頭を搔いて誤魔化すが、真っ赤に充血した眼と涙を拭き過ぎた為に真っ赤に腫れた目元は誤魔化せていなかった

「何はともあれ!先生がこうしてみんなの前に立って何かを教えるのはこれで最後なのですー。みなさんがこの学校で学んだことは何も勉強だけではないのですよー。これからは道は違えど、自分がこの学校で学んだことを糧に真っ直ぐに生きて欲しいのですー。でも、もし何かに挫けてしまいそうになってしまったら!この学校に遊びに来て先生のもとに来て構わないのですよー?みなさんはいつまでだって先生の大切な生徒さんで、先生はいつだって、可愛い生徒さんの味方なのですから」

(学んだこと・・・か:俺は一体...って、マトモに学校に通えなかった俺がそんなこと考える方が野暮ってもんか...)

上条は頼杖をつきながら小萌の話を聞いていたが、ふと、そんな風に考えてしまっていた

(来年の今頃は…みんな何してんのかな…俺は何とか大学の二次試験に滑り込みで合格できたからいいが、大学に行かず働き出すヤツもいるって聞いたし…でも、それでもみんな元気にやっていくんだらうな…)

(でも本当なら今頃は…『アイツら』も…ちやんと…)

「では…みなさんお元気で！いつの日か立派になった皆さんに会えることを先生楽しみに待ってるのですよ！それじゃあ、吹寄ちゃん、最後の号令をお願いするのですー」

「はい！全員、起立！」
ガタガタツガタツ！

吹寄が呼びかけると、クラスの全員が起立し、これまでにないほど綺麗に背筋を伸ばし、これまでお世話になった教師に目を向けた

「先生！今まで本当にありがとうございました！さようなら！」

「「ありがとうございます！さようなら！」」

ザワザワザワザワ…ガヤガヤ…

「小萌せんせー！僕のアルバムに、小萌せんせの熱いハートの籠った一言を」執筆願いますー！」

「もちろんなのですー！青ピちゃんも、自分のパン屋さんを開いたら

その時はぜひ先生に連絡を下さい、お店のパン丸ごと買い占めに行くのですよー」

「もおー！せーんせー！それじゃ商売あがったりやないですかー！」

「姫神さん、この街を離れても、私のこと忘れないでね？いつでも連絡してね。たまには一緒に遊びに行ったりしましょ？」

「うん、ふ、吹寄ちゃんも…これから大学でも頑張つてね…／＼／＼」

「おおく？私とのお別れで泣いてくれるのかしら？あはは！」

「わ、笑うことない！／＼／＼」

「あはは、ごめんごめん。何だかつい可愛く見えちゃってさ、こういうところも世話焼きって言われる所にかしらね」

「でも、そんな制理だからこそ、きつと面倒見のいい、立派なお医者さんになると思う。その夢、応援してる、頑張つて」

「うん、ありがとー！じゃ、最後にツーショット撮りましょ姫神さん。はい、チーズー！」

「上やん、クラスの卒業記念打ち上げ、もちろん来るだろ？」

「ん？ああ、悪い土御門、先に行つててくれ。俺は後で合流すつから」

「…今日も、行くのか？」

「ああ『今日も』つて訳じゃないんだけど…『今日は』絶対に行かなきゃダメなんだ」

「…あんまり背負いすぎるなよ。『彼ら』も俺たちも…上やんにそんな重荷を背負わせたい訳じゃないんだ」

「大丈夫だ、分かつてる…ずっと前から分かつてる。これは俺の…ただの一人よがりだ」

「上やん…」

「じゃあ、また後でな…」

「上やん！」

「…なんだ？」

「…今はまだ都合でこつちに来られてないが…スタイルも神裂もインデックスも…お前のことを心配してる。忘れないでくれ、たしかに

どうしても引きずってしまふことは分かる。でも、それ以上に『あの世界』から生還した上やんには、これまでずっと心配してくれた人達にこれ以上、心配をかけないことも…『彼ら』の為にもこれから先を生きていくことが、大切なんだ」

「・・・土御門、サンキューな」

「ああ」

「でも…」

(もう綺麗事なんて言い飽きたし…聞き飽きちまったよ)

「・・・?でもなんだ?」

「いや…なんでもない。それじゃ…」

そう心の中で悲痛に叫びながら上条当麻はその踵を返し、卒業生の皆が語り合う教室を後にした

—————

上条当麻は学校で卒業式を終え、学校を後にし、学園都市内のとある病院を訪れていた

「こんにちは」

「はい、こんにちは…あつ、あなたでしたか」

「毎日すいません、面会をお願いしてもいいですか?」

「はい、もちろんです。でもいいんですか?今日は確か学園都市中の学校が卒業式のはずですが…」

病院の受け付けを担当しているナースは不安そうに上条に尋ねた

「ええ、いいんです。卒業式はちゃんと出ましたし、今日だけを特別にすることなく、今日も来なきやいけないつて思ってたんです」

「そう…ですか…」

「それに、アイツらの中にもいるかもしれないじゃないですか。もしちゃんと起きていたら、俺と同じように今日卒業式を迎えていたかもしれないヤツらが」

「……………」

「すみません、それじゃ」

暗い声色でそう呟くと、上条は病棟の奥へと歩き出し、段々と小さくなつていく足音とともに彼の後ろ姿は見えなくなつていった

「重症だね、彼」

「あ、先生…」

先ほど上条を相手していた受付のナースに声をかけたのは、この病院の名医にして「冥土帰し」の異名を冠するカエルによく似た顔の医者だった

「先生は彼をよくご存知なのですか？」

「……2年前の彼はよくまあ厄介事に首を突っ込んで怪我をして帰って来てね、何度僕が治療したかなんてもう数えるのも億劫になるほどだったよ。夏の時なんて、それはもう目も当てられないくらいの大怪我をしてきたもんだ」

「あはは、そんなにヤンチャな子だったんですね。今の彼とずっと眠っていた彼しか知らない私からしたら…想像も出来ないです」

「だからこそ、彼は変わってしまったと言いつけるね…」

「ええ…何だか今の彼は…目に光がない…そんな感じがします…」

「今の彼は恐らく…心が死んでしまっているんだろうね。精神科の手解きを受ければ多少は変わるのかもしれないが、所詮気休めでしかないね。なにしろ彼が負った心の傷は深すぎる」

「先生…なんとかか…してあげられないんでしょうか？」

「こればかりは僕も専門外だね。これは2年前からずっと痛感してきたことだが…こんなにも患者の為になれないとは…無力だよ」

「あの日『彼が目を覚ました』と…2年間彼の病室にずっと通い続けていたあの女の子がそう叫んだのを聞いた時どれほど嬉しかったことか…これでやっと2年前にこの病院に運ばれて来た全てのSAO患者が救われると…そう思った」

「ゲームクリアから一転して…こんな悲劇になるなんて…こんな…こんな…あんまりです…」

「僕もまさかこんなことになるなんて思いもしなかったよ…まさか彼ともう1人の『白い彼』以外誰も…」

「目を覚まさないとはね」

「よっ、御坂」

「……」

ピツ…ピツ…ピツ…

「今日は卒業式だったよ…本当ならお前も去年の春には卒業式と入学式やってたんだよな…」

「……」

ピツ…ピツ…ピツ…

上条当麻が病室のベットで眠る御坂美琴に声をかけるが、彼女が彼に口を聞くことはない。上条の言葉に返事をするのは、無機質に美琴

の心音を鳴らす機会音だけだった

「お前も…案外向こうでリズやシリカやアルゴ…エギルにクライン達と元気にやったりすんのか？一応俺たちと同じSAO患者の何人かが学園都市内外問わずこの病院に搬送されて入院してんだけどさ…関係者以外面会謝絶だってよ…笑っちまうよな」

「……………」

「一緒に命を賭して生き抜いた俺たちを…学園都市内の人間と外の人間とでだけで関係者にはなり得ないってズバツとさ…」

「……………」

「まあ正直俺もお前の関係者って言えるか微妙だけどな…でもお前の母さんが俺だけはって許可出してくれて…事件を取り締まってる政府の人も、俺らがSAOで一緒にいたって面も考慮してくれてこうして見舞いに通えてんだから…贅沢は言えないよな」

「……………」

「でも…ここに來てるってだけで、お前だけじゃなくて、現実のどこかにいるみんなのお見舞いになつてると思うんだ…」

「……………」

「なあ…御坂もそう思うよな…俺がここに來る意味はちゃんとあるんだって…そう…思うよな…」

「……………」

「それとも…俺はやっぱ関係者でもないのかな…それもそうか…俺だけはみんなと違って…こうして目覚めて…普通の毎日送ってんだもん…そりゃ無関係だって言われても…仕方…ねえよな…」

「……………」

「なあ…何か…何か言ってくれよ美琴…そんなに怒ってんのか…？最期のお別れの時に麻痺毒打ったこと…」

「……………」

「喋ってくれただけじゃなくていい…少し笑ってくれただけでも…泣いてくれるだけでも…いいからさ…怒ってんならいくらでも謝るからさ…」

「……………」

2年前の天真爛漫で元気の溢れる彼女の笑顔も、彼女の体から迸る電撃も、もうこの世界にはない

「電撃だつていくらでも飛ばしてくれていい…いくらだつて右手で消し飛ばしてやるから…どんな勝負だつて受けて立つから…」

「……………」

綺麗に手入れされていた茶色の短髪もいっくらか枝分かれが目立ち、綺麗に澄んでいたその瞳も二度と開くことはない

「もう一度…あともう一度だけでいいから…あの時みたい…」

「……………」

彼女の目蓋は動かない。彼女の指は動かない。彼女の脚は動かない。彼女の心は動かない。あるのは、ただ呼吸。生きるための最低限の行為。そこに意志はなく、あるのはただの…『御坂美琴』という姿をした抜け殻だけ

「俺の名前を…呼んでくれよ…」

「……………」

未だなお眠り続ける少女がその生涯で最も恋い焦がれた少年のそんな願いは、少女に届くことはなく、風に運ばれ遠く彼方へと消えていった

ログイン者総数	10000名
死亡者総数	3853名
生還者総数	2名
安否不明者総数	6145名

以上